
頑張ってみるよ

りふえいる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

頑張ってみるよ

【Nコード】

N6625S

【作者名】

りふえいる

【あらすじ】

日本の女子小学生の若郷香乃しきむらのかのは、ニヴルヘイムの女王……アルテレイマによって神隠しされる。橋の番人であるモーズグズに拾われ、魔犬ガルムと偽りの女王ヘル、飛竜ニーズヘッグとも出逢う。

死後の世界の中で皆と触れ合い、香乃は『生と死』について迷い、考え……ひとつの答えを導き出す。

プロローグ

わたしは病室で、いつものように本を読んでいた。

というのも、わたしは交通事故にあつて下半身が動かないんだよね。

トラックにはねられて、一命を取り止めたのは奇跡だったとか、皆が言つてたけれど。

こうなつた今では、あの時に死んでいたほうが楽だった。

もう、歩けないの？

意識不明の状態から目を覚ましてすぐ、わたしはお母さんにそう聞いた。

そしたら、泣いていたね。泣いちゃつたんだよね、お母さん。

お父さんも、複雑そうな顔をしてたね。

「車イス生活かあ」

窓越しに、外の景色を眺める。

「いいなあ」

公園で無邪気に遊んでいる子どもたち。それを見て、思わずそうつぶやいた。

ちよつと前まで、わたしだつてこのふたつの足で歩けたんだ。走ることだつて、お母さんに頼まれてお使いにだつて行けたんだよ。

だけでもう、それはできない。

ううん、できないわけじゃない。

わたしの両足が使えなくなっただけで、車イスでお出かけすることはできる。

けど、それは周りに迷惑をかけるよね。それくらい、わたしでも分かるもの。

「はあ」

自然と溜息がもれる。

これから先、わたしはどうしたらいいんだろう。

障害者として生きる？ そんなのいやだ。

自分の足で、自由に走り回りたい。なのに、それができないなんて。

お父さんとお母さんから、学校の友だちから、近所のおばさんから、お医者さんに看護師さんから、かわいそうな目で見られるなんてやだっ！

そんな思いをするぐらいなら、いつそ死んでしまったほうがよかった。

「ぐすっ」

開いていた本のページが、わたしの涙にぬれる。

悔しくて、悲しくて、どうしようもなかった。

トラックの運転手をうらむよりも、自分の不運さを嘆いた。

あの時、一秒でも一分でも遅く、もしくは早く、横断歩道を渡っていたら　こうはならなかったのにっ！

「っ」

気づいたら本が、強く握ったせいでくしゃくしゃになっていた。

わたしはそれを投げ捨てた。

「はぁ、はぁ」

壁にぶつかり床に落ちたそれを見て、ハッとなる。

呼吸を整えて、パジャマの袖で涙をふいた。

「ぶっ」

休もう。起きていても、嫌なことしか考えられないもの。

もうすぐ夕食の時間だけど、それまでゆっくりと眠ることにした。

第1話

さっむう！

当然だよ。気がついたらわたしは、暗くて冷たい風が吹く外にいたんだもの。

ここは、草むら？ ど、どこなのよ？ ここはっ。

あ、空にふたつの丸い物体が確認できる。あれは、太陽に月かなあ？ お星様もあるね。

「だいじょうぶう？」

「え？」

「あれえ、バルドルご一行とはくれたのかなあ？」

草むらで横になってるわたしを見下ろす、ひとりの女の子。

目じりの垂れた黒くて大きな瞳。長くてツヤのある黒髪を振り乱しながら、彼女はわたしの腕を持って引きずり、どこかに連れて行くこうとする。

「わ、わ、い、いたいってば」

「ああ、ごめんなさいい。でもお、急がないと」

その子が言うよりも早く、わたしはそれを直視する。

「ガアウオオオオオオッ！」

「ひいっ!？」

首輪と鎖につながれた黒くて大きいワンちゃんが、わたしに噛みつきこうとした。

ガチンッ。ワンちゃんの歯と歯が、目の前で音を立てる。

「ガルムっ。めっ」

「ガ、ガウウ」

その子が叱ると、ワンちゃんは急におとなしくなった。

でもまだ、目が血走ってる。こ、こわいよっ。

「むっ。反抗的ですねえ。ご飯あげませんよう」

ワンちゃんはお座りのポーズになって、尻尾を振って次の指示を

待ってる。

「ガムムっ。この子は食べちゃダメえ。解ったあ？」

「ガウツ」

「よおし。はい、これあげるう」

「ワウンツ！」

その子はどこからか骨を取り出し、それを高く放り投げた。

ワンちゃんはジャラジャラと鎖を鳴らしながら追いかけて、地面に落ちた骨に夢中でかじりついている。

「今だっ。早く逃げましょお」

「あ、う、うん」

その子に手を引かれ、わたしは橋の傍そばにある小屋へと避難させられた。

「あれ？ 歩ける……ようになってる」

それに気づいたのは、小屋に入ってからだった。

「ん〜？ どしたのあ？」

パタン。静かに戸を引いて閉める女の子。

「あ、その。わたし、足が動かせないはずだったのに……なんで？」

「はあ。なんでって、わたちに言われても困りますう」

わたしと一緒に首を傾げる女の子。

「くしゅん」

小屋の中は外みたいにひんやりしてた。うう、風邪を引きそお。

「だいじょうぶですかあ？」

「あ、うん。ちょっと凍こえるね」

女の子は黒のワンピースに同色のマントを羽織ってて、サンダルを履はいてた。それだけでよく寒くないねって言いたくなる。

わたしの格好かっこうは、病室にいた時に着てたパジャマのまんま。他は病院内で愛用してたスリッパだけ。

暖房はないのかなと目で探していたら、その子があるところを指

差した。

「そのこのベッドで暖まってもいいですよ」

「あ、ありがとう」

小屋の中は八畳ほどの広さ。畳、といっても木造で板張りだよ。木箱に布を何重にも被せてあるベッドには、毛布が二枚たたんで置いてある。その脇に本棚があつて、その上にティーポット、香草が植えられた鉢がいくつか並んでる。

その鉢の近くには発光する石があり、それが部屋の明かりとなり、香草を育てる日光を補っているようだ。

本棚の隣に置かれたふたのない木箱には、色とりどりの液体の入った小ビンが整理整頓されてる。

ここの主である女の子は窓辺のイスに腰かけて、外を眺めているようだ。そこ以外に窓はないみたい。

その子の前には机があつて、その足に大きなほうきにちりとりが立てかけられてる。机の下には木製のゴミ箱があつた。

机上には花ビンがあり、それに羽根ペンが数本差し込まれてる。

他にはビン詰め絵の具に木製のパレット、画用紙が、上から順に重ねられてた。

「わ。ぽかぽかする」

ベッドにあつた毛布一枚に包まっただけで、熱湯風呂に入っているような感じになる。

これじゃのぼせちゃうと思ひ、軽くひらけた状態にした。

「ふう。これ、すごく暖かいね」

「ここ、ニヴルヘイムは極寒の世界ですからねえ。でもでも、慣れれば軽装で外を出歩けますよう」

「む、無理だよ。あんな寒いのに、薄着で外を出歩くなんて」

「はあ。でもあなたは、その格好でここまで来たんですよえ？

バルドルとその妻ナンナに付き添って」

「ん？ え、ええっと。その、バルドルって人は誰？」

「知らないんですかあ？ となると、自力でここまでえ？ はあ、

凄^{すこ}い女の子もいたもんですねえ。ガルムの近くで居眠りなんて、肝が据わっていると思いましたがよう。最初は

会話が噛み合っていない。

「そ、その……今、何時かな？」

「え？ なんじって、どういう意味ですか？」

「今は夜でしょ？ いつ、朝が来るのかなあ……って」

「朝なんて、ニヴルヘイムにはありませんよう？」

「え？ ど、どゆ〜こと？」

「常に白夜びやくやですう。薄明るいですう。寒いですう。ここで頼れる明かりなんて、光花こうかと灯石あかりせきぐらいしかありませんしい。あ、遠くにあるお日様とお月様がありましたねえ」

んつと。あかりせきってというのは、香草を育てるために置かれた、その石のことかな。

もう片方は校歌？ 硬貨？ 多分違うね。なんのことやら。

「あ、その。今更だけど、君は？」

「ん〜？ わたちは、モーズグズと申しますう。黄金の橋ギアラルの番をしており、ガルムの面倒を見ていますう」

「そ、そうなんだ。えつと、わたしは若郷香乃しきょうかのかのです」

「じゃあ、これからは香乃ちゃんと呼ぶね〜」

「あ、わたしはモウちゃんでもいい？」

「はあい。そう呼んでくれて結構ですよ」

ふたり同時に頭をペコリ。

同じくらしいの背丈の女の子なので、仲良しになれそう。

「あ、それは？」

ふと、モウちゃんの首から下げられたそれが気になった。

「ん〜？ あ、これはガルムの乳歯にゅうしなんですよ」

「えつと、さっきのワンちゃん？」

「はあい。ガルムが小さい頃に抜け落ちた牙を、加工して首飾りにしてあるんですよ」

にこにことうれしそうに話してくれるモウちゃん。

あれだけ大きなワンちゃんを、どうやって手懐けたんだらう。
ものすつごい凶暴だったけど、噛まれたりしなかったのかなあ。

「ところで、香乃ちゃんは何歳ですかあ？」

「え？ あ、うん。十一才です」

「はあ。若くして亡くなってしまうなんて、さみしいですねえ」

え？

「でもまあ、道中倒れずにここまで来れたんですう。特別に、わたし
ちが館まで案内してあげますよう」

「ちよ、ちよつと待って。え？ わたしって、死んじやったの？」

「ええ。そうですね。二ヴルヘイムは、氷と死の世界。戦乙女いくさおとめ
に見入られなかった死者が集う場所ですけど。もしかして、知りま
せんでしたかあ？」

にぶるへいむ？　いくさおとめ？

えつと、それって……どこかで聞いたような。

あ、つい最近PSPで遊んでた『ヴァルキリープロファイル』だ
よつ。

あまりの難しさに病室でノートパソコンを使って、攻略サイトと
かをのぞいたり、北欧神話について知りたくて、グーグルで検索し
たり本を読んだりしてたなあ。

でも、そのゲームは北欧神話を少しアレンジしたものなんだよね。

って、そんなことはどうでもいいの。

つまり、わたしは死んじやってここにいるの？

え、なんで？　意味が、意味が分からないよ。

「どうしましたあ？　なんか、理解できてないような顔ですねえ」

「ほ、ほんとに……ここは、死者の国なの？」

「はい。もしかして、意識がない状態で亡くなられたんですかあ？」

「そ、そうかも……しれない」

「はあ。となると、自ら進んで橋を渡り、あそこで力尽きて倒れて
た　　というわけではないんですねえ？」

「う、うん」

「なるへそ。ようやく事情がつかめましたあ」

わたしは全然、理解できてない。

「香乃ちゃんは、死んじゃって最初からあそこに誘われて倒れていた、と。うむ。運がいいんだか悪いんだか、微妙なところですね。でも結果的に、わたしがガルムに食べられちゃう前に拾っちゃいましたから……幸運と言つべきなのでしょうおかあ？」

不思議と、涙は出なかった。

「ここが死後の世界？ 意味分かんないっ。信じられるはずないじやん。」

「だって、わたしはこうして生きているもの。夢だよね。うん、きっとそうだ。」

「うん。その表情、わたしの言葉を信じてませんねえ」

「そ、そうでもないよ」

ただひとつ、大きな変化があった。

それは、わたしの足が動くということ。

歩ける、走れる、ジャンプだってできるんだ。

これは夢だね。そうに決まってる。じゃないと足が動くはずないもの。

「あんまりはしゃがないでくださあい。この小屋、狭いですしい」

「う、ごめん」

両手を合わせて謝ると、モウちゃんはにっこりと微笑んだ。

「じゃあ、身支度をするので、少し待っててくださいねえ」

「う、うん」

わたしたちはおやすみ中のガルムの脇を通り抜け、ある洞くつの前をやってきた。

あ、モウちゃんから黒マント借りてます。寒がりなわたしに、外れないように羽織らせてくれた。優しいね、モウちゃんは。

ちなみに、ほうきかと思ってたのは、実は大筆おおひででした。

出かける前にモウちゃんに指摘されて、恥ずかしい思いをしたよ。

「どうしましたかあ？」

大きな筆をベルトにつけて、それを小さな身体に巻いて背負っているモウちゃんは、振り返ってわたしの顔をのぞき込む。

てか、その格好からして『モンハン』の大剣っばい。

「え〜っと。この中、暗いよね。危なくない？」

「はあい。だから、灯石を手に持って進むんですう」

「あ、ありがとう」

モウちゃんは光る石ころをひとつ、わたしにくれた。

へえ。これがあかりせきなんだ。

「ささ、お手繋いで行きましょお」

「う、うん」

わたしとモウちゃんは足下に気をつけながら洞くつを進む。

う。なんか、異臭がするんだけど。あ、モウちゃんが先に行っちゃう。

カツン、カツン、ピチャ。たまにある水たまりにびっくりはするけど、どうしてか恐怖はなかった。

モウちゃんがいるからかな？

何度も振り返って、笑顔をくれるから怖くないのかも。

「わっ」と

「あ、だいじょうぶですかあ？」

「う、うん」

石ころにつまづいたら、モウちゃんがわたしを支えてくれた。

「ありがとね」

「いえいえ」

それにしても、この洞くつって外より暖かい気がする。

なんでだろ？ 明かりとして、火を使ってるわけでもないのに。

うわ、カビがすごい生えてる。どうりでカビくさいわけだよ。

歩いててふと気づいた。下っているような気がする。らせん状に

なってるのかな？

しばらく歩いていたら、微かな光が差し込むのが見えた。

「ようやく着きましたあ」

「わあ」

洞くつを出たわたしたちの目前には、石造りの大きな館が建っている。

鈍い銀色の柵がその館を囲んでおり、近寄りがたい感じがした。

その柵には光る花があちこちに巻きついており、幻想的な雰囲気を作り出している。

「どうかしましたかあ？」

「な、なんでもないよ」

手を放したモウちゃんが、黒ずんだ門を押して開く。

ギギギと、錆びてるから不快な音がする。

「あちこちに苔こけが生えてるね。石にこびりついてる」

「それはしょうがないですよ。日の光がないですし、じめじめするんです。乾燥しているよりは、湿気があるほうがお肌にはいいですね」

「そ、そうだけでも。カビとか、そういうの大変じゃない？」

「それは館内を見れば、一目瞭然いちせくりょうぜんですねえ。ささ、中へどうぞあ」

「あ、ごめん」

中に失礼して、わたしはモウちゃんと力を合わせて門を閉めた。

手をパンパンと払った後、わたしたちは館のほうへ歩いてく。

「さて、庭園のほうは見るも気味が悪いだけでしょおしい。早々に館内に行きましょう。バルドルご一行を迎えた後ですからあ、ごちそうがいただけるかもしれませえん」

舌を出して、じゅるつとよだれをすすするモウちゃん。

わたしを連れてくるのは口実で、ほんとはご飯が食べたかったんだね。きつと。

「さて、扉を開けますよう」

「うん」

正面玄関に着いて、モウちゃんは入口の扉を引いて開けた。
案の定、中はすごかった。

空気がよどんでるし、カビくさいし、ほこりがたまってるし、物が散らかってるし　とにかく、掃除をしてないのが一目で分かった。

「んん？　何か、様子が変わですねえ」

モウちゃんは我先に館内に入り、あちこちと見回しては、ひとりで奥に進んでいる。

ひとりぼつちは嫌なので、わたしはモウちゃんについてく。

「あれえ？　いつもなら、骸骨さんとかが出迎えてくれるのに。どうしたんでしょうお？」

「が、がいこつう？」

今、聞いてはいけないようなものを　き、気のせいだよ。うん。

「……血の臭い？」

「え？」

「香乃ちゃんは、私たちから離れないように。一悶着ありそうです。大筆を左手で抜いて構え、少しずつ前へ進むモウちゃん。

すると。

「うわあああああああつ！」

「た、たすけてくれええっ」

青年とおじいさんにおばあさんが石柱の陰から現れ、こっちへと走ってくる。

「“シャットアウト”」

ひものついた筆の背を彼らに向けて、モウちゃんは低い声で何かを唱えた。

「うぐ」

「な、なんだ」

「た、たすけてくれっ。頼む。ワシらは殺されとうないっ！」

見えない何かに捕らえられた人たちは、バンバンと何かを叩いて、

ここから出たいとこん願している。

モウちゃんは軽やかな足取りで彼らに接近し、こう訊ねた。

「すでに死んでるのに戯言はよしましよおよう。肉体の死の次は、
靈魂の死。そうなれば消滅確定ですからねえ。冗談はさておき、何
があつたのかを簡潔に説明してください。そうすれば、わたちの
権限で救い出せるかもしれませえん」

「へ、ヘルグ あ、いや。ヘル様が……バルドル神に対して、刃
を向けたのです。すでにやられたものも数名いて、ワシらはその騒
動に巻き込まれただけなんじゃ」

「なるへそ。いつものヒスですかねえ。それとも」

モウちゃんは右手で鼻先をこすり、考えているようだった。

「“ディスプレイ”」

そこに右手をかざして、また何かを唱えた。

ガラスが砕けるような音がした後、彼らの周囲にほたるのような
淡い光が舞っている。

「外に避難するとよいでしょう。私たちはヘルちゃんをなだめに行
くんで、ほとぼりが冷めるまで身を潜めてるようにい」

「あ、ありがとうござえやす」

「恩に着る」

ひもに通した金の指輪を首から下げている青年は、腰を抜かして
立っていないでおばあさんをおぶさり、おじいさんと一緒に館の外
に出た。

わたしはそれを見送った後、モウちゃんのほうへ向き直る。

「あれ、ついてくるんですかあ？ 下手をすると、死にますよう」

「も、モウちゃんが……危ないところに行こうとするから」

「引き止めようとう？ 優しいですねえ。香乃ちゃんはあ」

「だ、だって。友だちが危ない目にあうかもしれないのに、ほっと
けるわけないじゃん」

「……………」

「え、え？ ど、どしたの？」

「ああ、いえ。その、本当に危ないですから、近寄らないほうが賢明ですよ。ヘルちゃん、虫の居所が悪いのかもしれないしね。」
その、ヘルちゃんって。

確か、ニヴルヘイムの女王だよな？

ちゃん付けで呼んでいる時点で、モウちゃんがすごくく見えてくる。

うっん。実際すごいと思う。

だって、だって、目の前で魔法を唱えてたんだものっ。

「わわわ。瞳がすごくく、キラキラしてますねえ」

「え？ そ、そうかなあ」

「ま、それはいいでしょお。とにかく危ないですから、香乃ちゃんも館の外に出てくださあいねえ」

「やだ」

「わがママを言わないで。戦えない香乃ちゃんがいても、わたちにとっては足手まとい。要するに邪魔なだけですう」

「っ」

拒絶されて、わたしの心は折れそうになった。

でも、折れない。なんでだろうね？

だって、モウちゃんは友だちだから。この夢の世界で、初めてできた友だちだから。

「いやだよっ！ モウちゃんは大事な友だちだもん。助けてくれたもん。だから、今度はわたしが何とかしたいの」

「はあ。後で痛い目に遭っても、わたちは知りませんよう」

カキーン。鋭い金属音が聞こえる。

モウちゃんを先頭にわたしたちは二階に上がり、女王の間を見下ろせる場所にやってきた。

吹き抜けの転落防止用の手すりをつかみ、身を乗り出して、そこで少女と青年が戦っているのを目撃する。

「……………」

「く、な、もう止めるんだ！」

少女は大鎌を担ぎ、青年は剣を手にして、激しく打ち合っていた。その傍らには、男の子や女の子、ゴリマッチョな男性に、キレイな服を着てる女の人が　血みどろで倒れている。

「随分と派手にやらかしましたねえ。あそこに倒れてるきらびやかな女性、バルドルの奥さんじゃないですかあ」

隣のモウちゃんはこんな光景を目の当たりにしても、平然としている。

わたしは膝が震えてて、へたばっちゃって、逃げたくてもできないよつ。

「だいじょうぶですかあ？　深く息を吸って、吐いてを繰り返してください」

「は、はあ、ふう、はあ、ふう」

背中をさすってくれるモウちゃんの手が心地いい。

「落ち着きましたかあ？」

「な、なんとか……………」

人の死体を見たのは、初めてだった。

あまりの気味悪さに、涙がこぼれてる。

左胸を手で押さえて、ドキドキが静まるように深呼吸した。

これ、夢なの？

そう思えるほど、リアルな衝撃だった。これで目覚めないなんて、どうかしてる。

「だから、来ないほうがいいと言ったんですう。でもまあ、いつかは骸骨さんとかと触れ合うんですしい。免疫めんえきがついたと思えば、ケガの功名かもしれませんねえ」

うう。気持ちが悪くて吐き気がする。

「ん〜。あ、そだ。わたちに何かあるといけませんしい、これを預かってくださいねえ」

「え？」

モウちゃんはガルの乳歯の首飾りを、わたしにかけてくれた。
「さて、長引くとあの方が憤激しますしねえ。さつさと終わらせま
しよお」

モウちゃんは大きな筆を両手に構え、手すりの上に飛び乗り、一
階へと降り立った。

「ぬっ？ な、新手か」

「ヘルちゃあん、いい加減にしたほうがいいですよ」

「……………」
四つん這いになって、わたしはそこで何が起きているかを目視す
る。

男の人が剣を片手に持ち、モウちゃんをにらんでいる。

貴族風な服装と、いかにもイケメンな顔立ち。どこかの王子様か
な？

一方、ついさつきまでその青年と戦っていた少女は、紫のワンピース
という薄着で、左手に持つ大鎌を左肩に担いで小休止している。
汗で湿った赤みがかった長い紫の髪を指でとかしながら、青紫の
瞳でモウちゃんを凝視してた。

「……………失せろ」

「それはできません〜ん。ヘルちゃん、後でどうなっても知りませ
んよう？」

「……………」

ヘルと呼ばれた少女は不意に、大鎌をモウちゃんへと投げた。

「あらよ〜つと。ほいつ」

筆の背にあるひもをその柄えに通して、モウちゃんは飛んできた大
鎌を器用にキャッチしてみせた。

それを頭上でブンブンと振り回して、遠心力で勢いが増したそれ
を男の人へと投じる。

「な、ぐっ!？」

間一髪、男の人はしゃがんでそれを回避した。

大鎌は石柱に深く突き刺さってしまった。

「そ、そなたも私を屠るといふのか」

「別にいい？ あんまり揉めすぎるとう、あの方が憤激してえ、しばらくの間はビクビクしなくちゃならないのがあ、わたちは我慢ならぬんですよ」

「あの方？ 誰だ、そこにいるヘルではないのか」

「さあ？ 誰でしょおねえ」

モウちゃんはすつとぼけながら、筆先を男の人へ向けた。

「……手を出すな」

「あのねえ、ヘルちゃんから吹っかけてきたんでしょお？ でしたら大鎌を投げないでくださあゝい。ケガしたらどうするんですかあ」

「……………」

あの子、ヘルで間違いなさそうだね。

スタスタと、大鎌の刺さった石柱へと歩み寄るヘル。

「さ、させるものか！」

男の人はヘルに斬りかかった。

ヘルは刃を右腕で受け止めて、苦痛に顔をしかめる。

「な、なんだと？」

「……………はっ」

ヘルは男の人を蹴飛ばした。

その拍子で剣は赤いカーペットの上に落ち、男の人は石の壁にめり込んだ。

「ぐ、こ、これしきのことだ」

「……………」

無言のまま、ヘルは左手だけで大鎌を引き抜く。

それによって石柱はガラガラと崩れ落ち、あたりに塵が舞った。

「こ、このままやられてなるものか」

「“シャットアウト”」

逃げ出そうとする男の人を見て、モウちゃんはまたその魔法を唱えた。

男の人はバンバンと見えない何かを叩いている。

「な、くそつ。空間に壁を作り出したのか」

「ヘルちゃん。これぐらいの支援はいいでしょお？」

「……………（こくり）」

静かにうなづいて、舌なめずりするヘル。

「あらら。目がイッチャってますねえ」

モウちゃんはその場に見切りをつけ、膝を曲げて、高く跳躍する。へやうじつ

「よよつと」

そうして手すりの上に足を乗せ、そこからぴよんと飛び降り、わたしのところに戻ってきた。

「香乃ちゃん、だいじょうぶですかあ？」

「あ、うん。でも、男の人は……………」

「気にしないでくださいあい。彼は、ああなる運命なんですう」

モウちゃんは筆を床に落とし、その小さな腕でわたしを抱き締め、両耳を塞いだ。

いきなり何をするのと思ったけど、それは正しかった。

「ぎあああああああああああああああああああああああ
つつつつつ！」

男の人の断末魔がしたから。

「よしよし」

モウちゃんは、小さな身体でわたしを抱きすくめる。

「あ、え、な、なに、が……………？」

「だいじょうぶ。怖くないですよ」

その言葉で、わたしは自分が震えていることに気がついた。

死。

それが、何よりも怖いものだと思ったからだ。

「香乃ちゃん。あなたがなんで死んだのかは存じませんが、なぜで
しょうね」

「え？」

「不思議と、香乃ちゃんからは」

モウちゃんはわたしを突き飛ばした。

ガキインと、強く不快な音がする。

モウちゃんが大筆で、ヘルの大鎌を防いだんだ。

「何をするんですう？ ヘルちゃあん」

「……………」

低い声で冷静に問いかけるモウちゃんとは対照的に、ヘルと呼ばれた少女は全身血だらけで、舌を出して興奮を抑えきれない様子。

その目が、狂気に彩られているような気がした。

「く。ま、まずい」

ヘルと呼ばれた少女はモウちゃんを押し倒して、すかさずわたしへと斬りかかる。

「ひっ!？」

振り上げられる大鎌。

恐怖のあまり、わたしは目を閉じてしまった。

「……………」

ん？ あ、あれっ？ い、痛くないいつ？

「ヘル。誰が、その娘を殺せと命じた？」

心臓が、ドクンとはねた。

恐るおそる、まぶたを上げてみると。

「アルテレイマ様。遅いですよう」

眼前に、赤のワンピースを着こなした女の子が立っていた。

振り乱される、つややかで長い紫の髪。

その周囲には鮮やかなすみれ色の布が浮いててね。それが、ヘルをがんじがらめにして捕らえていた。

「済まぬ。少々寝入っていたものでな。それはそうと、ヘルや」

「……………」

ヘルは布によって投げ捨てられ、一階にある玉座の後ろの壁にめり込んだ。

地震でいうと、震度いくつなんだろうね。それぐらいの地響きが

した。

「おいたが過ぎる。これからお仕置きしてやるつぞ」

「あれま。じゃあわたちは、香乃ちゃんを連れて広間に行ってますねえ」

「うむ。その娘はわらわが呼んだ客人。ゆえに、丁重にもてなしたもれ」

モウちゃんとアルテレイマと呼ばれた少女が擦れ違つた。

アルテレイマはヘルの下へ、モウちゃんは腰が抜けてるわたしをおんぶして、あるところへと連れてつてくれた。

すつごく広い食堂に案内されて、わたしとモウちゃんは席に着いて、さっきの女の子を待っている。

とりあえず、わたしは首飾りをモウちゃんに返却しておいた。

「ありや。まだ付けててもよかつたんですけど」

「そういうわけにはいかないよ。それよりも、ここさ。汚いよね」

長いテーブル。それにかけられたクロスも、端のほうがボロボロで擦りきれてる。

これじゃ、いい気分で食事できないよ。

「はあ。しょうがないんです。掃除してるの、骸骨さんばかりですからあ」

「ひいっ!？」

びっくりして、わたしは隣のモウちゃんに抱きついた。

まださっきので心臓がバクバクいつてるのに、立て続けに驚かされてめまいがしたよ。

「ありや。いつもながら、新鮮ですねえ。ミドガルズとかで亡くなつたお子さんとかは、いつもあれ見て泣くんですよ」

メイド服を着たガイコツが、ほうきとちりとりを持って掃除してる。

「な、な、なにあれ」

「ですから、骸骨さんですう。メイド服を着てるのばかりですけど、元は女の人の骨なので問題ありません」
「そうじゃない。そうじゃないんだよつ。」

わたしが言ってるのは、どうしてガイコツが動いているの？
マンガとかアニメとか映画とかゲームとかで、ゾンビとかアンデッドとか、見慣れてはいるよ？

でも、実際に現物を見たら、恐怖で直視できない。
理科室で見た骨の標本より怖いって。だって、だって、服着てるし動いてるもんつ。

「あわわわわわわつ」
「だ、だいじょぶですよ。ここの骸骨さんは、人を襲ったりしませんからあ」

「いやいやいやいやつ。なんで、なあぐんで崩れずに動けてるの？ どうして？ うえええええ？ うつわあゝ」

「お、落ち着きましよお。確かに崩れないのは気になるでしょおけどう、それは屍術ネクロマンシーによって成立してるんですう。要するに、魔術ですよお」

「まじゆつ？」
気になる単語が出て、冷静になるわたし。
モウちゃんから離れて、続きに耳を傾けた。かたむ

「ええ。かくいうわたちも、空術師デイトレイクトですからつ」
えっへんと、ない胸を張るモウちゃん。ギリでBかなあ。

「でいむ、でいくと？」
「んゝ。簡単に言えば『次元に魔法を書き取る者』ですかねえ」
「ふえ？」

「あゝ、理解できてない顔してますねえ。説明しましょうかあ？」
「う、うん。お願い」

「はあい。じゃあ、簡潔に述べましょう。先刻唱えた“シャットアウト”のように、空間に対して干渉する魔法を唱えたり、筆やら羽根ペン、彫刻刀などを用いて、空間もしくは無生物である小物に魔

法を描いたり刻んだりする者を、俗に『ディムディクト空術師』と言っんですお

「空間に、魔法を描く？ 小物に、刻む？ ど〜ゆ〜ことなの？」

「ん〜。印章やら刻印の使用方法フォーミュラでは解りづらいでしょう。え

〜と、つまりは魔法陣。召喚などで用いられる魔法陣がありますよねえ？ それは理解できますかあ？」

「う、うん。魔法陣は知ってるよ」

「そおですかあ。魔法陣は通常、平坦なところに書くものです。

その魔法陣は大抵、召喚などの大規模なものに使われることが多いんです。まあ、一部には破壊やら結界、様々な用途に用いることもありますねえ。その魔法陣を簡潔な文字に置き換えてえ、本に書き写したりい、小石などに刻むことでえ、誰でも魔法を使用できるようにするんです」

「え〜と。それはわたしでも？」

「はあい。わたしがそうした代物を提供すれば、の話になりますけどお」

「あ、じゃあわたしは自分で魔法を唱えることはできないんだね」

「はあ。香乃ちゃんが魔法を使えるかどうかは、確かめればいいだけですよ」

「ど、どうやって？」

「あ、それは　とと。アルテレイマ様がやってきましたあ」

モウちゃんは話をそこで切り上げ、出入口のほうを見る。

アルテレイマはすみれ色の布をヘルの首に巻きつけて、彼女をワ
ンちゃんのように扱っていた。

「待たせたのう」

わたしの正面に着席するアルテレイマ。

話をする前に席を立て、わたしは彼女に詰め寄った。

「なんじゃ？」

「ちよつと、それはかわいそうだよ」

わたしはヘルを縛る布を引きはがそうとしたけど、できなかつた。まるで接着剤を使っているかのように、くっついて離れないよ。「ヘルはおいたをした。そちがあれこれと口を出すことではない」「それでも、右腕にケガしてる。これは早く処置しないと、化膿かのうしちゃうよ」「

無言だったヘルは、顔を上げてわたしをまじまじと見つめてる。すぐにハツとなって、目を伏せちゃったけどね。

「やれやれ。小うるさいガキじゃのう。席に戻らぬか」

おばあちゃんのような口調で、わたしに着席を促すアルテレイマ。「いゝやくだつ。この子の手当てが済むまで、わたしは席に戻らないから」

「ふうむ。致し方ない。ヘルや、患部を前に出せ」「……………（こくり）」

少しためらいがあったけど、ヘルはおとなしく右腕を突き出した。そうしたら布がヘルの首から離れて、そこに巻きついて淡い光を放ってる。

「しばらくすれば治癒する。これでよいじゃろう。席に戻るがよろし」

「え？ あ、う、うん」

ヘルの顔を見るとだいじょぶそうなので、わたしは指定席に腰を下ろした。

「さて、自己紹介からじゃな。わらわはニヴルヘイムを統治する者、アルテレイマとゆう」

とつても長い紫の髪は、ほこりだらけで手入れが行き届いてない。毛先が痛んでるのが遠目でもはっきりと分かる。

そのくすんだ紫の目は、何だか眠たそうな印象。こっちまでおやすみしたくなるよ。

「え、なんで？ そっちの子が女王なんじゃないの？」

ヘルのほうを見て、わたしはアルテレイマに聞き返した。

「あ、っと。わたしは若郷香乃です」

アルテレイマにギロツとにらまれたので、意を察したわたしはすぐに名乗った。

「ふうむ。さっきの質問の答えじゃが、隣におるヘルはわらわの代りにすぎぬ。そのほうが何かと都合がよいしろう」

「え？ ど、どくゆゝこと？」

意味が分からないので、隣のモウちゃんを見た。

「はあ。要するに、本当のニヴルヘイムの統治者はアルテレイマ様で、ヘルちゃんは外部に対しての偽装ですう。アルテレイマ様は、ムスペルヘイムというスルトの対極に位置します。あ、そう言っても解りませんよねえ？」

「スルトなら分かるよ。えっと、炎の巨人だよね」

「わお。香乃ちゃんって博識ですねえ。ミドガルスでムスペルヘイムについて知る人なんて、ほとんどいないのにい」

なぜか、モウちゃんにびっくりされる。

そもそも、わたしはミドガルス出身じゃないし。日本生まれで埼玉県民です。

「ふっ」

「あ、アルテレイマ様あ。何かおかしいんですう？」

「いいや」

首を左右に振るアルテレイマ。

うんうんとうなづいた後、半目でわたしをじいつと凝視する。

「香乃といったか。そちは、わらわをアルテレイマと呼んでいいぞ」

「は、はあ」

「ヘルのことと呼び捨てでよい。わらわが許可する」
それを耳にしてヘルが。

「……ちっ」

し、舌打ちをした。

「別によいじやろう。さて、周知させておかねばなるまい。香乃はわらわの大切な客人。ヘルや。香乃に対して下手なことをすれば、先刻の仕置き以上の事をするぞ」

「……(びくつ)」

恐れをなしたヘルは、アルテレイマのほうを向いて涙目になる。

「そのようなことになれば、泣いても許さぬ。覚悟があるなら、香乃をしいたげてみるとよい。楽しみが待っておるぞ」

「……(こくこく)」

「お、脅すなんてよくないよ」

「ふむ？ そのようなつもりはない。こうでも言わぬと、先刻のよう
うにヘルに斬られるやもしれぬぞ。香乃は、それでもいいとゆうか
？」

「そ、それは……嫌かも」

「ふむ。だったら口を挟むでない」

さつきから気になってたんだよね。

「あのさ、客人ってど〜ゆ〜意味？」

「ようやく、その質問か」

やれやれと、溜息をつくアルテレイマ。

「香乃、お前を生きた状態でニヴル Heim に導いたのは この、
わらわじゃ」

「は？」

「ふむ？ こう言えばすぐに理解できると思ったのじゃが、どうし
て小首を傾げる？」

「い、言ってる意味が分からないの」

「なるほど。しかし、わらわは事実だけを述べている。間違いはひ
とつもない。そこだけは理解してほしい」

「り、理解しろって……強引だね」

「仕方あるまい。あれこれと遠回しに言うよりは、飾らずに申すほ
うがよいと思っただからじゃ。まさか裏目に出るとは」

「はあ。つまり、わたしは生きてる状態で死んじゃったの？」

「違う。ニヴル Heim は死者の国じゃが、香乃は例外に当てはまる。
生きておる。まっ、こう言ってもすぐには信じられぬじゃろう」

「えっと、わたし。両足が不自由だったんだけど？ これはどうい

「うごと？」

「単純じゃ。わらわが治してやった」

「は？」

「むう。ここまで言うても、まだ半信半疑か」

「治したって、魔法で？」

「さよう。これで疑問は尽きたか？」

「ううん」

「なら申せ。洗いざらい吐いてみせよ。疑問をひとつずつ潰してやろうぞ」

「なんで、わたしを選んだの？ てか、これって夢？ 悪い夢なら、早く覚めるよね？ だってわたし、病院にいたんだもん」

「わらわがそちを選んだ理由は、ただおもしろそうじゃと思ったからゆえ。それと、これは夢ではない。紛れもない現実じゃ。覚めることはない。永遠に、のう」

「あいたたっ」

「な、何をしておる？」

「夢だって確証が欲しくて、自分で頬をつねったんだよっ。」

「そうしたら、痛い。かなり痛い。どうせ夢だって信じてたから、手加減しなかった自分がうらめしいっ。」

「ゆ、夢じゃ……ないの？」

「うむ」

「ま、マジでっ？」

「………………。どれだけ言えば、信じてもらえるかのう」
もう、充分です。

「夢じゃない。じゃあなんで、わたしはここにいるの？」

「あ、あのさ。アルトレイマは、どうしてわたしを呼んだの？」

「先刻、答えたであろう？」

「いいから。なんで？」

「ふう。何と言うべきかのう。似ている、そう感じたからかもしれぬ」

「似てる？ どこが？」

見た目、確かにあなたとわたしは同じくらいの身長だよ。

実際、わたしは小学六年生でまだ百四十センチだし。

もう少して成長期が来る。そう信じていますっ。

「外見もあるが、それだけではない。まっ、感覚といったところかのう」

「か」

「か？」

「帰してよっ！ わたしを、元いた世界に！」

バンツとテーブルを叩いて、わたしはそう主張した。

でも、アルトレイマは顔色ひとつ変えない。

「無理じゃ。こちらに召喚した以上、戻ることは叶わぬ」

「うそっ！ ぜっつたいにうそだ！」

「嘘ではない。諦めよ」

諦める？ 嫌だよ。絶対に認めない。

「むう。その目は、否が応でも戻りたい。そう言いたげな目をして
おる」

「分かってるなら、そうしてよ。早く、ねえっ！ お母さんとお父
さんのいるところへわたしを帰してよっ！」

「何度も言わせるでない。不可能じゃ。こちらにいる以上、香乃。

お前は従わなくてはならない」

「な、何に……？」

「わらわにじゃ」

だったら、わたしひとりで見つけるよ。こちらに呼べる方法があるなら、戻る方法だって必ずあるはず。

「ふっ。無駄じゃ。香乃、お前は戻れない」

「うるさいっ！」

気づいたら、泣いていた。

認めたくないよ。だって、だって、わたしは足が不自由だったけど、向こうの世界で暮らしてたんだ。

どうして、どうして急にこっちに呼ばれなくちゃならないの？
勝手すぎるよ。なんでそんなことするのっ!？

「案ずるな。悪いようにはせん。香乃、そなたは　　と。こりゃ、
泣き止むまで話は中断せざるをえぬな」

テールブルクロスが、涙でぐちゃぐちゃになってた。

わたしはモウちゃんに背中をさすられ、なぐさめられたりはげま
されたりして、少しだけ落ち着きを取り戻している。

パジャマの袖で涙をふいてから、わたしは顔を上げた。

「ところで、モーズグズ。香乃に魔法談義をしたようじゃが」

「はあい。わたしは、自分が空術師^{デイト}であることを伝えましたが。何
か問題でも？」

「よい。モーズグズ。ヘルがバルドルを屠ったことはこの館では周
知。しかし、しばらくは外には漏らすな。香乃も同じであるぞ」
それにはうなづくしかない。

「承知しました。ですが、アーシルが何もしてこないとは限りませ
んよう？　バルドルが消滅したことを知られでもしたら、それこそ
戦争ですう。ニヴルヘイムの平穏が破られる可能性もあるのであ
？」

「案ずるな。洞窟の入口から先は、オーデインの館にある『世界を
見通す高座』^{フリススキャルヴ}でも見通せぬよう結界を施してある。心配はいらぬさ」
「さいですか」

さっきの男の人は、バルドルっていうんだ。

ん？　あれ、なんかおかしくない？

「どうした？　香乃、水でも必要か」

手を上げてガイコツを呼ぼうとしたアルトレイマを、わたしは首
を振って止める。

「い、いいよ。それより、さっきバルドルって人が……違うか。神
様が、亡くなったの？」

「そうじゃ。ヘルが屠って消滅してある。それがどうかしたかのう？」

「おかしくない？ しばらく経ってから、他の神様がバルドルを迎えに来るんじゃないかなかったっけ？」

わたしの発言で、周囲がどよめいた。

気づいたら、ガイコツだけでなく、大勢の人がここをのぞき込んでいる。

「ほう？ 香乃、お前は何か知っておるようじゃな。存分に述べよ。わらわが傾聴してやるぞ」

アルトレイマは手で皆を制して、わたしの発言を促す。

何か引つかかるけど、わたしは自分で調べた北欧神話の知識を話してみた。

「え〜っと。確かバルドルって、ロキにだまされたホズが、宿り木の若木を投げたせいで死んでしまい、それでニヴルヘイムに来るんだよね？」

「……ちっ」

ヘルはわたしをにらんで舌打ちをした。

近くにアルトレイマがいるからか、それほど威圧感はなかった。

「そういえば、ヘルってロキの娘さんだったっけ」

「……父を呼び捨てにするな」

「あ、ごめん。それで怒ってたんだ」

「ヘル。よいではないか。香乃の言葉に耳を傾けよ。おもしろいことが聞けそうじゃぞ」

おもしろい？ わたしにとっては、この世界の行く末が分かること自体、気味が悪くてしょうがない。

「え〜っとね。それから数日後に、ヘルモーズってアース神族がスレイプニルっていう馬を駆って、ここに来るはずなんだよね」

頭を抱えながら言ってみると、ザワザワとした反応があった。

「ふむふむ。して、次は？」

「ヘルモーズがヘルにバルドルを連れ戻したいと交渉するんだけど、

それは口キによって失敗するんだよね」

「ほう？　しかし、もうバルドルはおらぬ。香乃、お前の予言は外れておるなあ」

予言？　違う。わたしはこの世界の出来事を、知識を、病室で本を読んだりネットで検索したりして知ったんだ。

「そうだね。でも、そこ以外は当たつてると思う」

「ふむ？　バルドルの消滅以外が、か？」

「うん」

「その根拠は？」

根拠？　そんなものないよ。だってあなたはさっき、これは予言だと言ったじゃない。

さっき話したことはこの世界にとって、わたしが作ったウソではないんだよ？

「ほえ」。凄いですねえ。香乃ちゃん、実は巫女さんだったんですかあ？

「ち、違うよ」

「ふえ？　じゃあ、なんで未来について事細かに知ってるんですかあ？」

モウちゃんは、わたしの言葉を信じているようだ。

「なるほど。わらわと同じ、夢見の能力か？」

「　ゆめみ？」

「自覚しておらぬだけで、夢で世界の未来を見通している。巫女が持ちうる能力のひとつじゃ。そうした予知能力が香乃にはあるのじやろつて」

「ほえ」

感心しているモウちゃん。

わたしのフォローをしたアルトレイマは、どこか満足げ。

「香乃ちゃんは巫女さんなんですねえ」

巫女さんていうと、どうも神社を思い出す。

でも、この世界では巫女の意味が違う。わたしはそれに合わせた

ほうがよさそうだ。

「うん。多分、そうなのかも」

「ほえ」

もしかしたら、アルテレイマは未来を知りたくてわたしを呼んだのかな？

違うよね。そんな単純な理由で、わたしを召喚したとは思えない。だって、もう歴史が変わっている。バルドルが二度死んだなんてわたしの北欧神話の知識にはないもの。

じゃあいつたい何を目的に？ アルテレイマって子の考えは、そう簡単に読み取れるものじゃなさそうだ。

「あの。ひとついい？」

「ふむ？ よいぞ」

それ以前に、わたしはあなたを知らない。

アルテレイマという、ニヴルヘイムの真の女王を。

「あの、アルテレイマは……いつからここにいたの？」

「アーシルによる世界創造以前から。わらわは生まれながらにして、ニヴルヘイムにおる。スルトがムスペルヘイムの長であるように、わらわはここニヴルヘイムの長である。一応言っておくが、スルトのほうもわらわを知っておるぞ」

「そ、そう……」

自信を持って答えられたら、それが事実だと受け入れるしかない。

「ん。アルテレイマ様、ひとつ疑問があるんです」

「なんじゃ？ モーズグズ」

拳手したモウちゃんは、隣にいるわたしの顔を見ながらこう質問した。

「香乃ちゃん。明らかにミドガルズ独特の臭いがしないんですね。それに、名前がミドガルズ内ではありえないというか。いったいどこから呼んだんです？」

「先刻申したであろう？ 香乃は、わらわの客人じゃと。どこから来たのか、どうでもよいではないか」

「はあ。さいですか」

「だろうね。言っても理解してもらえないだろうし。」

「それともうひとつ。香乃ちゃんが言っていましたよねえ？ ヘルモ

ーズが、スレイプニルを駆つてここに来ると」

「そうじゃったな。もしその話が本当ならば、手を打たねばなるまい。モーズグズ。彼奴ら（きやつ）が来たら迎え撃て」

「迎撃しろと？ はあ、これは意外な申しつけですねえ。神族の来訪者は、丁重にもてなせと以前からおっしゃっていたのに」

「ふつ。丁重に殺せと訂正しよう。追いついていただけでもよい。できるなら、スレイプニルは生け捕りにしろ。荷が重いと感じたなら、ガルム（しえき）を使役しても構わぬ」

「重要事項を、淡々（たんたん）と述べないでください」

「ふつ。それでも理解はできたであろう？」

「ん。はい」

今聞き取ったことを頭の中で整理してから、モウちゃんはうなづいた。

「んや。ふたりとも、疑問は尽きたか？」

「ま、まだ。だけど、今日はこれぐらいにする」

「今日？ ああ、そういう感覚が抜けきらぬか」

「な、何が言いたいの」

「いや。ニヴル Heim には朝昼晩の概念がない。常に白夜であるゆえ。眠たくなれば寝て、腹が空けば食べる。自身の体内時計にしたがつて生活するとよい。さあ、わらわが香乃のために用意した部屋へ案内してやろうぞ」

「嫌だよ。こんなとこ、恐ろしくて住めない」

「ふうむ？ この館にはいたくないと申すか。それは難儀じゃのう。他に住むところなど、ニヴル Heim ではそう多くないとゆつのに」

「も、モウちゃんのところにお世話になるもん」

「モーズグズの小屋でか？」

わたしがそう意見すると、アルトレイマはモウちゃんをにらむ。

「う。まさか、断れとおっしゃるつもりじゃ」

「いいや。モーズグズ、香乃の面倒を見てやれ」

「え？ え、えっ？ い、いいんですかあ？」

「ふむ？ その様子から察するに、モーズグズは香乃と一緒にいた
いようじゃな」

「ま、まあ……その、ひとりでさみしいとは思ってましたよう？」

「いつつも外ばかり眺めてるので、退屈でしょうがなかったんです」

「さようか。なら、香乃。モーズグズの言うことをきちんと聞いて、
生活するがよい」

「な、なんか裏がありそう。」

「疑いの眼差しを向けていたら、アルテイマはこうも言う。」

「生活必需品などは、庭にある倉庫から自由に持ち出すとよい。一
度あいさつすれば、番をする者も香乃の顔を覚えるしう。必ず立
ち寄るように」

「うん。なあんか、うさんくさいんだよねえ。」

「ふうむ？ 何か、浮かない顔をしてるようじゃが」

「なんで、わたしだけ特別扱いするの？ わたしは、一応人間だよ
？」

「わらわの客人。ただそれだけで特別視されるのが不愉快か？」

「そ、そうだよ。だって、普段ここにいる人は……」

「まあ、よろしくない生活をしているのは確かじゃ。しかし、香乃
にこの慣習を口出しする権限はない。たとえ、わらわの客人でも
じゃ」

「最後のほうだけ、強調されたのが気になる。」

「話はこれで終わりじゃ。また何かあったらここを訪れるがよい。
向こうの彼奴らも、香乃の顔を覚えたからな」

アルテイマが指差したほうを見ると、ガイコツの群れが近くに
いて うきやあつ。

「あ、あいたたた」

びっくりして、イスから転げ落ちちゃったよ。

「ぷつ。あつははははははははははっ！ これはこれは愉快じゃ。新鮮な反応を見せてくれたわい」

「わ、わざと……？」

ふと、後頭部に温かいものが触れていた。

それは、モウちゃんのおっぱいだっただ。

「あうっ。アルトレイマ様、わたちまで事故に巻き込まれましたよう」

「どうやら、わたしを助けようとしたモウちゃんも転んじやったみたい。」

「あり？ あ、反物たんものが守つてくれたんですね」

モウちゃんの言うように、わたしたちは布によつて宙に浮いていた。

「助かりましたあ」

「あ、ありがとう」

「いや。大事な客人けがに怪我でもされたら困る。先刻はからかつて済まなかった」

地に足をつけ、わたしとモウちゃんは倒れたイスを戻す。

布はアルトレイマのほうに戻り、彼女の身体に巻きついた。

「ヘルのケガは？」

「案ずるな。もう治つておる」

「あ、ほんとだ」

傷はきちんと塞がつてた。

てかそれつて、布じゃなくて和服とかに使われる反物だったんだね。モウちゃんの発言で知つたよ。

「さて、この場はお開きとしよう。モーズグズ。香乃を倉庫へ案内した後、小屋に戻るがよい」

「はい」

館の外にある倉庫についた。

けれども、なんかやだっ。

わたしはモウちゃんの背中にくっついて、ガクガクブルブルと震えている。

「どうしましたあ？」

「だ、だって」

倉庫を守ってる番人が、が、が、ガイコツ剣士なんだもんっ！

腕が何本もあるしっ。

もうやだよ。館内で見慣れたよねとか言われても、怖いものは怖いもん。しょうがないじゃんっ。

動く骨なんて作り話で、学校の怪談だけって思ってたんだもん。

「はあ。近くにはワンちゃんもいますよう？」

「あれはワンちゃんじゃないよっ！」

だって、あれ。『ドラクエ』とかで見る、アニマルゾンビっぽいじゃん。

血だらけだし、目が飛び出てるし、肉がただれて、骨が見えてるしっ。

見た目がとんでもなく怖い犬なんて、可愛いはずないよっ。

ガイコツ剣士もそうだけどさ。もしかしてこれら、『ドラクエ』を参考にしてるとしか思えないほど似てる。いや、マジで。

「だって、ああいうのがいないと倉庫を荒らす人が出てしまうので警備を厳重にしないとイケないんですよう？」

分かります。ええ、分かりますとも。

でもね？ あれは、お化け屋敷とか苦手な人が見たら、泣くよ？ 犬とか大好きな、動物愛好家さんが見たら、気を失っちゃうよ？ だって、怖いもん。それしか言っていないけどさ、現物を見たら、マジでビビるって。

「いいから行きましようよう。ここで時間を費やしていたらあ、ヘルモーズを迎撃するのに必要な準備が整いませえん」

「あ、あ、うん。そだね」

カタコトな返事をして、わたしとモウちゃんは倉庫の番人にあい

さつをした。

『何用だ？』

うわ、しゃべれるの？ 喉^{のど}とか、声帯がないのに。

「アルテレイマ様の命で、香乃ちゃんが必要とするものを持ち出したいのですが」

『そうか。また何か、ヒマ潰しの道具でも求めに来たと思っただんだが……』

「私たちは、いつも小屋で見張ってるんですよ？ 今は留守にしておいて、ガルムが寝てるか暴れてるでしょうけど。あの子の面倒を見るのは骨が折れるんですよ」

『そうか。われらもヘマをすれば、ガルムかニースヘッグの餌になるからな。さあ、通るがいい。好きなだけ持ち出すんだ。ただし、われらは骨ゆえ。重いものは持てん。持ち場を離れるわけにもいかん。自分達が持てる範囲で』

「はいはい。いつもながら、くどいですう」

モウちゃんが制すと、ガイコツ剣士は『むう』と不満気な反応を示した。

「し、失礼します」

モウちゃんが倉庫の戸を開け放ち、わたしを手招きする。

「え」

わたしはそこに入って、びっくりした。

「なんで、わたしの私物がここにあるの？」

病室でわたしが使っていた物が、家でわたしが使っていた物が、なぜかダンボールに入れられている。

「あ、これは……」

倉庫に入っただけ、わたしは病室で使ってたノートパソコンを発見した。

これは使い物にならないと思い、ここに放置。

「何かの盾ですかあ？ 金属製みたいですし。頑丈そうですねえ」

「モウちゃん、それは乱暴に扱わないで。壊れやすいから」

「は、はあ。とりあえずわたちは、違つところで適当に物あさりしてるんでえ」

「うん。わたしは自分の私物から、使えそうなのを探しておくよ」
わたしはダンボールの中から、一着のワンピースを手にする。

ランドセルは、ないね。ケータイ電話とゲーム機とかは 使えそうにないので放置。だって、電気ないじゃん。

「あ」

もうすぐ中学生だったってこともあり、運動着とかを入れる大きめのバッグを買ってもらってたんだよね。

これは使えそうだし、これに物を詰め込もう。

「あれ？」

服をいくつか詰め込んでから気づく。

「スニーカーだ。スリッパじゃ不便だし、これに履き替えよ」

こつちのほう動きやすいし、足のケガも防げる。スリッパはダンボールに入れとこう。

「お」

わたしはダンボールの横に花ビンを見つけた。

差してある花はすでに枯れていて、水のほうも少しこぼれている。

「中に、ビー玉がある」

お母さんが花を生ける時、花が傾かないように入れていたものだ。

わたしは水を捨てて、花ビンからビー玉を取り出した。

「わおう。キレイな宝石ですねえ。これ、何て言うんですかあ？」

「ビー玉」

「びいだま？ なるへそ。これ、魔法を込める小物として使えそうですねえ」

「え。そうなの？」

「はあい。わたしはこんな小さな物にも、きちんと魔法を込めることが出来ますう。微弱だけど有効な魔法が込められそうですう」

「へえ。そうなんだ」

もう必要なものはなとそうなので　って、いい物を見つけたよ。
うん。これがあれば、モウちゃんのひま潰しに貢献できるはずだ。

第2話

《モーズグズの小屋 若郷香乃》

「あゝ、また負けてしまいましたあ」

「ルールは覚えたでしょ？」

「はい。次は負けませんよう」

わたしとモウちゃんは毛布に包まりながらイスに座って、机の上でオセロをしている。

ほんとはすぐに私服に着替えたかったんだけど、モウちゃんがそれを見つけて大はしゃぎ。

なので、連戦です。ちなみに、わたしは連勝街道まっしぐら。

でもね。驚かされるのは、モウちゃんの上達の早さだ。

最初は勝手が分からず、盤上のほとんどが白か黒の単色になっていた。

今の勝負は、わずかな差で勝てた。もう一度勝負したら、どうなることやら。

「おもしろいボードゲームですねえ。香乃ちゃんがいた世界では流行っていたんですかあ？」

「い、一部の人にね」

「ふん」

くうづうづうづうづう。

「ありやりや」

「あう」

ちなみに、ふたり同時にお腹が鳴りました。

「そういえば、ご飯目当てで館に行ったのに、なあんにも食べてませんねえ」

「そ、そだね」

顔が真っ赤だよ。モウちゃんとわたし、恥ずかしくて目をそらし

ちゃった。

「ん〜。じゃあ、すぐに何か作りますねえ」

「あれ、ここで料理するの？ キッチンないじゃん」

「そうですね、見てくださいよう」

モウちゃんは席を立ち、毛布をたたんでベッドの上に投げる。わたしのバッグがそれを被った。

しゃがんでから、モウちゃんは戸の近くにある床板を外す。

その床下収納から大きなツボ、鍋に木のへら、食器とスプーンを二組取り出した。

気になったので、わたしはそれを指差して訊ねる。

「なに、それ？」

「^{えんぱく}燕麦の入った壺です」

「はあ。えつと、えんぱく？」

「麦の一種ですよ」

こつちの世界では、そういうものを食べてるんだ。へえ。

「これでオートミールを作りますから、待っててくださいねえ」

「ん？ おうとみいる？」

「あれ、知らないんですかあ？」

「う、うん」

「だいじょうぶですう。おいしいですからあ」

よく分かんないけど、モウちゃんを信じよう。うん。

赤い文字が書かれた丸い木版の上に鍋を置き、モウちゃんはそそくさと外に飛び出した。

すぐに戻ってきて、ボタンと戸を閉める。

どうやら、水を汲みに行ってたらしい。

手にした木の桶ふたつに水が満たされてるからね。

「これで燕麦を洗わないとお」

木の桶にえんぱくを入れて、米を研ぐように念入りに洗う。

「それ、わたしがやるうか？」

「いえいえ。川の水は恐ろしく冷たいので、凍傷を起こしますよう

「？」

「そ、そんなに冷たいの？」

「冗談ですう。香乃ちゃんは見てるだけでいいので、少々お待ちを」

洗ったえんばくを手ですくって入れて、片方の桶の水を鍋に注ぎ、それに手をかざして何かブツブツと唱えている。

すると、木板の赤い文字が急に輝き出した。

「それって、もしかして印章？」

「ええ。火の印章ですう。炎こそ出ませんけど、熱だけを出すようにしてありますから。ご安心を」

それで鍋を煮立てて、木のへらで中身をかき混ぜている。

「ん。ヤギのミルクと砂糖を少し足しましょう」

モウちゃんは四つん這いになって、床下収納を「ごそごそ」とあさる。

あらら。

「ではでは、入れちゃいましょう」

それらが入った小ビンを手にして、どばどばと注いで大ざっぱに調理してる。

一応、言っておこうかな。

「モウちゃん、それ取る時に下着が見えたよ」

「はっつっ！」

直後、モウちゃんは頬を赤くする。

「あ、あ、いえ、そのう」

「まあ、わたしは平気だよ？ うん」

「っ、次からは気をつけますう」

机の上を片付けて、自分の席に座り、手を合わせる。

「いただきます」

「はあい。いただきますあす」

その音頭を取った後、わたしたちはスプーンを手にした。

献立はオートミール。そんだけです。

わたしはそれを一口頬張った。

「あ、甘いね」

「はい。オートミールは少し甘めにしてあります」

うん、できればもうちよつと食べたいなあ。

お肉とかお魚とかお野菜とか。そういうので、がっつりお腹を満たしたい。

病院食は栄養を考えて作られてたけど、育ち盛りのわたしから言わせると、量が少なかつたんだよね。

「ん？ 香乃ちゃん、何だか物足りなさそうな顔してますねえ」

「そ、そんなことないよ」

「じゃあ、リンゴを追加でいただきますよ」

モウちゃんは席を立ち、トコトコと床下収納へ向かう。今度はわたしの目線に気をつけて屈み、そこから赤いリンゴをひとつ取り出した。

「受け取ってくださいねえ」

モウちゃんはそれをわたしに投げてくる。

「わっ」と

何とかキャッチに成功。ふう、いきなり投げてこないでよっ。

「ひんやりしてるね」

「はい。しっかり熟してるので、おいしいですよ」

真っ赤なりんご。それを手で軽く磨いてから一口かじった。

席に戻ったモウちゃんは、オートミールを食べ進めてる。

「あのさ、モウちゃんはいつもこういうの食べてるの？」

「はい。もう少し贅沢ぜいたくして、お肉とかお魚とか食べたいんですけど。アルテレイマ様、たまあにしかそういうごちそうを出さないんですよねえ」

「そうなんだ。備蓄してるのかなあ」

「そんなには。死者が持ち込んでくる食料をいただいたり、後はご自身で買い物に出かけたりしてます」

「ふ〜ん」

つて。

「で、出かけたりしてるの？」

「え、ええ。董がいたうの外套を羽織って、ミドガルズやヨツンヘイムに外出して、食料や備品を買いそろえたりするんですよ。忽然こっぜんといなくなるから、わたち達が行方不明だつて騒いだりする時もあるんですよねえ。まったく、出かける時は一言伝えるか、紙に書いて知らせればいいのにい。館をオーデインとかに見通されるのは嫌だつて言うくせに、最低限の支度だけして出かけるから、本当に困るんですよ」

「ご立腹なモウちゃん。」

それはそうと、重要なことがひとつあったね。

オセロばっかやってて、すっかり忘れてたよ。

「ところでさ、モウちゃん」

「ん〜？」

「ヘルモーズのこと、どうするつもりなの？」

「はあ。それですか。問題ありません。後は小道具を作るだけですからあ」

「小道具？」

「はあい。香乃ちゃんが持つてるびいだま。万が一のために、それらに魔法を込めておこうと思っんですよあ」

「どうして？」

「何せ相手はアーシル。驕おしり高ぶつて失敗なんてできません。ガラムを使役しても構わないとお達しがありました。ガラムはわたちの言うことを確実に聞いてくれるわけでもないの。だったら、自分でできる準備はきちんとしておかなくては。もしわたちがやられてもだいじょぶなように、香乃ちゃんには護身用にそれを所持しててほしいんですよ」

モウちゃんが、やられる？

それは、すっごい嫌だと思った。

「わたしにも、何かできないかな？」

「言うと思いましたが。ヘルちゃんを止めようとする時から解つてましたけど、香乃ちゃんは危険を顧みず行動しますよねえ」

「い、いけないの？」

「いいえ。とつてもうれいんです」

にこやかな笑顔。

モウちゃんは、この世界で初めてできた友だち。

だから、守りたい。でも、わたしにできることは限られている。

「危ないですから、香乃ちゃんは手を出さないでくださいねえ」

「え、でもさ。何か、手伝えることはないの？」

「ん〜。言つても聞かなそうですし、解りましたあ」

「な、何をすればいいの？」

「とりあえず今は、ご飯を完食しましよおう」

「よいしょっ。では、びいだまに魔法を込めるんですけど、どの属性にしますう？」

「え。属性を選べるの？」

「はあい」

モウちゃんはイスに腰かけて、机の上に並べた道具を整理している。

色とりどりの液体が入った小ビンは、印章を描く際に必要なインクだったんだね。

花ビンに差した筆をひとつ左手に取り、にこにこと返答を待っている。

「じゃあ、ビー玉の色に合わせて属性を込めるのは？」

ベッドに腰かけて毛布に包まりながらわたしは、モウちゃんにその提案してみた。

「なるへそ〜。そのほうが覚えやすいですねえ。解りましたあ。赤は火、黄は土、水色は水、青は氷、緑は風、白は音、黒は重にして

おきますけど、いいですかあ？」

「うん、うん。他に属性は何があるの？」

「え〜っと。まだ使ってないのは、^{だいたい}橙ですねえ。雷属性が入ります」

「後さ、青いインクと紫のインク。これは水属性と氷属性でいいの？」

「はあい。びいだまとインクの色は一致してませんが、香乃ちゃん。この組み合わせは気に入りませんでしたかあ？」

「うん、うんうん」

「そうですねえ。じゃあ、透明なのに雷属性を入れますけど、いいですよねえ？」

「うん。それでいいよ」

「はあい」

「そういえばさ。モウちゃんは、どの属性が使いこなせるの？」

「わたしはもつぱら、重と闇ですかねえ」

「じゅう？」

「あ、それは重力のことですよ。ちなみに、私たちは攻撃魔法は使えないのでえ。あしからずう」

「使えないの？ じゃあ、攻撃魔法は込めるのは難しかったりする？」

「そんなことはありませんよう。使える魔法だけ込める専門家もいらっしやいますが、わたちの場合は攻撃力がとぼしいので、それを補うために罫とか小物を作ってるんです」

「ふ〜ん」

魔法に関して興味があるので、わたしはモウちゃんからいろいろ聞いてみたい。

でも、今は邪魔になるだけだしね。しばらくは控えましょ。

「びいだま。たくさんありますねえ。これだけあれば、戦術の幅も広がりそうですねえ」

「戦術？」

「はい。では作業に取りかかるので、少々お待ちを」
待っている間、わたしは退屈なんだよね。

「ねえ、手伝えることない？」

「ん〜。でしたら、香乃ちゃんが　ああ、いえ。なんでもありません」

「え？　ど、どうしたの？」

「なんでもないですよ。香乃ちゃんは、もうそろそろおやすみになったほうがいいと思います」

モウちゃん、びんぼう揺すりしてる。

「ごまかしてない？」

「そんなことは。ただ、普段いつもひとりで作業してるので。他の人がいるとかえって集中できないというか　あ、別に香乃ちゃんが邪魔というわけではないですよ？」

そっか。なら、わたしはおとなしくおやすみしよう。

今日だけでいろいろあったし。正直、混乱してるところがある。それにモウちゃん。ちょっとイライラしてるみたいだし。

「分かった。わたし、ここのベッドで寝るけどいい？」

「はい。わたしはしばらく作業してるので、ごゆっくりどうぞ」
「うん。ありがと」

靴を脱いで、毛布を被ってたバッグを下に置き、横になって毛布に包まる。

「おやすみなさい」

「はい。おやすみです」

《モーズグズの小屋》

魔法のビー玉を創り終えてすぐ、モーズグズはある気配に気がついた。
窓から外を眺めると、橋を渡る影がひとつ。

「馬？ それに、誰かが乗ってますねえ」

乗馬。それだけであれが誰なのか察しがつく。

「仕方ありませんねえ」

ありやま、到着が早い。準備が万全じゃないよお。

うう、眠い。焦点がちょっとずれてるう。

「香乃ちゃん……」

こんな状態で戦えるのか、不安になるモーズグズ。

彼女は香乃の寝顔を見て、ほっと胸を撫で下ろした。

(わたちが、守ってあげますからねえ)

小瓶をベルトに取りつけて、それを腰に巻く。それから大筆を左手に握り締める。

外に出る前に、モーズグズは小屋内の灯石の光を絶った。

「ん〜？」

いつものふうを装い、モーズグズは橋のほうへと歩いていく。

パカラパカラッ。馬の足音が多い。

それもそのはず。眼前にいる灰色の馬は、八つの脚を持っていた。

「ん？ なんだ、お前は」

「わたちはモーズグズ。その、黄金の橋ギアラルの番をしている者ですう」

そんな不気味な馬を駆るのは、鉄兜てつかぶとに鎖帷子くさりかたひら、左腰に長剣と短剣たすきを携たずさえているひとりの壮年の男性。

「そうか。ひとつ訊ねたいのだが、バルドル様の行方を知らないか？」

香乃ちゃんの言う通りだ。何もかもが。

ただ、ここに辿り着くまでの日数が異なる。おかげで、作業ペー
スの配分を間違えた。

でもそれは香乃ちゃんのせいじゃない。わたちがいけないんだ。

常日頃から何もせずなまけてて、退屈しのぎしか考えず、こうした戦闘になる事を予期して準備していなかった。わたちが、いけな
いんだ。

「バルドルなら、ここを通過して館に入りましたよう」

「なんだと？ くつ、一足遅かったか」

「そんなに急いでどうしたんですう？」

「む。悪いが、そなたに構っている時間はないのだ」

あくびを我慢して、モーズグズは行動に出た。

「アイソレイト」

「なにっ？」

モーズグズが右手をかざして唱えた魔法は、一瞬で男と馬を分断した。

「シャットアウト」

橋上にいる馬を空間の檻おびに捕らえる。

「な、何をするんだ」

男は川に落ちるも、すぐにそこから這い上がってきた。

「く。スレイプニルが拘束されるとは。貴様、我がフリッグ様の使
いだと知っての狼藉ろうじやくか」

「何のことですか？ それに、言いましたよう。私たちは橋の番を
している、と」

「どついう意味だ。まさか、通さないつもりか」

「まずは名乗ってくださいさあい。女王に謁見えつけんするのであれば、然るベ
き手続きをしないとう」

「ぬ。そうだな。失礼した。我の名前はヘルモーズ。所属はアース
ガルズ。これでいいか？」

「性急ですねえ」

「く。だから、何が言いたいつ！」

モーズグズのあからさまな挑発に、激怒するヘルモーズ。

「不合格。あなたにはこれから、亡くなってもらいますう」

ヘルモーズは長剣を引き抜いて、モーズグズとの距離を詰める。
「今ならまだ間に合うぞ。武器を捨て、我を館まで案内するのだ」

「ここ、ニヴル Heim ですよう？ この習わしにしたがえないのなら、早々におかえりくうださあいなあ」

「小娘の分際でえっ！」

踏み込みが速い。敏捷性びんしょうせきに富んでいる。

筆の柄つかで刃を受け止め、モーズグズは力押しされる前に後退した。

「待てえ！」

「そう言われて待つ人なんて、いませんよおくだっ」

舌を出してバカにすると、頭に来たヘルモーズがそこに踏み込む。

「炎の印章シル・オウ・ファイア」！

「ぬうっ！？」

モーズグズの呼びかけに応え、ヘルモーズの足下から火炎が発生する。

「く、こ、このおっ！」

しかしそれは、剣を振り回すことで消されてしまう。

「罨を仕込んでいるのか」

「それだけなら、どれだけ幸運でしょうかあ」

「もはや手加減などせぬ。覚悟するがいい」

剣先を向けられて、一瞬だけひるむモーズグズ。

淡い光が差し込む中、鈍い輝きを放つ刀身。それを見るなり、彼

女は頬を叩いて気合を入れ直した。

「くたばれえ！」

振り上げた剣を見て、モーズグズはただ後退を繰り返すのみ。

「逃げるだけか？ この臆病者めえ！」

小屋から充分に離れた時、モーズグズはヘルモーズの懐へ飛び込んだ。

「ごちゃごちゃと、うるさいですねえ」

「な、なに　ぐあっ！」

大筆でヘルモーズの右脇腹を殴った。

「こ、これしきで参ると思っっているのか」

反撃される前にバックステップで間合いを取り、モーズグズはサ

ンダルで地面を叩く。

「いいえ。あなたこそ、私たちを小娘だと侮あなごっていると　どうなるか知りませんか？」

右の人差し指を立てて挑発するモーズグズ。

「き、貴様ああああああっ！　もう、もう許しはせんぞお！」

「シャットアウト」

出入り禁止の魔法を唱えて、周囲に点々と空間の檻を作った。

ヘルモーズはそれに衝突して尻もちをつき、モーズグズはおかしくて吹き出す。

「く。このような小細工で、時間を稼はかせごうとはな」

「どうしましたあ？　そのまま転がっていては、館に辿り着くなんて不可能ですよ」

言いながらモーズグズは、筆毛ひつもうで隠しながら足下に罠を設置した。

「ふんっ！」

ガラスが破られるような音がした。

「発はっ気きして破壊するなんて……」

「これぐらい造作もないわ」

全身から気を放って、行く手を阻はばむ“シャットアウト”を破壊したヘルモーズ。

それを見て、モーズグズは作戦を練り直そうとする。も、あくびが出てしまった。

「しょうがないですねえ。こちらも飛ばすとしましょう」

一歩下がって、黄色の小瓶を手にしてふたを外す。そこから魔インクを垂らし、筆先に湿らせた。

「な、何をするつもりだ」

「さあ？　知りたければ、ここに来ればいいじゃないですかあ」

黄のインクで地面に印章を描いてから、トントンとサンダルを整える。

まだほとんどの“シャットアウト”は活きている。そう簡単には接近されないだろう。が、モーズグズはそれを見て考えを改めた。

「ヒヒイ〜ンッ！」

「む？ スレイプニルか」

解放されたスレイプニルがヘルモーズに駆け寄ろうとしている。

「リプレイス」

それを見て焦ったモーズグズは、すかさず転移魔法を唱える。ヘルモーズとモーズグズの位置が交換された。

「シール・オブ・アース 大地の印章”！」

彼女は印章を発動させた。地面から現れた岩石の槍が、ヘルモーズを貫く。

「ぐ、な、こ、この」

描いたばかりの印章の効果は絶大。

しかし、攻撃のほとんどが剣によって防がれた。

「反応がいいですねえ」

「ふん。これぐらいで参るものか！」

「あ。そこ、さつき罨を仕掛けたとこですよ」

「な、ぐわっ!?!」

空間の檻に閉じ込められたヘルモーズ。

それだけではなかった。そこには、ある印章が記されている。

「シール・オブ・ドゥーム “破滅の印章”！」

生命を抹殺する印章だ。

「な、ぐ、身体が……ッ！」

下肢から少しずつ闇に飲まれ、ヘルモーズの身体がバラけてゆく。後少しで倒せる。それが油断を生んだ。

「ヒヒイ〜ンッ！」

「え あぐうっ!?!」

後頭部に、体重の乗った蹴りをもらってしまうモーズグズ。

「いいぞ。スレイプニル」

忘れてました。すっかり。

スレイプニルも一応、敵のうちに入っているんだと。

「ぬんっ！」

ヘルモーズは発気して“シャットアウト”を破り、印章によって消滅する前にそこを脱した。
その際に転げてしまっても、ヘルモーズのバラけてた下肢が戻っていく。

(もうちよつとだったのにい)

印章は効果を完遂できなかった。

元に戻ったヘルモーズは剣を構えて、ゆっくりとモーズグズへ歩み寄る。

「闇になど、呑まれてたまるか！ さあ、覚悟するがいい」

スレイプニルに背中を踏みつけられて、モーズグズは立ち上がる
ことができない。

脳しんとうを起こしている彼女は、眼前に突きつけられた剣先を見つめ、自身の最期を覚悟した。

《モーズグズの小屋 若郷香乃》

~~~~あれ？

わたし、いつまで寝てたんだろう。

「んん？」

軽く目をこすり、あたりを見回す。

暗い。寒い。風邪引きそお。

「モウちゃん……？」

呼びかけても、返事はない。

ベッドから出て、靴を履く。窓からの微かな明かりを頼りに、机のほうへ歩いた。

「ビー玉。もうできてるのかな？」

分からない。でも、前に見た時とは違う輝きを帯びている。

不思議だった。手にするだけで、ドクンドクンと鼓動を感じるの。

「闇になど、呑まれてたまるか！ さあ、覚悟するがいい」

外から、男の人の声がする。

まさか？

と思い、わたしはビー玉をパジャマのポケットに突っ込む。それからゆっくりと戸を開けて、小屋から出た。

「いいんですかあ？ わたちを殺せば、女王はご立腹ですよ？」「く。この期におよんで、命乞いか？ 時間稼ぎなど無意味だ！」声のするほうを見て、わたしはハツとなる。

男の人が剣を逆手に握って、モウちゃんに突き刺そうとしていたからだ。

「な、だ、ダメっ！」

わたしはとつさにポケットからビー玉を取り出し、男の人へと投げた。

「む？ なんだ、小娘がまたひとぐああああああああああああああああつっ！？」

男の人に当たったそれは、バチバチとすさまじい電流を起こす。あまりにもまぶしくて、わたしは目をそらした。

「が、ぐ、な……んだ、と」

ガクリと、男の人が膝を崩した。

ブスブスと黒煙が上がってる。すごい威力だ。

「あれは、スレイプニル？」

普通の馬と明らかに姿形が違う。モウちゃんを押さえてるあれをどうにかしなくちゃ。

「ぬ、ぬうあああああああああああああつっ！」

男の人は気合で立ち上がり、鋭い眼差しでわたしをにらんでくる。

ビビっちゃダメ。モウちゃんが危ないんだ。

「小娘。妙なものを投げつけやがって。貴様もすぐに殺してやる！」  
「え」

男の人が素早い動きで接近してきた。

「り、“リプレイス”」

ふと、モウちゃんが何かをつぶやいた。

「ぬ？ ぐあつ！」

すると、男の人の足下がくぼみ、上のほうから土の塊が落ちてくる。

それは転げた男の人の脳天に直撃し、パラパラと砕け散った。

「き、貴様……まだそんな魔法を使ったのか」

いけない。モウちゃんをにらんでる。

そう思ってたわたしはビー玉を取り出す。

赤と青？ ええい、考えてるひまはないんだ。

「とりゃあつ！」

「ぬ？ な」

一方が炎を。もう一方が氷を発生させる。

それらは強烈な拒絶反応を示した。

「うぐおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおつつつつつ！？」

さっきのとは威力がまるで違う。

地鳴りがするほどの、ものすごい爆発が起きちゃった。

「きやつ」

わたしは爆風に飛ばされてしまい、尻もちをついてしまう。

勢いで転がりそうになるも、手足でどうにか踏ん張れた。

ふと、わたしはある事を思い出す。

火と氷。もしかして、今のは。

「す、すごつ。大穴に、川の水が……あ、モウちゃんは」

「ぷはあつ！ な、なんですか……今のは。もしかして、ふたつが  
合わさって？」

モウちゃんは、爆風によって川に吹っ飛ばされていた。

ああ、そつか。間違いない。さっきわたしは『クロノ・トリガー』  
でいう“反作用ボム”を引き起こしたんだ。

てか、男の人がこっちに近づいてなければ、モウちゃんも巻き込

んでたかも。

「が、がふっ。こ、このお……」

え？ ウソでしょ。まだ生きてるの？

爆発でできた大穴の中心に、水浸しになりながらも立ち上がる男の人がいる。

接近される前に、手持ちのビー玉でどうにかしないと。

「え、えっと」

わたしが立ち上がるよりも、男の人の初動のほうが。

「させるかああああっ！」

速い。刺される！

「“ギャザー”！」

怖くて目を閉じてしまった。その時。

「ぐ、うううっ」

顔に、冷たい液体がかかった。

「なんだと？ ふっ。その小娘を庇<sup>かば</sup>うとはな。手間が省けたぞ」

男の人の声を耳にして、わたしはまぶたを上げた。

「か、香乃ちゃん……早く、逃げて」

「モウちゃん！」

左肩を貫かれ、大筆を落とすモウちゃん。

右手で刀身をつかんで、これ以上は進ませまいと力<sup>りき</sup>んでいる。

「く。放せえ！」

嫌ですよ。放したら、香乃ちゃんを傷つけるじゃないですかあ。

そんなの、ぜつつつたいにやだもんっ！」

「ならば、貴様の左腕から切り落としてくれるわ」

無意識にわたしは行動してた。

「な、なんだと？」

「モウちゃんを、大切な友だちを傷つけるなああっ！」

素手で、両手で、わたしはその剣を握り締めていた。

わたしのために料理を作ってくれた。魔法のビー玉を作ってくれた。この左腕を、絶対にやらせない。やらせるもんかっ！



痛い。すつごく痛い。でもわたしは放さないっ。

そうしたら、後悔するから。したくないもん。あの時こうすればよかったなんて、思いたくないもの。

わたしは、両足が使えなくなつて困つてたんだ。絶望してたと言いきつてもいい。

そのつらさを、今まで当たり前だったものを失うつらさを、モウちゃんには味わつてほしくないよおっ！

「く。ならば、ふたりともここで朽ちるがよい！」  
ダメだ。力の差がありすぎる。

助けて。誰か、早くう！

その心の声が、届いたのかもしれない。  
上から、巨大な何かが現れたから。

「な、ぐ、ぐあああああああああああああああああああああ  
あああつ！？」

男の人は左肩を噛まれて、悲鳴をあげる。

「ガウガアアアアアアツ！」

ガルムだ。巨大なワンちゃんが、男の人に牙を立てていた。

「な、なんだこいつは。や、やめろおおっ！」

突然の襲撃に混乱したのか、男の人が剣から手を放す。

力では敵わず、男の人はガルムに押し倒される。

わたしはモウちゃんを抱き留めて、横たえた後で男の人に飛びかかった。

「な、何をするんだ。邪魔だっ！」

「許さない。あなただけは、ぜつつたいに許さないんだからあつ  
！」

その人が右手で引き抜いた短剣を、わたしは両手で押さえた。

刃先がガルムの左目に触れそうで怖い。だから、全力で食い止める。

「は、放さんかつ！ この、小娘の分際でえ！」

「ガルムを、ガルムも傷つけさせない！ もうこれ以上、わたしの大切な人を傷つけないでよおおおっ！」

「ぐあっ！？」

ガブリと、わたしはその右腕に噛みついた。

「ヒヒイ〜ンツ！」

そうだ。馬もいたんだ。

川の中から飛び出した馬は、男の人を助けようと突進してくる。

「ガールルルルウツ！」

「ヒンツ！？」

ガルムが喉を鳴らして眼を飛ばすと、馬は恐れをなして足を止めた。

「な、スレイプニル！ 我を助けるんだ。早く！」

その一瞬、力が緩んだ。

「し、しま」

短剣を奪ったわたしは、無我夢中で。

「やあああああああああああああああああつっつ！」

ザスツ。男の人の左胸に、短剣を突き刺した。

「な、ぐ、ぐああっ」

深く。より深く。心臓の音が止むように、もっと深く。

全体重をかけて、ひたすらに刃を押し込む。

「や、やめ……る」

聞こえない。それほどまでに、わたしは怒り狂っていた。

男の人の目が光を失っていくのが分かる。

それでもわたしは、力を緩めなかった。

死んだと確信するまでは、この手を、刃を、絶対に放したくなかった。

「はあ、はあ、はあ、はあっ」

男の人が、抵抗しなくなった。

自然と力が抜けて、わたしは膝を崩してしまふ。

それを待っていたのか、ガルムがわたしを押しつけて男の人をむさぼり食う。

「ガウ、ガルルツ。ゲフツ」

バリボリと肉と骨を飲み込み、大きなゲツプをした。

まだ物足りないのか、舌なめずりをしてスレイプニルをにらんでる。

「ヒンツ」

逃げ出そうとするスレイプニル。

そこを、すみれ色の反物が捕らえた。

「ガウツ!？」

その反物を見た瞬間、ガルムがおびえた反応を示した。

「ガルム。口の中にあるものを出せ」

背後から、凜とした声が聞こえる。

「キャウ〜ン」

弱々しく鳴くガルムは、ペツと鉄かぶとを吐き出した。

「あ、アル」

その名を呼ぼうとした瞬間、反物が伸びてきてわたしの口を塞いだ。

「もごもごっ」

「ガルム。お前は持ち場に戻れ」

「ワンツ」

「……。ほう?」

すみれ色のマントを頭から被っているアルテレイマ。

ガルムは吠えながら彼女との距離を詰めている。

しかし、その眼光に恐れをなしたのか。ガルムはおとなしく洞くつのほうへ帰った。

「ふはあ」

もうしゃべってもいいぞ。そんな感じで反物から解放された。

「も、モウちゃんは……」

「案ずるな。反物を巻いて寝かしておる。ただ」

「た、ただっ？」

「意識がない。相当なダメージを負っている。しばらくは休ませたほうがいい」

腕を組みながら、わたしの質問に答えるアルトレイマ。

モウちゃんは全身を反物に巻かれてて、どっという容態なのかは見た目じゃ分からない。

淡い光を放つ反物。それが治療してくれているんだ。助かる。きつと。

「……っ」

「む？」

わたしは、今になって気がついた。

自分の手が、着ているパジャマが、真っ赤な血に染まっていると  
いうことに。

「い、い、いやあああああああああああああああああああああああああああああ  
あああつつつつっ！」

「う、うう」

「ふむ。おはよう」

「え？」

アルトレイマの声がして、一気に目が覚めた。

イスに座って、彼女はわたしの顔をのぞき込んでる。

それが嫌で身を起こそうとしたら、両手で胸を押さえられた。

「よい。そのまま寝ておれ。手の傷を癒し終えるまで、じっとするのじゃぞ」

気づいたら、わたしの手は反物に包まれていた。

どうやらここは館内の医務室のよう。

広い部屋にベッドだけがある。あ、薬とかが入った棚に木箱もいくつか置かれてるみたい。

ベッドのシーツはボロボロのおざなり。周りを見てもほこりがたまってるし、クモの巣とかあるし、とても衛生的じゃないね。

「ふっ。どうした？」

「あ、ううん」

わたし、気を失ってたんだ。

あれ？ いつの間にか着替えさせられてる。

わたしの様子をうかがうアルテレイマがにっこりと微笑む。

「ああ。よいものじゃろう？ 白のワンピースじゃ」

ふと思いついたけど。モウちゃんもヘルもアルテレイマも、どうしてかワンピースを着用してるよね。

それ以外はないのかなあ？

てかこの白のワンピース、わたしが持ち出した普段着の中にあっただつじゃん。

「む？ どうした」

「な、なんでもない」

隣のベッドで眠るモウちゃんを見て、ちくりと胸が痛んだ。

「案ずるな。意識はないが、命に別状はない」

「そ、そう。よかった」

「スレイプニルは庭のほうで捕縛しておる。まだ暴れとるようじゃが、ヘルがたしなめておるし。落ち着くのに時間はかからんはずじゃ」

「そっか」

「まっ、親がロキであるからな。同じ血族。気が合うのかもしれないよ。言われて思い出したよ。」

あなたがなぜ、スレイプニルを生け捕りにしろって言ったのか。その理由が今になって分かった。

「ふむ？ 元気がないのう」

「気のせい、だよ」

「……。さようか」

アルテレイマは腕を組んで、イスの背もたれに背中を預けた。わたしが身を起こしても、今度は止めようとしなかったね。

「あのさ。アルテレイマ」

「なんじゃ？」

「あなたは、どうして自分の正体が表に出ることを恐れているの？」

「わらわがヘルモーズとの戦いを避けたことを、怒っておるのか」

「質問に質問で返さないでよ」

「済まぬ。じゃが、よいではないか。結果的にガルムに助けられたのじゃろう」

もしかして、アルテレイマが？

ガルムを解放したのかもしれない。そう直感した。

「ん？ どうしたのじゃ」

「ううん。なんでもないよ。それよりも、さっきの質問に答えて」

「このずだ袋に、ビー玉とやらを詰め込んでおいたぞ」

「どうやら、さっきのことは触れてほしくないらしい。」

わたしは魔法のビー玉が詰まったそれを、反物に包まった手で受け取った。

「っ」

「ふむ？ どうしたのじゃ」

「な、なんでも……。ない」

「そうは見えぬな。息が荒いぞ。深く呼吸するがよい」

すう、はあ、すう、はあ。

それを何度も繰り返したところで、忘れるなんてできない。

『や、やめ……。ろ』

ビー玉に触れた瞬間、思い出したんだ。

最期にそうつぶやいた、男の人の目を。

「あ」

手が震えてて、ビー玉の入ったずだ袋を落としてしまった。

床にあるそれを拾い上げて、わたしに手渡してくれるアルトレイマ。

「どうした？ まだ何か、悩みでもあるようじゃな」

「なんでも、ないよ」

「……。ヘルモーズか？」

「……」

「凶星か。まっ、振り返りぐらいで気絶するほどじゃ。かなりの潔癖症と見受ける」

「……ぐらい？」

「ん」

「振り返りぐらい？ わたしは、わたしは……。人を、殺したんだよ」「うむ。それがなんじゃと言う？」

「だ、だって。わたし、わたしのいた世界じゃ……。それは」

「大罪じゃと、言いたいのか？」

「そ、そうだよ……。うっ」

少し前に食べたものを、全部吐き出してしまった。

「が、げふっ！ ごほ、ごほんっ」

「だいじょうぶか？ 気をしっかり持て」

「ご、ごめん」

反物がわたしの吐いたものを受け止めてた。

わたしはそれを手でふきとろうとしたけど、アルトレイマに手で制される。

「よい。洗えば済む話じゃ」

「で、でも……」

「深呼吸せい。すぐに水を手配するから、背中をさすってやるっぞ」「ゆっくりと、優しく撫でてくれる。

吐き気が和らいで、少し落ち着いてきたよ。

「わ、わたしは……」

「言っな。香乃、お前はモーズグズを救うためにヘルモーズを殺害したのじゃろう？ それはあやまちではない。自信を持って」

「人を、殺すことに……?」

「違う。お前は大切な人を守った。それだけでよい。その心持ちだけで、随分と救われるものじゃ」

真剣な眼差しで、わたしに問いかけるアルトレイマ。

気持ち悪い。でももう、吐き出すものはない。

「うえっ。う、くう」

「……。安心したぞ」

何が? そう問いかける前に、ガイコツが水を届けてくれた。

びっくりはしたけど、そんな余裕はなかった。むしろ、見ることに慣れてきたのかもしれない。

「ほれ。口をふいてやるうぞ」

手でわたしの口をぬぐったアルトレイマは、木の桶に汲まれた水で手を洗う。

それから反物が自発的に水に飛び込んで、その汚れを洗い落とすた。

「だ、だいじょうぶなの?」

「案ずるな。モーズグズは反物に任せて。香乃、お前はわらわと共に散歩でもせぬか?」

気分転換にはいいかもしれない。

そう、言いたげな顔をしてるね。

「うん。いいよ」



### 第3話

《石の都ウァンティレズド 若郷香乃》

白のワンピースにスニーカー。その上に黒のマントを羽織らされて。わたしはアルトレイマと一緒に、ミドガルズにある島国を訪れていた。

あ、ちなみに。ニヴルヘイムからここまで、転移術で移動してます。テレポートってほんとにできるんだと知って、ちょっと感動中。「ん？ どうした」

アルトレイマは赤のワンピースにサンダル。その上にすみれ色のマントを被ってる。

反物はない。モウちゃんの手当てのために置いてきた。

「あ、ううん。それよりさ。ここって、どこなの？」  
アルトレイマのマントの端をつかんで、周りを見渡しながら訊ねる。

「人通りが多いのう。隅っこに行くぞ」

「あ、うん」

石の壁に石畳。石造りの家にレンガ造りの家。

見るとこ全部が石だらけ。レンガはそれほど普及していないみたい。今わたしたちは石で造られた門を通過し、町中にいる。

人通りが多いので、ふたりで家屋の陰に避難し、おしゃべりをする。

「ここは石の都と称される、ウァンティレズドという島国じゃ  
淡々とそう説明するアルトレイマ。

「それで、どうしてここに？」

「買い出しじゃよ。モーズグズに栄養のあるものを与えたいし、備蓄も少ないときた。やれやれ、何度同じ説明をさせるつもりじゃ」

「い、ごめん」

置き手紙を館に残したとは聞いてるけど、どうもね。

「迷子になられても困るしのう。手でも繋ぐか」

「うん」

少し通りを歩いたところで、アルトレイマは唐突に手を放した。

「どうしたの？ あ、なんでそこのお店に入るうとしてるの」

「まっ、気にするでない」

アルトレイマが先に入店したので、わたしもそこにお邪魔した。

「らっしやい」

見た感じ、武器と防具のお店。

うっ。汗と鉄くっさあい。

剣とか斧とか盾とか鎧とかが陳列されてて、女のわたしじゃ扱えない物ばかり。

ここに何の用があるんだろう。

「ふむ。いきなりで済まぬが、物を買ってほしい」

「お。なんだい？ 姉妹で旅をしているのか」

「そんなところじゃな」

わたしとアルトレイマは、傍<sup>はた</sup>からすればそう見えるのかもしい。

てか、それで通すつもりなんだ。別にいいけどさ。

「これらじゃ」

アルトレイマはどこから取り出したのか、鞘のない長剣と短剣、鉄かぶと。これらをカウスターに並べた。

って、全部あの男の人の物じゃない。

出された物を見て、中年のおじさん もとい。店主さんは、ひとつひとつに目を通して溜息をついていた。

「う〜む。この短剣は刃こぼれしてるな。よく見ると、こっちの長剣には血痕があるじゃないか」

「それは気にするな。盗賊からくすねたものじゃよ」

「盗賊から？ ほう。あんたら、腕利きの賞金稼ぎか何かかい？」

目の色を変える店主さん。アルトレイマの発言で、真顔になった。

「ふつ。どうじゃろうな」

腕を組んで、アルテレイマは査定を待っている。

「鞄がないしなあ。買い取り額は低めになるぞ」

「構わん。旅費の足しになればよい」

その数分後。店主さんがわたしたちを見て、こつ切り出した。

「悪いが、銀貨二枚でどうだ？」

「少ない。もうちつと奮発できぬか」

「そうは言っても、鞄がない。血の跡がある。研ぐなりしないと再使用ができないときた。唯一良質なのは兜ゆいぐらいだが、これも錆があるしなあ。これでも高く見積もっているんだぞ？」

「ふうむ。銀貨四枚は出せぬか？」

「そいつは無理な話さ。嬢ちゃんたち、ここがどこだか分かって言っただろうなあ？」

「無論。承知の上じゃ。石の都であるがゆえに、鉱物資源が安価で手に入る。つまり、鉱物資源などで製作された物はここでは腐るほどある。ゆえに高く買い取ってはもらえぬ。そう言いたいんじゃろうっ？」

「分かってんなら、何を当たりな」

「じゃが、そうも言ってもらえんのか。二日分の宿代ぐらいは稼がぬとどう」

銀貨二枚じゃ、二日も満足に過ごせないのかな。

この世界の通貨とか金銭事情がどういうものか知らないから、ここはアルテレイマに一任したほうがいいのかもね。

「分かったよ。銀貨三枚だ。これ以上は出せんぞ」

「ぬう。まあ、致し方あるまい。商談成立としよう」

「へへっ。まいどあり」

アルテレイマは店主さんからお金を受け取り、それを大事そうにずだ袋にしまった。

「さて、香乃。次へ行くぞ」

「あ、う、うん」

次にわたしたちがやってきたのは、路地裏にある古い物を扱うよ  
うなお店。

アンティーク。とにかくそういう、骨とう品を集めているところ  
だ。

「いらつしゃい」

今度の店主さんは、白いあごひげをたくわえたおじいさん。

周りを見るとツボとか、難しそうな本とか、いろいろな物をコレ  
クシヨンしてるみたい。

うつ。ほこりっぱいなあ。ちゃんと掃除しているのお？

明かりは火を灯したろうそく。それがあちこちにある。よく見  
ると、変な飾りつけされてるね。この店。

「物を買って取ってくれぬか。飯と宿に世話になりたいからのう」

「ほう？」

あごひげを指で触って、おじいさんがわたしとアルテレイマを見  
比べる。

また、子どもだと甘く見られてるみたい。

「……………。若い娘さんふたりか。何か、親から譲り受けたもので  
も売るつもりかな？」

「そんなところか。両親が遺跡で見つけた物を持ち込んだだけよ」  
そういつて、アルテレイマはカウンターに見慣れた物を並べ始め  
た。

ノートパソコン、ケータイ電話、ゲーム機。

それって、倉庫にあったわたしの私物じゃない。

「おっと、これも忘れておった」

それ、わたしが履き潰したスリッパ。

ビー玉の入ってた花ビンとか、全部売り飛ばす気なんだね。

「これはこれは、珍しい物ばっかりじゃ」

当然だよな。だって、こっちの世界にはない物だらけだもん。

「どこの遺跡で見つけたんじゃ？」

「解らぬ。父親が発掘した物ばかりで、中にはていねいに磨かれた物もあるようじゃが。いかんせん用途が不明。すでに他界した父親の遺産ではあるが、生活苦であるためにここに足を運んだのじゃよ」  
「なるほど。どれも初見の物ばかりで、すぐには判断できんぞよ？」

「構わんさ。ただ、査定に時間を取られるのは苦痛。すぐにも換金したい」

「ほうほう。ワシもよく解らんが、掘り出し物のようじゃしゅう」

「ふつ。まだまだとっておきがある。それも出すかどうかは、おじい。そなたの気持ち次第じゃな」

「ぬう。な〜かなか、駆け引きが上手じゃな〜。お嬢ちゃんや」  
アルテレイマ。ひどいよ。

わたしの私物を売ってさ、生活費を稼ごうだなんて。

でも、そうするしかないよね。電気ないし、てことは役に立たないしさ。

わたしの個人情報が必要になるときだけ、どうせバッテリーはすぐ切れる。そういうことにしよう。

「ふ〜むふむ。これらは金貨二枚、銀貨五枚で買い取るう」

「ぬう。ちと少ないな」

「な、なんと。足りな〜いと申すか。ならば、金貨三枚でどうじゃ？」

「そうか。まあそれでもよいのじゃが……ほれ。この革製のバッグを開けてみるがよい」

どこからか取り出したそれは、赤いランドセル。

てか、それが切り札だったんだ。

「ふ〜む？ 何かあるのかのう」

あごひげを指ですいて、難しい顔をするおじいさんは、ランドセルの中を見て驚いていた。

「な、なんじゃ？ この、珍妙な本の数々は」

それ、学校で使ってた教科書。

何冊か入ったままだったんだね。

「わらわでも解読できぬ古書の数々。どうじゃ？ この未知なる魔<sup>アイ</sup>導具<sup>ディフラクト</sup>を。これで、金貨五枚は出す気になったかや？」

アルテレイマ。一度でいいから、わたしの目を見てよ。

さつきから目線を合わせようとしないし。申しわけない気持ちがあるんなら、まずわたしに話を通さないとダメでしょう？

でも、結果的にわたしもこうするかもね。

この世界じゃ使い物にならないし。こっちからしたら珍しい物だからさ。高値で売れるかもって思うのも不思議じゃあない。

少し名残惜しいけど、しょうがない。生きるためだもん。そう思えば割り切れる。ぐすんっ。

「よゝかろう。それぐらいは出してやゝらんなあ」

「そうか。その本も入れてそれだけの金銭が入るのなら、ありがたいことじゃ。そうじゃな。香乃」

ようやくこっち見たね。アルテレイマ。

ギョツとして、すぐにおじいさんのほうに向き直った。

「よしよし。すぐに金を持ってきてやろう。しばらくここで待つておれ」

こうして、わたしは泣く泣く私物を売ることになりました。

「もうかったのう」

「うん。そうだね」

「い、嫌じゃったか？」

「そうでもないよ」

噴水広場にやってきたわたしたちは、手に入れたお金をどうするか。木製のベンチに座って相談してた。

といっても、第一に買い出し。次に食事と宿泊。優先順位はこの通り。

「さて、腹も空いたし。すぐにも飯にするかのう」

お金の入ったずだ袋を握りながら、隣のアルテレイマが言う。

「賛成。でも、わたしそんなに食欲ないよ」

「案ずるな。ウァンティレズドは海の幸が食卓に並ぶのが常。鮭さけが豊富に獲れるから、香乃も満足できるはず」

アルテレイマって、わたしがいた日本についてよく知ってるみたい。

お魚とか、わたしは好きだけどき。特にお寿司はね。

「あのさ」

「ん」

「アルテレイマは、わたしのいたところをどうやって知ったの？」

「ああ。そのようなことか」

腕を組んで、得意げに語り出すアルテレイマ。

「夢見じゃよ」

「ゆめみ？ ああ、そういえばそんなことを言ってたような」

「それで見通した。と言えば納得できるかの？」

「う、うん」

「わらわは夢の中で、様々な次元を見通せる。たまたま目に入ったのが、香乃であった。そういうことじゃよ」

なんかそれ、わたしが運悪いつていうふうに聞こえるんだけど。

「どうした？ さっきからあんまりしゃべらぬが……」

「昼食。どこかで食べるんじゃないの？」

「まあ、そうなんじゃが。実際問題、どこに宿があるか知らんものでな」

「はっ？ それ、行き当たりばったりってこと？」

「さよう。ウァンティレズドは広いからのう。東側に来たのはこれが初めてじゃ」

「ひ、ひがしっ？ あゝ、西とか、そういうふうに区分けされてるの？」

「ふむ。ウァンティレズドは東西に分けられておる。この広場は東

側の中心。これだけは知識としてある。じゃが、それ以外は皆無」

「み、店とか……ちゃんと場所を把握してたじゃない」

「それは案内板や看板を見ればすぐに解るといふもの。うるついでいたらたまたまあったから、そこで物売ろうと　ど、どした？」

アルトレイマの行動に、計画性がないのはよく分かったよ。モウちゃん。

「まあ、よいではないか。早速、魚を食べに宿を探そう」

「う、うん。そうしょっか」

歩き回って、わたしたちはようやく宿屋を見つけた。

木造建築。外見はボロボロだったけど、内装は結構キレイ。よく掃除されてると感心した。

ここの女将さんはかなり若く、働き盛りで生き生きしてる。

白のエプロン姿が妙に似合ってて、雰囲気はほんわか。のんびりできぞ。

「こちらが部屋の鍵です」

「ふむ。わらわ達は空腹なのじゃが、朝食の残りはあるかのう？」

「あらまあ。すぐに用意いたしますわね」

「さようか。ありがとう」

二階にある部屋にわたしたちを案内した後、女将さんはすぐにここを退室し、ゆっくり扉を閉めた。

バタバタと廊下を走る音が、何だかおかしくて笑ってしまう。

「対応がいいね。ここは」

「そのようじゃ。当たりを引いたぞ」

アルトレイマは窓を開けて、外の景色を眺めている。

「面白い物は、明日？」

ふたつあるうちの廊下側のベッドに腰かけながら、わたしはアルトレイマに聞いた。

「ふむ。モーズグズに限らず、他の皆にも栄養を与えねばな」



自ら買物に出かける女王も珍しいと思う。

これはわたしの偏見だから、考え直さないといけないね。

「まっ、わらわとしては徐々に陽光（ひかり）を浴びたかったというのもある。あのような暗い場所に引きこもっていたら、腐るような気がしてのう」

「ふん」

「これでもひとりの女子（おとめ）じゃ。見た目にも気を遣わねば　これ。何を笑っておる？」

「ごめんごめん。アルテレイマって、意外に女の子なんだね」

「むっ。失礼な」

唇をとがらせ、頬をふくらませて怒ってる。

今更だけど、わたしはこんな質問をした。

「ひとついい？」

「ふん。よいぞ。下らぬ問いであつたら、許さぬからな」

「ごめん。口裏合わせなただけどき。わたしはアルテレイマの妹、つていう設定でいいの？」

「ああ、さようか。そうじゃのう。ここではそれで通すのがよいじやろう。まっ、わらわのぼうがちと背丈が低いが……雰囲気がいえば、わらわのぼうが上。そうであるう？」

「そ、そだね。後もうひとつ。わたしはさ、あなたの本名をしゃべつていいの？」

「構わぬ。どうせもう、わらわの名と存在が知れたところで大した変化はない」

「え？」

「んや。なんでもない。気にするでないぞ」

それについて聞き出そう。そう思って、わたしが身を乗り出した時に。

コンコンと、扉がノックされた。

「失礼します。食事をお持ちしました」

「さようか。急で済まなかった」

「いえいえ。鮭のクリームシチューです。どうぞ召し上がってください」

シチュー？ うわ、おいしそうっ。

女将さんはトレイをテーブルに置いて、シチューをよそった皿をふたつ配ぜんしてくれた。あ、お冷やとスプーンもね。

「では、おかわりが欲しかったら呼んでくださいね」

「うむ」

一礼して、女将さんはここを退室した。

「さて、冷めぬうちにいただくっ」

「そ、そうだね」

わたしたちはその匂いに誘われ、自分で使うイスを引っ張り出し、それに腰を下ろす。

「いただきます」

「うん。いただきます」

テーブルの上に並べられたクリームシチュー。うん、いい香りだあ。

それをふうふうして、スプーンで一口すする。

「わあ。温かいし、おいしいね」

「あつっ」

あ、アルテレイマも猫舌なんだ。

水を飲んで、舌を冷やしてる。それから息を吹きかけて、アルテレイマはシチューを口に運ぶ。

「うむ。具は鮭と玉ねぎだけじゃが、美味じゃのう。玉ねぎをしんなりするまで炒めて、塩気をちと薄くし、コクとまるやかさで押し込んでいるのがよい。ぜひとも館で振る舞いたいところじゃが、わらわにはこれを作る技量がないしのう」

「アルテレイマって、自分で料理するの？」

「たまにやるぐらいじゃよ。といっても、焼き肉と魚にオートミールだけじゃが」

服だけじゃなく、食生活もとほしいね。

「そういう香乃は、料理とかできるのか？」

「うん。編み物とかも、一応はできるよ」

「ほう。なかなか多芸のようじゃな。魔の才もあるようじゃし、期待できるのう」

え？

「ま、まのさいって？」

「ん。魔導のことじゃぞ」

大きめの鮭を頬張りながら、そう言うアルテレイマ。  
もしかしたらの期待に胸が躍る。

「わ、わたし。魔法が使えるの？」

「そこは詳しく調べねば解らぬ。ただ、魔法が使えるかどうかに関しては微妙。魔の才と一言で言っても、それは魔導具アーティファクトを創作できる才能や、魔法を使用できる才能など多岐にわたる」

「え〜つと。つまり、わたしは魔法を使えないの？」

「それは詳しく調べると言っただぞ。後々、機会があればな」

「あ、そ、そう」

言い終えて、黙々とシチューを食べてるアルテレイマ。

わたしはそれに遅れまいと、シチューを胃に流し込んだ。

昼食を取った後、わたしたちはまた町中を歩いていた。

噴水広場より先に進むと、石壁せきへきに囲まれた中に石の宮殿があつてびっくり。

そこには誰が住んでいるんだろう。

「うわつ。すごい建物」

「あれは、ウアンティレズドを統治する王族が住む宮殿じゃ」

「へ〜」

「ウアンティレズドはヨツン Heim と交流のある唯一の国でな。パワーストーンなどを向こうに輸出する代わりに、建造などの技術伝授やら支援をもらったり、海賊などの無法者が近寄らぬよう周

辺海域を防衛しておるのじゃよ」

「ヨツンヘイムって、巨人族の住む世界だよな？」

「うむ。西側と東側にはひとつずつヨツンヘイムへの石橋があつてのう。その先にはヨツンの長であるベルゲルミルが住まう、ガストロプニルという城砦じやうがある。ウアンティレズドに何かあればヨツンの精鋭達が黙っておらぬからな。ウアンティレズドはミドガルズの中ではかなり治安がよい」

「ここから産出されるパワーストーンは、それだけ貴重なんだね」

「さよう。ドヴェルグなどが創作する物品にも使用されるほど、魔力の質がよい。ウアンティレズドのパワーストーンのほとんどは、ヨツンヘイムが握っていると云つても過言ではない」

「ドヴェルグって、黒小人くろこじん？」

「うむ。スヴァルトアルヴヘイムに住んでおる、アーティファクト魔導具の創作に長けた小人の一族じゃよ」

話している途中。

「……………」

アルテレイマの顔が、曇つたような気がする。

「あ、アルテレイマ？」

「んや。なんでもない。香乃、行くぞ」

「あつ、ちよつと待ってよ」

## 《石の宮殿》

三階建ての石の宮殿。

その三階にある一室にて、ふたりの女性が何やら話し合っている。

「承知しました。それを、呼び出せばいいのですね？」

「ええ。任せたわ」

ひとり淡い水色のドレスを身にまとつた王族の少女。

もうひとりとは地味な服を着ているが、一際目立つ黄金の首飾りをした、美しい女性。

「すでに魔法陣は描いてあるわ。あなたがその中心に立ち、その杖を立てて唱えればいい。それだけよ。理解できたかしら？」

「はい。ふふつ。これで、これでようやく終わるわ。私をコケにした愚者どもを、ようやく滅する事ができるのね」

杖を手にした少女は、明らかに狂っていた。

その瞳が、赤く、妖しく輝いているからだ。

「そうよ。あなたはこの国を滅ぼすの。そうすれば、人間も巨人もあなたの力に感服して、ここに新たに立国する王として認めてくれる」

少女に暗示をかける女性は、愉悦ゆえつに浸り、不気味に微笑んでいた。

「はい。その通りです。 フレイヤ様」

「おねえさま。 セネアおねえさま」

「ん？ あら、ミス。どうかしたの？」

宮殿にある中庭。レンガによって作られた大きな花壇かたん。

そこにある花に、じょうろで水をやってしているひとりの女性。

その女性が着る純白のドレスの裾すそを引っ張りながら、少女が笑顔で話しかけた。

「また、花に水やり？」

「ええ。少しでも長く、お花を生かすためには必要なことなのよ」

長い髪を振り乱し、銀糸のようなそれを指先でとかしているセネア。

ミスが甘えてくることがうれしくて、顔をほころばせている。

「ぶう」。最近、あたしと遊んでくれないよねっ。セネアおねえさまといい、イリアおねえさまといい……」

対照的に、不満そうに頬をふくらませるミス。

「うふふ。イリアは魔術の勉強を始めるとかで、古木の杖を手に入

れたと言つてたから。しばらくはそれに夢中で、マイスの面倒を見れそうにないわね」

「ぶう〜。セネアおねえさまも、いじわるう」

「はいはい。わたくしは夕暮れ前にはここを出発して、ヨツンヘイムにおもむいて、メングラッド様と会談をしなくてはならないの。マイス、留守番をお願いね」

「え〜？ それじゃ夜になっちゃうじゃん。どうしてセネアおねえさまを呼びつけるの？ 向こうから来ればいいじゃんかあ」

「しょうがないでしょう。あちらの方々は、ウアンティレズドとの交流を大事になさっているのですから。こちらがおろそかにしてしまつたら、この国の展望が危ういのです。理解してほしいわ。マイス」

じょうろを花壇の脇に置いて、にこやかに微笑むセネア。

（メングラッド様の護衛の巨人がこちらにやってきた時、住民と一緒にに泣いたり騒いでたりしたことを、この子はすっかり忘れちゃったのかしら？）

そんなことを考えながら、セネアはマイスの頭を撫でていた。

「ぶう〜」

「マイス。いいですか？」

屈んだセネアは真剣な面持ちで、マイスの瞳をじつと見つめる。

「あなたはこの国の第三王女なのです。その自覚を持って、姉であるわたくしの出発を見送りなさい。いいですか？」

セネアは妹であるマイスに、首から下げていた銀色のメダルをかけた。

「これは、おねえさまの大切なお守りですよ」

「だからこそ、です。マイス。これはあなたに預けます。わたくしがここに帰るまで、それはあなたが大事に、肌身離さず持つてなさい。わたくしが帰るまでになくしたりしたら、ゲンコツですよ？」

「う、うんっ」

驚きながらも、マイスはセネアの言葉に力強くうなづく。

(そのメダルを守るように、わたくしはこの国を、民を守らなくてはならない。ミス。それを理解してちょうだいね)  
そんな想いが込められたメダルには、空を優雅に羽ばたく天馬の姿が描かれていた。

「では、わたくしはこれから支度があるので。ミス。あなたは悪戯しないで、きちんと勉強するのですよ」

「はい」

ミスはメダルを大事そうに抱えて、部屋に戻るセネアを見送った。

### 《噴水広場 若郷香乃》

そそくさと立ち去るアルトレイマに、ようやく追いついたよ。

気がついたらここは噴水広場。もう、迷子になったらどうするの？

わたしが、だけどね。

「どうしたのじゃ？」

振り返りながら、アルトレイマは何事もなかったように聞いてくる。

「ど、どうしたって……アルトレイマが、急に走り去るからあっ

息も絶え絶えに、わたしは言い返した。

「わらわは歩いておったぞ」

「すう、はあつ。 って、そんなことはいいの。どうしたの？

なんか、急に難しい顔しちゃって。そこから逃げるようにここに来たけど」

「……。気にするでない」

「うそ。何か隠してるでしょう？」

「……………」

やっぱりだ。アルトレイマは、触れてほしくないことに触れられると無言になる。

「小腹が空いたのう。値は張るが、山羊やぎの乳を飲みとうないか？」  
そして、話をはぐらかそうとする。

「いらないよ」

「むう」

腕を組んで、真剣な眼差しでわたしを見つめてる。

「香乃」

「ん？」

「そちは、死についてどう思う？」

急に、変なことを聞くね。

死について、かあ。

わたしは、正直に答えた。

「よく、分からない」

「解らない？ どうしてそうなる」

「どうしてって言われても、わたしにはどう答えたらいいのか分からないよ。だって、わたしはまだ幼いからさ」

「幼い？ わらわは、そうは思わぬがの」

お昼を過ぎたからかな。人通りも多くなってきてる。

喧騒けんそうに消されてしまわないように、わたしは声を大きくして、アル

ルレイマに自分の考えを伝えた。

「まだまだわたしには、生きるとか死ぬとか。自信を持ってこれだと答えられないよ。でもね、わたしは死について怖いとか思ったりしないよ」

「怖いと思わぬ？ なぜじゃ」

「うん。一度、死にかけたからかな。目の前で、大切な人が殺されそうになったからかな。当たり前だけど、最初は怖かったよ。けどさ、怖がっていたら自分も守れないし、大切な人も守れない。そんなの嫌なもの。だから怖がる前に、立ち向かおうと思う」

「さようか」

「モウちゃんが危ない時は、本当にがむしゃらだったもん。怖いなんて感情は、わたしの中にはなかった。失うことのほうが怖いよね」



それに気がついてからは、何をしてもいいからモウちゃんを守りたくて必死だったよ」

「……………」  
「ふふつ。でも結局は、怖いんだよね。死ぬのは怖いよ。だって、死ぬってさ。今までの自分を忘れて、新しい自分に生まれ変わるってことでしょうか？ その怖さを忘れるのは、何よりも恐ろしいかもしれないね」

「……………」  
無言。でも、アルトレイマは微笑んでた。

「宿に戻るか。人が多くなってきたしのう」

「うん。そうだね」

宿屋に戻ったわたしたちは、あるトラブルを目の当たりにした。

「おおい、ね〜ちゃん。今からオレと遊びに行こうじゃねえ〜か」

「や、やめてくださいいっ。私はまだ、仕事が……………」

「なんだどう？ オレと付き合おうのが嫌だったのか！ オレは客だぞ。ちゃんともてなしてみろや！ でないと宿代は返してもらおうぜえ」

「そ、そんな……………」

ロビーで女将さんが男性にからまれてる。

周りの人は、見て見ぬ振りを決め込んでるようだ。

「この臭いは。あの男、酔うておるな」

アルトレイマがそんなことを言ってたけど、わたしは構わずに。

「ちよつと、さっきから何をやってるんですか」

男の人の腕をつかんで、女将さんから引き離そうとした。

「あん？ なんだてめえは。オレは、ガキにや興味ねえんだよ！」

「きやつ」

強引に振り払われて、わたしは転ばされてしまう。

その拍子に、ポケットに入れてたずだ袋からビー玉がこぼれてし

まう。

「あ」

「なんだこりゃ？ けっ、ガキが宝石なんて高級品を持ち歩きやがって。よしっ。これはオレが全部もらってやる。感謝しろよお」

男の人がビー玉をひとつ拾い上げ、それをポケットにしまおうとする。

わたしはそれが許せず、ガブリと腕に噛みついた。

「な、なにしゃがるっ！ この、放しやがれ！」

「ふぎいっっ」

ゴンゴンと、頭を何回も殴られる。

痛い。痛いけど、それはわたしの大切な宝物なんだ。盗らないでよっ。

「これ」

その一言だけで、この場の空気が冷え込んだ。ような気がした。

「わらわの妹に暴力を振るうでない」

「な、なんだ……と」

静寂が満ちる。と同時に、戦慄せんりつが走った。

おばあちゃんのような口調は相変わらず。だけど、今のアルテレイマの声には怒気が込められている。

それだけじゃない。誰もがすぐみ上がるほどの何か。何かがある。

「て、てめえの……」

「口答えをするでない。この宿の者達に迷惑をかけるだけでなく、妹にすら手を上げ、物を奪い取るうとする。そのようなゲスを、わらわは許しはせぬぞ」

「っ」

わたしもその気迫にビビって、自然と男の人から離れてしまう。あうっ。尻もちをついちゃったよ。

アルテレイマは腕を組んで、少しずつ、少しずつ、わたしとの距離を詰めてくる。

「な、生意気なガキがっ。お前らのようなガキが、こんなお宝を持

ち歩いていいはずないだろ」

その声は、恐怖で裏返っていた。

明らかに、おびえている。肉食獣に追い詰められた、草食動物のようだ。

「いいから、返せ。そして、失せろ」

「な、く」

男の人の顔は真っ青。やがて、いてもたってもいられなくなったのか。男の人はビー玉を床に落として、ここを走り去った。

「香乃。ほれ、ビー玉を全部拾ってやったぞ」

「あ、ありがとう」

アルトレイマはひとりでビー玉を集めて、わたしのずだ袋に入れてくれた。

それから手を引いて、わたしを立ち上がらせる。

この行いが、冷えていた空気を温めたらしい。

「あ、あのう」

「んや？」

「あ、ありがとうございます。助けてもらって、その……これは薬草です。殴られたところに当ててくださいね」

「ふむ。ありがたく使わせてもらおう。ほれ、香乃。頭を出してみ

「い

「うひっ」

いきなりわたしの頭に薬草を当てて、にこりと微笑むアルトレイマ。ちよつち染みるう。

女将さんもつられて笑みを浮かべていた。

わたしたちは部屋に戻り、夕食までのんびりとくつろいでる。

「香乃。ひとつよいか」

「な、なに？」

わたしは廊下側のベッドでゴロゴロしてて、アルトレイマは窓辺

のベッドに腰かけてる。

「香乃は、他人のためによく無茶をするようじゃが……過去に、何かあったのかや？」

「え？ あ、ううん。特には。ただ」

「ただ？」

「ひとりでいるのが、嫌なんだよ。病室にいる時、看護師さんがたまに来てはくれるけどさ。夜中はずっとひとりだった。さみしかった。病院だから、ケータイ電話とかも満足に使えなかったしね。だから、あんなにも必死になっちゃうんじゃないかな？ 自分のことなのに、疑問系で終わらせるのは……ちょっと変かもしれないけど」

「さようか」  
わたしのいた世界のことを話してもだいじょうぶなのは、アルテレイマぐらいだ。

なんだかそれが、ありがたかった。ただひとり、わたしの過去に世界のことを理解してくれるから。

「わたしも、ひとついい？」

「ん」

「アルテレイマは、わたしから未来の筋書きを知ろうと思ったの？」

「……………」

「あ、答えないつもり？」

「んや。未来とは、この世界の未来か？」

「あ、うん」

あれ、反応が予想してたのと違う。

「どうしてそう思った？」

「え、だって……アルテレイマは、それを理由にわたしを呼んだんじゃないの？ バルドルの件だって、根掘り葉掘り聞いてたじゃない」

「ふむ」

あ、腕を組んだ。

「ち、違うの？」

「香乃。質問に質問で返して悪いが、お前は这个世界についてどこまで知っておるのじゃ?」

「どこまでって、ほとんどだよ。」

ただ、ここウアンティレズドのこととか、あなたのこととかはまるつきり知らない。

「どう、言えはいいのかな。細かいところまでは知らないって言ったほうがいいかな」

「さようか」

「それより、答えてよ」

「ふむ。香乃から未来を知ろうとする、か。確かに、それは運命を変える上では重要じゃろう」

「変える? 運命を?」

「しかし、それはもう誤りであろう?」

「そ、そうだね。未来は、変わってしまったね」

「変わってしまった? 香乃、お前の知ることが本来あるべき道筋じゃと言いたいのか」

「え、そ、そうじゃないよ。知っている歴史と、随分と違うなあって。ただ、わたしの知っているのはアルトレイマの言ったように間違いない。それは確かなことですよ?」

「ふむ」

「え? そ、そこで話を切らないでよ」

「なんじゃ?」

アルトレイマはゴロンと横になった。

わたしに背を向けて眠ろうとしたので、慌てて起きて止めちゃったよ。

「アルトレイマ。ちゃんと答えて」

「必要になれば、香乃の知識に頼る」

「え? だ、だって……それは誤りだって言ってたじゃない」

「歴史においてはな。それ以外のは正誤がはっきりしておるのか?」

「え。ああ、その、分かんない」

「ならそれでよい。少し疲れた。寝かせてたもれ」

「あ、そう。じゃあわたしも仮眠するね」

「うむ」

背を向けて、アルトレイマは寝入ってしまった。

しょくがないっか。わたしはビー玉を取り出して、属性の組み合わせについて考えることにした。

## 《石の宮殿》

宮殿の三階にある自室に戻り、身支度を済ませたセネア。

彼女は部屋を出て、馬車が待つ裏門へ向かう途中、廊下で妹のイリアに出会った。

「あら、セネアお姉様」

「イリア。また今日も魔法の勉強かしら？」

杖を片時も放さず、熱心に魔術を学んでいる。

それに感心こそすれど、セネアはイリアから狂気めいたものを感じた。

「ええ。セネアお姉様こそ、外交でいそがしいのですね」

「そうね。でも苦痛ではないわ」

「あら？　そういえば、いつも首から下げているメダルがありませんね」

「あれは、マイルスに預けました。イリア。わたしが戻るまで、この国をお願いね」

「それはお父様とお母様に言ってくださいな。まだ私は未熟者です。国を背負うなど、とてもとても……」

何かが違う。セネアはそう直感した。

その些細な変化が何によるものなのか、見極めようとするも。

「では、セネアお姉様。私は少し散歩してきますわ」

一礼して、イリアは逃げるように立ち去ってしまった。

「……………」  
セネアはイリアの背中を見送りながら、漠然とした不安を感じていた。

《宿屋『小鳥のさえずり』 若郷香乃》

夕食の時間。わたしたちは部屋でご飯をいただく。

「いただきます」

「うむ。いただきます」

献立はパン、鮭のクリームシチュー。たったそれだけ。

ちよつと足りないなあ。

米があつて、一汁三菜。それが一番いいよね。

「どうした。香乃」

「あ、うん。なんでもないよ」

パンを一口かじる。

「うわっ。なにこれ」

「ん。小麦の皮が混じったパンじゃぞ。ミドガルズでは、一般的な食料じゃ」

ボソボソとしてて、あんまりおいしくない。

「シチューに浸して食すがよい。そのほうが美味じゃぞ」

「うん。そうする」

シチューを染み込ませて食べると、少しはマシになった。

「ミドガルズって、あんまり食生活きちんとしてないんだね」

「そうでもないぞ。羊や山羊、豚に猪とかも食べておる。ただ、野菜や果物が少ないがのう。時としてクジラやアザラシも食卓に並ぶが、これらは極めて稀まれじゃ」

お母さんの手料理。食べたいなあ。

病院にたまに持ってきてくれた、塩むすびが食べたいなあ。

うう。わたしやっぱり日本人だよ。お米がほんとに食べたいいつ。

「香乃。ホームシックか？」

え。

鋭い指摘を受けて動揺したわたしは、思わず涙をこぼしてしまっ  
た。

「ふっ。そんなに泣いておったら、シチューがしょっぱくなるぞ」

「う、うるさいよ……っ」

溢れ出したらもう、止まらなかった。

帰りたい。すぐに、わたしのいた日本へ戻りたいよ。

でも、それはできない。だって、アルテレイマがそう言ってたか  
ら。

だから、無理なんだ。諦めなくちゃいけない。わたしはもう、こ  
の世界の住人のひとりになってしまったんだ。

「済まぬな。香乃。わらわのわがままのために」

「……えっ？」

「……………」

何かをつぶやいたアルテレイマは、すっとハンカチを差し出した。

「これで涙をぬぐうがよい。気が済むまで泣け。ひとりが嫌なら、

わらわが抱き締めてやるぞ」



## 第4話

### 《西の石橋》

満月と星が輝く夜空の下。

巨人ひとりほどある幅広い石橋の上を、馬車がせわしなく走っていた。

もうすぐヨツンヘイムの領内。出迎えてくれる巨人の影がいくつも見える。

「はあ」

その馬車の中で、セネアは溜息をついていた。

自分の妹を疑うなんてよくない。そう思っていたからだ。

「セネア様。何か、不安なことでも？」

付き添いの侍女よじのひとりが、浮かない顔のセネアを心配する。

「いえ、なんでもありません」

「さようでございますか。気分が優れないようでしたら、すぐにお申しつけください」

「ええ。解りましたわ」

突如、地震が発生した。

「な、何事ですか」

「わ、分かりません。いきなり、揺れ始めて……」

馬の手綱を引く御者おやに訊いてすぐ、セネアは馬車から飛び出した。侍女もそれに続き、セネアの傍に寄り添う。

「せ、セネア様」

「落ち着きなさい。それよりも、ニーロスの様子がおかしいわ」

「ヒン。ヒヒィーンッ！」

暴れてはいるが、ここから逃げ出す様子はない。

「よ、よしよし。どつどつ」

御者がなだめても、馬は一向に落ち着きを見せない。

セネアの手がその鼻に触れると、馬はおとなしくなった。  
「な、あれは」

セネアは何かを感知し、石の宮殿のほうを見やる。  
そこには、天高く昇り立つ龍が存在した。

### 《石の宮殿》

宮殿の中庭に、ひとりの少女が立っていた。

「あつはははははははははははつ！ ついに、ついにこの時が来たんだわ。私が、私が女王になる時が」

イリアだ。魔術師のローブに袖を通し、古木の杖を地面に突き立て、浮き上がる黄金色の魔法陣の中心で高笑いしている。

「この国を滅ぼして、私が女王になるのよ。さあ、やっておしまい。サンド・ワーム！ 大地を喰らい、肥やし耕<sup>たがや</sup>せ！」

イリアは気づいていない。

治める国もなければ、民もいなければ、王の存在など無意味だということに。

その矛盾に、イリアは気づいていない。

「さあ、滅ぼせ！ 私を愚か者扱<sup>こ</sup>いした連中を、全て呑み込んでしまえ！」

イリアは魔法陣の中心から離れ、召喚されたワームをあおいでほくそ笑む。

口が真ん丸で歯があり、目が細く、外皮が分厚く、中には硬い鱗も持つものもいる。ミミズを大きくしたような存在。それがワームだ。

天に昇る、太くて長いワームは 手始めに、石の宮殿を全身で押し潰<sup>つぶ</sup>した。

大きな体躯<sup>たいく</sup>によって真っ二つになった宮殿は、次第に崩壊してゆく。

「ふふつ。お父様もお母様も、もう生きてはいないわ。さあ、次は街よ。島全体を死に満たすのよ！」

自分の家族を殺すことを、自分の住む国を滅ぼすことを、イリアは楽しいと感じていた。

それとは裏腹に、イリアは泣いている。大粒の涙をこぼしている。  
(なんで? なんで、私は……こんなに悲しいの?)

解らない。解るはずもない。今のイリアの認識は、歪められているから。

「大きなミミズじゃのう」

「な、だれっ!？」

突然の訪問者に、イリアは気が動転した。

杖を両手に握り締め、声が出たほうを振り返る。

「蟲龍<sup>ワーム</sup>か。いいや、その亜種か? 先刻、声を張り上げておったからのう。本来砂漠に生息し、砂岩を喰らうミミズを召喚するとは…

…貴様、何故にこのような真似をする」

アルテレイマだ。顎<sup>あご</sup>に手をやって、眼前にある事実を推察している。

この場に香乃はいない。宿に置いてきたようだ。

「な、何者? あなたは、いったいどうやってここに」

「わらわのことなどどうでもよい。貴様、ワームを使役して何をするつもりじゃ?」

両手を腰に置くだけで、アルテレイマは逃げ出そうとするイリアに目もくれない。

近くの花壇に咲く花を見て、微笑む余裕を見せている。

(フレイヤの傀儡<sup>かいらい</sup>か。なら、彼奴<sup>きやつ</sup>はどこにおる?)

探している。目の前にいる少女を操っている黒幕　フレイヤを。

「サンド・ワーム! この女を、この女をぶっ潰しなさい!」

杖を振りかざし、イリアは声を張り上げて命令する。

指示を受けたワームは、アルテレイマの足下の土を盛り上げさせた。

「ぬっ？ 尾つぽで叩くか！」  
すかさずその場を離れ、ワームの尾撃から逃れる。

（この魔法陣。召喚を終えても残存するのか？ んや、どうやらまだ発動状態らしいの。このままでは、二匹目が来る）

アルテレイマは全身を外気にさらしたワームを見て、ほくそ笑んだ。

「ストーン！」

イリアが唱えた投石の魔法。アルテレイマは、それを見るなり右腕でさばいた。

「な」

「ふ。少々痛いが、致し方あるまい」

払う際に石の角に当たったのか、手の甲から出血している。

鮮血を滴らせながら、アルテレイマは魔法陣を観察した。

（石の宮殿。その周りを囲むように書かれておる。しかもあの娘。

王族のひとりらしいな。オーディンめ。ヨツンヘイムに大量のパワーストーンが流れ込むのを、どうして今になって止める？ フレイヤを差し向けたのはどういう意図じゃ？）

思考を中断し、アルテレイマはワームの突進を高く跳んでかわした。

「あんなのに喰われでもしたら、一巻の終わりじゃ。気をつけねば」  
着地してから、アルテレイマはイリアのいたほうを見やる。

すでに、イリアはいない。

ここから逃げ出したのなら、それはそれでいい。アルテレイマは眼前の敵に集中する。

「潜ったか」

ワームは地面に潜行し、その尻尾も地中へと消えた。

「なら、今のうちに走って距離を稼ぐとしよう」

アルテレイマは魔法陣に沿って反時計回りに走る。血が地面へ流れ落ちる。

「むっ？」



鼓膜こまくが破れたらしく、右耳から血が流れ出る。

「な、なんじゃと」

咆哮さはんで三半規管さんはんきかんをやられ、平衡感覚へいこうが狂っている。

膝を崩したアルテレイマは、ワームが地面に潜ったのを見て焦った。

「い、急がねばならぬ」

ふらつきながらも走り、アルテレイマはワームの咬撃から何とか逃れた。

「く、このままでは……」

飛び出したワームは、おもむろに石の宮殿　もとい、瓦礫がれきの山

へ這いずり、岩や石ころを口に含んでいる。

「な、まさか」

嫌な想像をしたアルテレイマは、すぐに走って間合いを取る。

「ぬうっ！」

ワームはこちらを向いて、石を高速で撃ち出してくる。

アルテレイマは身を伏せて、それらをかわすことができた。

「な、なんとという速度。一発もらえば、即死ではないか」

石弾せきだんは宮殿を囲う石の壁を貫通し、近くの家屋を粉々に粉碎していた。

「まずいな。血が、足りなくなってきたか……」

朦朧もつろうとする意識。アルテレイマは、今の自分が長くないことを悟った。

「ふっ。まだじゃ。まだ終わらんよ！」

頬を張って、気合を入れ直す。

「ぬ。またか」

再び地面に潜ったのを見送って、アルテレイマは不敵に笑う。今なら、距離を稼げる。

そう思ったアルテレイマは、残った体力を振り絞って走った。

「ぶっっ」

魔法陣に沿って駆け抜けたことで、花壇に辿り着いた。宮殿を一

周したのだ。

花壇のレンガでつまずき、転んでしまうアルテレイマ。

「これまで、か」

もう、動ける余力はない。

力尽きた瞬間を逃さず、ワームは彼女を丸飲みした。

《宿屋『小鳥のさえずり』 若郷香乃》

ガシャンツ。窓ガラスが割れる音で、わたしは目を覚ました。

「な、なにっ？」

寝ぼけていたのもあって、ベッドから落ちてしまう。

「あいたたた」

何かの遠吠えが聞こえる。

それが何なのか確かめようと、立ち上がって窓へと向かおうとしたら。

「あ、ガラスの破片が……」

床に散らばるそれを見つけて、わたしはベッドに腰かけて靴を履く。

靴を床でトントンと整えてから、気がついた。

「あれ、アルテレイマ？」

隣のベッドで寝てるはずの人が、いない。

「え。ど、どこに……」

行ったのか、見当がつかない。

えっと、確かわたし。泣いちゃって、アルテレイマからハンカチをもらって、うっん。

泣き疲れて、寝ちゃってたんだね。それで、彼女にベッドに運ばれた、と。

あれあれ。肝心のアルテレイマはどこ？

「考えてても分かんないや。とにかく探そう」

わたしはビー玉の入ったずだ袋がポケットにあることと、ハンカチを所持しているかを確認して、黒のマントを羽織ってから部屋を飛び出した。

### 《西の石橋》

「あなた達はヨツン Heim に向かいなさい。すぐに救援を要請するのです」

「は、はい。しかし、セネア様は」

「わたくしは だいじょうぶです。これから走ってウァンティレズドに戻り、皆を救出します。さあ、急いで！」

セネアが手振りで促すと、侍女は馬車に乗り込み、御者は馬車馬を走らせた。

遠ざかる馬車に、橋の向こう側にいる巨人達。

彼らを信じて、セネアはウァンティレズドのほうへ向き直った。

「ぶっつ」

はやる気持ちを抑えるべく、セネアは深呼吸をした。

「いったい、何が」

銀色の長い艶髪が、潮風になびく。

セネアは瞳を閉じて、強く念じた。

「行きましよう」

その一言で、その女性が着る純白のドレスは 瞬く間に、戦乙

女の装束へと変化した。

白を基調とした鎧兜。ところどころに白い羽根が飾られている。

銀の双剣を腰の鞘に収めて、セネアは背中に純白の翼を具現化させた。

「待ってて」

その翼で風を叩き、空高く飛翔する。

羽ばたくペースを上げて、セネアは高速でウァンティレズドへ向



かう。

しかし、それをよしとしない者がいた。

「きゃあつ!?!」

前方から、光線が飛来する。

被弾こそしなかったが、奇襲を仕掛けられてセネアはバランスを崩してしまう。

「くっ」

すぐに翼を消失させ、地に足をつける。

どうにか体勢を直したセネアは、橋の先をじっと凝視した。

「あれは……」

人影がひとつ。月光があっても正体は判然としない。

しかも、向こうはセネアを捉えている。近づかなければ話にならない。

「仕方ありませんね」

セネアは銀製の双剣を引き抜き、徒歩でその人影への接近を試みる。

その途中、向こうは一度も攻撃を仕掛けてこなかった。

「な、あなたは……」

近づいてみて、ようやく敵の正体が解った。

「フレイヤ、様?」

金系のような長い髪を手でかき上げて、紅蓮の瞳でセネアをにらんでいる。

「ええ。そうね」

「ど、どうして……このような場所に」

何となく、解っていた。

けれどもセネアは、何かの間違いだと頑かたくなに信じてしまう。

それが、油断を生んだ。

「さようなら。セネア」

「な　ぐっつ!?!」

右手から放たれる光線。

セネアは左肩にそれをもらい、左に持つ小剣を落としてしまった。「っ。な、何を……」

「二度言わせないで。さようなら」

フレイヤは左手から、発光する白い球体を発現させる。

それが光線として撃ち出される前に、セネアは右の小剣をフレイヤへと投げた。

「っ。セネア。あなたは、あたくしに逆らうというの?」

横に動いて避けられた。その際、フレイヤの発現は消えている。

セネアは足下にある小剣を蹴り上げて、右手でキャッチした。

左腕はもう動きそうにない。利き腕をやられたのは、自分の甘さのせいだとセネアは痛感する。

「フレイヤ様。わたくしは、オーディン様とあなたに仕えて、あまた数多エインヘリアもの勇士を送り届けたはずです。しかし、なぜですか? 何故、ウアンティレズドを手にかげようと……」

「黙りなさい。セネア、あなたはもう不要なの」

「そんな。わたくしが戦乙女になる事を承諾したのは、ウアンティレズドの平穩のため。それでは、約束が違うじゃありませんか!」

「それがなんだっていうの? あなたの言い分なんて知らないわ」「身勝手すぎます! 考え直してくれませんか? わたくしは、わたくしは」

「もう遅いわよ。だって、見たでしょう? 石の宮殿はもう、ぺっしゃんこななのよ」

冷たく笑うフレイヤを見て、セネアは失望した。

「さあ、あなたもここで終わるのよ。おとなしく死になさい」

打ちひしがれている場合じゃない。セネアは失意のまま、フレイヤへ斬りかかった。

「っ。ちい」

「フレイヤ! あなたを、あなたを許してなるものか!」  
後退するフレイヤ。

セネアは光線を警戒して、深追いをしなかった。

「だったら、なんだというの？」

「あなたを、殺すまで！」

「できるものならやってみなさい」

フレイヤは駆け足でセネアから間合いを離す。

セネアは誘われていると解っているながら、彼女を追いかけた。

「は」

足で落ちていた小剣を蹴飛ばして、セネアはそれを口に<sup>くわ</sup>啜<sup>くわ</sup>える。

「さあ、やっておしまい」

フレイヤは立ち止まり、その脇から何者かが飛び出した。

その影は上段に構えた杖を、セネアへと振り下ろす。

「っ」

右の小剣で杖を受けたセネアは、その姿を見て愕然<sup>がくぜん</sup>とする。

「セネアお姉様。フレイヤ様に敵対するなんて、どういっつもりですの？」

イリアだ。操られた彼女は、フレイヤの盾となった。

「さあ、イリア。そいつはあたくしの敵よ。となれば、それはあなたの敵でもあるの」

「な、なにを」

眼前で行われる洗脳に、セネアは恐怖した。

自分の妹を人形として扱うフレイヤを見て、セネアは齒噛みする。

「っ」

セネアは悪いと思いつつも、イリアの腹を蹴飛ばした。

石橋の上を転がるイリア。セネアは彼女を無視し、フレイヤへと斬りかかる。

「おっと。動かないほうがいいわよ」

「っっっ！」

フレイヤは電撃をイリアの近くへ撃ち込んだ。

それを見て足を止めたセネアは、悔しさに唇を噛み切った。

「な、なんで……」

「ぶっつ。そんなことは聞くまでもないでしょう。イリアは、あた

くしの命を受けてサンド・ワームを召喚し、ウァンティレズドに戦火をもたらしたのよ」

「こ、この外道があつ！ フレイヤ。あなたは……あなたは、わたくしの国だけでなく家族すらも冒瀆した！ それは万死に値するわ！」

「だからなんだと？ 武器を捨てなさい。さもなければ、イリアを消すわよ？」

「……っ」

セネアは躊躇した。ここで武器を捨てても、自分が犠牲になつても、フレイヤがイリアを助ける保障はないからだ。

「うふふ。セネアお姉様あ。私は、ウァンティレズドの女王になるのよあ」

絶句した。セネアは、起き上がるイリアの目を見てしまったのだ。生気のない瞳。そこから溢れる涙。

イリアは操り人形と化しても、自分が何をしているのか解っている。

「神とは、卑劣なのですね」

「なんですって？」

「卑怯で、何よりも穢らわしい。わたくしはそのような方々に忠誠を誓い、エインヘリアを送り届けていたのですね」

セネアは、口に啞えていた小剣を捨てた。

そして、深く嘆息した。

「口が過ぎるわよ。セネア」

「フレイヤ。あなたこそ、行動が過ぎるわ」

「生意気な口を聞くのね。セネア。イリアを消してもいいの？」

「……」

実妹を人質に取られ、セネアは戦意喪失していた。

するべきことはひとつ。セネアは覚悟を決めた。

「フレイヤ。あなたは醜い」

「は？」



わたしは外へ飛び出す。

「あ、あれは……」

太くて長いミミズが一匹。石の宮殿のほうから顔を出している。その遙か上。月が照らす夜空に何か、黒いものが飛んでいた。

「あ、ちよつと」

「ごめんなさい。わたし、お姉ちゃんを探してきます！」

女将さんを振りきって、わたしは噴水広場のほうへ駆け出した。

## 《ウアンティレズド上空》

(やれやれ、面倒だ)

彼女　黒き飛竜ニーズヘッグは、星が瞬く夜空を羽ばたきながら、大きな溜息をついた。

四本の足、背中にふたつの翼。鋭い爪に牙があり、鱗は漆黒のよう。

ニーズヘッグは本来、ニヴルヘイムのフェルゲルミルという泉に生息しており、世界樹ユグドラシルの根をかじる邪竜じょうりゆうとされる。

泉に投げ込まれる死体を貪食どんじくするのが常で、こうして外界に姿を見せるのは極めて稀まれだ。

(まったく。アルテレイマ様は、本当にイタズラが好きだよな)

また大きな溜息をついて、ニーズヘッグは地上を見下ろした。

ワームが一匹。それも、砂岩を喰らう亜種。

その紫色の眼は、敵をしっかりと捉えた。

「あれをやれと言うのか。しょうがないな」

少し紫がかってはいるものの、自分の鱗は黒い。この宵闇よいやみならば、自分の姿を捉えるのは難しいだろう。

とはいえ、敵はワーム。退化した視力を頼りに捕捉しているとは思えなかった。

それにもう援軍は期待できそうにない。なぜなら、アルテレイマ

がコントロールを奪った魔法陣はもう消失している。

「自らの血で既存の魔法陣を奪取して、私を召喚したか。あの方が好きこのむ手口だ。無事できるといいが……」

言いながら、ニーズヘッグは苦笑した。

「さて、どう料理してやろうか」

翼を折りたたんで、ニーズヘッグは急降下する。

風切り音が凄まじい。高速で飛翔する姿は、目視では捉えきれない。

ニーズヘッグはその勢いのままに、顔を出したワームへ火球かきゅうを放った。

「む。外皮が厚いな」

胴体に着弾した。しかし、あまり効いていないように見える。

Uの字を描くように飛翔するニーズヘッグは、反転してワームを見下ろす。

ニーズヘッグは穴に潜ったワームを見るなり、羽ばたいて高度を上げた。

「なにっ？」

ニーズヘッグは真下を見て驚く。

ワームが地面から飛び出した勢いを加えて、石弾を連射してきたからだ。

「く。当てずっぽうだな」

その射撃に正確性はなかった。

石弾が目の前を通り過ぎたので、ニーズヘッグは今の高度で停空ていくうして、下を見ながら回避に専念する。

それが止んだ後、おもむろに空をあおいだ。

「まずいな」

つぶやきながら、ニーズヘッグは夜空の星に　ではなく、違うものに目を凝らした。

上に撃ち出された石弾は、いずれ落ちてくる。

自由落下によって、速度と威力を増して。

「く」

それらは雨のようにウアンティレズドへと降り注いだ。

「石の雨か。この国もおしまいだな」

ぼやきながら、ニーズヘッグは高度を上げつつそれらを潜り抜ける。

飛翔しつつ、保険として口から火球を連射する。

「むんっ」

無作為に撃ったそれは、眼前に迫る石弾を粉碎した。

「運がいい」

寸前で撃ち落とすのに成功して、ニーズヘッグは安堵した。

「どうやら、止んだようだな」

忘れていた。ニーズヘッグは、それを受けてから思い出す。

「ぐうっ!？」

翼に激痛が走る。

ワームが撃ち出した石弾のいくつかが、右の翼膜を貫通したのだ。

「し、しまった。このままでは」

高度を維持できず、地上に墜落してしまう。

「私の翼に傷をくれるとはな。ふっ」

下では大口を開けて、ワームが待っている。

「それも一興。楽しまねば損だな」

不敵な笑みを浮かべながら、ニーズヘッグは腹を括った。

第二波として射出された石弾をかい潜り、ニーズヘッグは翼を折りたたみ、高速で急降下し始める。

(イチかバチか。賭けてみるか)

遠い。まだまだ。もう少し。待て。まだ、まだ。今だ。

ニーズヘッグは身体を縦に回転させた。その勢いは、回るたびに増している。

そして、絶妙なタイミングで　ワームの頭を尻尾で殴打した。

「ぬうっ!？」

ニーズヘッグは前後両足を地につけ、どうにか不時着する。



身を翻してとどめを刺そうとするが、着地の衝撃によって四肢がしびれていて、それができない。

「く。ま、まずったな」

その反動は強烈だった。自分がやった博打はくちの代償が、これで済んだのなら安いもの。ニーズヘッグはそう思うことにした。

「ワームは……」

首だけで振り返り、それを視認する。

横たわって絶命していた。尾撃によってワームの頭はぐちゃりと潰されて、中から緑色の血が溢れている。

重力を利用した急降下。それに回転を加えた遠心力。

そのふたつが相乗して、ニーズヘッグの尾撃は決定打となった。

「む。石の雨、か」

第二波の石弾に当たらぬことを祈って、ニーズヘッグは深呼吸を繰り返した。

### 《噴水広場 若郷香乃》

「はあ、はあ、はあ」

息切れしながらも、わたしは噴水広場までやってきた。

「あ、アルテレイマは……」

ここから見渡しても、その姿は見当たらない。

どこに、いるの？

泣きそうになる自分を抑えて、もう一度あたりを見回す。

あ。

やっぱり、そうなんだね。

わたしは、ひとりが嫌なんだ。

だから、こんなにも必死になってアルテレイマを探してるんだね。

見知らぬ世界で迷子になって、ひとりぼっちになって、弱虫なわ

たしは未だに……誰かに助けられるのが当然だと思ってる。

自分勝手だよ。誰かに甘えてばかりで、わたしは自分のさみしさをひた隠していた。

迷惑だよ。アルテレイマに引き込まれたとはいえ、わたしはこの世界では赤ん坊も同然なんだ。

「わわっ!？」

突然、誰かに背中を押された。

わたしが倒れてすぐ、背後で爆音がした。なんだろう？

「ひっ」

首だけで振り返ったら、そこには頭が潰れた女の人。あ。

宿の女将さん。そうだよ。白いエプロンが、赤く染まってる。

ズドゥンッ。近くに何かが落下する。わたしは、それで女将さんの死因を理解した。

「わ、わたし……」

助けられたんだ。わたしを庇って、女将さんはこうなってしまったんだ。

え。どうしてこうなるの？ なに、何が起きてるのっ？

分からなくて、怖くなって、両手で口を塞ぐ。

「……せい!」

ヒュン。頭上を何かが横ぎった。

「……死にたいのか」

その声は、もしかして。

「……伏せている」

「うぐっ」

背中を足で踏みつけられる。そうしたのは、ヘルだ。

「……」

無言のまま、ヘルは空から降る何かを大鎌で打ち払う。それが止んだのか。ヘルは片腕でわたしを持ち上げた。

「……行くぞ」

どこに？ それを聞く前に、ヘルは石の宮殿のほうへダッシュしていた。

《西の石橋》

「この、このおっ！」  
フレイヤがセネアの亡骸なきがらを蹴っている。

髪を、服を、首飾りを、顔を、血で汚されたことに腹を立てているのだ。

「セネア、お姉様……？」

一方、イリアは実姉じっしの死に、強い衝撃を受けていた。

涙が溢れ、全身から力が抜けて、膝を崩し、杖を落とす。

「い、い、」

頭を抱えて、イリアは。

「いやあああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああつつつ！」

絶叫する。その悲哀は、フレイヤの催眠術を破るほどだった。

「な、え」

それで冷静になったフレイヤは、イリアに何が起きたのかを察した。

「く。ならば」

フレイヤが泣き叫ぶイリアへと手をかざした時。

「遊びが過ぎるぞ」

それは払われた。全裸の少女　アルトレイマの手によって。

「な、なにやつ！？」

ひるむフレイヤ。その好機をアルトレイマは逃さない。

その腕をつかんで、全身から冷気をほとばしらせる。

「な、これは……！」

四肢が氷漬けになる。フレイヤは全ての行動が封じられる前に、

イリアのほうをにらんだ。

「む？」

アルトレイマはその視線が気になり、イリアのほうを見た。

「え、な、なにこれ。い、いやあっ!？」

彼女が握っていた古木の杖。それが、いくつもの枝と根を広げて、イリアを捕まえたのだ。

「な、なんじゃと？」

あまりの衝撃に、アルトレイマの集中が乱れた。

そこを逃さず、フレイヤは発気して氷の枷かせを打ち砕く。

「やあっ!」

「しもうた」

フレイヤは身を離してすぐ「ライトニング」を唱えて、稲妻をアルトレイマへ落とす。

「やれやれ」

指をパチンと鳴らして、アルトレイマはその雷を打ち消した。

それを見てフレイヤは不快な顔をする。

「ふふっ。あなたが何者か知らないけど、あたくしにケンカを売ろうなんて百年早いわ」

「ほざけ」

たがいに身構える。

も、アルトレイマはイリアが気になっていた。

(あの杖。どうやら生物らしいな。なんじゃ？ いったい、何を飼っている……?)

横目でイリアを見やった後、アルトレイマはフレイヤを見据えた。

「あ、あ、ああああああっ!？」

イリアの悲鳴うなが轟く。樹木によって捕らえられたイリアは、瞬く間にその肉体を乗っ取られる。

髪が葉となり、皮膚が樹皮となり、腕や指が枝となる。

「まさか、フレイヤ。貴様あっ!」

「なによ？ 何か理解したのなら、言葉で発しなさいよ!」

両手から紡がれるひとつの大きな白い球体。そこから放たれる光線。

アルテレイマはそれを受けて、全身に大火傷を負った。

「ぬ、く」

膝を崩し、倒れる直前にこう言い放った。

「ツリーフォーク、玩具のように弄もてあそびおって……」

アルテレイマは力尽きた。

「あっはははは。一瞬の油断が、死を招いたのよ。だからあんたは死んだの。ふふっ。たかが人間が、あたくしに敵かなうはずないじゃないの。お・ば・か・さん」

折おりしも、その言葉はそっくりそのまま返された。

「な、ぐううっ!?!」

アルテレイマによって。

「フレイヤ。貴様のやり口など、ただの遊戯に過ぎん」

背後から凍こ気を発して、アルテレイマは再びフレイヤを捕まえた。先程よりも凍結が早い。抵抗できぬよう、一気に氷漬けにするつもりだ。

「な、ば、ばかな……え?」

フレイヤは驚愕おどろした。ついさっき倒したはずのアルテレイマが、白い灰となったからだ。

「ぶ、分身を……」

「それは違う。一言で表すなら、わらわは死に嫌われた者じゃ」

「ふ、ふざけ……ないで」

「む」

フレイヤの苦し紛れの指示で、ツリーフォークがアルテレイマに殴りかかる。

「く」

身を離してしまったことで、またしても拘束に失敗した。

「はあっ!」

目の前で氷の枷が砕かれて、アルテレイマは齒噛みする。

「同じ手が二度も通じると思ってた？ 甘いよ。あんたは！」  
振り返りざまに放たれる光線。アルテレイマはツリーフォークの  
陰に隠れた。

「く、クギヤアアアッ!？」

「ええい。邪魔よ！」

フレイヤは光線の威力を高めて、ツリーフォークを照射する。

アルテレイマは頃合を見て、自分の舌を噛み切った。

口から大量に吐血し、笑いながら絶命する。

その姿を目の当たりにして、フレイヤはおののいた。

「な、なんなの？ く、あいつは」

また背後から来る。フレイヤは後ろを見るが、誰もいない。

「ど、どこに……?」

上、左右、後ろのセネアの遺体、前の焼け焦げたツリーフォーク。  
その陰にいるアルテレイマはすでに白い灰と化している。

見当たらない。それが不安となる。そして、隙が生じた。

「どこを見ておる?」

不意に飛び出た、自分の意思とは関係ない発言に、フレイヤは両  
手で口を押さえる。

アルテレイマは、フレイヤに憑依ひきついしていた。

『ふっ。わらわが、肉体のみを縛りつけると思ったか?』

『で、出ていけ! あ、あたくしの……あたくしのおっ!』

身体を乗っ取られ、フレイヤは狂乱した。

「やあああああああああああああああああああっ!」

折おりあしく、アルテレイマも混乱した。

「な」

ヨツン Heim 方面から何者かが、声をあげながら斬りかかってき  
たのだ。

反射的にそれを両腕で防いでしまうアルテレイマ。

ちっつ。アルテレイマは内心、フレイヤの肉体を守ったことに舌打ちする。

「あなたは何者ですか？ 先程から、光を放っていましたね」  
仕掛けてきたのは、ひとりの少女だった。

ボーイッシュな藍の短髪に、強い輝きを秘めた藍の瞳。その凛々（りり）しい顔立ちには、闘志がみなぎっていることが解る。

服装は長い袖をまくった白のワイシャツ、その中に水玉模様のTEEシャツ。デニムの短パンに、白の靴下と運動靴。どれも違和感なく着こなしている。

左手にはチエック柄の雨傘が握られていた。左腰には鞘に収まった細身の剣が、ベルトに引っかけるように差してある。

「グガアアアアアッ！」

「わ」

少女はツリーフォークの拳を後退して避けた。

その隙に、アルテレイマはフレイヤから抜け出る。

「はっ。あ、これは……？」

ようやく自由を取り戻し、フレイヤは安堵した。

が、あまりの恐怖に四肢が震えている。

身の危険を感じたフレイヤは、ツリーフォークにこう指示した。

「こ、こいつらを始末なさい！ あたくしは、退散するわ」

まばゆい光を全身から放って、フレイヤはこの場から逃走した。

「あ、く」

至近距離で閃光をもらった少女は、視力を奪われてよろめく。

「ウアアアアッ」

少女にツリーフォークの拳が迫る。

「ッ！？」

しかし、それは寸前で氷漬けとなり、動きを止めた。

「無事か？ その娘よ」

靈魂の具現化を済ませたアルテレイマが、異国の風貌をした少女を庇ったのだ。

「え、ええ。それより、あなたは……？」

視力が回復してきたのか、少女は隣に立つアルテレイマを見やる。全裸だったことに驚いて、彼女は視線をそらした。

「見たところ、異邦人のようじゃな」

「……………」

「よい。答えずとも」

答えないのは、羞恥心があったから。アルテレイマはそれに気づいていない。

ズウンツ。突然、石橋が揺れ動いた。

ツリーフォークを無視し、奥のほうを見るふたり。

「どうやら、フレイヤが石橋を破壊したようじゃな」

「え？ あ、本当だ」

「距離にかなりあるな。跳んで越えるのは無理そうじゃ。それより娘よ、ヨツンの援軍はまだ来ぬのか？」

「え。あたしが、どうしてヨツン Heim から来たと？」

「臭いじゃ。巨人特有の臭い。じゃが、そちらはそないなものは感じられん。ただそれが染みついておるだけ」

拳を振り上げたのを見て、ふたりはツリーフォークから距離を取る。

「グカアアアアツ！」

もう片方の腕を叩きつけて、氷の枷を壊そうとするツリーフォーク。

「まだ、のようじゃな」

後ろを振り返るアルテレイマ。橋の先には巨人の影がいくつかわれど、どれもこちらに来る様子は見られない。

「何をしておる？ 巨人族は、ウァンティレズドを見捨てる気か？」

「そういうつもりはありませんよ。ただ」

「ただ？ なんじゃ」

「もう少し、待ってください」

何か事情があるのだらう。そう察したアルテレイマは、近くに倒



れるセネアの遺体を一顧し、それからツリーフォークを見据えた。

「はああああああああああああああああっっっ！」

雨傘を両手で構え、少女はそれに気を集中させた。発光して、目に見えるほどに。

（異邦人に、これほどの気の使い手が？ なんとゆう……）

少女は雨傘の先端を地面につけて、勢いよく振り上げた。

解き放たれた気の刃は、ツリーフォークを貫いた。それは氷の枷を打ち砕き、ツリーフォークに致命傷を負わせる。

あおむけに倒れるツリーフォーク。しかし、それはすぐに再生を始めた。

「まだ、生きてる？ ならば」

「ゆけ」

「え？」

そのつぶやきに、少女はアルトレイマのほうを見る。が、すぐにそっぽ向いた。

「こやつはわらわが引き受ける。娘よ、フレイヤを追え。まだ何かしでかすつもりでいる」

「いいんですか？」

「案ずるな。わらわひとりできどうにかする。見たところ ん？」

アルトレイマは、少女を一瞥して絶句した。

信じられないものを見た。アルトレイマは少女をマジマジと見つめ、やがて「ふっ」と息をつく。

「ゆけ。フレイヤに一泡吹かせてやるがよい」

「な、なにをいって……？」

「ゆけえっ！」

その叫びに驚いたのか、少女がビクツとなる。間髪をいれず、少女はその場から高く跳んだ。

「ガクアアアアッ！」

ツリーフォークが再生をほとんど終えて、立ち上がるも膝を崩した。

それにかかなりの体力を費やしたのか、ツリーフォークは息も絶え絶えである。

「こいつは厄介じゃな。自己再生能力まであるとは」

言いながら、アルトレイマは指を鳴らして支援を待つことにした。

「さて、と」

アルトレイマはヨツン Heim 方面へ走ろうとする。

が、振り返った直後にそれは降ってきた。

「なにっ？」

石橋が崩れ落ちる。第二波の石の雨が、東西両方の橋を貫いたからだ。

それによって、セネアの遺体も落下する。

「まづつたな」

ぼやきながら、落ちないように後ずさる。

ウァンティレズド。ヨツン Heim。どちらへの道も進めない。

「倒す以外に、安全を確保するのは無理か」

正直、休みたい。アルトレイマは自身の能力により、心身がかなり疲弊ひへいしていた。

手の甲で額を汗をぬぐう。ひんやりした風が心地いい。

「ツオオオオウ」

ツリーフォークがおもむろに立ち上がった。アルトレイマを捕らえようと接近してくる。

「クガアアッ！」

「おっと」

両腕を振り下ろす一撃。かろうじて避けることはできたが、その威力は石橋に亀裂を走らせるほど。

アルトレイマは背後に回り込みながら、あたりに凍気を散らす。

「又ガアッ!？」

すると、ツリーフォークが転んだ。路面が凍結しているので、滑

りやすくなっている。

「距離を稼ぐとするかのう」

アルテレイマは全身から凍てつく気を放出しながら、反対側の石橋の端へと移動する。

「しかし、面倒じゃのう」

「ガ、ゲクウ」

ツリーフォークは四つん這いになりながらも、アルテレイマに迫ってくる。

「……………」

腕を組んで、指の爪を甘噛みする。

ふと、遠くのほうで何かが動いた。巨人達がこちらへ向かっているのだ。

「ようやく、来るか」

その発言は、巨人へ向けられたものではない。

おもむろに、アルテレイマは空をあおいだ。

「クグイオアアアアアアアッ？」

眼前にいるツリーフォークに、大きな何かが飛びついた。

「ニーズヘッグ。そやつを喰らえ。一片も残すなよ。再生されたらちと困る」

「ガウツガアアッ！」

「おや。聞いておらぬか」

ツリーフォークに噛みついたのは、ニーズヘッグだった。

腹を空かせているのか、血眼になってツリーフォークを噛みちぎっている。

間もなく、ツリーフォークはニーズヘッグの腹の中に収まってしまった。

「ゲツフ」

大きなゲツプをして、ニーズヘッグは首だけでアルテレイマのほうを向いた。

「アルテレイマ様。私を使役するのであれば、事前に連絡をもらえ

ませんか」

「急な事だったのな。ま、樹木は好きじゃろう?」

「ええ。久しぶりの菜食です。それよりも、急いでお戻りになった  
ほうがよろしいかと」

「どこにじゃ?」

「なぜかは知りませんが、ヘルが人間の娘を庇って戦闘しておられます。あのヘルが護衛しているなど、最初は目を疑いましたよ。さては、あなたの友人でしょうか?」

「その通り。まっ、ヘルはお前を召喚するついでに呼び出しただけ  
じゃ」

「ついで? どう考えても、計算通りでしょう」

「そうでもない。さて、ニーズヘッグ。もう一仕事頼めるか?」

「構いませんよ。ここまで来たら、どうとでもなれます」

アルテレイマは、向こう側の石橋の端へ歩いていく。

「なんです?」

「ついてこい」

ズシンズシンと足音を立てて、ニーズヘッグはアルテレイマの背中を追う。

「こやつじゃ」

アルテレイマは下を指差し、ニーズヘッグに橋下を見るよう促した。

首だけを出して、ニーズヘッグはそれを凝視する。

「これは……戦乙女?」

「さよう」

そこには、氷柱（氷柱）となって落下をまぬがれたセネアの遺体があった。

「これを、喰らえと言つのですね」

「うむ」

「御意。おおせのままに」

指示されて、ニーズヘッグは氷塊（氷塊）にガブリついた。それから頭を持ち上げて、咀嚼（咀嚼）を繰り返す。

バリバリと氷を噛み砕く途中、不意に顔をしかめて、ペツと何かを吐き出した。

「口内を切ってしまったじゃないですか」

「魚を食べたら骨がついてきたと思えばよいじゃろう」

アルテレイマの足下に、セネアの使っていた銀製の双剣が転がった。

「済まん。傷はすぐに再生できるじゃろう？」

それを拾いながら、アルテレイマは謝罪の言葉を口にする。

「ええ。まあ。さて、次は何をすればいいのです？」

舌で傷口をなめた後、ニーズヘッグは齒にはさまった氷の破片をほじくる。

「ヘルの下へ向かうぞ。おもしろいものが見れるかもしれぬ」

「おもしろいもの？」

「ああ。そうなった時のフレイヤの顔が見たい。想像しただけで達しそうじゃよ」

「はあ。そのような発言は控えましょうね」

### 《石の宮殿跡 若郷香乃》

ヘルに手を引かれて、わたしは石の宮殿へ連れて来られた。

言葉を失ったよ。

だって、もうそこには建物がなかったからさ。

周囲も穴ぼこだらけだし、何があったんだろう。

「うえっ!?!? な、なにあれ」

穴から顔を出した大きなミミズが、頭から緑の血を垂れ流してる。死んでる、のかな？

視界の隅で何か動いたので、わたしはそっちのほうを見た。

「わっ」

「……ニーズヘッグ」

びつくりしてあとずさる。

「にいずへっく？」

わたしの質問に答えず、ヘルは黒い飛竜へ詰め寄る。

「ん？」

飛竜は眠りから覚めたのか。かっとその目が開かれた。

「ふえっ!？」

そうしてすぐ、飛竜は口から火の玉を吐き出した。

ヘルはわたしの後頭部をわしづかみして、強引に地面へ伏せさせる。

直後、頭上のほうで何かが砕ける音がした。

「ヘル。第二波が来るぞ」

「……承知」

わたしの背中を踏みつけて、ヘルは何かをさばいていた。

てかさ、この飛竜の声はハスキーだね。色っぽくてゾクツとしたよ。

「……ふう」

それを終えて安堵したのか、ヘルがわたしから離れる。

「あいたた」

顔を上げたら、心臓がはねた。

だって目の前には、わたしの瞳をのぞき込む飛竜がいたから。

「わ、え、うえ？」

ガラムに襲われたことを思い出し、食べられちゃうと勘違いする。

「隠れている」

「え？」

「いいから、早く私の陰に」

言われるがまま、わたしは黒マントに包まって飛竜の懐に隠れた。

「……貴様は」

「な、あなたは」

ヘルの声と、もうひとりとは別の女性の声。

誰だろう？ 気になって、包まってるマントから目だけを出

してのぞき見る。

「フレイヤか」

「え？」

「しっ」

飛竜のつぶやきで、ヘルと対峙しているのが誰なのか分かった。

「なんですって？ ニーズヘッグが、どうしてここに」

「私がここにいてはいけないのか？」

「ワームがやられたのを見ると、あんたがやったのね」

「ふっ。あのようなミニズごときで、私を制するなど愚の骨頂。もう少しマシな餌を用意するんだな」

黒のマントが保護色になっているのもあって、わたしの存在は気づかれてないみたい。

「……ふっ」

ニーズヘッグの発言に遅れて、ヘルが不敵に笑う。

「やる気、みたいね。あんたは特に。魔法陣を解呪して、そんなのまで召喚した。どういう理由でニヴルヘイムから外出しているのかわらないけれど、あたくしはこれで失礼するわ」

フレイヤは全身からまぶしい光を放った。

そのせいで、目が見えなくなる。

「……ちっ」

ヘルもそれを受けてしまったようで、立ち往生している。

「く。妙な首飾りから魔法陣を放ったぞ。何かが、来る」

ニーズヘッグが、フレイヤを目で追いながら状況を知らせてくれた。

「クエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエツツツ！」

ほどなくして、それは召喚された。

「あれは、コカトリス」

ニーズヘッグが言うそれは、見た目はニワトリなんだけども、尻

尾が大きなヘビのバケモノだった。

しかも、コカトリス？ 確かそれって、石化させる能力があったような。

「コーコツコココケツ」

鳴き声は、ニワトリのまんまだ。

「……余計なことを」

ヘルは左手の大鎌を担いで、コカトリスのほうへゆっくりと歩く。「た、戦う気なの？」

「やるしかないだろう。あれが持つ毒は、生物を石と化す。わずかの間、動きを止めてくる邪眼じやがんもあるしな。簡易方陣せんぎほうじんで呼び出した中型の魔物とはいえ、あれは侮れん」

ふと、ニーズヘッグが空をあおいた。

「翼膜の再生は終えたようだ。これで、アルトレイマ様の下へ向かえる」

「え？」

四本足で立ち上がり、ニーズヘッグは翼を羽ばたかせる。強い風にさらされて、わたしは尻もちをついてしまった。

「あ、アルトレイマは……生きてるの？」

「その表現は、実に珍妙だ」

わたしを見下ろしながら、にこりと微笑むニーズヘッグ。

視線を前に戻して、ニーズヘッグは口から火の玉を吐き出した。

「コケッコココケツ！？」

目の前で燃え盛る炎を見て、コカトリスがぎょうてんし、あとずさった。

「……かすった」

手で右耳を触りながら、ヘルがこちらをにらむ。

てか、ワンピースの裾が短いよ。風でめくれて、下着が見えちゃった。んん？ あれ、ワンピースの裾がちぎられてるような。

「悪く言うな。それとも何か？ そいつを、私に譲る気はあるのか」  
「……ない」



んなことよりも、コカトリスは火におびえている。ということは、火が嫌いなんだ。

まっ、ニワトリだしね。焼き鳥にされるのはやだよね。うん。

「そうか。なら私がアルテレイマ様のところへ行くぞ」

「……任せた」

コカトリスのほうを向き直り、ヘルは突進する。

てか、パンチラしてるってばっ。うう、もう見えても気にしないっ。

「解った。娘、お前は私の背に乗れ」

「え？」

「早くしろ。悠長にしゃべっている時間はないぞ。アルテレイマ様に何かあったのだ。急がねば」

「だ、だったら……」

わたしは、ニーズヘッグの誘いを断り、背を向けた。

きっとだいじょうぶ。だって、こんなすごい飛竜がいるんだもん。それよりも、ヘルが心配。パンチラのことじゃないよっ。

だって、相手は石化能力を持っているんだよ？ ひとりじゃ、立ち向かうのも不安なはず。

「どうなっても知らんぞ」

ニーズヘッグは翼で風を叩き、夜空へと飛翔した。

ヘルとコカトリスの戦闘は、開始されて間もない。

わたしにできることは、何かないかな。

「えっと」

ずだ袋からビー玉を取り出す。

手の平には赤いのがふたつ。よし、これならいける。

「やああああっ！」

助走をつけて、赤いビー玉ひとつをコカトリスへと投げた。

「コケッ!？」

見事ビー玉は命中した。けど、凶体がでかくて火力が足りないと感じる。

羽根が黒く焦げた程度で、大したダメージになってないね。やっぱ。

「クエエエツ！」

やばつ。今ので、わたしのほうへ駆けてくる。

「……余計な真似をするな」

ヘルが背を向けたコカトリスへ一撃を見舞う。

それは翼をかすり、軽い切り傷を負わせた。

「コケ〜ツコココツ！」

それにも腹を立てて、何度も飛びはねる。それからコカトリスはヘルのほうを向いた。

え〜つと。わたし、どうしよう。

「……はっ」

ヘルは大鎌を振り回し、その斬撃でコカトリスの羽根を少しずつ散らしている。

「クエエエツ！」

甲高い声で鳴き、コカトリスはクチバシでつつく。

それを後退してかわすヘル。

何となく、おかしい。そう感じたのは、ヘルの手数が少ないのと、踏み込みが浅いからだ。

多分、ヘルはコカトリスの石化能力を恐れている。邪眼、それも警戒しているはずだ。

「コケ〜ツ」

「……ちっ」

コカトリスの翼で叩く攻撃を、大鎌で受けるヘル。

それを盾代わりにしているのは、明らかに視線を合わせたくないから。

幸い、コカトリスはわたしのほうに目を向けていない。奇襲を仕掛けるのなら、今だね。

「えっと」

ビー玉を取り出して、中に緑があるか確認する。

もう数は少ない。自分で考えた組み合わせをあらかじめ持ってよう。反撃される可能性もあるしね。

「ヘル。下がって！」

大声で指示しながら、わたしは接近する。

「……………」

奇妙に思いながらも、ヘルはコカトリスから距離を置いた。

「いっけええっ！」

赤と緑のビー玉を、勢いに任せて投げた。

コカトリスは声の主を探そうとして、こちらを向いている。よし、当たったあ。

「クケツ！？」

「燃えちゅゅっ、尽きろおっ！ “バーニング”！」

手前に出して、噛みながらも自分で考えた名称を叫ぶ。するとそれに呼応したように火が風に育まれ、より大きな炎の渦ができる。それは瞬く間にコカトリスを飲み込んだ。

「クギエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエツツ！？」

全身が紅蓮の炎に包まれている。もう少しで焼き鳥の完成だあ。

「……………」

ヘルは呆然としてたけど、途中ハツとなり、火だるま状態のコカトリスへ大鎌を投げた。

「クギヤ！」

それは見事に足を斬って転ばし、ヘルのところへ戻っていく。のたうち回って消火したコカトリスは、起き上がるなり鳴き立った。

「クツケエエエエエエエツ！」

それから、わたしをすごい形相でにらんだ。

「あ、え」

しまった。目が合っちゃったよ。

「コツケエエエエッ！」

え、こっち来るの？ ビー玉、ビー玉を投げないと。

あ、身体が、身体が言うことを聞かないよおっ！

「……………させるものか！」

ヘルはコカトリスとわたしの間に割り込んで、そのクチバシを右腕に受けた。

そうしたら、その腕が灰色になっていく。あ、石化しちゃってる。

「……………ぐっ」

「クケエエッ!？」

追撃される前に蹴飛ばして、ヘルは右腕を地面に落とした。

かなり重いんだ。大量の汗をかいてるし、それじゃもう満足に動けそうにない。

「……………逃げる」

「え？」

できないよ。だって、ヘルがそうだったのはわたしの責任だから。それに、守られるのだけなんて嫌だよ。わたしにも、あなたを守らせてよ。。

「コツケッ！」

考える。今すぐに、この窮地きゅうちを打開する術を。早くっ。

「……………な」

コカトリスはわたしに対して怒っている。なら、ヘルから離れれば自然と彼女は安全になる。

「わ」

移動してる途中、足に何かが当たった。

「じょうろ？」

「クツケエエエッ！」

接近してくる。でもわたしは逃げない。だって、いいことを思いついたから。

「そらっ！」

「クカツ!?」

とつさにじょうろを蹴飛ばした。うん、コカトリスの顔面に命中したよお。

顔に水がかかった。よし、今だ。

「くらえっ！」

「……………“フリーズ”」

わたしとヘルの行動は、同時だった。

青色のビー玉から氷が弾け飛ぶ。直後にヘルが唱えた魔法が大きな氷を発生させる。

それらはコカトリスを包み込んで、氷像を作り出した。

「あ、はあ、はあ、ふう」

ぺたん。ヘルのおかげで、何とか倒したんだね。腰が抜けちゃったよ。

「……………っ? 香乃、退避しろ！」

え? な、なんで。

氷が、砕けてく。中にいたコカトリスが、飛び出してくる。

「……………ちいっ！」

ヘルは左手の大鎌を投げた。それはわたしとコカトリスの間に突き刺さる。

「コツケエエエツッ！」

氷が砕け散った時から、時間の流れがゆっくりに感じられた。

コカトリスが大鎌を跳び越えて、わたしをつつこうとする。

……え? 何かが頭上にいる。この影は、とてつもなく大きいものだ。

「グ、ギエエエツッ!?」

コカトリスはひるんだ。それもそうだよな。死んでいるはずのミズが、急に飛びかかってきたんだから。

不死のミミズはコカトリスを丸飲みにして、わたしの眼前をゴロゴロと転がった。

それは石の壁にぶつかって止まった後、バリボキと鈍い音を鳴らす。

「あ、え……？」

短い間にいろいろとありすぎて、混乱している。

分かっているのは、わたしがヘルに助けられたことぐらい。

「……ふう」

安堵の溜息。ヘルは膝を崩して、深呼吸を繰り返している。

不死のミミズはコカトリス一羽を食べ終えた後、ピクリともしなくなつた。

「よっと」

わたしの眼前に降り立つ、ひとりの少女。

「無事か？ 香乃」

アルテレイマだ。って、うわわわわわわっ。な、なんで裸なの？

「んや。ヘル、どうやら右腕に毒液をかけられたらしいな」

「……ちっ」

「機嫌が悪いな。どうした？」

アルテレイマがヘルの下へ歩み寄る。そうしたらすぐに、上からすごいのが現れた。

「に、に」

ニーズヘッグだ。バサバサと翼を動かして、わたしの前にゆっくりと着地した。

「おや、コカトリスの姿がないな。娘よ、どこに消えたか知らないか？」

わたしはちらつと、動かないミミズのほうを見やる。

「なるほど。腐れワームの体内か。諦めるとしよう。上質な鶏肉とりにくを久方に食べたかったんだが……はあ」

が、がっかりしてる。

出会って間もないけどさ、ニーズヘッグってグルメ？

「香乃。ニーズヘッグ。こっちに来てたもれ」

アルテレイマに呼ばれたけど、わたしは立てそうにない。

「ふむ。アルテレイマ様。娘は身動きできないようだ」

「さようか。ならば仕方ない。わらわが肩を貸してやろうぞ」

こちらに戻ってきたアルテレイマは、少し疲れ気味な様子。

それでも弱音を吐いたりしないで、わたしを助けてくれた。

うわっ。間近で見ると、アルテレイマって細っ。でも、肉付きは

いい。おっぱいとかはちっこいけど、くびれとかあるし、なんだかセクシー。ちなみにBっぽい。

って、わたしはなあにをじっくり観察してるのっ!？ もう、

もう頭ん中がこんがらがってるよ。あ、なんかめまいがする。

「よっと。歩けるか?」

「な、なんとか」

ヘルスの傍に歩み寄って、アルテレイマはわたしから離れた。

ちよっとよろけながらも、わたしはアルテレイマに質問する。

「な、何をするの?」

「ヘルが受けたのは毒液。水と布さえあればぬぐえる」

「あ、そ、そ〜ゆ〜ことね」

だったらと、わたしはポケットからハンカチと水のビー玉を取り出す。

「ニーズヘッグ。そこにあるものをくれぬか」

「どちらだ?」

「……。解らぬのか?」

アルテレイマの指示で、ニーズヘッグはじょうろを指でピンと弾いてみせた。それと大鎌の二択で迷ってたんだね。

「おっと。うむ。ありがとな」

それをキャッチし、アルテレイマはわたしからビー玉をもらっ。

それを用いてじょうろを水で満たした。

それで少しずつ水をかけて、ヘルの右腕をハンカチでていねいにふいている。

「一気にやらないの？」

「コカトリスの毒液は、生物体の細胞を乾燥させて石化させる。有効な方法は水を少しずつかけて毒液を布でぬぐうこと。中和剤、解毒薬があれば一瞬で治せる。が、ここにはないのでね。地道にやるしかないのさ」

アルテレイマに処置されている間、ヘルは何だか不機嫌だった。にらまれるわたし。原因を作ったのはわたしなので、頭を下げて謝る。

「ご、ごめんなさい」

「……ふん」

あ、まだ怒ってる。んっと、もしかして照れ隠し？

ズウウウウウウウウウウウッッ！

「な、なに？ 今の音」

「フレイヤとさっきの娘が近くでやりあっておる。来るぞ！」

アルテレイマはミミズが倒れてるほうを指差して、声を張り上げた。

しばらくして、石の壁が粉々に砕けた。砂煙の中に人影が見える。

「なんで、なんでよう！ なんであんたが、なんでえっ!？」

だ、だれ？ すごい、取り乱してる。

「あらよつと」

女の子がミミズの死骸しかいに降り立った。

その女の子はたたんであるチェク柄の傘を、左手に握り締めている。

ちらつとわたしたちのほうを確認した後、女の子はそこから飛び降りて、絶叫する人のほうへ歩いていった。

「なんであんたが、フレイ兄さんの剣を!？」

砂煙が晴れた。そこにいたのは、黒ずんだ服を着る女性。

首には黄金のネックレスがあるけども、それだけが浮いてるね。



フアッションセンスないよと言いたくなる。てか、胸デカっ。Eかなあ？

「な、まさか」

ニーズヘッグの口が半開きになってる。

それと、呼吸が早くなつたような気がする。どうしたんだろう。

「案ずるな。ニーズヘッグ」

「む」

ちらりとアルテレイマがニーズヘッグの瞳を見つめる。

それで落ち着きを取り戻したニーズヘッグ。アイコンタクトつてやつ？

「う。あ、あんたら……もう、コカトリスを」

「わらわ達を相手にしたのが運の尽き。フレイヤよ。オーディンに進言するがよい。もう貴様の時代は終わりじゃと」

「ふ、ふざけんじやないわよ！」

わ、キレた。両手を合わせ、バチバチと放電する橙の球体を出現させて、こちらを狙い撃とうとする。

が、女の子が傘を広げようとする動作を見てためらった。

「香乃。ヘルを頼む」

「あ、うん」

ハンカチとじょうろを受け取り、わたしは右腕の処置を引き継いだ。

「忘れないでください。あなたの相手は、このあたしです」

「うっさいわよ！ どいつもこいつも、あたくしを馬鹿にしてえ！」

ふと、ニーズヘッグがわたしとヘルを庇うように翼を広げた。

アルテレイマは女の子の隣へと跳び、おもむろに腕を組んでる。

「フレイヤよ。お前の画かくした通り、ウァンティレズドは滅んだ。しかし、後味が悪いじゃろう？ 選ぶがよい。ここでくたばるか、尻尾を巻いて逃げ出し、屈辱を背負うか」

口調はとても穏やかだけど、神経を逆撫でしてるよ。

どっちも選びたくないよね。だってフレイヤって娘、プライド高

そうなんだもん。

「っざけんな！　ここで、ここであんたらを始末するわよお！」

まるでかめはめはのように、フレイヤは光線を放った。

アルテレイマに命中する直前、女の子が割り込み、広げた傘でそれを受け止めた。

「な、この！　くたばれええええええええええっ！」

ありえない。だって、傘だけでどうにかできる威力ではないと思っただから。

じゃあなんで、あの傘は壊れないの？　そもそも、あの女の子はなに？

「その程度ですか？」

「っ」

撃ちきって、フレイヤは両手を膝に置いて深呼吸をしている。

「な、なんで……この、人間風情があっ！」

負け犬の遠吠え、だね。

「ふざけんな。っざけんなあああああっ！」

「もう、遊びは終わりにしましょう」

「何をぬかしてるの。あんたがここで終わるのよ！　見てなさい。

これからあたくしがあんたを消滅させてやるわ！」

傘をたたんで、女の子は右手を宙にさまよわせた。

うっん。指が動くかどうかを確かめている。でもそれが、大技の予備動作だとは思いついもしなかった。

「さあ、覚悟なさい！」

「さようなら」

右の掌底てのひらで空中を叩いた。直後、フレイヤが膝を崩し、何度もえずく。

「う、ぐう……うええええっ！」

逆流したのか、吐いちゃってるよ。

顔は青ざめ、手足は凍えたように震え、手の平を見つめながら全身を弛緩しかんさせた。

「な、にを……」

それは気になった。ううん。今この場にいる皆が、女の子がフレイヤに何をしたのか理解できてない。そんな顔をしている。

「別に。あなたの周囲の気圧を、極度に下げただけですよ」

気圧を、下げた？ 意味が分からない。さっきの動作だけで、そんな現象が引き起こせるの？

「なるほど。掌底で大気を叩いて流動させ、作用点である手から円錐型に空気を押しつけたのか」

アルトレイマが説明してるけど、まったく分かんない。

「でなければ呼吸困難の反応など即座に起きん。細やかなことさの波導の使い手とは、恐れ入る」

「……。あなたは、いったい」

女の子が驚いた様子で、アルトレイマを見やる。

「なるほど。そっちの女子は、この地上の大気を……その周辺のみ、高高度に似通った状態にしたのだな？」

わたしたちを庇う体勢を崩さず、ニーズヘッグがこう補足する。

「へえ。そちらのドラゴン。なかなか賢いみたいですね」

「フレイヤが急に高山病にかかったのは、そういうことか。そのような体術使いが人間にいるとはな。よく、今の今までオーディンに目をつけられなかったものだ」

こうざんびよう？ あ、それなら分かるよ。気圧の変化と酸素が薄くなったことで、頭痛や吐き気がしたり、体調がおかしくなる病気だ。

てか、ちょっと待ってよ。あの女の子はついさっき、そんなとんでもないことをやってのけたの？

「さて。今なら見逃してあげます。フレイヤよ、立ち去りなさい」  
視線をフレイヤに戻して、女の子は彼女に詰め寄る。

「ひ」

もう、その表情には恐怖しかなかった。

「よい。そこまで脅さずとも、フレイヤに戦意はのうない」

アルテレイマが女の子とフレイヤの間に割り込む。

「そう、ですね」

女の子は傘を逆手に持って、地面へと突き刺した。  
なんだろう。すごく、憂鬱ゆううつそうな顔をしてる。

「無益な殺生は嫌いに見える」

「分かりますか？」

「うむ。しかし、その優しさが時に仇あだとなろう。情はなるべく戦いくでは捨てる。付け入られるぞ」

「忠告、ありがとうございます」

このふたりが話している間に、フレイヤは姿を消していた。

ふと、女の子がこっちを一瞥する。あ、傘を引き抜いて歩いてきた。

「……ちっ」

ヘルがフレイヤのいたところを見つめて、舌打ちをする。

「……………」

じいっと表情をうかがっていると、ヘルは鋭い眼光でわたしを射すくめる。

ただ、にらまれても怖くないんだよね。

ついさつき身をていして庇ってくれたから、親近感が湧く。んつと、Bかなあ？

「敵の気配はないな」

言いながら、ニーズヘッグは翼をたたむ。

「石化、しているんですね」

「ふむ」

アルテレイマもこっちにやってきた。ただ、裸なのはどうかしようよ。

落ち着いて考えたら、わたしはどうしてこれを渡さなかったんだろう。

はあ。てんぱると、人間は判断力が欠如するねえ。

じょうろとハンカチを置いて、わたしはそれを差し出した。

「アルテレイマ。ほら、黒マント」

「ふむ？ ああ、別にいらぬ」

「いやいやいやいやつ。夜だよ？ 潮風で寒いよ？ 外なんだよ？ 冷静になってこうしてマント外してさ、渡そうとしても受け取らないんだよ？ アルテレイマって、裸族ヌードなんですかあ？

「なあんて突っ込みは口に出さず、強引にマントを羽織はねらせるわだし。」

「ふう」

と、胸を撫で下ろす女の子。ん〜つと、こかね？

彼女とは対照的に、不満そうなアルテレイマ。

「なんで？ やっぱ、裸族なの？ てかさ、そもそも服はどうしたの？ 何があつて、すっぱんぼんになつてるの？」

「あ、ダメだ。めまいがしてきた。考えないようにしよう。うんっ。  
「薬ならありますよ。少し待ってくれませんか」

女の子は左腰にあるずだ袋を手にして、それをアルテレイマに手渡した。

「ふむ？ いらぬのか」

「ええ。差し上げます。中の薬は全てメングラッドが調合したもので、信用してださいょうぶですよ」

それから足早に、ここを離れる女の子。

「急いでおるのか？」

「ええ。後は巨人達が何とかしてくれるでしょう。では」

あ。わたしが呼び止める前に、女の子は空高く跳んでっちゃった。

#### 第4話（後書き）

ツリーフォークは『マジック・ザ・ギャザリング』にあるクリーチャータイプです。

この場を借りて、感謝の意を表します。

他にも古参のぎゃざプレイヤーなら、ニヤリとしそつなカード名称をちりばめてあります。

## 第5話

あの女の子からもらった薬で、ヘルの右腕の石化を治療した後。ニーズヘッグの背に乗り、ウアンティレズドから飛び去って。今わたしたちは、近くに森林がある海岸にいます。

「うっわあ〜」

「ん？ どうした。香乃」

アルテレイマに手を引かれて、ニーズヘッグの背中から下ろされる。

「だ、だって。初めてだもん」

「何がじゃ？」

地に足をつけて、わたしは自分たちを乗せて運んでくれた黒い飛竜を見上げた。

「ドラゴンの背中に、乗れるなあんで！ あ、あ、ありがとう！」

アルテレイマあ

あまりにも感動で、大はしゃぎしてるわたし。

「ああ。そないなことか」

それとは対照的に、アルテレイマはそっけない態度で、森林のほうで適当な長さの枝を拾ってた。それで砂浜に何か書き記している。「なあによお。そっちこそ、どうしたのお？」

ちよっとそれが気に入らなくて、アルテレイマに突っかかるわたし。

「転移する際に必要な魔力があまりない。転移の方陣を記すから、ちと待っておれ」

「然様shyouでございますか」

「……………（こくり）」

ニーズヘッグとヘルは、首を縦に振った。

「むっ」

「まあまあ。香乃、といったか。改めて、私の名はニーズヘッグと

申す」

「あ、ごていねいにどうも。わたしは、若郷香乃です」

「……ッ!」

ふと、ニーズヘッグの顔が険しくなったような。

気のせい、かな？

「なるほど」

「え、何がるほどなの？」

「いや。香乃。君は、ガルムと顔を合わせたのか？」

「あ、うん。食べられそうになっちゃったけど」

「そうか。後で、ガルムと話さねばならんな」

「え？」

わたしから目をそらして、ニーズヘッグは翼を折りたたみ、ゴロんとくつろいでる。

「……ふう」

右腕の石化が解けて、ヘルは安堵の溜息。

「ご、ごめんね。ヘル」

手を合わせて謝ると、そっぽ向かれてしまう。

「う、うう」

「……………」

無言で、ヘルは海を眺めていた。

「……フェンリル兄さん」

「え？」

「……………」

何か、ボソツとひとり言。よく聞こえなかったよ。

「まだですか？ アルテレイマ様」

「そう急かすな。ニーズヘッグ。そなたらの体積を計算した上で、

こちらもやっておる。もう少し待たれよ」

「解りました」

まだ時間がかかるようなので、わたしはニーズヘッグの陰に隠れて、潮風をやりすごす。



「ヘルもこっちおいでよ」

「……………」

わたしの声が聞こえないのか。

ヘルは朝日を見つめながら、遠くをじっと見つめていた。

「家族が恋しいのか」

「え？」

「この海のどこかに、フェンリルとヨルムンガンドがいるからな。

フェンリルの所在は不明だが、ミドガルズのどこかに縛りつけられているらしい」

「それ、誰から聞いたの？」

「バルドルが言っていたぞ」

ん？ 何か、引つかかる。

「えつと。その時、ニーズヘッグはあの館に…………？」

「いないぞ。私は地獄耳なのでな。館でのやりとりは、耳を澄ませればよく聞こえる」

「そうなんだ。へえ」

ニーズヘッグの耳は、確かに大きい。

こんな近くでドラゴンが見れるなんて、感動だよおつ。

ふと、ヘルがわたし　じゃなくて、ニーズヘッグをにらんでいた。

「……………余計なことを」

「ふつ。バルドルからフェンリルが拘束されていると知り、その居場所を聞く前に逆上したのはどこの誰かな？」

「……………ちっ」

あ、そうだったんだ。

それで、怒ってたんだね。ヘルは。

「ヘルは、フェンリルを助けたかったの？」

「……………」

うっ。ヘルはかなりご機嫌斜めだ。

けど、ヘルがとっても家族想いなのは分かった。うん。

「よし。できたぞ」

「おや。もう？ 随分と早い完成ですね」

「砂浜に落書きするなど、大して時間はかからん」

アルトレイマが微笑みながら、こちらに歩いてくる。

「珍しいですね。アルトレイマ様が、笑顔を見せるなど」

「んや？ ニーズヘッグ、そんなにわらわは寝ぼけ顔をさらしていたのか？」

「寝ぼけているかどうかは知りませんがね。久しぶりに、あなたの笑うところを見ましたよ」

難しい顔をして、アルトレイマは腕を組む。

そんなに珍しいの？ アルトレイマが笑うのって。わたしは何度も見てるから、そんなふうに感じなかったよ。

「ヘル。何か言いたそうじゃな」

「……………（ふるふる）」

首を横に振り、ヘルはちらっとわたしを見た。

「まあ、よい。わらわは呪文を唱えておるから、もう少し待っておれ」

アルトレイマは描かれた円の中心に移動し、両手を広げて何か唱えている。

「…………… 香乃のおかげ」

「え？」

「……………（ぶいっ）」

ヘルが何か小声でつぶやいてたけど、なんだろ？

「上に立つ者の孤独、か」

「ん」

ニーズヘッグの一言で、アルトレイマがわたしを呼んだ理由が。何となく、分かったような気がした。

わたしたちはニーズヘッグの背に乗って、転移術を用いてニヴル

ヘイムに帰還する。

転移する際、移すものはなるべくまとまっていたほうがいいらしい。体積がどうか言われたけど、なんのこっちゃ。

「では、私は泉に戻ります」

「うむ。ご苦労じゃったな」

場所は黄金の橋の前、モウちゃんの小屋付近。

わたしは先に飛び降りたアルトレイマに手を引かれ、安全に着地した。

「……………」

ヘルは無言のまま地に足をつけ、こちらを振り返りもせず先へ進む。

「愛想のない娘だ」

「言っな。ニーズヘッグ。ヘルは照れておるのじゃよ」

アルトレイマのつぶやきに、ピクリと反応したような あれね。すぐに歩き出しちゃったよ。

「さて、わらわ達も急ごう。モーズグズが館で待っておるはず」

「う、うん」

わたしはアルトレイマに手を引かれ、洞くつのほうへ向かう。

「またね」

「ほう。また、か。次に会う折おしが楽しみだ。娘よ」

ニーズヘッグは手を振るわたしを見て、にこりと微笑んだ。

洞くつから出てすぐ、アルトレイマがずだ袋から薬を出して、こつぶやいた。

「メングラッドの薬が手に入るとはな。これはこれは、よい収穫じゃと言える」

それで思い出したよ。何のためにウァンティレズドに行ったのかを。

「アルトレイマ」

「ふむ？」

足を止めて、わたしは彼女を問い詰める。

「お金、どうしたの？」

ビクツ。こちらを振り返る前だったので、アルトレイマがどういう表情をしたのかは分からない。

惜しい。彼女がこっち見てから言うべきだったかな。

「なくしたんだ？」

「い、いや……その。何と言うべきか」

「こっち向いてよ。話をする時は、まず人の顔を見る。基本でしょっ？」

「……………」

無言のまま、アルトレイマはわたしの瞳を見つめてきた。

「香乃？ その、わらわが何を言うても怒らぬか？」

ギョツ。わたしは手を強く握った。

逃がさない。そして、早く言いなさい。自分の瞳にそんな思いを込めた。

そしたら、アルトレイマはバツが悪そうに目を伏せる。

「実は。サンド・ワームに飲まれてしまったのじゃよ」

指先で頬をかきながら、正直に告白してくれた。

「そう。ならいいよ」

「な、なぬ？ よ、よいのか」

「うん。アルトレイマが無事ならそれでいい。私物を売って手に入れたお金だからさ、ちよつともつたいない気もするけど。それ以上に大切な人を失ったら、嫌だもんね。タダだけど、お薬もらえたいね。結果的には問題ないよ」

アルトレイマが持つ薬には、ラベルが貼られている。字は読めないけど。

それしてくれたあの女の子はなんだったんだらう。ちよつち気になる。

「ところでさ、ウァンティレズドのことなんだけど」

「ふむ？ まあ、それは館に入ってから話をしよう」

「性急だね。どうしたの？」

「早う、服ぐらい着させてほしいものじゃ」

「う、うん。じゃあ早く行こうか」

「ふむ。やはりこれがないと始まらない」

ちなみに、わたしとアルトレイマは倉庫に来てます。

そこでアルトレイマは赤のワンピースをゲットし、わたしの目の前で袖を通した。

「あのさ。もしかしてここにあるのって、日本から盗んだものだったりする？」

「ふむ？ まあ、箱に入ってるのはほとんどそうじゃが」

「……………」

「ど、どうした？」

「アルトレイマ。具体的にどうやってそれらをここに移したの？」

「軽い転移術じゃよ。小さな物品であれば、質量がないから移すのは容易。しかし、生物を動かすと多大な力がある。それらは常にじつとしておるわけではないからな」

「じゃあ」

「無理じゃ。次元の状態にもよるが、その行為は歪みを生みかねん。下手をすれば、何が起きるか知れたものではない」

台詞を先取りしないでよ。まだ何も言っていないのに。

でも、ウソを言ってるようには見えない。真剣な顔してるからさ。

「そっか」

「済まぬな」

「いいよ。じゃ、早く館に行こうよ」

「うむ」

「香乃ちゃんあ〜んっ」

「わわわわ」

館の医務室にやってきたら、モウちゃんがわたしに抱きついてきたよ。

ただ、全裸なのがちよつと……あ、確実にBだ。

「うえ〜ん。勝手にお出かけしちゃうから、さみしかったですよ〜」

「ご、ごめん」

な、なに？ ちゃんと置き手紙してから外出したんだけど。もしかして見てない？

「モーズグズ。香乃から離れる。着替えを持ってきてやったぞ」

「ふえ？」

あ、さっきの倉庫でモウちゃんの分の黒ワンプを入手してたんだ。アルテレイマはそれと黒マントを返却する。

「ひどいですよう。ふたりして、仲良くお出かけなんてえ」

モウちゃん、なんか機嫌悪い。

わたしから離れて、そそくさと服を着る。マントを羽織った。

そして、大筆を握って深呼吸。

「うしっ。気合が入りましたあ」

よかった。元気になって。

ベッドの上にたたまれてたすみれ色の反物を浮遊させ、それを自分の身体に巻きつけるアルテレイマ。

「やはりこれがないと、戦も満足にできん」

「ふえ？ な、何か……あつたんですかあ？」

「それは食堂で説いてやろう。ふたりとも、ついてこい」

食堂に案内されて、わたしはついこの間座ったところに腰を下ろす。

モウちゃんとアルテレイマもそうして、これからお話 という

ところに。

「あうち」

隣にいるモウちゃんが、お腹を押さえて涙目になる。

「ど、どうしたの？」

「腹でも空いたか？」

わたしとアルトレイマが同時に質問をすると、モウちゃんは深くうなづいた。

ずっと寝てたままで、食事してなかったんだね。

「ふうむ。空腹のままではな。久方に、肉でもいただくとするか  
う」

「わ〜い。お肉だあ」

モウちゃん、大喜び。

パンパンと手を叩き、アルトレイマはガイコツを呼び寄せる。

アルトレイマが注文している間、わたしは隣にいるモウちゃんにこんなことを聞いた。

「お肉つて、何が出てくるの？」

「ふえ？ ああ、羊の肉ですよ。ここではいつもそれをいただいでるんですよ」

「ふ〜ん」

なんか、物足りない。

お米が食べたいなあ。ついでに言うと、お風呂にも入りたい。

「どうかしましたかあ？」

「あ、な、なんでもないよ」

心配させまいと、にっこりと微笑む。

「香乃、モーズグズ。飯はもう少し待たれよ」

「あ、うん」

「了解ですよ」

うなづいた後、モウちゃんが周りを見渡している。

「どうした？」

「ヘルちゃんはいないんですねえ」

「んや。あやつはスレイプニルの世話をしとるじやろう。肉親に対しては情が深いからな」

「はあ。んで、何があったのか話してくれませんかあ？」

おどけた感じではなく、真剣な口調で聞くモウちゃん。

「そうさの。飯が届くまでの余興。わらわ達が何をしていたのか、モーズグズにも教えてやろうぞ」

わたしとアルトレイマは、ウァンティレズドの一件を話した。

ただ、アルトレイマは観光だけを口にして、わたしと別行動している時のことは話してくれなかった。

「へ〜。香乃ちゃん、大活躍だったんですね」

そうでもない。

だってわたしは、結果的にヘルにもアルトレイマにも助けられてばかりだ。

むしろ、邪魔ばかりして足を引っ張ってた。

わたしがいないほうが、かえってよかったのかもしれない。

「どう、しましたかあ？」

「うん。だいじょうぶ」

「落ち込んでるように見えましたがお」

「だいじょうぶだよ」

そう突っぱねて、わたしはアルトレイマを見た。

彼女は腕を組んだまま、深呼吸を繰り返してる。

「ちと済まんな」

アルトレイマは両肘をテーブルに乗せて、手の平からふたつの炎を出した。

「な、何をするつもりですかあ？」

「ニーズヘッグから取り出した、マテリアライズ霊魂を物質化しようかと思うてな」

まてりあらいず？

「どうして、急にい？」

小首を傾げるモウちゃん。

「ウァンティレズドで何があったのか、その証言が欲しくてな。あ



る程度の推測は立つが、事実と異なっては踏み込めないところもある」

「まるで、確たる証拠を手に入れて、それを口実に何かするみたいな口振りですねえ」

「……………」

アルトレイマは答えなかった。

口にはしなくても、そうだって伶俐な瞳が物語ってる。

「目がくらむぞ。閉じておれ」

わたしとモウちゃんは仕方なく目をつむる。

注意を払ってから、アルトレイマは魂を人の姿へと変えた。

「あぐっ」

衝突音。何があつたのか気になり、わたしは恐るおそる目を開く。

「うぎゃっ!」

また、またですかっ。

も、もうっ。いい加減にしてほしいよ。

何度も何度も女の子の裸を見させられて、わたしはどう反応したらいいのっ。ちなみにDっばいけど。

「あいたたた」

「ほれ。すぐにこれを着ろ」

アルトレイマが手にしているのは、白のワンピース。少し大きめ。

それぐらいじゃないと合わない。だって、その人はわたしより身長あるもん。

「こ、ここは……………」

「いいから、これを着ろ」

テーブルの上にいるのは、キレイな女の子。

銀色の髪を振り乱して、危ないところを隠してる。もしわたしが男だったら、鼻血を吹いてたかもしれない。

わけわかめなまま、女の子はテーブルから降りて、白ワンピースに袖

を通した。

「これで、よろしいですか」

「うむ。隣に座りんしゃい」

言われるがまま、女の方はイスに腰を下ろす。

「あれ？ アルテレイマ様、もうひとつ靈魂があつたはずですけど」

「もう片方は無理じゃ。ダメージがありすぎる。浄化させつつ転生へ促したほうがよさそうじゃな」

首を左右に振りながら、アルテレイマは溜息をついた。

「お話中のところ申しわけありません。ここは、どこなのですか？」

「ニヴルヘイムにある館じゃよ」

聞いた途端、女の方はハツとなる。

「そう、ですね。わたくしは、自刃じじんでしたのでから」

「名は？」

「あ、はい。わたくしは、セネア　こほんつ。セネア・グレイスです」

一度咳払いをして、女の方はそう名乗った。

「……………」

「あ、わたしは若郷香乃です。香乃でいいですよ」

「モーズグズと申しますう」

それから、わたしたちが自己紹介をする。

ただ、アルテレイマだけが何も言わなかった。

「どうしたの。アルテレイマ」

「んや」

また首を左右に振り、腕を組んで何かを考えている。

「あの」

「ん」

「もうひとつ、魂があると言っていましたか」

「……………」

「どうして、何も答えないのです？ 失礼ではありませんか」

それでも、アルテレイマは口を閉ざしたまま。

セネアさんのほうをじつと凝視して、何か考えてる。

「ひとつ聞きたい」

「構いませんよ。ですが、先にあなたが答えてください」

「ふう。わらわはアルトレイマ。ニヴルヘイムを統治する者よ」

それを耳にして、セネアさんは目を丸くした。

「な、何をおっしゃっているのか。理解に苦しみますね」

悪いけど、それは本当なんだよね。

わたしとモウちゃんの目を見て、セネアさんは疑心を確信に変えたようだった。

「あなた、が？」

「ああ。して、わらわは質問をしてよいのか？」

「え、ええ。はい」

「うむ。セネアよ、そなたは戦乙女であろう？ オーディンとはどのような契約を交わしておったんじゃ」

「契約？ 単純ですよ。ウァンティレズドの平穩。ただそれだけです」

うんうんとうなづいて、納得しているアルトレイマ。

「二重スパイか？」

「っ」

「凶星ときたか。まあよい」

腕をほどいて、肩をすくめるアルトレイマ。

「どうして、そうだと思ったのですか？」

「ウァンティレズドはヨツンヘイムと交流がある。戦乙女はアースガルスと連絡を取り合う。ウァンティレズドの第一王女であるそなたが、二重スパイではないかとにらんでおった」

え。この人、あの国の王女様だったの？

しかも戦乙女。複雑な事情を抱えていそうだ。

「随分と鋭いですね」

「これでも、頭脳労働には自信がある」

えっへんと、ない胸を張るアルトレイマ。うん、Bだね。

一方、セネアさんの胸は大きい。ちょっとくらやましい。やっぱDかなあ。

「それで、わたくしが戦乙女だから何だと言つのです?」「  
そう。それが気になる。」

アルテレイマは、何を理由にセネアさん呼び出したんだろう。  
「セネアよ。先刻、ひとつと申したが……実はもうひとつ、確かめたい事がある」

「何でしょうか」

「フェンリルはどこにおる?」

「っ」

フェンリル。確か、ロキの子どもの狼だったっけ。

セネアさんは困惑しているようだ。表情に出てるもん。

「そ、それを知って……何をなさるつもりですか」

「なるほど。場所は知っておるのじゃな」

「あ、あなたは……」

キツと、セネアさんはアルテレイマをにらむ。

その視線を受け、アルテレイマはセネアさんと目を合わせた。

「あなたは、フェンリルをどうするつもりですか」

「解放する」

「なんですって? あの氷狼ユウウチを、手懐てなけられると思つているのですか」

「ぶっ」

セネアさんの言葉を聞いて、鼻で笑うアルテレイマ。

何でか知らないけど、隣のモウちゃんは「ぷくくっ」と笑いをこらえている。

「アルテレイマ様。どちらに?」

セネアさんの動揺を見て、アルテレイマは席を立った。

「近々、壊滅したウアンティレズドから死者の大群が押し寄せるはず。今のうちに、対策はしておいたほうがよさそうじゃ」

「なるへそ」。でもそれは、わたちがやってはいけませんかあ?」

「案ずるな。橋を封鎖し、ガラムを放ってやればほとんどは腹の中じゃ」

モウちゃんとアルトレイマの会話は、セネアさんに衝撃を与えたようだ。

「わたくしを、亡国の民達を、どうなさるつもりですか」

セネアさんの瞳から、大粒の涙がこぼれる。

わたしは、もう見てられなかった。

「アルトレイマ」

「ん」

「セネアさんを、苦しめないでよ」

「そう仕向けたのは、アーシルじゃぞ」

「話をそらさないで。さつきから、アルトレイマは何がしたいのか分からない。はっきり言つてよ。そうしないと伝わらないからね！」

バンツ。わたしがテーブルを叩いて起立すると、アルトレイマはこつちをにらんできた。

「そうやって、いじめて楽しんでいるの？ だったらアルトレイマも神々と変わらないじゃない」

「香乃。お前も解つておるじゃろう？」

「何が？」

「無論。“神々の終刻”<sup>ラグナロク</sup>を」

思わず、固まってしまった。

「急に、何を言い出すの」

知つてはいる。この世界の結末が、どうなるのかを。

「まさか、仕掛けるの？」

「いや。それは飛躍しすぎじゃ」

「な、なら……どうしてそんなことを」

セネアさんやモウちゃん、食事を運んできたガイコツたちが、呆然としている。

ついていけない。そんな雰囲気。

わたしとアルトレイマだけはこの話題について、<sup>じつじゆ</sup>滞ることはない。

「香乃。お前にひとつ問いたい」

「な、なによ」

「ラグナロクの結果。それはどうなる？」

「え？」

ガイコツは我に返ったのか、食事を配ぜんする。

献立は、スープ、ステーキ、パン、リンゴ。それ以外に目立つのではない。

ふと、話を聞きつけたのか。廊下には人間、不死者が大勢いる。

「結果って？」

「誰が何と対峙し、勝敗はどうなるのか。ただそれだけでよい」

言いながら、アルトレイマは着席する。

「オーディンはフェンリルに丸飲みされる。その後に、フェンリルはヴィザルにやられる。トールとヨルムンガンドは相打ち。ロキとヘイムダル、テュールとガルムも相打ち。フレイとスルトはスルトの勝利。わたしが知るのはそれぐらいだよ？」

「他の者はどうなる？」

「さあ。ムスベル、ヨツン、不死の軍勢にやられるんじゃないかな。最終的にスルトの放つ炎でほとんどの世界が壊滅するって流れだし」

「さようか」

わたしの話を聞き終えて、アルトレイマは腕を組んで目をつむる。言ってから、わたしは気がついた。

「あ、アルトレイマ」

「なんじゃ？」

パチリと、彼女は左目だけを開ける。

「な、なんでも……ない」

「さようか」

答えた後、アルトレイマは再び目を閉じる。

わたしは周りを見ながら着席し、配られた食べ物に手をつけた。

「香乃ちゃん。まだいただきますしてませんよう」

「そ、そうだね」

感情的になつた自分を、深呼吸を繰り返すことで抑える。

さっきの、間違ひなく言わされた。

セネアさんを責めるアルトレイマを許せなくなって、つい勢いで言つてしまった。

「あの」

「え？」

「あなたは、巫女なのですか？」

「っ」

セネアさんがわたしに聞いた。しょうがなく、うんとうなづく。

「アルトレイマ」

「ん」

彼女は両目を開けた。

「セネアさんもそうだけど、ウアンティレズドの人たちをどうするの」

「案ずるな。悪いようにはしない。望むのなら、アーシルへの復讐ふくしゅうの機会を与えてもよい」

「復しゅうって……」

「ヨツンヘイムの巨人達も今頃、滅んだウアンティレズドを現場検証しておるはず。何がどうなってそうだったか。証言は限られるが、電撃戦を仕掛けたのが誰なのか。大方予想はついとるじやろう」

「は、始まつちゃうの？」

「んや。確かな証拠もないのに、感情で先走つて挑むなど愚の骨頂。ラグナロクはまだ先じやろうて」

瞳を閉じて、アルトレイマは肩をすくめる。

「ん？」

視線に気づいて、アルトレイマはセネアさんのほうを向く。

「わたくしが情報を提供すれば、民の皆を優遇してくれるのですか」「あつてもなくてもどちらでもよい。わらわがセネアの口から聞きたいのは、フェンリルの所在とアーシルへの復讐を望むか否か。そのふたつのみ。それ以外はどうでもよい」

「どうでも、いい？ やはり、わたくし達を軽視しているのですね」  
「どう思われようが構わん。ここを訪れる死者ひとりひとりに涙していたら、ニヴルヘイムの女王など務まらんよ」

パンツ。手を合わせて、アルテレイマは先に「いただきます」をした。

「冷める前にいただく。皆にもごちそうするから、存分に腹ごしらえするがよい」

ガイコツが給食当番のように、ここを訪れた人にパンと肉、リンゴを配っている。

わたしたちも空腹を我慢できず、食事をすることにした。

カタリ。

セネアさんがスプーンを置く音がした。

すでにわたしやモウちゃん、アルテレイマは完食してる。  
セネアさんだけが、食事に手をつけるのが遅かったのだ。

「ごちそうさまでした」

「ふむ。おそまつさまじゃ」

沈黙。重苦しい空気の中、ふたりの声がよく聞こえる。

「こほんっ」

ふと、セネアさんが咳払いをした。

注目を集めさせて、それから彼女はアルテレイマのほうを向いて話し始めた。

「フェンリルは、ヨツンヘイム、ムスペルヘイム、ミドガルズの三方。その中心となる海域にある孤島に拘束されています」

唐突にそんな話をされて、周りにはきよとんとなってしまう。

「さようか。ありがとう」

アルテレイマはにこつと微笑み、セネアさんに頭を下げた。

「いえ。それよりも、フェンリルの拘束は普通ではありませんよ」  
そうだったね。わたしは構わず、話に割り込んだ。



「グレイプニルだったっけ？　アース神族がドヴェルグに特注で作らせた、魔法のひも」

わたしの発言で、あたりがざわついた。

アルテレイマは言ってたもん。必要になったらわたしの知識に頼るって。今がその時だよ。うん。

ふと、足音がしてわたしはそっちへ振り向く。

「わ」

「……フェンリル兄さんは、どうすれば助けられる」

ヘルだ。息を荒げながら、わたしの襟えりをつかんできた。

「落ち着け。ヘル」

「……………」

「げほつ。こほ、くふつ。い、いきなりだからびっくりしたよう」

思いきりやられたので、むせちゃったじゃない。

「香乃や。その、グレイプニルとやらじゃが。何をどうすればいい」

「し、知らないよ。ラグナロク直前にフェンリルは解放されるはず

だし。そもそも、自力でどうにかするんじゃないの？」

「ふうむ。誰かが解呪する、というわけではないのか？」

「誰かって。わたしはそこまでは知らないよ」

「さようか」

腕を組んで考え込むアルテレイマ。

その隣にいるセネアさんは、戸惑いを隠せないようだ。

「わたくしの言葉を、信じるのですか？」

「うむ」

「神々がわたくしに与えた情報は、虚偽かもしれませんがよ」

銀色の瞳が潤んでる。

「その可能性を否定はせんさ。じゃがな、わらわは過去に一度スルトとやりあつておる。引き分けたがのう」

その何気ない一言で、場が騒然とした。

モウちゃんは目を白黒とさせ、セネアさんは口が半開きになり、ヘルは無反応？だった。

他の皆は何やらブツブツと雑談している。

「もしかして、それが原因でユーミルが誕生したの？」

「……………」

あれ、今度はアルテレイマがびっくりしてるよ。

「せ、台詞を…………先取りされるとはな」

え。マジで？ 適当に言ったんだけど、当たっちゃったんだ。

髪をかき上げて、アルテレイマは「ふう」と一息。

「話を戻そう。先刻のセネアの情報じゃが、確かにそこには小島がある。その島の所在を知るのは、わらわのような限られた者のみ。フェンリルを拘束するのなら、そこは打ってつけじゃろう。しかもグレイプニルという魔導具アーティファクトで縛りつけておるなら、たとえ他者がそこに踏み込んでも解放は容易ではない。となれば、信憑性しんぽうせいはある」  
アルテレイマがその情報を正しいと踏んだのには、そういう理由があつたんだね。

「しかし、別な問題が出てきた。グレイプニルの解呪じゃな」

「はい」

「む？ モーズグズ」

「わたちも一応は工匠リッチの端くれなのでえ。もしかしたら解呪できるかもしれませ うぐえ」

突然、ヘルはモウちゃんの襟をつかんだ。

「うぐぐぐぐぐ」

手でバンバンと叩くと、ヘルはモウちゃんを離れた。

「い、いきなり何をするんですかあ」

「……………(ぶいっ)」

バツが悪く、そっぽを向くヘル。

「何はともあれ、現場に行って確かめたほうがよさそうじゃな」

アルテレイマはそう言うけどさ、外出したいだけなんじゃないの？

「あのだ。解呪できるの？」

「材質さえ解れば、それに込められる魔術が限定できる。となれば解呪もやりやすい。それは香乃には解らぬか？」

「グレイプニルの材質ね。うん。ちょっと待って。今思い出すから」

アルテレイマふうに腕を組んで、目を閉じて振り返る。

こういうどうでもいい雑学を、わたしは好んで学習してた。まさか、それが今になって役立つなんてね。

「……頼む」

「え？」

わたしは、目を疑った。

ヘルが、わたしに頭を下げたからだ。

「な、なにを」

「……後生だ。フェンリル兄さんを助けてくれ」

ぶるぶると、震えてる。

恥ずかしいんだろう。顔が紅潮してるし。

「うん。任せて」

「……ほんとか？」

顔を上げて、ヘルはわたしの両肩に手を置く。

「わたしの知識でどこまでできるか分かんないけど、やれるだけやってみる」

ヘルにとつて、家族は大事なもの。

それは、彼女の言動でよく分かった。

ロキを呼び捨てにしたことを怒ったり、スレイプニルの世話をしたり、今こうしてフェンリルのために頭を下げたりできる。家族が、何よりも大切なものだと伝わってくる。

「安請け合ひしてよいのか？」

「無下にはできないよ。だって、こんなに必死でお願いするんだもん。わたしだって、もし家族や親友がひどいことをされてたら……」

何とかできる人に、こうして頼み込むよ」

「……」

アルテレイマは無言だった。

そういえば、アルテレイマに家族はいるのかな。

機会があつたら、今度それとなく聞いてみよう。

「あのさ。材質に関してだけど、猫の足音とか魚の息とか、この世に存在しないものがほとんどだったかな。それ以外は思い出せないや」

「存在しないもの、か。充分じゃ。ドヴェルグのこしらえた一品であることも考慮すると、大体の見当がつく」

「そ、そうなの？ 解呪はできそう？」

「うむつ。今すぐにここを出るぞ。ただし、ヘルとモーズグズはここに残れ」

「え〜？」

「……………（こくり）」

モウちゃんとは対照的に、ヘルは素直だ。

ヘルのわたしを見る目が、なんだか優しく感じられた。

「ウアンティレズドでコカトリスから守ってくれたもんね。今度は、わたしがあなたを助ける番だよ」

「……………そうか」

にこつと、素敵なお顔をくれたヘル。

同性のわたしでもドキツとしちゃうほど、とっても魅力的な笑みだった。

食事を済ませて、後片付けをしてから。

わたしとアルテレイマ、セネアさんは館の外に出て、庭にやってきた。

向かっているのは館の裏。歩いてると、あたりはカビだらけ。外壁とか柵とか、お掃除したくなるよう。

「ヘルはいいけどさ。モウちゃんはお留守番でいいの？ 解呪が得意みたいだつて言ってたじゃない」

「解呪に関してはわらわだけはどうにかする。それに、じゃ。もうじきここは面倒になるし。少なからず番人と女王代理がいたほ

うがよい」

「といつても、モウちゃんの説得には数十分ぐらい要したんだよね。」

「そのせいか、わたしとアルテレイマはちょっと脱力してる。」

「わたくしを同行させる意味はあるのでしょうか？」

「首を傾げる仕草が、なんだか上品。」

「セネアさん、見た目からして高貴な感じがするよね。なんか憧れちゃう。」

「道案内しろとは言わんさ。ただ、館内ではできぬ話もあるからのうち。」

「だから、わたくしも連れ出すのですね」

「うむ」

ちらっと、セネアさんはわたしを見やった。

「正直、巫女というのは成人女性かと思いましたが」

「え？ あ、はあ。ごめんなさい。期待通りじゃなくて」

「あ、いえ。けしてそういう意味では……」

わたしが謝ると、今度はセネアさんが平謝りする。

「おたがいに何度も頭を下げて。いつまで遊んでおる」

「言いながらアルテレイマは、スレイプニルがいる小屋へと歩き出した。」

「あ、待ってよ〜」

そう。わたしたちはスレイプニルに乗って外出する。

ただ、馬に三人乗りできたかなあ。それが不安なんだよね。

「ヘルがよく手入れしておるようじゃ」

小屋は木造で、いかにも手作り感がある。

よく見ると、あちこちにスパツと鋭利な刃物で切られたような跡が。

もしかして、これってヘルが即興ウチノウチノで作ったの？

「ヒンッ」

「うむ。よく懐なついておる。ヘルが尽力があつてこそじゃ」

アルテレイマはにこにこことスレイプニルの鼻を撫でている。

「てかさ、転移するって方法はないの？ そのほうが楽じゃん」

「ふむ？ ああ、それじゃと座標を合わせるのが難しくてな。行き慣れている場所は成功しやすいが、その孤島は周りが海だから徒歩で移動できぬ。下手に転移して海に落ちてもしたら、それこそ危ない。それに、わらわは疲れておる。正確に転移できる自信がない。理解できたかのう？」

よく分かりました。ルーラ登録しとかないと 違う。

安全に配慮して、スレイプニルで移動するんだね。うん。

「何せその付近の海域は、ヨルムンガンドも出没するからな」

「え。あの大蛇の？」

「ふむ。説明がいらぬから助かるわい」

うんうんとうなづきながら、アルテレイマは手綱を引いてスレイプニルを小屋から出す。

「それはそうと、アルテレイマ」

「ん？」

「そのスレイプニルにさ、誰が乗るの？」

「わらわと香乃だけじゃ。セネアには飛んでもらう。戦乙女は背に翼を生やせるからのう」

「承知しました。ここではあなたが法律ですものね」

渋々といった感じで、セネアさんが首を縦に振る。

「飛行生物に襲われぬとは限らんからな。セネアよ、これを返そう」  
どこから取り出したのか、アルテレイマは銀の双剣をセネアさん  
に手渡す。

「これは、わたくしが使っていた……」

「拾っておいた。鞘も合わせてある。やはり慣れた武器がなければ、戦いづらいじゃろう？」

「ええ。そうですね。その配慮に感謝いたします」

ペコリ。セネアさんは深々とおじぎした。

「堅苦しいのう」

「は、はあ」

確かに、セネアさんはちょっと堅いかもね。

よく言えば礼儀正しい。

「その、わたくしはあなた　いえ。アルトレイマ様にまだ忠誠を誓っておりませんね」

「よい。わらわはそういうのが一番嫌いじゃ」

ツンとして突き放すアルトレイマ。

セネアさんは「え、え〜っと」と困ってる。

「別にニヴルヘイムにおるからといって、わらわに従属せよと強制はせんさ。自由にして構わん。ただ、自由と粗暴を履き違えたら容赦よしょうはせんぞ」

「そう、ですか」

「それと、わらわのことは呼び捨てでよい」

「は、はい」

返事をするセネアさんをにらむアルトレイマ。

本当に分かっておるのかと言いたげな顔してるね。

「香乃。わらわに何か物申したいのか」

手綱を両手で握りながら、アルトレイマがわたしに眼を飛ばす。

「アルトレイマが軽すぎるんだよ。今だってさ、女王って感じしないもん」

「……………」

「あれ。怒っちゃった？」

「今のは、少し傷ついた」

う。涙目で抗議される。

「まっ、確かにわらわは女王然とはしとらんさ。自覚はある。わらわは権力だとか支配だとかどうでもよい。渋々ながらニヴルヘイムに気をやっておるからう。ゆえに、女王としての風格がないんじやるうて」

言いながらへこんでいるアルトレイマ。

「あ、その…………別にそれが悪いんじゃないよ？　わたしは、どちら

かというところありのままのアルトレイマが好きだもん」

「む？」

あ、照れてる。

「多分、多分だよ？ 本当の意味でアルトレイマが女王だったら、わたしはここまで打ち解けられなかったと思う。自由に生きるアルトレイマのほうが、接しやすいもん」

「さ、さようか」

「うん。だから、そのままでもいいよ」

言いきって、自分も恥ずかしくなる。

「うふふつ。ふたりは、仲がいいんですね」

「からかっておるのか？」

「いえ。ただ、うらやましいと思ったんです。わたくしは、心を許せる親友というのはいませんでしたから」  
いなかっただ。

セネアさんにとって、親友と呼べる存在は。

「だったら、はい」

「え？」

わたしが差し出した手を見て、セネアさんはびっくりしてる。

「友だちに、なるうよ」

「な、え。どうして……」

「こうして出会ったのは何かの縁だよ。だったら、手をつなごう？  
わたしはそうしたいよ」

ひとりぼっち。それは嫌だよな。

だから、わたしはセネアさんの支えになりたい。

本音を言えば、わたしがさみしいだけなんだよね。ふふつ。

「そう、ですか」

セネアさんはおずおずと、わたしの手を握ってくれた。

「よろしくね」

「はい。よろしく、お願いします」



わたしとアルトレイマはスレイプニルを駆って、セネアさんは背中に純白の翼を広げて飛翔し、とある孤島へ降り立った。

日が傾いてる。夕暮れの海なんて、ニヴルヘイムにいたら見られない光景だよな。

休憩きゅうけいをはさみながらの旅だったので、正確な時間は分からないけど、わたしたちは二日ぐらいかけてここまで来た。

「ようやく、辿り着いたな」

「うん」

う。お尻が痛い。

ずっと乗馬してたからか、お尻がめっちゃくちゃ痛いつ。

「ん？ どうした、香乃」

先に降りたアルトレイマが、わたしの手を引いてくれた。

砂浜に足をつけた瞬間、バランスを崩して尻もちをつく。

「あいつたあああつ」

わたしの悲鳴を聞いて、翼を消して降り立ったセネアさんが駆け寄ってくる。

「だいじょうぶですか？ 馬に長時間乗っていると、そうなってしまふんですよね。わたくしも慣れないうちは、それで号泣しましたよ」

セネアさんは脇の下に腕を通して、わたしを軽々と持ち上げる。

わたしを立たせてくれた後、服についた砂を手で払ってくれた。

「あ、ありがとう」

「いいえ。わたくしもよく経験したことです。慣れるまでは、本当に痛いんですよえ」

ああ、共感してくれる人がいる。

うれしくてちよっち涙目のわたしは、ちらりとアルトレイマのほうを見やった。

「ん？ どした」

なんで、アルトレイマは平気なの？

わたしは前にいるアルテレイマに必死にしがみついていたよ。  
特に何かしている様子はなかった。身体に巻きつけてある反物で  
お尻をガードしていることもなかった。

な・ん・で？

「なんじゃ？ 言いたいことがあるなら言っがよい」  
「言わない。」

「ふうむ？ して、洞窟の周辺には森だけ、か。随分と物さびしい  
ところじゃな」

振り返って、アルテレイマは洞くつのほうへ歩き出した。  
わたしとセネアさんは後を追いかける。

ふと、アルテレイマが洞くつよりかなり手前で足を止めた。なん  
だろう。

「どうしたの？」

ずっと無言で、何もしゃべろうとしない。

ただアルテレイマは、洞くつではなく空を見上げている。

「何か、いるのですか？」

「違う。ただ、奇妙な感じがしたのでな」

奇妙？ 今のアルテレイマのほうがよっぽどそうだよ。

「気のせい、か」

ポツリと、ひとり言をもらす。

「ゆくぞ」

そう告げて、アルテレイマは洞くつに入った。

淡い光が中を照らす。アルテレイマが灯石を使ったからだ。

「……誰だ？」

ビクツ。低くてよく通る声が響いた。

アルテレイマは声の主の居場所を特定し、そこへ灯石を投じた。

「……なんじゃと？」

絶句した。アルテレイマだけは、かるうじて言葉が出たみたいだ  
けど。

すでに銀色の毛並みの狼は      グレイプニルの拘束から解き放た

れていた。

「はあ、く。私を、屠りに来たのか……？」

「フェンリル、じゃな？」

「だからどうした。私を……く」

よろけながらも、フェンリルは身構える。

その眼光は鋭かった。しかし、わたしを見た瞬間にそれが和らぐ。

「お前は……まさか」

「え？」

「い、いや、臭いが違うな。だが、似ている。なんだ？ 貴様は、

なんだあ！？」

「ひいつ」

緊張の糸が緩んだ時に怒鳴られたので、わたしは恐怖で足がふらついてしまった。

「だいじょうぶですか」

「あ、う、うん」

セネアさんはわたしを支えた後、短剣を左手に構えて前に立った。

「ぐ」

ガクリと、フェンリルは崩れ落ちた。

「疲弊しておるな。無理はせんほうがよい」

「く。敵に情けなど、かけられてたまるか」

「落ち着け。わらわ達はお前を倒すためにここを訪れたのではない」

「む。本当か？」

あれ。意外にも話が通じる。

てか、わたしをじっと見てるんだよね。どうしてかなあ。

「信じる。しかし、驚いたな。グレイプニルというひもを……すでに引きちぎっておるとは」

「いつ!？」

わたしがびつくりしたのは、フェンリルがわたしを射すくめたからだ。

な、なんで？ わたし、まだ何もしてないのに。

「香乃さんに危害を加えるつもりですか」

セネアさんはわたしを庇いながら、フェンリルに問いかける。

「その台詞は、つい先刻までの私だったらうなづけたがな」

「ど、どういう意味ですか？ いい加減にしないと、斬り伏せますよ」

「これは……ほう。やはりお前は戦乙女か」

「だ、だったらなんだというんです」

「それにこちらは……死臭が染みついているな。それも濃度が高い。貴様、ネクロマンサー屍術師か」

「んや。ハズレじゃ」

「そうか。ならいい」

フェンリルは舌を出して、息を荒げている。

「済まないが、食料と水はないか」

目がうつろだ。

そんな状態で、強がってたんだね。

わたしはフェンリルに近づこうとしたら。

「香乃さん。危ないから下がって」

セネアさんに腕で制されてしまう。

「よい。セネア、フェンリルに戦意はない」

「し、しかし」

「そのような身で戦たたかはできぬじやろう。それはそうと、食料と水を確保しよう。話はそれからじゃ」

この間に、わたしはフェンリルへと接近した。

アルトレイマは外へ出たようだけど、セネアさんはまだ警戒を解いてない。

「だいじょうぶ？」

「む。小娘よ、私が怖くないのか」

「怖いよ。でも今は、あなたを助けることのほうが先決」

「……。同じことを言うんだな」

「え？」

「いや」

首を横に振って、フェンリルはわたしに身を委ねた。

凝り固まった筋肉をほぐそうと、入念にマッサージしてあげる。

「ヘルが、あなたのことを心配してたよ」

「ん？ ヘルだと？」

「うん」

「そうか。お前達がここを訪れた理由が解けた」

ひとり納得している様子のフェンリル。

「それはそうと、もうすぐヨルムンガンドが戻るはずだが……」

「え？ なんで」

「海中で魚を啜えて、私に届けると言ってたからな。しかし、未だに帰らない。何をやっているんだか」

大きな溜息をつくフェンリル。

「む」

「あ、痛かった？」

「いや。妙に慣れている気がしてな。気持ちがいいものだ」

家で飼ってたワンちゃんと同じやられてたからね。

「おう。これはこれは、なかなかよいぞ。むう。そこ、そこがいい。ぬお。くう〜」

「なんか、親父くさいよ〜」。

「その戦乙女」

「わたくしはセネアです」

短剣を鞘に収めて、セネアさんはフェンリルの前で屈んだ。

「なぜ、私を助けに来た？ アーシルが黙ってはいないぞ」

「そうだとっても、先に裏切ったのはあちらです」

「む。どうやらお前も、私と同じく欺かれたか」

「はい」

「難儀なものだ」

打ち解けたのか、セネアさんとフェンリルが同時に笑う。

「ところで、小娘よ」

「ん？」

「お前は、そのひもを手でちぎれるか？」

「は？」

ひもつて、フェンリルの周りに落ちてるやつだよな。

「頼む。やってみせてくれ」

「な、なんで？」

「いいから、頼む」

何度もお願いされたので、わたしは仕方なくひもを拾い上げる。

そして、力を込めて引っ張ってみる。ダメだ。とんでもなく丈夫だよ。

「できない、のか」

「な、何でこんなことを言い出すの。わたしには、とてもじゃないけど無理だよ」

「ふむ。実はそれを、軽々と引きちぎった娘がここを訪れてな」

え。え？ ま、マジで？

「おっと、自己紹介が遅れたな。私はフェンリルという。ふたりの名は？」

「あ、うん。若郷香乃です」

「セネアと申します」

「あ。さっき出てったのはアルテイマって言うんだよ」

「うむ。覚えたぞ。しかし、お前はあの娘とは違うのか。ちと残念だ」

溜息をひとつ。何があつたのか知らないけど、かなり落ち込んでる様子。

「済みませんが、事の詳細を説いてもらえませんか」

「そうだな。悪い。拘束されていた私を救い出したのは、人間の娘だったのだ。折笠華葉と名乗っていたな」

おりかさ、かよ？

「えっと、どういうこと？」

「その娘と同じ臭いがしたのでな。少々興奮してしまった。驚かせ

て済まない」

同じ臭いって、まさか。

「わたし以外にも……？」

「ん」

「ねえ、その娘はどこに行ったの？」

「ムスペルヘイムへ向かうと言っていたな」

ゴクリと、唾を飲んだ。

「あそこは灼熱の大地。人間が足を踏み入れるような土地ではない。今はフェンリルじゃない。アルトレイマだ。

魚を反物で包んで、洞くつ内に運んできたようだ。

「フェンリル。魚は嫌いか？」

「いや」

「ふむ。ヨルムンガンドがこれを届けてくれと言っもんでな。探す手間が省けたぞ」

こつちにやってきて、反物で魚をさばくアルトレイマ。

器用に鱗をはぎ、骨を取り除き、三枚に下ろしてる。

できたそれらを反物に盛って、フェンリルの前に差し出した。

「いいのか」

「構わん。食べる。生け作りじゃ」

「感謝する」

フェンリルはガツガツと魚をむさぼり食う。あ、わたしも一切れ食べたいなあ。

「ねえ、アルトレイマ」

すつくとわたしは立ち上がる。

「止めておけ」

「ちよつと。話を聞かないで何を言っの」

腕を組むアルトレイマに詰め寄った。

「ムスペルヘイムへ行きたい。そう言いたいんじゃないのじゃろっ？」

「うん」

「無理じゃ。わらわでも、あそこに長居はできん」

「だって、その……」

「火傷ならまだいいほうじゃ。窒息するぞ」

「ち、ちっそく？」

「ああ。ムスペルヘイムには酸素がほとんどない。火と熱の世界じゃ。生身では丸焼けになるのがオチ。近づくことすら危険極まりない」

「で、でも。フェンリルを助けた娘は、そこに向かったんだよ？」

「急いで引き止めないと危ないんじゃない？」

「いや」

フェンリルが話に割り込んできた。

「その娘は、ヨツンヘイムにあるウトガルスからヨルムンガンドの背に乗ってここに来た。ここからは徒歩で海上を進むと言っていた。その言動は明らかに、普通の人間ではない」

「普通の人間じゃないって。でも、その娘からはわたしと同じ臭いがしたんだよね」

「ああ。間違いない。しかし、お前とあの娘は根本的に違うものがある」

「違う、もの？」

わたしはいぶかしげに、フェンリルの瞳を見つめた。

「鍛え方だよ。あの娘はヨルムンガンドと互角に渡り合える力もあり、発気もできる。おまけに、私の拘束をいとも簡単に破ってみせた。これだけできる娘が、たかが熱気にくたばるとは思えん」

「んや。灼熱の大地に常日頃住んでおるムスペルは、身体能力の高さに加え、肉体が頑丈にできておる。人間のような脆弱な身体では、喉や肺などの呼吸器官が熱にやられて即死するぞ」

腕をほどいて、アルトレイマは灯石とちぎれたひもを拾った。

「でも、アルトレイマは過去にスルトとやりあつたんでしょ？」

「ああ。自身の肉体を凍気で守りつつ、体内電気を増幅して、自身の体内と大気中にある水分を酸素と水素に分解しながらな」

「え？ そんな難しいことをしながら戦ってたの？」



「ふむ。そうでもせんと呼吸が成り立たない。幸い、ムスペルヘイムの周囲は海じゃからな。あの中は高温の蒸気だらけで蒸し暑い。それを電解して酸素が確保できなければ、活動すらままならぬ」

「自息法じそくほうができるのか、お前も」

「できる。しかし、ムスペルヘイムでは半日ぐらいか。自息法をやりながら、発気によって外気温から自身を守りつつ活動するのは酷じゃな。ムスペルヘイムは安易な気持ちでもむく土地ではないのじゃ。そこは理解してほしい」

いつも自信満々なアルトレイマが、弱音を吐くんだ。

本当に無理なんだね。諦めたくはないけど、死んじやつたらどうしようもないもんね。

「ところで、フェンリルや。ひとつ聞きたい」

「なんだ」

「その娘は、藍色の髪と瞳ではなかったか？」

「……。どうしてそれが？」

「やはり。あの娘が」

アルトレイマは灯石をポンポンと上に放りながら、わたしを一瞥した。

「な、なによ」

「香乃。覚えておらぬか？ 石の宮殿跡で、フレイヤとやりあったいた」

「そこまで言われて、思い出さないとはいはずないよ。」

「あの、女の子が」

傘を持って、フレイヤを圧倒していた。あの、女の子が……？

ひとつ、疑問が浮かんだ。

「え、なに？ その女の子は、鍛練たんれんして強くなったの？」

「おそらくそうじゃろうな」

「じゃあ、わたしでも……」

「止めておけ。香乃は肉体を酷使うことには向いておらんじやろう」

「き、決めつけないでよ」

「第一、じゃ。ムスペルヘイムに何の用があったのか、それすら解らんというに」

そういえば、そうだね。

皆がフェンリルのほうを向く。

「ヨルムンガンドから聞いたが、その娘は元の世界に帰るとか言ってたそうだ」

元の世界に、帰る？

わたしは思わず、アルテレイマのほうを向いた。

「なるほど。ムスペルヘイムにそれがある、ということか」

「何の話をしているんだ？」

「まあ、こちらの話じゃ」

アルテレイマは複雑そうに、わたしを見つめる。

「さて、長話はそこまでにしようぞ。ヘルが心配しておるしいう。

忘れ物はないか？ ニヴルヘイムへ転移するぞ」

## 第6話

「たちゆけて」

え？ だれっ？

「やだああああっ！ もうやだ、だれか……だれかたちゆけてよお！」

幼い子どもの声。

泣き叫んでる。

「えへへっ。ほらあ、ぐつちゃぐちゃだよっ？」

赤い？

なに？ 何が……起きてるの。

「あっひゃひゃひゃっ！」

……絶句した。

何人もの死体が転がる血の海に、ひとりの女の子が立っていたからだ。

「う、うう」

「んや。目覚めたか。香乃」

「こ、ここは……？」

「小屋じゃよ。橋の近く、モーズグズのだ」

あ、そっか。

わたし、戻ってすぐに寝ちゃったんだ。

「あれ、モウちゃんは？」

上半身を起こして、イスに座ってるアルトレイマに聞く。

「川で水を汲んでおる。すぐに戻るじゃろ」

お、本当にすぐ戻ってきた。

「あれえ、香乃ちゃん。おはようございますう」

木の桶を入口に置いて、ペコリと頭を下げるモウちゃん。

「もう、体調はいいの？」

「ええ。万全ですう。心配してくれてありがとう。香乃ちゃんっ」  
「うわ」

ぎゅ〜っと、わたしに抱きついてくるモウちゃん。

さみしがり屋なんだねえ。

わたしもモウちゃんを抱き締めて、頬ほお擦りまでしちゃった。

「ふっ」

アルテレイマはわたしたちの熱々振りに、あきれているようだ。

「あれ、フェンリルとかは？」

「皆は館に戻ったぞ。ヘルはフェンリルにべったりで、しばらくは落ち着かんじやる。根っからのブラコンじゃからなあ。セネアは少し厚着して、橋のほうにおる。ある人間のみが、館に辿り着いていないとか」

わたしはモウちゃんから離れ、脱がされてた靴を履く。

「さて。わらわはもうそろそろ館に戻る。地ならしも終えたようじやしな」

席を立ち、わたしたちの間を通り抜けるアルテレイマ。

「あ、それよりも香乃ちゃん。お水をどうぞ」

「あ、うん。ありがとう」

差し出された木の桶から水を手ですくい、それで喉を潤した。

「あ、外套は羽織ってたほうがいいですよ。冷えてきましたからあ」

「そ、そうなんだ」

わたしはモウちゃんから黒マントをもらい、おそろいのマントをなびかせて外に出た。

アルテレイマは橋の前にいるセネアさんと話し込んでいた。

セネアさんは白のマントを羽織ってる。月明かりが彼女を美しく彩ってるね。

「あ、香乃さん。おはようございます」

「はい。おはようございます」

「たがいに会釈。<sup>えしゃく</sup>」

「ふむ。ちようどよい」

「何が？ アルトレイマが何を考えているのか分かんない。」

「ふと、あることに気がついた。」

「モウちゃん。わたしが投げたビー玉でできた大穴さ。埋まってるね」

「はい？ ああ、それですかあ？ ついさっき、わたしが埋め立てたんです」

「そ、そうだったんだ」

「さっきアルトレイマが言った『地ならし』って、これのことだったんだね。」

「まだ、なんですね」

「あれ。セネアさんとアルトレイマの表情が暗い。どうしたんだろ。」

「アルトレイマさん」

「ん。長いから呼び捨てでよいと何度も言っておるじゃろう？」

「わたくしには、このほうがいいです」

「ふう。さようか。して、どうした」

「本当に、妹は、マイルスは来ていないのですか？」

「先刻モーズグズにも確かめたが、そのような娘はいなかった。イリアだったか。それはセネアを物質化<sup>マテリアライズ</sup>した際、自我が崩壊していると察したからな。すでに転生するよう促した」

「そう、ですか。マイルスはまだ、生きている可能性は？」

「ありうる。しかし、石の宮殿の下敷きになったことを考えると……マイルスが無事かどうかは怪しい。生存しておるのなら、巨人族に救出されたかもしれぬな」

「……………」

「不安そうなセネアさん。」

「アルトレイマさん」

「ん」

「わたくしは、アーシルに国を、民を、何より大切な家族を蹂躪じゆうりつりんされました。ですが、今わたくしの胸にあるのは憎悪ではありません。悲哀だけです」

「ふむ」

「復讐。その機会を与えてくれると言いましたね。でもわたくしには戦意がありません。憎いからといって報復に出るのは、わたくしもアーシルと同じではないかと思ひまして」

「なるほど。セネアの意見はよく解った」

「うなづくアルテレイマに、複雑そうなセネアさん。」

「復しゅう。その機会を捨てたんだ。」

「もし、わたしだったらどうするのかなあ。」

大切な家族を殺される。多分、わたしはセネアさんみたいなことは言えないよね。

きっと、怒りに任せて動いてしまうだろう。うらんで、相手を殺すまで絶対に許さない。

考えただけで、自分のことが怖くなっちゃった。

「いけませんか？」

「無理強いはせんよ。わらわも、戦いくに乗り気ではない」

「ならどうして、あなたはフェンリルを解放したのですか」

「別に、わらわはヘルの憂鬱うげつそうな顔をいつまでも見とうなかつただけのこと。肉親が残酷な仕打ちにあっているかもしれないのに、平然としていられるものか。あやつの情の深さは、誰よりもわらわが理解しておる」

腕を組んで、恥ずかしそうにそっぽ向くアルテレイマ。

「アルテレイマって、優しいところあるよね」

「ぬ。な、なんじゃと？ わ、わらわは……ただ、部下の気持ちに配慮してじゃな」

「はいはい」

「む。そのような扱いをするとは、香乃。後で覚えておれ」

「はいはい」

照れ隠しに噛みついてきたね。段々、アルトレイマのことが分かってきた。

「ひとつ、よろしいですか」

「ふむ？」

頬をふくらませたまま、アルトレイマはセネアさんのほうを見る。

「亡国の民を、不死者として使役するつもりはありますか」

「ない」

あ、頬が縮んだ。

「本当、ですか」

「亡骸や不死者など、ここではガルムとニースヘッグの餌になるのが常よ。そんなこんなで今は大して数がない。館にいる死者もいずれば転生する。それに、じゃ。不死者の軍勢を作るとするなら、ラグナロク直前のほうが多くそろうはず。好ましくはないがね」

セネアさんはまだ不安なのかな。少し伏し目がちだ。

「真実を知ったら、民達はとうするのでしょうか。やはり、戦いに参加するのかしら」

「報復に出るといふなら、その機会は与える。望むのなら、不死者となって戦いくを続けても構わん。ただ、わらわはラグナロクらぐに關与するつもりはない」

「どうしてですかあ？ アルトレイマ様って、ほおんとに屍ネクロマンシー術を毛嫌いしてるんですねえ」

え？

「別によいじやろう。そないなことは」

そ、それは意外だ。

「ヘルちゃんもそんなに好んで使いませんしい。おふたりは、不死者は必要最低限でいいと言いますしねえ」

そういえば、ヘルは大きなミミズの死体があると知りながら、コカトリスと対峙した時に不死者として使わなかった。

でも、わたしがピンチになった途端にミミズは動き出した。思い

出してみると、納得できるよ。うん。

「モーズグズ。何が言いたい？」

真剣な眼差しで、アルトレイマはモウちゃんを見つめる。

「あ、い、いえ……その、口が過ぎましたあ」

深々と頭を下げるモウちゃん。今のは、アルトレイマの逆鱗げきりんに触れかけたらしい。

「屍術ネクロマンシーを使えるからといって、乱用はせんさ。一番最悪な事を常に想定しろと、わらわはヘルにも言い聞かせてある」

「最悪なこと？ それって、なに」

わたしが聞くと、アルトレイマは瞳を潤ませながらこう答えた。

「もし、もしもの話じゃ。親しい友人、家族、それらが不死者になつたらどう思う？」

「っ」

「香乃。今のお前の気持ちだが、わらわとヘルの共通の見解じゃよ」  
すつつつごく、嫌だと思った。

見たくないもん。想像すらしたくない。大切な人が、不死者になつたらなんて。

「わらわは、モーズグズ、香乃、セネア。そなたらを不死者として使役しようない。ヘルとて皆を不死者として使いたいとは思っては  
おらん。だからこそ、自身の価値観が歪まぬように必要最低限のみ  
不死者を生み出しておるのさ。死を利用するというのは、他者がた  
だの物や兵器にしか見えんようになる弊害へいがいを生じさせる。多用すれ  
ばするほど、利己的になりやすいからのう。そのような術を使える  
からこそ、常に己を律しなくてはならない。道理を誤らぬようにす  
るのは、実に難儀なことよ」

アルトレイマは腕を組みながら、わたしたちに背を向けた。

涙を、見せなくなかったんだね。

「そう、だったんですかあ」

「む。モーズグズ、くつつくでない」

感動して抱きついたモウちゃんを、アルトレイマは必死に引きは



がそつとする。

「意外、でした」

「ぬ？ セネア、お前もか」

セネアさんはアルトレイマの両手をしっかりと握ってる。

「わたしも、そう思ったよ」

「か、香乃」

へきえきするアルトレイマを見ると、なんだか可愛いっ。

そっかぁ。うんうん。彼女の本音を聞いて、うれしくなっちゃったよ。

「な、香乃。お前も抱きつくなっ」

「えっへへ」

「ぬう。せ、セネア。笑ってないで止めんかっ」

「いえいえ。仲がよろしいことで」

「ぬぬぬぬっ」

困惑するアルトレイマは、わたしたちを引きずりながら館のほうへ戻ってた。

洞くつを抜け、門を押して開いて。

館へ向かって歩いている時、不意にアルトレイマがわたしたちを突き飛ばした。

「くっ」

アルトレイマの周囲にいくつもの氷塊ができる。

「あいたたた」

「これは……」

「敵襲？」

わたし、モウちゃん、セネアさんはそれぞれで反応が違う。

「何の真似じゃ。フェンリル」

今、アルトレイマが誰かの名をつぶやいた。

ふと、館の屋根のほうから何かが降りてくる。それは。

「ふっ。これしきのことですらたえるのか？ ニヴルヘイムの女王が、笑わせる」

フェンリルだった。アルトレイマの目の前に着地し、銀毛ぎんもつと尻尾を逆立てている。

アルトレイマは身動きができない。両足首が、氷に捕まってるからだ。

「あ、アルトレイマっ」

「香乃。そなたらはそこを動くでないぞ」

フェンリルは、アルトレイマの反応を見て大口を開けた。

「他人を気遣う余裕を見せるか」

「戯たわむれにもほどがあるぞ」

「戦いくに遊びもあるか。私はただ、力なき者に付き従うつもりはない。貴様の力量がどれほどのものか、この目で確かめさせてもらう」

言い終えて、フェンリルはアルトレイマへ飛びかかる。

「む」

アルトレイマに巻きついてたすみれ色の反物がほどけて、フェンリルへと襲いかかる。

対するフェンリルは冷静に噛みついて、反物をビリビリに引き裂いた。

「すうっ。はあああああああっ」

アルトレイマは何かをして、氷を一気に砕いた。

「ぬっ」

フェンリルは宙に氷の足場を作り、すぐに後転した。

「正しい判断じゃな」

腕を組んで、におう立ち。アルトレイマは口元に冷笑を浮かべてる。

ふたつとなった反物を呼び戻して、両腕に巻きつけた。

「強烈な発気だな。しかも、凍てつく。まるで吹雪のようだ」

「分析しておる場合か？」

「む」

すでにフェンリルを囲うように、氷の槍が伸び始めている。

それを氷の壁で防ぎ、フェンリルは白い吐息をつく。

「大した威力ではないな」

「さようか。なら、これはどうじゃ？」

アルトレイマは両手を広げて、指先をフェンリルへと向けた。

そこから、冷たい風が吹き荒れる。

「凍てつく波動」

そう。まさにそれ。アルトレイマは『ドラクエ』の大ボスがよく使う、いてつくはどうを放った。

ガイコツ剣士とかで疑問に感じてたんだけどさ。アルトレイマって、もしかして『ドラクエ』知ってるの？

「くっ。なんだと？」

フェンリルの周囲にあった氷の槍と壁が、瞬く間に塵となる。

「容赦はせんぞ」

言いながら、アルトレイマは腕にあった反物をほどいてみせた。ふわふわと浮くそれらは、小さくまとまって 次第に、大鎌の形状になる。しかも、凍りついて形を固定させてるよ。

『な、何事ですか。これは』

騒ぎを聞きつけたのか、ガイコツたちがふたりを取り囲む。

「手を出すな。これは、わらわとフェンリルの戦いくさじゃ。邪魔立てした時点で、バラすぞ」

その大鎌を左手に持ち、振り払って風切り音を鳴らすアルトレイマ。

『むむ……』

アルトレイマに一喝されて、ガイコツたちは距離を置いた。よっぽど解体されたくないんだね。

「私と差しでやりあうか。いい度胸をしている」

「ふっ。減らず口を。黙らせてやるっ」

アルトレイマはフェンリルとの距離を一瞬で詰めた。肉眼で捉えられたのは、奇跡に近いかも。

「く。速いな」

そういうフェンリルも、斬撃を跳んでかわした。かなり素早い。空中に作った氷を蹴って宙返りし、アルトレイマの背後に位置する。

「ひゅ〜」

振り返りながら、アルトレイマは口笛を吹く。

「見た目は細いのに、なかなかできるな。正直、侮っていた」

「油断は禁物。ロキからそう教わらなかったか」

「生憎、父親についてはあんまり記憶がなくてね」

首を横に振りながら、フェンリルは前傾姿勢になった。

「む？ これは……」

アルトレイマは、腕にある無数の切り傷に気がついた。

「今更か？ ついさっきやらせてもらったぞ」

「なるほど。フェンリル。体毛を氷結させて、不可視の刃で身を守っておるな」

「看破するのが早い。ヘルを従えていたのは、伊達<sup>だて</sup>ではなさそうだし、  
そういえば、ヘルの姿がない。なんでだろう。」

フェンリルと一緒にいると思っただのに、ていうか、ヘルならふたりのケンカを止めるはずなのに。ど、どこにいるの？

「やれやれ」

小声で何かつぶやいた後、アルトレイマは左右の手から紫色の球体をひとつずつ生み出した。

反物は解凍されて、彼女の両腕に巻きついてる。

「発現か？ 器用な真似をする」

「ふっ」

鼻で笑った後、アルトレイマはふたつの球体をひとつにまとめた。

「な、なにっ？」

「“アイスバーグ”」

密度を増した球体を解き放ち、アルトレイマはその場に屈んだ。荒れ狂う吹雪。それだけじゃない。地面を伝う無数の氷の刃が、

フェンリルの目と鼻の先に氷の塊を作り出す。

「く、なんだと!？」

一瞬にして氷山に囲まれた。フェンリルに逃げ場はない。

しかし、そのうちのひとつが粉々に砕けた。フェンリルが体当たりして突破したんだ。

「や、やるう」

口から氷の針を吐き出して、フェンリルは息も絶え絶えにアルテレイマをにらむ。

「避けきるとは、意外じゃな。加減をしたのがよろしくなかったか」  
わたしたちがいるから、本気じゃなかったんだ。

でも、ガイコツたちは氷漬けになってる。館の周囲は白銀の世界と化してて、下手に歩いたら転びそうだ。

「わ」

「あ、だいじょぶですか。香乃ちゃん」

「う、うん」

軽くめまいがした。少し息苦しい。

わたしを支えてくれたモウちゃんとセネアさんも、息が乱れてる。

「ま、参った」

「む?」

「この通りだ。私の敗北を認める」

お座りの体勢になり、フェンリルは尻尾を左右に振ってた。白旗らしいね。

「じゃから?」

しかし、アルテレイマはそれをよしとしない。

再び両手で紫色の光を紡ぎ、反物を分けて凍らせ、ふたつの球体とブーメランを作った。

「先に仕掛けたのはそちらじゃろう? 不意撃ちをしておいて、勝手に止めるでない」

「く」

フェンリルはその眼光にたじろいだ。

圧倒的な力を持つアルテレイマを前にして、悔しそうに歯噛みしている。

「……………」

「む？ ヘルか」

見られない。そんな切羽詰まった感じで、ヘルがふたりの間に降り立つ。

「ちょうどよい。兄妹きょうだいもろとも、しつけてやるう」

「……………」

大鎌を盾にして、ヘルはアルテレイマをじっと注視してる。

「あ、アルテレイマっ！」

わたしはそれを見逃せず、ついふたりの間に　うきゃあっ。

「あいたたた」

こけました。

ついさっき注意したのに、まさか自分が転んじゃうなんて。

ああ、お尻がひんやりしてる。

そんなこんなで滑るに滑って、ふたりの間に割り込みました。

「香乃。そこをどけ」

「い、いやだよ。もういいじゃない。フェンリルだって謝ってるんだし、ヘルだつておびえてるじゃない」

「それが許せん。戦いくさを始めておいて、自分勝手に止めるな」

「まだ続けるんだつたら、わたしもあなたと戦うよ」

「ぬ」

立ち上がるうとして、また転倒しちゃう。

うう。いったあゝい。

「ぶ、うぶぶっ」

「ひっどおい。アルテレイマ、笑わなくてもいいじゃない！」

「すまんすまん」

そんなにおかしかったのか、アルテレイマは腹を抱えて笑っている。

「……………」

「あ、ありがとね」  
手を差し伸べたヘルも、笑いをこらえてる。  
「香乃に免じて、先刻のあやまちは許してやろう」  
「む。寛容な心遣い、感謝する」  
フェンリルは再びお座りして、深々と頭を下げた。

「とでも言うと思ったか？」

「ぐうう！？」

フェンリルの声。わたしは振り返って、ぎよっとする。

「あほうが」

アルトレイマは冷たくそう吐き捨てた。

「……兄さん」

無数の氷の針に貫かれて、フェンリルは大量に出血している。

「く。み、見えなかった」

崩れ落ちるフェンリル。もう、虫の息だ。

「急所は狙っておらん。徐々にいたぶってやらねばな」

ヘルはキツとアルトレイマをにらみ、大鎌を振りかざした。

「ほう？ やってみるがいい」

浮遊する反物を解凍し、腰に巻きつけながら腕を組む。あからさまに挑発してるよ。

しかし、ヘルは動かない。歯を強く食い縛り、にらんだまま。

震えてる？ 違う。動けないんだ。

「あ、アルトレイマっ！」

わたしはヘルの前に立ち、両腕を広げた。転げそうになるも、どうにか踏ん張ってみせる。

「庇うのか？ その、愚かな兄妹を」

「う、うるさいっ！ アルトレイマだって、やりすぎだよ」

「む？」

わたしの目の前に、背中白い翼で羽ばたく人が セネアさん

だ。

銀の短剣による二刀流で、アルテレイマと対峙してる。

「お願いです。もう止めてください」

「どいつもこいつも、お人好しばかりじゃな」

白い溜息をついた後、アルテレイマは不気味に笑った。

「ちようどいい」

「なっ」

ぼそっとつぶやいて、アルテレイマは氷の双剣を手にして、セネアさんとつば迫り合いをする。

「ほっ？ どちらか一方は抜ける自信はあったのじゃが」

「や、やる気なのですね」

「ふ」

「ぐっ！？」

左の鉄拳を腹に見舞われ、翼が消えてしまい、セネアさんは地面にうずくまる。

「もう少し足腰を鍛えろ。飛べるからといって、下肢を鈍らせては持ち腐れよ」

一言注意して、アルテレイマはこっちに接近する。

「……く」

ヘルは前に出て、大鎌で斬りかかる。

「ふ」

後退してかわされた。けど、ヘルの狙いは当てることじゃなかった。

「……とりゃあー！」

まるでスコップのように刃で地面をえぐり、その刀身を足で蹴飛ばす。土塊をアルテレイマへ投じるためだ。

「ふん」

でもそれは、右手で打ち砕かれてしまった。

「ほっ？」

「え？」



びっくりした。

だって、ヘルがわたしの首に大鎌を突きつけているから。

「な、ヘルちゃん」

「……動くな」

モウちゃんを言葉で制して、ヘルはアルテレイマとにらみあう。

「本気か？」

「……」

「まあ、よい」

静かな足取りで、ヘルに近づくとアルテレイマ。

「……く、くるな」

声が ううん。声だけじゃない。手が、足が、恐怖で震えてる。

「フェンリルを傷つけられて怒り心頭なのは理解できる。じゃが、自分の非を省みず、香乃を人質にするとはな。いい度胸をしておるのう。む？」

言葉の途中で、アルテレイマは後ろを振り返ろうとした。

「もう、もう止めてください。争いは、好まないのではなかったのですか？」

首と背中に剣を突きつけられ、アルテレイマはじっとしている。

「八方塞がり、か」

言う割には、楽しそうだね。

「く、や、やめろ。ヘル」

「……兄さん。兄さんは休んでて」

わ、わたしはどうしたらいいの？

目でアルテレイマに訴えたら、彼女はまばたきを二回して、ふうと溜息をついた。

「香乃。深呼吸して目を閉じろ」

「え？」

「いいから」

皆が怪訝な顔を（げげん）する中、わたしは言われた通りのことをした。

「茶番は終わりじゃ」

ブルツ。その発言の直後、気温が一気に下がった気がした。

びっくりして目を開けると、後ろでヘルが膝を崩して、歯をカチカチと鳴らしながら泣いている。セネアさんは尻もちをついて、同じく涙目。フェンリルも、目を見開いて呆然としている。モウちゃんは大筆を杖代わりにして、息を荒げていた。

「ちいとばかり、本気になってしまったな」

バツが悪そうに、頭をかいて腕を組むアルテレイマ。

白い溜息をついた後、彼女はこう忠告した。

「この秩序を乱す行為。わらわはそれが許せんだけよ。フェンリル。ヘル。そなたらの行為をもう咎め<sup>とが</sup>はせん。しばらく休んでおれ」

それから、アルテレイマは背後を振り返る。

「セネア。そなたは回復魔法は詠唱できるか」

「は、はい」

「なら、それでフェンリルを治療してやれ。わらわはこれから頭を冷やしに、フェルゲルミルへゆく」

腕をほどきながら注意した後、アルテレイマはモウちゃんの横を通り過ぎた。

白銀の世界のど真ん中で、セネアさんが両手から淡い光を発して、フェンリルを治療してる。

「だいじょうぶですか？」

「むう。あれほどの力の持ち主とはな。見誤ったぞ」

アルテレイマの攻撃は意外と浅く、フェンリルのダメージはそれほどでもなかった。

手加減、してたんだね。

彼女の戦う姿を目の当たりにして、わたしが抱いてたアルテレイマの印象が変わったような気がする。

「ところでさ。モウちゃん？」

「はぁい？」

「フェルゲルミルって、なに」

「ああ。それですか。わたちの小屋から、河川に沿って上流へ歩けばすぐに見えてきます。そこにニースヘッグが棲すんでるんですよ」

「へえ」

「追いかけてよ」

「ちよつとお待ちを」

隣にいたモウちゃんは、わたしの腕をつかんで強引に止めた。

「な、なに？」

「わたしもついてきますう。香乃ちゃんひとりだと、危ないような気がしてえ」

「危ないって、迷子になるかもってこと？」

「というわけで、わたち達はアルテレイマ様の後を追いますう。んじゃ」

モウちゃんは手を上げて、皆にそう宣言した。

「え、あ。い、いつてきまゝす」

わたしは一応、皆にあいさつはしておいた。

灯石を頼りに洞くつを抜けて、わたしとモウちゃんはガルムに出迎えられた。

「ワンツ」

「わ」

「こらっ。ガルム、香乃ちゃんがびっくりしてるじゃないですかあ」

「キャウ〜ン」

モウちゃんが叱ると、ガルムはおとなしくなる。

首輪と鎖につながれているガルムは、お座りの体勢で尻尾を左右に振ってる。

「香乃ちゃん。ガルムの頭を撫で撫でしましょう。今日は機嫌がいみたいですしい」

「え」

「ほら、ガルムも待ってますよう」  
「う、うう」

だって、でかいもん。よく見たら、わたしの身長より大きいんだよ？

体毛が黒いし、牙が鋭いし、じゃれて爪に引っかかれないう不安ですつ。

「ワンツ。ワウ、キャイン」

「あ、そうなのう？ だからガルムは、香乃ちゃんがお気に入りなんですなえ」

「ウォンツ」

「わあ。すつごうい」

なに？ 通じてるの？

「ささ、香乃ちゃん。ガルムに撫で撫でお」

「いやいや。わたし、さっきの会話理解できてないし」

「ぶ〜。つべこべ言わず、撫でましようよう〜」

モウちゃんは頬をふくらませて、背伸びして抗議してくる。

おずおずと、わたしはガルムの頭に手を伸ばした。

「よ、よしよ〜し」

「ワン」

「う、うん」

何を言ってるか分かんないけど、とりあえず何度も頭を撫でた。

「香乃ちゃんって、アルテレイマ様に似てるけど。怖いじゃなくて、可愛いから食べてみたいと言ってますねえ」

「はっ」

その途中、モウちゃんがにこにここと爆弾発言したので、硬直してしまつ。

「でも、食べちゃダメですよ。アルテレイマ様がブチギレますからあ」

「キャンツ」

その注意を聞いて、ガルムはあどさつた。

身震いしているところから察するに、本気でアルテレイマを恐れている。

上下関係はつきりしてるなあ。ワンちゃんは主人に忠実なようです。

ガラムとお別れして、わたしとモウちゃんは小屋に入った。

「香乃ちゃん、とりあえず忘れ物はないですかあ？」

「なに？ 遠いの？」

「いえ。歩いてすぐなんですけどねえ」

？ 何か、含みがある。

マントを脱ぎ捨てて、わたしはベッドの脇に置いてたバッグの中をあさる。その中から新しい白ワンピースを取り出し、それに着替えようとした。

「さつき尻もちついたせいで、冷たいんだよね」

「はあ。着替えないほうがいいんじゃないでしょうかあ」

「ん？ モウちゃん、何かあるならはつきり言って」

「その。びいだま、まだ持ってますかあ？」

「え。うん。まだあるよ」

「そうですね。それで何か、香乃ちゃんの武器を創れないかと思っただんです」

「えっと。それって、フェルゲルミルへ行くのに必要なの？」

「香乃ちゃん。コカトリスを相手に邪眼を浴びたでしょう？ ヘルちゃんがいたから事無きを得たものの、いつか大ケガをしそうな気がしてえ」

あ、心配してくれてるんだ。

「だから私たち、香乃ちゃんが自衛できるように何か武器を創りたいんですよねえ」

うう。その眼差しは、ちょっと反則じゃない？

潤んで、しかも上目使いで、か、可愛いっ。

「モウちゃん。わたしはだいじょうぶ」

「そう、ですかあ？」

「もう、危ない真似はしないよ。だから、心配しないでだいじょうぶ」

「なら、いいんですけど」

ほつと安堵するモウちゃん。ごめんね。ウソついて。

着替えを止めて、わたしは立ち上がる。それからマントを羽織って、ポツケにあるずだ袋を手で確かめる。

まだ、数があるからだいじょうぶだね。

「あ、言い忘れてましたあ」

「ん？」

「ヘルモーズと相對した時、助けてくれてどうもありがとお」

ペコリ。モウちゃんは深々とおじぎした。

「え？ な、なんでモウちゃんがそんなこと言うの」

「話が前後して申しわけありません。私たちもガルムも、香乃ちゃんに救われました。ついさっきも、ガルムは照れながらも香乃ちゃんにお礼を言っていました。私たちも言いたくなかったですよ」

そうだったんだ。言葉は分かんなかったけどさ。

「わたしだつて、モウちゃんやガルムに助けられたもん。ありがとね」

「わわ。これじゃわたしの立場がありません」

「きやつ」

ぎゅっと、いきなり抱きついてきた。

うう。なんだかうれしそうな顔してる。

その笑顔を見ると、わたしのしたことは間違いじゃなかった。そう思えてくるよ。

「モウちゃん。早く行こう。アルレイマのところへ」

「はい。わたしが案内するですう」

小屋を出て、わたしたちはペアの黒マントをなびかせ、灯石を頼りに上流へと進む。

丸太の橋を渡り、坂道を上り、どうにか泉の見える高所にやってきた。

「あ」

「ニーズヘッグ、ですねえ」

一本の大きな根っこ。それが上から泉へ伸びてる。樹木の幹らしきものは見当たらない。

その根っこの真下に、黒くて大きな影が見えた。どうやらそこが、巢らしいね。

「んや？ 香乃にモーズグズ。どうしてここに」

「アルトレイマ様あ」

道を下ろうとしたら、アルトレイマと鉢合わせになった。

ふう。さつきみたいないな怖い雰囲気はない。普段通りの彼女だ。

「もう、頭を冷やせたの？」

「む。香乃、わらわをバカにしておるのか」

「そ、そういうつもりはないよ。ただ、ちょっと気になったんだよ」

「さようか。ならよいのだ」

腕を組んで、うんうんとうなづくアルトレイマ。ただ、表情が暗いような。どうしたんだろ。

くるりときびすを返して、下り坂を進む。

「ここまで来たんじゃ。せっかくじゃから、ニーズヘッグと話をしたいけ」

わたしたちを先導して、アルトレイマは泉に沿って歩く。

平坦な道が続くけど、灯石で照らすと地面が泥っぽい。転ばないように気をつけなくちゃ。

「この泉、なんだか黒いね」

ほんの少し、硫黄のような臭いがする。

霧はあるし、空気がひんやりしてるよ。さむっ。

「以前は瘴気しょうきを持つほど汚染しておった。今は浄化が進んでいる」

「へえ。どうやったの」

「死体をここに溜め込むなと命令してからのう。ニーズヘッグは腹を壊すほど骸くわくを食べてた時期があったが、今は落ち着いておる。他にもあれこれと手回ししたのが幸いと言えるな」

「それじゃあ、正確に説明したことになるませんよう。ガルムだつて、彼女に負けないくらい大食らいですからねえ」

彼女？

「さよう。少し前までは死者が溢れんばかりじゃつた。ヘルがニヴルヘイムに来てからは、転生やら消滅の裁定。不死者の管理と育成。ニーズヘッグとガルムの調教に食欲の調整。いろいろとできるようになった。単純にそれまでは、人手が足りんかった。それに尽きるのう」

「ええ。ほんとに大変でしたよう。ガルムはちつつちやい頃から、世話が焼けましたからねえ」

「それをお前が言うでない。ま、ニーズヘッグはここでは大人のほうじゃな」

同時にふたりが笑い出した。想い出を懐かしんでるねえ。

ようやく、わたしたちはニーズヘッグの巢に辿り着いた。

「おや。アルトレイマ様、今度は可愛いお嬢さんをふたりも連れてきて」

「ほんの少し離れて戻ったぐらいで、何を言っておるか」

腕をほどいて、手を腰に置いて説教するアルトレイマ。

「あまりユグドラシルの根はかじるなよ。身体を冷やすのは危険じやからな」

「承知しておりますよ」

小枝を敷き詰めたとこに鎮座ちんざしてるニーズヘッグ。

その体勢は、丸まって卵を温めているようなくありつ？

「失礼だけどさ。その、白いのって……」

「ん？ ああ、これはニーズヘッグの卵じゃ。ちなみに三つあるぞ」  
わたしが指差すと、アルトレイマが腕を組み直して答えてくれる。



「あれ、もしかしてニーズヘッグってお母さん？」

「ふむ。そうだぞ。私はこの子らを温めているのに、突然ウァンテイレスドに召喚されたのだ。おかげで卵が冷えてしまった」

「もうその文句はよい。聞き飽きた」

「あなたがそうでも、私にとっては死活問題です」

「むう」

アルテレイマがニーズヘッグからお叱りを受けてる。

てか、さっきモウちゃんか『彼女』って言った理由がよく分かった。

「それはそうと、アルテレイマ様」

「ん？」

「妙な声がするから一刻も早く、戦乙女をお呼びくださいと申しただけです」

「そうじゃったな。今すぐに館に戻ろう。少し待っておれ」

「お願いします」

妙な声？

『ひっひゃあつ！ あっひえひえひえっ。あつれえ、こわれちゃったよう？ こわれちゃうんだねえ〜。ニンゲンてさあ、バラちゅとおっもろいよあ〜』

その疑問が浮かんだ時、あの夢のことを思い出した。

「なに、今の」

「え？」

だって、声が聞こえたんだもん。

わたしは両耳を押さえて、ニーズヘッグの顔を見る。

「まさか、娘よ」

「香乃にも、今のが聞こえたのか？」

ニーズヘッグとアルテレイマが、同時にわたしを見た。

「う。うん」

「わたしには、何も聞こえませんでしたけどどう？」

「モーズグズには霊力がない。端から期待しておらん」

「が〜んっ」

アルトレイマのきつつい突っ込みに、モウちゃんはがっくりとうなだれた。

「いいんです。いいんですよ。どうせわたちなんて、手先が器用なだけで……うう〜」

あ、いじけちゃった。

モウちゃん、ニーズヘッグの尻尾をつんつんについて、現実逃避してるっ。

「さて、モーズグズのこと頼んだぞ。わらわはセネアを呼んでくる」

嫌なことをさらりと。まあ、よいでしょう」

ニーズヘッグは嘆息しながらも、尻尾でモウちゃんの頭を撫でた。

「それよりも、娘よ」

「呼び捨てでいいよ」

「そ、そうか。済まない。香乃、でいいか」

「は、はい」

「少女の声が、聞こえたんだな」

「うん。でも、今の……」

わたしは、夢で見た光景を鮮明に思い出していた。

「う」

口元を手で押さえ、吐き気をどうにか我慢する。

「少し休ませたほうがいいな」

「あ、だいじょぶですか。香乃ちゃん」

モウちゃんはわたしの背中をさすりながら、自身のマントをほどいて、それを敷いたところに座らせてくれた。

「香乃。ひとつ聞きたい」

「な、なに」

「ここ、フェルゲルミルの景色が原因でえづいたのではないのだな」

「え、あ……違うよ」

「そ、そうか。ならよいのだ」

いきなりニーズヘッグがおかしいことを言ったので、吐き気がなくなっていた。

てか、それが狙いだっただのかな。

「ふう」

深呼吸をして、気持ちを落ち着ける。

「なんだったの。あの声は」

「解らない。ただ、少女のものだというのは確かだ。ウアンティレズドから帰還してから、ふいと聞こえるようになった。ついさっきもアルテレイマ様と相談して、何とか解決してくれと懇願こんがんしたのだ。あんなのを常時間かされたら、気がおかしくなる」

うん。あれを毎日聞いてたら、ノイローゼになるよね。

「香乃ちゃん。どんな声なんですかあ？ あ、ごめんなさいい」

「ううん。いいよ。えっと、小さい女の子なんだよね。血の海で、人の首を手にしてたんだ」

言ってる、あれっと思ったよ。

ふたりもそう感じたらしい。

「香乃。お前は……映像が見えたのか」

「あ、え〜っとね」

首を伸ばして、わたしの顔をのぞき込もうとするニーズヘッグ。

一応ドラゴンなので、普通にしても迫力あるんだよね。びっくりするから止めてほしい。

「お背中さすさすう〜」

「モウちゃん。ありがと」

「まだまださすさすう〜」

鼻歌交じりで行ってくれるので、気が紛れるよ。

「香乃。お前には微かだが、霊力があるようだな」

「れいりよく？ 霊感みたいなもの？」

「うむ。霊魂が見えるのであれば、鍛練次第で様々なものが霊視で

きるようになる」

わたしに、そんな力があつたんだ。驚きだねっ。

「そうなんだ。でも、それができるから何だつて言うの?」

「む。す、少し怒っているようだが……どうしたんだ」

「だって、その、迷惑だもん。あんな恐ろしいものを、どうして見えるのか。見ちゃうのか。見たくないんだよ。不思議ではあるけどさ、わたしは……その」

「血を見慣れないのは理解できる。しかし、こうは思えないか?

誰かが、香乃に助けを求めているのだと」

「わたしに? でも、わたしにはどうしようもできないよ。場所も分かんないし、姿もそうだよ。第一、わたしは無力だもん」

言つてて、落ち込んだじゃうよ」。

だって、わたしは何もできないんだから。

「そんなことはありませんっ。私たちは、香乃ちゃんに助けられましたっ」

隣に座つてたモウちゃんが、いきなり大声を出す。

「あ、ごめんなさい。耳が痛いですかあ?」

「平気だよ。突然だったからびつくりしただけ」

「はあ。すいません」

何度も頭を下げるモウちゃん。

「でも、ほんとですよ? わたちは、香乃ちゃんに感謝してますっ」

「そつか。でも、今度ばかりはわたしには無理だよ。何か、嫌な予感がするの」

「予感? 巫女として、何か感じたいんですかあ?」

巫女じゃない。そう否定したいけど、それで通してるんだった。

「なんだろうね。その女の子だけど、誰かに助けを求めているとは思えないんだよね」

「え? ど、ど〜ゆ〜意味ですかあ」

「私も気になるな」

ニーズヘッグは身体を丸めて、ふうつと白い息をつく。目線をわたしから外して、遠くを眺めている。人影を見つけたようだ。

「誰かに、終止符を打ってほしい。そんな感じがしたの」

「それは、つまり……自分を殺してくれ、と？」

「うん。そうだね」

「っ」

モウちゃんは、言葉を失っていた。

「確かにそうだな。あの少女の声には絶望と恐怖、悲観しかなかった。ユグドラシルの根を通してその声が聞こえるというのなら、その少女の想念はかなりのものだ。長くは放置できん。急がねば何か起こる気がしてならない」

話はそこで切られた。

アルテレイマとセネアさんがやってきたからだ。

「何の用ですか。急にこちらへ呼び出して」

「そう言うな。フェンリルは元気になって、ヘルと遊んでおるではないか。その間はひまじやろう？」

「わたくしは館でもう少し民の皆と話がしたかったのですが……」

「マイスを案じる気持ちは解るが、ほんの少しだけでいい。力を貸してたもれ」

揉めながらも、ふたりはニーズヘッグの巢に辿り着いた。

「待たせたな。説得に時間がかかった」

「わたくしはまだ納得してません」

「言うな。それより」

アルテレイマはちらつとニーズヘッグを見た。

「ふむ。お前が戦乙女か」

「そうです。何があったんですか」

「機嫌が悪いな。詳しい話は道中で耳にしたらどう。ユグドラシル

を經由して、何者かが叫んでいるのだ。正体と場所を突き止めてほしい」

「確かに、わたくしは戦乙女でした。その役職上、探ることは可能ですけど」

「急いでくれ。香乃も体調を崩している。それほどまでの狂気なのだ」

「香乃さんが？ 顔色が優れませんか。癒しを授けましようか」

「平気です。セネアさん、一刻も早く。お願いします」

わたしとニーズヘッグが同時に頭を下げた。

「ふたりもこうして頭を垂れておる。わらわからも頼む」

「あ、わたちも」

アルテレイマとモウちゃんも、セネアさんに頭を下げた。

「皆さんがそこまでおっしゃるのであれば、応えないわけには参りませんね。頭を上げてください」

期待の眼差しが、セネアさんに注がれる。ちよつと困っているみたいだけど、すぐに真顔になった。

「集中しますので、しばしお待ちを」

ゴクリ。皆が固唾を飲んだ。

両手を胸元で合わせて、瞳を閉じる。祈りを捧げている格好だ。

しばらくして、セネアさんが目を開けた。

「どうじゃ？」

「ミドガルズのコーネイス地方。その南部から聞こえます」

「こうねいす？」

セネアさんの答えに、わたしは首を傾げる。皆も同じみたい。

「すまん。情報が少ない。それでは場所が特定できん」

「えっと、コーネイスというのはヨツンヘイムに最も近い地域なのです。正確に言うなら、ウァンティレズドの南方。海を越えた先にある大陸の、森林から……声がするんです」

「ああ。ウァンティレズドからこちらに戻る際に、降り立ったあの海岸の近くか。そこに転移してから搜索したほうがよさそうじゃな」

「え、ええ。とても強い念を感じました。ただならぬ気です。他にも子供の声があったので、誰が誰なのか特定が……」  
「うむ。今すぐに出るとしよう」

アルテレイマは腕を組んで、皆の顔を一瞥する。

「セネア。お前についてきてもらいたい」

「そうですね。わたくしも、この少女が気になりますし」

「あまり大人数で行くのは危険じゃな。もうひとりぐらいは  
「はいっ」

わたしは、大きな声と手を上げた。

「香乃、か。これは遊びではないのじゃぞ」

「そうですね。香乃ちゃん、私たちと一緒に留守番ですっ  
わたしを止めようと抱きついてくるモウちゃん。」

「ダメだよ。わたしは、女の子の顔を見たんだ」

「ぬ？ なんじゃと？ 映像まで視認できたとゆうか」  
それを聞いて、アルテレイマが目の色を変える。

「しかし、のう」

「アルテレイマ。お願い。無理はしないから」  
手を合わせて頼み込むわたし。

「わらわとしてはフェンリルに同行願いたかったが、まだ本調子ではないようだしのう」

うつむいて、悩んでいるアルテレイマ。

何となくだけど、様子がおかしい。

「香乃。今回は止めておけ」

「でも、ウァンティレズドの時だってだいじょうぶだったもん」

「あの時はフレイヤの謀略に巻き込まれ、運よく助かったようなものじゃろう」

「そうだけどさ。その女の子は、わたしを呼んでいるような気がするの」

「呼ぶ？ 香乃をか」

「うん。何となくだけど、ね」

はあく。アルトレイマは大きな溜息をついた。

「出向く先は危地<sup>きち</sup>じゃぞ？　そこは理解しておるな」

「分かってるよ。アルトレイマ、お願い。後悔はしたくないの」

「ふむ。ならばひとつ問おう。身体的特徴は？」

「え」

「やることが搜索である以上、情報は共有しておいたほうがよい。

香乃、その少女の外見に何か目立つところはあったか」

「うーんとね。黒かった。髪も瞳もね」

「さようか。よし。モーズグズ。香乃を頼むぞ」

くくえ？

「了解ですう」

「ちよ、ちよっと待ってよ。わたしを、連れてくんじやないの？」

身を乗り出そうとしたら、モウちゃんに引き止められる。

「セネア。転移するぞ」

「え。もうですか？」

「ゆくぞ」

わたしを置いて、アルトレイマとセネアさんはこの場から姿を消した。

「な、なんでよ」

「しょうがないだろう。アルトレイマ様は、香乃を危険な目に遭わせたくないのだ。そこは汲み取ってやれ」

ニーズヘッグは舌で卵の殻をなめている。汚れをふきとっているようだ。

それにしても、うかつだった。

さらつと答えちゃったわたしもわたしだけどさ。はあく。

「そうですよう。香乃ちゃん、危ない真似はしないって約束したばかりじゃないですかあ」

ご立腹のモウちゃん。



「そ、そうだけどさ。今回はほんとに、本当にわたしを呼んでいるような気がするの」

「どうして、ですか」

涙目で、わたしにすがりつくモウちゃん。

「約束は、守ってくれないとお」

頬をふくらませて、潤んだ瞳で訴えてくる。

「ご、ごめん。その、ごめんなさい」

「あう」

モウちゃんを抱き締めて、わたしはニーズヘッグのほうを見る。

「今は休息しろ。ただ、ここにいると声が聞こえる。香乃とモーズグズは小屋に戻ったほうがいいんじゃないか？」

「もう少し。ここにいさせて」

「そうか。構いやしないが、香乃。私にそこまで連れて行けとか言い出さないだろうな？」

「え？ ええ？」

「ああ。思ってたな」

「あ、いやあ。その」

「それは無理だ。私は産卵後にワームと戦闘して、再生能力で身体を酷使したからな。あんまり長くは飛べん。諦める」

うっ。モウちゃんが腕に力を込めたよ。

「そうじゃないよ。わたしだって女の子だもん。ニーズヘッグが疲れているの見れば分かるよ」

「そうか。ならいい」

「あ、それとね」

「ん？」

「ドラゴンって、ほんとに卵産んで温めるんだね」

「……………。なんだって？」

「あ、ああ。ごめん。初めて見たから、びっくりしてるんだよ」

第一、わたしのいた世界じゃドラゴンなんていないし。

「そうか。初見か」

「うん」

「まあ、繁殖期の竜なんて見かけたものなら……その人間はほとんどの場合、餌となるからな。こうして穏やかに観察できるのは珍しいほうだろう」

「ドラゴンって、普段から何を食べてるの？」

「私の場合は参考にならないな。何せ、ニヴルヘイムには亡者<sup>キジツヤ</sup>しか喰らうものがない」

「あ、そ、そっか」

「ふっ。とはいっても、普段は肉とかだろう。人や豚などの家畜、鳥なども好んで食べる。中には共食い。あるいは、野菜やら果実だけを頼りに生活しているのもいるそうだ」

「そうなんだ」

「私はユグドラシルにかじりついて、その樹液で栄養を補っている。死体だけではさすがに偏るからな。フェルゲルミルの水もそれなりに澄んできたからいいが、もう少し環境が改善されないと子供の発育によろしくない」

「ふうん」

『ママあっ！ だれか、ママを……ママをみつけてよおおおおお  
おおおおおっっ！』

他愛のない会話をしていたら、不意にそれが聞こえた。

「ど、どうしましたかあ？」

モウちゃんが、わたしとニーズヘッグを交互に見やる。

「また、か」

「うん。なんか、すごい頭痛いんだけど」

頭を抱えて、わたしは指先で冷や汗をぬぐう。

「私はそれほどでもないが、香乃には負担なんだろう。もうそろそろここから離れたほうがいいぞ。アルトレイマ様が向かったんだ。今より強いのが来るかもしれない」

「そ、そうだね」

よろけながらも立ち上がり、わたしはモウちゃんの敷きマントから離れる。

その時だった。それが現れたのは。

「え、な」

「これは、空間が……歪んでいる？　まずい。香乃、手を伸ばせ！　もう、手遅れだった。

わたしは、その黒い渦に半身を飲み込まれていたから。

「あ、香乃ちゃん！」

わたしが伸ばした手を、モウちゃんがつかむ。続けてニーズヘッグが尻尾で腕を捕まえた。

「う、うわわわっ」

ふたりが力を合わせても、わたしをそこから引きずり出すことはできなかった。

## 第7話

《白い孤児院・B1F 若郷香乃》

「あいたたたたっ」

すう。はあ。呼吸だけで、この場の空気が重いと感じた。

「な、なにこれ」

目の前が赤い。それに、嫌な臭いがする。

手がベトベトしてる。この赤いの、液体みたいだ……って。

これ、血じゃない。

「え？ こ、ここは……」

四つん這いになって顔を上げると、石造りの部屋の中だというのは分かった。

明かりはろうそくの火だけで薄暗い。ふと気づいたけど、一部の石は灯石のようだ。

「あ〜」

わたしの眼前には全裸の女の子が立っている。見たところ、かなり幼い。

「ママあ？」

「っ」

全身が真っ赤だ。腰まで伸びた長い黒髪は、血で妖しく染まっている。

その黒い瞳は生気がない。わたしがちゃんと見えているのかわからないよ。

「うっふふふふ〜」

やばい。その表情を一言で言い表すなら、それが的確だ。

「え、な、なんなの」

立ち上がるうとしたら、急に何かに押さえつけられた。

「にげないでよ〜。ママあ」

「わ、わたし……っく」

うつぶせになる。それでもまだ、全身が何かに圧迫されてるよ。

「く、くる……し」

息が、できない。

ぴちゃ。ぴちゅ。女の子の足音が、わたしに迫ってくる。

「ママあ。ママああああああああああっっっ！」

なに？ どうしたの？ この子は、なんでわたしをお母さんだと思ってるの？

しかもわたし、ついさっきまでニヴル Heim にいたのに。

急にこんなところに飛ばされて、何がどうなっちゃったの？

「む？」

「だれえ？ くちよじじい」

「っ」

男の人？ ダメだ、身体が重くて姿を確認できない。

「あ、ちよれ。じじくちよも、わちきとあちよんでくれるんだあ」

「な」

カキインツ。鋭い金属音がする。

あ、身体が軽くなった。どうやら見えない力は、あの女の子によるものみたい。

「っ」

「あっははははは。おっもろい。くちよじじい、つつよい」  
ズガアンツ。石で造られた壁に風穴があく。

その近くにいた男の人の様子からして、あの女の子がやったんだ。

「あっひゃひゃひゃひゃっ！」

愉快そうに笑う女の子。

え？

お、女の子が浮かんでる。地に足をつけてない。ふわふわと浮遊してるよ。

「くっ」

男の人は短剣を手にして、ひとりで動く長剣と打ち合ってる。

「えっへへへ〜」

「っ」

持ち手のない剣は男の人を確実に追い詰めてる。人の手にないそれは、打ち払ってもすぐに立て直して攻撃してくるんだ。

ど、どうすればいいの？ わたしは、どっちを助ければいいの？

「ヴィザル様！ 助太刀いたします！」

風穴からふたりの男性が駆けつけた。一方的にやられてるのは「ヴィザル」って言うんだね。

って、それってまさか。

フェンリルを倒す神と同じ名前じゃない？

「あの女ふたりか！ ならば、今すぐに引導を渡してやる」

え、わたしも敵なの？

剣士のひとりがわたしがわたくしめがけて走ってくる。

「ママをいじめるなあああああああああああああああああ  
っっっ！」

すっごい声量。叫んだと同時に、女の子の周囲の石床が広範囲で  
せきしょう  
くぼむ。

「っ、な、なんだ……くぼえええっ!?!」

剣士が倒れ込んだ。

その身体が床にめり込む。同時に、骨がきしむ音が響いた。

バキ、ボキ。グチャ。一瞬のうちに、剣士は血だまりに沈んだ。

「な、なんだ……あれは。本当にバケモノじゃないか」

「っ」

残った男性ふたりは、女の子の圧倒的な力におののいた。

その隙について、浮遊する剣が魔法使いのひとりに襲いかかる。

「む」

しかし、ヴィザルがその刀身をつかんで止めてみせた。

「た、助かりました」

「……………」

無言。その表情を見ると、明らかに怒っている。

血を垂らしながらも、男の人はその剣の柄えを握り締めた。

「わあ〜。こんどはじじくちよふたりがあちよんでくれるよう。ママあ〜」

わたしを見て、女の子はうれしそうに笑う。

その表情は怖いと思った。女の子が、血で彩られているのもあるかもしれない。

「ママあ。わちきを……あいちて！ あいちて、あいちてよあー！」  
この声。

この子が、わたしを呼んでいたんだね。

とにかく今は、この子と一緒に逃げることを考えよう。

「うっ」

手足が、言うことを聞かない。血や死体を見て、怖がってる場合じゃないんだ。

立って、立ち上がったよ。お願いだから、動いてっ。

「ぱびぷぺぱ〜」

楽しげに歌いながら、女の子は左右の手から黒い球体をひとつずつ作り出す。

「な、あんな若い娘が、そのような高等技術を！」

高等技術？

敵の魔法使いの発言で、それがどんなにすごいことなのか知った。アルトレイマとかは簡単そうにやってたから、難しくないんじゃないかって素人目で思ってけどさ。誰でも使えるってわけじゃないんだ。

「も〜あきたっ。くちよじじい、バイバイ〜」

黒い球体ふたつをひとつにして、女の子は満面の笑みでそれを解き放った。

「ぬ、ぐああっ!?!」

「っ!」

女の子の前方にいるふたりだけに、何かのしかかっている。片膝

をついてどうにか抵抗してるけど、両膝がついて、次に手がつく。腕だけは曲げまいと必死だ。

そういえば。

アルテレイマのは紫で、フレイヤのは橙だったよね。

氷、雷。このように色で属性を判別できるはず。あの女の子が使っているのは黒だよね。え〜っと、重だっけ？ となると、重力なんだ。

ガラン、ドゴンツ。天井、壁が崩れ始めた。あの子の力に耐えられなくなったんだ。

「危ないっ！」

がむしゃらだった。この時のわたしは、女の子を庇うことしか頭になかった。

「ふみ？」

女の子を押し倒した直後、背中に重いものが当たる。

つうつう〜っ！

いったあいつ。泣きそうだよ、マジでっ。

「ママあ？ ないてるのぉ？」

「へ、平気だよ」

微笑んだ。精一杯、強がってみせる。

「く。も、もう……許しはせんぞ」

「ぬ」

ふたりにかかってた重力が、なくなってる。

逃げようにも、出入口はふたりの真後ろにあった。

おまけにさ、わたしはがれきを背中に受けちゃって、満足に動けない。

「ママあ。ママあ」

「だ、だいじょぶだから」

下にいる女の子が急におとなしくなった。

涙目で、わたしの〜っ。おっぱいをつかんできたよ。しかもふたつ。



「おとなしくするんだ。すぐに引導を渡してやる」

「な、なんでよっ！ どうして、わたしとこの子を傷つけようとするの？」

「黙れ！ 先にそちらから仕掛けたのではないか」

確かにそうだけども。いつの間にかわたしは、この子の味方になつてるし。

まっ、別にいいけどね。女の子をいじめる男なんて、ろくなやつじゃないもん。

「ママを……」

「え？」

「ママを、いじめるなああああっ！」

吹き飛ばされた。でも、大した威力じゃない。

「く、う」

壁に激突したわたしは、すぐに女の子の下へと走る。

でも、途中で足を止めた。背中に激痛が走ったのと、女の子が狂乱したからだ。

「うわああああああああんっ！」

「な」

「これは、まずいですね」

女の子自身だけじゃない。その周囲にある石ころも、宙に浮いている。

「じじくちよなんかきらいだあああっ！」

「うわあっ!？」

杖をかざしてバリアを張る魔法使い。バリント。しかし、それはすぐに碎かれる。

「む」

魔法使いを庇うヴィザル。剣や両腕でガードしてても、無数の石ころが全身を痛めつける。

「う、ううっ。だれだよ……だれだあああああああああああっ

！そこにいるんだね。ぜんぶ、ぜんぶこわちてやるっ！」



「ぶう。だれだよ？ あんたなんか知らないもんっ！」

ええっ？

「わっ」

泣き止んだと思ったら、今度はわたしを敵と認識してる？

「どっかいつちやええええっ！」

「あ、ぐうっ!？」

吹っ飛ばされて、壁に背中をぶつけてしまう。

ズキンッ。女の子を庇った時の傷が、悲鳴をあげる。

「く、あ」

意識が、落ちそう。

でも、そうなら終わりで。歯を食い縛って、わたしは壁に手をつきながらその子の目を見つめる。

「あ、なにそれえ？」

「え？」

ぶつかった拍子に、ずだ袋からビー玉がこぼれ落ちた。

キラキラと輝くそれは、女の子の興味を引いたようだ。

「わあ。きれい」

「そ、そうだよ」

屈んでビー玉を拾いながら、近づいてきた女の子にそれを見せる。

「ほら。中には魔法が込められてるの。だからぶついたりしちゃダ

メだよ？」

「うんっ」

この子、何か障害があるのかな。

自分が何をしているのかも、分からなくなってるみたいだし。

「わーい。ありがと、おねえちゃん」

「う、うん」

ママの次は、おねえちゃんか。

わたしには実の妹はいないけど、少しうれしくなっちゃった。

「ねえ、君の名前は？」

「なまえ？ なにちよれ」

「な、ないの？」

「うん」

笑顔で言われても、ね。

「よ、よくも……」

男の人の声。さっきの魔法使いだ。

びっくりした。だって、その人の左腕がなくなっているから。

「よくも、ヴィザル様をおおおおとおおおおとおおおお  
っっ！」

振り下ろした杖から、火の玉を放ってきた。

「うるちやいよお！ じじくちよはだまってえっ！」

「う、ぐああああああああああっ！？」

その声だけで、火の玉が消失する。魔法使いは床に叩きつけられ、すぐに圧死した。

全身から血が溢れてる。まるで、トマトを押し潰した感じだ。

「えっへへへ。ママあ、これわちきにくれるのう？」

「あ、あげるからさ。今は、わたしの言うことを聞いてくれる？」

「うんっ」

無邪気な笑顔。それだけなら、ほんとによかったのに。

わたしは残った力を振り絞り、この子を連れて部屋から飛び出した。

### 《捕食者の森林》

月光が照らす森林。その中を歩く、アルレイマとセネア。

「どうじゃ。セネア」

「強い念を感じます。しかし」

白いマントの端を握り、セネアは不安そうな面持ちで答えた。

「他にも多数、何やらうごめく気配があります。その念に引かれて  
やってきたのでしょうかね」

「さようか。面倒になりそうじゃ。気合を入れねばな」

セネアの案内で進んでいると、ふたりの目の前に石で造られた大きな城が見えてきた。

「火の手が上がっておるな」

「ええ。これは、いったいどうしたことでしょう」

その周囲には、複数の人や獣の亡骸が転がっている。

同時に、戦乙女とエインヘリアで構成されるチームもいくつかいた。

「何奴？」

「敵だ。敵襲だ！」

セネアは気が動転した。そこには、見知った顔が何人かいたからだ。

「なるほど。アーシルの手の者か」

その表情を横目で見やり、アルトレイマはそう確信した。

腰に巻いてある反物を少し緩めて、戦闘態勢になる。

「致し方ない。セネア、やるぞ」

「了解しました。しかし、わたくしは戦乙女としての鎧兜がないので……」

それを聞いて、アルトレイマはしまったと思った。

ニーズヘッグにそれ一式を食わせてしまったからだ。

「うむ。深追いはするなよ」

「はい」

《白い孤児院・B1F 若郷香乃》

部屋を出てすぐ、倒れている男の人を発見した。ヴィザルだ。

「頭を、貫かれてる」

女の子が放った石ころが、運悪く当たったんだ。

わたしはその人が落とした短剣を拾い上げる。

「これで、わたしでも少しは」

戦える。武器があるのとないのじゃ、かなり違うしね。

でも今は、逃げるのが最優先。

「ママあ」

「うん。おねえちゃんから離れちゃダメだよ？」

「はあいつ」

女の子は今は落ち着いてる。しかし、いつまた暴走するか分からない。

ビー玉を見て喜んでるから、しばらくはだいじょうぶでしょう。

「えっと、どっちに行けばいいのかな」

倒れてるヴィザルがこっちに逃げようとしたのなら、出口はこの方向にあるはず。

ただ、そうしたら他の敵に出くわしそうな気がする。

「ママあ。こっちだよ」

「あ。待って」

女の子がわたしの手を引いて走り出す。ほんとはこちらに行きたくないけど、道が分かんないからそうも言ってもらえない。

それに、女の子はここにいたんだ。わたしよりは道に詳しいはず。

しばらく進んでいたら、ひらけた場所に出る。

「な、なにここ」

「あちよんであそんで」

「ここも、ひどい有様ありさまだった。人の死体が、あちこちにある。

でも、さっきの部屋よりかは赤くない。比べるのもどつかと思っけどな。

「あ、階段」

わたしは女の子の手を引いてそこまで走る。

「上るよ。足下に気をつけ」なくともだいじょうぶだね」

「うん」

いい返事。

わたしはひたすらに階段を駆け上がる。女の子は浮いてるので、心配はいらなそう。

階段を上り終えて、わたしたちは言葉を失った。

「え」

「わ」

なぜなら、わたしたちの目の前には。

「動物？ これって……」

明らかに人じゃない、バラバラの死体が無数に転がっていた。

内臓が外に出てる。見るだけで吐き気がしてきたよ。

何があつてこうなっているのか、全然理解できない。思考が止まってしまう。

「ひ」

膝が震える。怖い。逃げたい。今すぐにここから逃げ出したいよつ。

「ママあ？」

「あ」

その呼びかけで我に戻る。女の子の手の温もりで、少しだけど恐怖が和らいだ。

「だ、だいじょうぶ。わたしを信じて」

「うんっ」

うれしそうだった。笑えば、とっても素敵な女の子じゃない。

大きくなれば、絶対に美人になる。この美少女は、わたしが守り通さなくちゃ。

「走るよ」

「はい」

血でぬれてない場所を踏んで、この廊下を一気に駆け抜ける。

臭いが本当にきつい。長くここにいたら、気が狂ってしまいそうだ。

でも、だいじょうぶ。女の子の手の温もりが、わたしの理性をつなぎ止めてくれる。

「あ」

「え？」

女の子の声が出て、わたしは足を止めて振り返る。

「おちちゃったよ」

ビー玉を落としたんだ。

拾いに戻ろうとするので、わたしは手を引いて女の子を止めた。

「ほら、また新しいのあげるから」

「やだっ！ あれがいいっ！」

「わ、分かったから。じゃ、おねえちゃんと拾いましょ」

「う、うん」

大声で泣いて騒がれたら、敵にこちらの位置がバレてしまう。

とにかく今は、落としたビー玉を回収しよう。

血だまりを歩き、女の子は手を真つ赤にしながらビー玉を拾い上げた。

「えっへへ」

えくぼが可愛い。その笑顔に見とれてたら、その足音に気づくのが遅れたよ。

「何者だ？ そこにいるのは」

しわがれた声が出て、わたしは後ろを振り返る。

そこには深々と帽子を被り、紺色のマントを羽織った、白いあごひげをたくわえるおじいさんがいた。

### 《白い孤児院前》

「やあああああっ！」

アルテレイマに斬りかかってくる勇敢なエインヘリア達。

「ぶっ」

その動きは急に止まった。氷の枷に捕らえられているのだ。

「何をしている！ 早く、その賊を倒せ」



戦乙女が声を張り上げる。しかし、それでも彼らは身動きできない。

「アルトレイマさん」

「セネア。お前は後方から支援しろ。前にいられると、巻き添えを食うぞ」

「っ。はい」

銀の双剣を構えていたセネアは、静かにアルトレイマの背後に位置した。

「は。貴様は、フレイヤ様に見限られた、ウアンティレズドの王女ではないか」

「っ」

「どうした？ 何も言い返さないのか」

「この臭いは……？ はっ、そいつからは不死者の臭いがするぞ。

そんな素性も知れない魔女リッチの下しか、行く場所がなかったのか。ん？」

セネアは悔しさに歯噛みする。

かつての同胞に罵詈雑言ばりぞごごんを浴びせられ、怒りを覚えたのではない。目の前にいる戦乙女達が利用されていると知って、哀れんでいるのだ。

「戦乙女は三人。エインヘリアは八人か。やや多いな」

アルトレイマは腕を組みながら、捕らえたエインヘリアふたりへ手をかざした。

「さて、どうしたもののかう？」

「何を言うか。たかが魔女リッチひとりに、我々が屈すると思うか」

「リッチ？ わらわがか？」

「そうだ。不死者の臭いが染みついている貴様が、屍術師ネクロマンサーでないと言うのか？ これはこれは、冗談が過ぎるぞ」

戦乙女とエインヘリア達が、アルトレイマを見て笑い出す。

しかし、とらわれたエインヘリアにそんな余裕はなかった。

「ぬっ！？」

「な、何をするか！」

戦乙女達がどよめく。

氷の枷に捕まっていたエインヘリアが、そこから抜け出て彼女らに斬りかかったからだ。

「ブレインウォッシュ」

小声でつぶやいたアルトレイマは、エインヘリアふたりを洗脳したことを明らかにした。

「ふん。エインヘリアなど、靈魂を物質化マテリアライズしただけの存在にすぎない。となれば、わらわがコントロールを奪うなど造作もないわ」

それを耳にして、セネアは身震いする。

この人が敵でなくてよかった。

心底そう思えるほど、味方であるアルトレイマは頼もしい。

「貴様らとて、オーデインに仕える魔女リッチではないか」

「な、なんだと!？」

「憤いきどおるといふことは、凶星か」

「ふざけるなああああつ！」

アルトレイマはエインヘリアを盾にして、両手から紫の球体をひとつずつ発現させた。

「セネア。下がっている。酸欠になるぞ」

「え？ あ、はい」

「吹雪ふぶいたら剣を空へ投げろ。いいな！」

その指示にうなづいて、セネアは呼吸を整える。

アルトレイマは紫の球体を融合させ、それを解き放った。

「ブリーク！」

その呼びかけに応えるように、吹雪が起きる。

セネアは双剣を投げた。ふたつの剣は、アルトレイマの頭上を越えて、舞い降る雪の中に消えた。

「く、これしきのことぞ！」

戦乙女のひとり、洗脳されたエインヘリアを突き飛ばして突進してくる。

振り下ろされる刃。

しかし、アルテレイマは避けない。

「な、なんだと」

「ふっ」

白刃が肌に触れる寸前、反物が戦乙女の全身に巻きついた。

「な、や、やめ」

妖しく輝く反物。

「アストラライズ  
霊体化」

戦乙女は青白い光となって、反物に吸収された。

「な、なにを」

「案ずるな。殺してはいない」

振り返らず、アルテレイマは両手を前に出して広げた。

「雪が積もってきたな。頃合か」

吹雪が弱まる。それにさらされた戦乙女とエインヘリア達はどう

なったのだろうか。

セネアは刮目かつもくした。

「な。え？」

信じられなかった。

なぜなら、自分の投げた小剣ふたつが。

「な、ぐう」

「がはあ」

右胸の甲冑かっちゅうを貫き、戦乙女ふたりを氷柱に繋ぎ止めていたからだ。エインヘリアは全員が氷漬けになっている。洗脳したのも含めて、だ。

「お前達は、わらわをなめすぎじゃ。死や靈魂について、熟知しておるのか？ わらわほどではあるまいて」

腕を組み、微笑むアルテレイマ。

ふと、セネアは何かを感じ取ってアルテレイマに声をかけた。

「アルテレイマさん」

「案ずるな。こやつらは利用されておるだけ。一時的に靈魂を反物

に吸収し、ニヴル Heim で頭を冷やしてやらねばな

「いえ、そうではなくて」

「ん？ なんじゃ」

セネアは、石の城のほうを見て怪訝な顔をしていた。

「あの中から、香乃さんの思念が……いえ、まさかとは思いますが」

「なに？ それは本当か？」

「え、ええ。微かに、香乃さんの声がするんです」

白銀の世界の中、ふたりはその真偽を確かめるべく走り出した。

《白い孤児院・1F 若郷香乃》

「くちよじじいっ。じじくちよ〜」

「ちよ、ちよっ」と

女の子はおじいさんとやりあう気満々だ。

「む。儂わしを愚弄おぼろするか」

おじいさんは右手に槍を構え、その背で床を叩き、威嚇いかくしてきた。

「な、それは」

おじいさんはわたしの持つ武器を見て、目を見開いた。

「貴様、ヴィザルの短剣をどうして持っておる！」

「え？」

「まさか、貴様あつ！」

お、怒ってる？ わ、接近してきた。

「くちよじじいっ！」

「ぬ」

おじいさんは足を止めた。

女の子が左右の手から、黒い球体をひとつずつ生み出したからだ。  
「そのような高等術を、そのような幼い娘が……なるほど。目当て

のものが、すぐに見つかったわい」

目当てのもの？ このおじいさんも、この女の子を狙っているんだ。

「おとなしくするんだ。すぐにその靈魂を、我が館へ誘ってやろう」  
何言ってるの？ この人。

「ママをいじめるなあああああああっ！」

ふたつの球体を合わせて、女の子はそれを解き放とうとした。  
けど。

「うああああああああああああああっっっ！？」

発動は、失敗した。

ひとつとなった黒い球体は、女の子の意思に反して暴発したのだ。

「あぐっ！」  
至近距離にいたわたしも、その被害を受けてしまう。

「う、ぐ」  
後頭部を強く打ってしまった。

「ふっ。調子に乗って発現し、融合しようとするからだ。ふたつの均衡が乱れたから起きた事故。しかし、あの娘は……実に使えるな」  
何かブツブツ言いながら、おじいさんが歩いてくる。

わたしはふらふらになりながらも、女の子を助け出そうと四つん這いで進む。

「だ、だいじょうぶだから」

それは、誰に対して言ったんだろう。  
女の子かな。自分かな。どっちもだね。うん。

「う、う」  
意識が落ちそうになる。

負けじとわたしは、上から覆い被さって女の子を庇う。

「ヴィザルの仇を、討たせてもらおうぞ」

おじいさんは、槍の先端をわたしの首元に突きつける。

ふと、気づいた。

血だまりの上に輝く、白いビー玉の存在に。  
わたしはそれを、思いきり叩いた。

「ぬっ？　ぐあー!？」

鳴り響く騒音。至近距離で聞いたから、耳が痛い。

「こ、この……悪あがきを！　覚悟するがいい！」

怒り心頭のおじいさんは、槍を振りかざした。

女の子も巻き添えになる。そう感じたわたしは女の子を突き飛ばした。

「あ、が、ふ……っ！」

その直後、左胸に冷たいものが触れた。

「な、なんだと？」

「……………っ」

もう、自分はダメだよな。

せめて、せめてもの願いは。ほんの少しだけでもいい。  
時間を、時間を稼げるのなら……。

### 《白い孤児院・1F》

二手に分かれて、アルテレイマは建物の中を搜索していた。

「本当に、香乃がいるのか……?」

疑問だった。セネアが感じた念は、間違いではないか？

「む?」

部屋の中を見て回っていたら、遠くのほうで何か物音がした。

「あっちか?」

廊下に戻り、音がした方角を見やる。

嫌な予感がして、アルテレイマは走り出す。

そして、見つけてしまった。

「この、このっ！　小賢こけんしい小娘が、死しても儂に抵抗するのか！」

・・・香乃だった。

左胸を貫かれて、絶命している。

その身に受けた槍を放すまいと、息絶えながらも抗あいつがっていた。

「はなせえっ！ この、ならば……」

老人が香乃を蹴飛ばすのを止め、魔法を唱えようとする。

が、その動作は止まった。

冷え込んだ空気を感じ取り、老人はアルテレイマのほうを振り向く。

「な、何者だ」

「……………」

無言で、アルテレイマは老人へ詰め寄る。

反物をほどいて、それを大鎌の形に凍結させた。

「な、なにを　ぐうつ!？」

擦れ違いざまに老人の右手が、切り落とされた。

槍を拾うこともせず、老人は階段のほうへ逃げる。

「な、なんだ貴様は。く、ならば……」

「……………」

ポタ、ポタ。

物言わぬ香乃の頬に、アルテレイマの涙が触れる。

「オーデイン」

「む?」

「ここで死ぬ」

アルテレイマの殺気を受けて、オーデインと呼ばれた老人はたじろいだ。

しかし、それは転移術を妨なまたげるには至らなかった。

「あ、アルテレイマ……さん」

セネアだ。

彼女も物音を聞きつけて、この場に駆けつけた。

両手で口を押さえて、この場で何があつたのかを察する。

「屈んだアルテレイマは、香乃の左胸に手を置く。

「セネア。香乃は任せろ。そちらの黒い女子おなこを頼む」

「え？ な、なにを」

アルテレイマは、自ら舌を噛み切る。

セネアはそれに衝撃を受けて、膝を崩してしまった。

### 《若郷香乃》

あれ？

そこにいるの、アルテレイマじゃない。

あ、おじいさんだ。あ、消えちゃった。

「泣いてるの？」

アルテレイマが、大粒の涙をこぼしてる。

それを目で追いかけていたら、わたしは見つけてしまった。

槍に突き刺されて、死んでいる自分自身を。

「わたし、死んじゃったんだ」

でも、結果的に女の子は助かった。

アルテレイマがいれば、あの女の子は無事だよな。うん。

それにわたしは、死んだってニヴルヘイムに逝けるんだもの。

でももし、逝けなかったら？

急に、怖くなった。

「あ、セネアさん」

ふと、アルテレイマがわたしに触れている。

なんだろう？ その顔をのぞき込もうとしたら。

アルテレイマは、血を吐いて倒れ込んでしまった。

「え、な、何をしているの？」

状況が飲み込めず、混乱してしまう。



『ここにいたか』

『え?』

聞き慣れた声が出て、わたしはそつちを振り向く。

『あ、アルトレイマ? な、なんで? アルトレイマも、死んじやつたの?』

『ふむ』

『な、なんでそんなことをするのよっ!』

わたしが怒っても、アルトレイマは顔色ひとつ変えない。腕を組んで、目を閉じている。

『詳しいことは後で話す。香乃、急げ』

『な、なにを?』

『選べ。このまま逝くのか。それとも、わらわと共に生きるのか。』

『さあ、どうする?』

『は?』

意味が分からない。

でも、アルトレイマの顔は真剣だった。

『選べって、わたしはこのままニヴルヘイムに逝くんでは?』

『………………。それは嘘じゃ』

『え?』

『わらわは、香乃をニヴルヘイムに引き込む方法として…………その肉体と靈魂を引き離れた。靈魂であれば、次元を超越する際にそれほど影響はない。日本にいた香乃を殺したのは、このわらわじゃ。済まない』

な、なにいつてるの?

『下半身不随を治したと言ったが、それも嘘じゃ。わらわは医師ではない。治癒の術など心得てはおらん。それは、香乃の靈魂を物質マテリアライズ化したゆえに起きた副作用みたいなものじゃ』

『ちよ、ちよっと待ってよ。アルトレイマ、さっきから何を…………言ってるの?』

『いいから、早はやう選べ! 消滅したいのか? さあっ!』

消滅つて、わたし消えちゃうの？

そんなの、そんなのやだよ。

だから、わたしは安易に。

『あ、あなたと一緒に生きるよ。だから、だから助けてよお！』  
アルテレイマの提示した選択肢に、乗っかってしまった。

## 第8話

身体が、重い。

信じられなかった。

左胸に槍が刺さっているのに、身動きができたから。

「か、香乃……さん？」

「せ、せね……」

『しゃべるな。つい先刻まで死んでおった身で、無茶をするでない』

あ、アルテレイマ？

『心で念じるだけでいい。それはそうと、セネア。早くグングニルを引き抜け』

「ふえっ？ え、あ、アルテレイマさん？ ど、どうして……」

『いいから、早くグングニルを抜け。これのルーン文字が、活動する際に邪魔になる』

「は、はい」

セネアさんはおずおずと、わたしの左胸から槍を引き抜いた。

「げほっ。ごふ、がはっ！」

その拍子に、たくさんの血が流れる。

と同時に、急速に再生が始まった。

「な、なんですかこれは」

『わらわの亡骸が、香乃に浸透しておるだけじゃ』

わたしに覆い被さっていたアルテレイマの身体が、白い灰になる。そしてそれは淡い光となって、わたしの全身を包んだ。

「な、なにこれ……すごい。力が、みなぎってくる」

不思議な感覚だった。

身体の内側から、鼓動が伝わってくる。心臓の音とは違う、力の胎動が感じられるの。

『当たり前じゃ。ニヴルヘイムの女王であるわらわの力を、香乃は得たのじゃぞ？』

「はっ？」

「え、ど、どうしました？」

今の、セネアさんには聞こえてないんだね。

『精神感応を他者に伝えるのは一部だけじゃ。今は香乃だけに限定する』

「あ、アルテレイマ」

『聞きたいことは念じるだけでいい。他者に聞かれるとまずいこともあろう』

まずいことって、なによ。

『まあ、セネアには伝えておかねばな』

大鎌の形に凍りついてた反物が、解凍されてわたしの腰に巻きついた。

「う」

『グングニルを杖代わりにしろ』

それって、オーデインの愛用する槍だよね。

てか、あのおじいさんはオーデインだったんだ。

わたしはその槍を支えにして、壁に手をやりながら立ち上がる。

「だ、だいじょうぶですか。香乃さん」

「心配は無用。セネア、早くあの女子おんなこを診てやれ」

うえっ？

「え？ あ、は、はい」

きょとんとしてたセネアさんは、混乱したまま女の子へ駆け寄った。

「あ、アルテレイマ」

『なんじゃ』

「今、わたし……」

「セネア。その女子おんなこを連れて外に出るぞ」

「え？ あ、はい。承知しました」

何が起きているのか理解できてないセネアさん。

目を白黒とさせながら、わたしの顔をマジマジと見つめている。

「セネア。事情は後で説明する。とにかく今はここを出ることだけを考える」

床に落ちてた短剣を蹴り上げ、わたしの手はそれをつかんだ。

建物から出て、わたしはセネアさんのほうを振り向いた。自分の意思には関係なく。

てか、外は真っ暗だ。ほんと、ニヴル Heim にいると日にちの感覚がおかしくなるね。

「セネア」

「な、なんでしょうか」

「今言葉を発しておるのは、わらわじゃ」

「え？ あ、あなたは……香乃さんではないのですか」

「いや、香乃の身体を借りておる。わらわこと、アルテレイマは若郷香乃に宿っておるにすぎない」

「宿るって、どうしてそのようなことを……？」

疑問だよ。あなたがわたしの中にいるのと、あたりが真っ白の世界だっということがさ。

「それよりも、抱きかかえている女子おとめを反物おもひで包む。手を放せ」  
セネアさんの腕の中で眠る女の子を、反物が保護する。

淡い光を放ち、傷を癒しているみたい。

「これは、酷いな」

「ええ。傷は大したことありません。けれども、かなり衰弱しています」

「ひとまず、ここを脱しよう。オーディンがついさっきまでいた捕らえていた戦乙女にも逃げられた。まだ何か来るやもしれぬ」

「そう、ですね」

アルテレイマは女の子を包んだ反物を引き寄せる。

赤ちゃんを背負うようにそれを、ぐるぐるとわたしの身体に巻きつけた。

「あの、え〜つと。香乃さん？」

「セネア。グングニルを持って」

わたしは槍をセネアさんへ投げる。勝手にしてよ、もっつ。

「え？ わ、わたくしが？」

「かつての主の槍を握るのは、億劫か？」

「い、いえ。ただ、槍なんて扱いが……」

「慣れてないなら、この機会に覚えろ。その業物は、初心者にはちいとばかり強力かもしれぬがな」

セネアさんはグングニルを握り締めて、大きく深呼吸した。

「わたくしよりも、香乃さんが使ったほうがいいのでは？」

「馬鹿を言うでない。その槍を扱うには、いかんせん身長が低い」  
さり気に、わたしの身体的特徴をバカにしてない？

『そんなことはない。第一、元のわらわは香乃より背丈が低いのに  
やぞ？ こんな長物を、香乃はどう使うつもりじゃ』

物干し竿とか。

『そ、それは……宝の持ち腐れというんじゃないぞ』  
ジョークだよ。

「承知しました。しかし、わたくしにはあまる代物ですね」

「そう言うな。難しければ、わらわがもらい受ける」

「あら？ ついさつきまでと言っていることが違いますよ。もしかして、香乃さんが真似して？」

「違うよ。今はわたしだけだ」

「そうですか。判別するのが大変です」

セネアさんは溜息をひとつ。

「このルーンダガーも、相当の業物。なかなかよろしそ」

「あ、それ。ヴィザルが持ってたものだよ」

アルテレイマがしゃべってる途中で割り込み、わたしがそう説明した。

「ヴィザル？ 香乃、お前はヴィザルとやりあったのか」

「てかさ、わたしの身体で会話するのがおかしいよ！ アルテレイ

マ、お願いだからわたしをほっといて。早く出てっよー！

「それはできん」

「なんで」

「そうすれば、香乃が消滅する」

「え？」

「今は、わらわの力で仮初の命を得ているにすぎない。もう少し時間が経たねば、香乃から抜け出ることもかなわん」

「一蓮托生いちれんたくしょうだね」

「うまいな。その表現は」

「あ、そ」

セネアさんはきょとん。わたしとアルトレイマのやりとりについていけないんだね。

「こほん。とにかく、今はわらわにその身を委ねろ。これからヨツンヘイムへ向かう」

「ヨツンヘイムへ？ ガストロプニルですか」

「察しが早くて助かる。この女子おなは、メングラッドに診てもらったほうがよさそうじゃ」

メングラッド？

え〜つと確か、薬をくれた娘が言ってたね。

「その前に、この建物は浄化したほうがよさそうじゃな」

「なんで？」

「なぜって、ヴィザルの遺体があるのじゃろう？」

「そ、そうだけど」

「神族の遺体を放置するのは危険じゃ。何かに利用されでもしたら、ミドガルズの均衡が崩れる。それに、わらわ達が来たという痕跡を消しておいたほうがいい。追跡されるのは勘弁じゃからな」

アルトレイマは両手から青白い炎を紡ぎ出し、それを解き放った。石で造られた建物は、瞬く間にその炎に包まれる。

不思議な炎だった。触れているものを焦がさず、少しずつ光の塵へと変換している。

「さて、セネア。グングニルは目立つ。靈体化アストライニスしておいたほうがよいぞ。下手に騒いで、ガストロプニルの巨人達とやりあうのはごめんじゃからな」

「え？ あ、はい」

言いながら、アルトレイマは短剣を青白い光に変換して反物に吸収させた。

セネアさんも槍をほたるのようにして、その身に光を取り込んだ。「それとひとつ。ガストロプニルを訪れた際、わらわのことは友人で通せ。余計な説明に時間を割くさのは勘弁願いたい」

「は、はい。了解しました」

う、きぼちわるい。

「だ、だいじょうぶですか？」

『案ずるな。大したことはない』

「わたしが大したことだよ！」

『そうかつかするな。セネアが困っておるじゃろっ』

「むうっ！ 変な突っ込みだけは、精神感應で行うくせにっ」

その一言でセネアさんは、ぼんつと手を打ち合わせた。

「納得しました。香乃さんの口から出る前後のつかめない言葉は、アルトレイマさんが奇妙なことを口走ったからなのですな」

「え、あゝ、うん。そうです」

それはそうと、ここはどこ？

目の前には石造りの大きな城があるし。人間が住むには、ちょっとでかすぎない？

『あれはガストロプニル。ほれ。あぐらをかいとる門番がおるぞ』

「あ、ほんとだ」

てか、アルトレイマと精神感應で話すなら、言葉に出すのは止めよう。

セネアさんが首を傾げるのが横目で見えたから、うん。これから



は気をつけないと。

「誰だあ？ そこにいるのはあゝ」

う、うるさいっ。耳栓欲しいっ。

「フィヨルスヴィド。声が大きいです。香乃さんが耳を押さえてしまいましたよ」

ありがとうございます。セネアさん。

「あゝ、すまなんだ。オイラはフィヨルスヴィド。これぐらいの声でいいかあい？」

「う、うん」

のんびりとした口調。雰囲気からして、優しそうな人だ。

身体はとっても大きい。一目で巨人だって分かる。

向こうからしたら、わたしとセネアさんはアリンコだね。それぐらい体格差があるよ。

「んで、そっちはセネア様かあ。無事だったのかあゝ」

銀髪を指ですいて、セネアさんは唇を噛んだ。

「わたくしのことはいいでしょう。それよりも、夜分遅くに申しわけないので。メングラッド様と面会したいのです」

「んゝ？ どうしたあい。随分と急だなあ」

「香乃さんの背中に、病気に苦しむ女の子がいるのです。見えませんか？」

「おお。言われてみれば、そんな子がいるなあ。解った。こっちに小人用の出入口があるから、そこを通ってくれえい」

その扉を開閉し、城内に入ったわたしとセネアさん。

ふと、ゴーンと鐘の音が鳴る。なんだろう。

「一回、ですね。来客の合図でしょう」  
誰が鳴らしたの？

『さっきのフィヨルスヴィドじゃ。今の鐘は大気震動ではなく、魔の波動で響いておる。となると、メングラッド用のやつじゃな』

ああ、そう。

「ここで待ちましよう。下手に動くと、迷子になりますから」  
「確かに広そうだね」

城壁の内側は芝生だらけ。高い高い石造りの建物ばかりで、わたしが小人になってしまった感じだよ。

しばらくして、ワンちゃんを引き連れた女の人ひとりやってきた。

「あ、セネアさん」

「お久しぶりです。メングラッド様」

セネアさんが頭を下げたので、わたしも深々とおじぎした。

キレイな銀色の瞳と、腰まである長い銀髪。髪はふたつの三つ編みにしている。

てか、肌が白い。透き通ってる。どういつふうに手入れしてるんだろう。気になるね。

服装は白のワンピースに、水玉模様のエプロン。どちらもよく似合ってるう。んっとD? いいや、こだね。

「あら? そちらの子は」

「急なことで申しわけありません。メングラッド様、香乃さんの背中にいるこの子を診てあげてください」

「お、お願いします」

わたしはメングラッドって人に背を向けた。

その子の顔を見るなり、メングラッドはびっくりする。

「なんてことを。この臭いは……まさか」

「事情は後で説明します。メングラッド様、急いでくれませんか」

「解りました。走りますのでついてきてください。あっと。ワンちゃん達、このふたりを食べてはいけませんよ。理解できましたか?」

大勢いるワンちゃんは、一斉に「ワンッ」と返事した。

城壁内にある離れの館。

そのこの医務室に誘われ、わたしとセネアさんは女の子をベッドに寝かした。

「エイル。エイル！」

「な、何事ですか？」

奥のほうから白いカーテンを開いて、碧眼へきがんの女性が現れる。

割ぼう着だったかな。その服装で給食係のおばさんを思い出したよ。この人はDだ。

「重症患者です。ロキとマイスの看護を中断し、こちらを手伝ってくれませんか」

「然様さようですか。助力致します」

え？

今の、聞き間違いじゃないよね。

「ロキ、じゃと？」

「マイス？ え、マイスが？」

アルテレイマとセネアさんは、それぞれで異なる反応を示した。てか、アルテレイマっ。声ももれてるっ。

「そうでしたね。セネア、あなたはマイスを診てくれませんか。あの事件からずっと意識がないんです。あなたが呼びかければ、もしかしたら……」

「は、はい」

セネアさんはエイルさんが出てきた白いカーテンの中を見て、首を振ってこちらを見る。

「そこにいるのはロキですよ。そのひとつ奥のほうです」

「ありがとうございます」

エイルさんに教えられ、セネアさんは急ぎ足で奥にあるカーテンを開け放った。

それから、鼻をすするような号泣、してるんだね。

『しばらくはほっとこう。姉妹のことじゃしな』

「そっだね」

しまった。小声だけどつばやいちゃった。

でも今、メングラッドとエイルさんは女の子を癒しの光で包んでいる。気づいてないよね。

ん〜っと。ここにいと、邪魔かなあ。

「あの、わたしにも何か手伝えませんか？」

「え？ あ、その……あなたは？」

メングラッドがわたしのほうを向いて、聞いてくる。

「わたしは若郷香乃です。セネアさんの友人……ですね」

「そう、ですか。この子は、あなたの妹さんですか？」

「違います。その、事情は……後で話します」

「……………。解りました」

なんだろう。返事に間があっただけ。

「あなたは祈っててください。物が必要になれば、その都度指示を出します」

「は、はい」

数時間、女の子につきつきりだった。

もう、朝日が顔を出してるね。くたくたあ〜。

エイルさんは回復魔法を行使し続けていたせいで、汗だくだよ。

わたしも息が切れてる。棚にある薬の出し入れとか、木の桶で井戸へ水汲みとか、いろいろと使われたせいもあるけどさ。

驚かされるのは、メングラッドが息を切らしていないことだ。汗ひとつもかいていない。

エイルさんと同じぐらい、癒しの光を放出していたのに、ね。

「顔色はよくなりましたが、これは難儀ですね」

イスに腰を下ろしながら、メングラッドが自分の人差し指を甘噛みする。

「な、なにが……あつたんですか」

息も絶え絶えに聞くと、メングラッドはわたしの目を見てこう話した。

「臭いから感じていたのですが、この子には薬物が投与されています」

「薬物？」

「ええ。麻薬の類というか。幻覚剤、興奮剤、様々な薬を服用させられたのでしよう。かなり衰弱していました。半日ほど遅れていたら、おそらくは……」

「そんなに、ひどかったんだ。」

「麻薬って、どうしてそんな」

「それは、わたくしにはとんと。この子を救出したあなたなら、事情を知っているのでは？」

「わたしは無言で首を振る。」

「今更ですが、香乃。あなたも外傷があちこちにありますがね」

「わたしはいいよ。とにかく今は、この女の子を治療しないと」

ふう。呼吸を整えて、メングラッドはエイルさんのほうを見た。

「エイル。この場合はわたくしに任せてほしいです。あなたはベルゲルミルに知恵の泉の水を確保してほしいと言伝（ことづて）を」

「承知しました」

呼吸を整えながら、エイルさんが擦れ違（すれちが）う。

扉を開閉する音がしてから、静寂がこの部屋を包んだ。

「水でも飲みますか？」

「あ、はい」

メングラッドは席を立ち、近くの棚からグラスを取り出す。

『……………』

治療で使ったのとは別の木の桶に近寄り、ひしゃくを手にして、グラスに水を注いでくれた。

「どうぞ」

「あ、ありがとう」

わたしはそれを受け取り、一気に飲み干す。

「あら。そんなに喉が渴（かわ）いていたんですね。すみません。処置に夢中でお茶も出せずに」



薬は投与してはなりません。残留している薬物と何らかの反応を起こすかもしれませんから。それと、一ヶ月はこの子の新陳代謝で毒抜きをしなくてはなりませんね。最後にもうひとつ。気がかりなのは禁断症状でしょうか」

「精神に、異常を来たしておると？」

「ええ。おそらくこの子は、情緒が不安定のはずです。それに加えて凄まじい力を感じます。薬によって潜在能力を引き出され、精神を乱され、心身ともに悲鳴をあげていましたからね。禁断症状を起こして暴れ出さないか不安ですよ」

「その子は、ある施設で兵器として育てられていた」

「施設？」

「コーネイス地方の南の森林に、石造りの建物があった。見た限り、あれは何かの研究施設じゃったな。完全に調査したわけではないが、わらわはそう推測している」

「実験のために、こんな……こんなになるまで、痛めつけられていたのですね」

メングラッドは指先で涙をぬぐった。それから、女の子の額にそつと手を置く。

ふと、わたしはその子の左のこめかみに、三日月のような形をした古傷を見つけた。

本当に、ボロボロなんだ。まんしんそうい満身創痕のその子は、必死でわたしを呼び寄せたんだね。

「こほんっ。その子はね、ヴィザルやオーデインに狙われていたの」

「その口調は」

「うん。しばらくアルテレイマは引っ込んでて」

「それよりも、オーデインに？」

「そう。この子は、両手から黒い球体を発生させたの。かなりの魔法使いだよ」

「発現を、同時にふたつも？」

メングラッドが目を見開いた。そ、そんなにすごいことなの？

「疑問じゃな。それほどの使い手が、たかがオーディンにやられるとは思えん」

「あ、アルテレイマ」

「いいから、説明してたもね。しばらくは引っ込む代わりに、香乃のほうで何があつたのか説明してほしい」

「しょうがないので、わたしはこの子に出会ってから、自分が……死ぬまでのことを話した。」

「香乃」

「なに？ 引っ込むんじゃなかったの？」

「傍から見ても、ひとり芝居だよ。ここまで来たら、もうどうとでもなれつ。」

「いや、これだけは聞きたい。この子が発現する際、ビー玉を手にかけていたのか？」

「う、うん」

「なるほど。融合失敗はそれが原因じゃ」

「え？」

「うんうんと、メングラッドもうなづいてる。なに？ ふたりだけ解つてて、わたしだけ仲間外れなの？」

「発現は思念の集合体。それは理解できるな」

「うん。」

「その女子おんなの属性は重。白のビー玉は音の属性。黒とは相性が悪い」  
「え？ てことは。」

「そう。両手に生み出した黒の球体は、ビー玉を手に行っていることで片方が相性の関係で弱まってしまった。それに気づかず融合してしまったせいで均衡が乱れ、暴発してしまった。それが事故の原因じゃよ」

「そ、そうなんだ。」

「しかし、闇雲に発現でき、融合まで編み出しておるとは……この子は、恐ろしい魔の才を秘めておる。きちんと教育すれば、どうなることやら」



「アルテレイマ。あなたは、この子を兵器として育てるつもりですか？」

う。眼光が鋭い。

「勘違いをするな。これを最後に引っ込むが、メングラッド。わらはこの子を養子として引き取りたい」

え？ よ、養子つて。

「責任は取れるのですね」

「もちろん」

ただそれだけを言って、アルテレイマは引っ込んだ。

「あ、と」

「そういえば、ひとつ」

メングラッドはその子の額を撫でながら、こんなことを聞いてきた。

「この子の名前は？」

わたしが椅子に座って、数分が経過した。

隣では椅子に腰を下ろしたメングラッドが、すやすやと寝息を立てている。

『香乃。決まったか？』

「無理」

『声に出すな。メングラッドは起きておるぞ』

「は？」

あ、ほんとだ。耳がピクピクと動いてる。

改めて、わたしは女の子を見る。

キレイな寝顔。お人形さんみたいだ。

『人形、か』

それで、ピンと来た。

「ドール、でいい？」

「ドール、ですか？」

わ、起きた。

「タヌキ寝入りが得意なやつめ」

「あなたに言われたくありませんわ」

「たがいに嫌みは言うけど、本気って感じはない。じゃれてるって  
言えばいいのかな。」

「てか、もう判別できてるんだ。口調の違いはあれど、適応の早さに  
びっくり。」

「ドール、ですね。これからは……そう呼びましょう」

ん？ あれ、メングラッドの表情が曇ったような。

「メングラッド」

「え、つと。香乃？」

「あ、はい。呼び捨てだから、解らなかつた？」

「いえ。結構ですよ。それよりも、あなたにひとつ訊ねたいことが  
あるのです」

「え、な、なに？」

「あなたは、日本人ですか？」

え？

「なるほど。では次です。折笠華葉という少女を知っていますか？」

「う、うん。ウァンティレズドの一件で会ったよ。でも、すぐに別  
れちゃったし」

「そう、ですか」

「はあ。メングラッドはうつむいて溜息をひとつ。」

「あ、確かその娘は……フェンリルから聞いたんだけど、ムスペル  
ヘイムに向かうって」

「フェンリル？」

「メングラッドは首を傾げる。」

「彼女がフェンリルを解放したことを伝える。すると。」

「フェンリルを……そうですか。彼女は、無事にムスペルヘイムへ  
辿り着いたのですね」

「ねえ、その、折笠華葉だけ。どうして彼女はムスペルヘイムに

「？」

「元の世界に帰るためですよ」

「どうやって？」

「華葉はシンマラから、ムスペルヘイムに次元の穴があることを聞いたんです」

「しんまら？」

「ムスペルヘイムの長、スルトの妻ですよ。ここはアルトレイマが説明するかと思ったのですが、口出ししませんでしたね」

「あはは。今は、おとなしくしてるみたい」

「それはそれでよいです。それより、あなたはさつきウアンティレズドで華葉に会ったと言いましたね」

「うん。強かったよ。フレイヤを圧倒してたから」

「それはそうでしょうね。知恵の泉の水を飲み、イアルンヴィズで力の果実を口にして生還したのですから。華葉はもう、神族では太刀打ちできません。ベルゲルミルですら、手に負えなかったのですから」

「ベルゲルミルが、じゃと？」

「ほら、出てきた」

メングラッド。アルトレイマの扱いが解ってるう。

「こほん。失礼」

「ふふ。おそらく、華葉ならスルトとも渡り合えるはず」

「そ、そんなに強いのか？」

「ええ。ただ、気になるのはムスペルヘイムの環境ですね。あそこは酸素がほとんどありませんし、何せ灼熱ですから。華葉の身体能力の半分も発揮できるかどうか」

「無事だよ。きつと」

「ふう。日本人は、皆そうなのですか？」

「え？」

「根拠もないのに、信じられる。その強さですよ」

「ん。ひとつ言えるのは」

「言えるのは？」

「日本の女の子は、とっても強いってことかな」  
「なるほど」

メングラッドはにっこりと微笑んだ。

「ぬ、ぐああああつ！ うおおうでいいいいいいん！」

な、なに？ 急に誰かが大声を。

「ロキ。どうなされました」

「だまれ……だれだ、貴様は」

「メングラッドです。ここヨツン Heim で医師をしております」  
椅子から立ち上がり、会釈。

ロキと呼ばれた男の人は、それを無視して部屋から出ていこうとする。

この人がロキなんだ。

髪は淡い緑色で、寝癖だらけ。その瞳は漆黒で、見つめてたら引き込まれそうだ。

スタイルはほっそり。でもマッチョ。いわゆる細マッチョ。

顔立ちはイケメンだけど、目つきが怖い。少し頬が痩せてるけど、だいじょうぶかな。

「ちょっと」

「どけ。小娘」

「やだ。どかない」

わたしはロキの前に立ち塞がり、両腕を広げる。

「俺と、やりあうつもりか？」

「っ」

「解ったのなら、さっさとどけえ！」

「きゃっ」

頬を殴られた。転びそうになったけど、誰かが支えてくれる。

「ロキ。何をしていますのですか」

この声。後ろで支えてくれたのは、エイルさんだ。

「だまれ……俺は、俺はオーデインを殺す。そのために生き延びた」  
「その身体では、アースガルズにおもむく前に倒れますよ」

「そうだよ。ロキ、あなたを心配している人がニヴルヘイムにいるの」

その一言で、ロキがわたしを見る。怖い目でにらまれても、わたしはひるまない。

「ヘルに、フェンリルが……あなたの身を案じてたよ」

「フェンリルはとうとう殺されたか」

「ち、違う。わたしが……じゃなくて、え〜っと。まあ、助けたの説明するのがめんどくさくて、はしょった。」

「スレイプニルもニヴルヘイムにいるよ」

「なに？」

意外そうな顔をした。それもそっか。スレイプニルはオーデインのものだしね。

「……………。殴って済まなかった」

「え？ あ、いいよ」

首から下げた銀のロケット。わたしがそれを見つめっていると、ロキは恥ずかしそうにそれをシャツの中に隠した。

今のつて。

『フェンリル、ヨルムンガンド、ヘル。彼らの幼少期の……誰が書いたのかは知らぬが、ロキの姿もあったな』

ふうん。ロキも家族想い、なんだね。

「それよりも、セネアさんはいらっしやいますか」

「セネアさんは、マイスを診てますよ。そっとしておいたほうがよろしいかと」

「然様ですか。それは困りましたね」

頬に手を当てて、いかにも困った仕草をするエイルさん。

「エイル。何かあったのですか？」

「はい。ウァンティレズドで何があったのか、セネアさんはご存じ

のはず。事情聴取をしたいと、ベルゲルミル様がおっしゃっております」

「あ、それならわたしが話せるよ」

「あなたが？ 証言できるのであれば、あなたでも構いませんが…

…」

「香乃は、ウアンテイレスドで華葉に会っているそうなの」

それを耳にして、エイルさんはハツとなる。

華葉つて娘は、いったいここで何をしてたんだろう。ちょっと気になる。

「それと、ロキ。あなたもベルゲルミル様に呼ばれています」

「俺が、か？」

「ええ。詳しい話は王の間ですと言っておりますが、お二方はそこまでの道をご存じではないでしょう」

「私がふたりをそこまで連れて行くわ」

「メングラッド様が？ しかし、その女の子は……」

「落ち着いたからだいじょうぶです。何かあったら、外のワンちゃんを寄こしなさい」

「はい。おおせのままに」

メングラッドに案内されて、わたしとロキは王の間の前にやってきた。

しっかし、この城の中はすごいねえ。

『あんまりじろじろ見んほうがよいぞ』

だって、巨人兵とかいるし。石柱も、天井も、とんでもなく高いよ。

『巨人が住まうのじゃ。小人用の通路もあるし、扉もあちこちにある。巨人が誤って踏み潰さないように、いろいろと配慮がなされておるのじゃよ』

ふうん。

「失礼します」

メングラッドが先に入り、わたしとロキもそれに続く。

「んん？ おや、メングラッドか」

う、うるさつ。高級耳栓が欲しいつ。

「ベルゲルミル。声を小さく」

「あ、ああ。濟まない」

ほんの少しだけ抑えてくれた。それでも耳が痛いけどね。バタンと、扉を閉めるメングラッド。

「近くに寄れ」

「はい」

メングラッドに続いて、わたしとロキは前が出る。

それにしても、大きい。学校の屋上を軽々抜いてそうなほど、とっても高い。

ひげがふっさふさだ。毛むくじやら。筋肉がすごいいから、ワイルドでかっくい。

髪は茶色くて、とっても長い。ひげも伸びてるね。

服のサイズは何しだろう。洗濯が大変そうだ。

「そちらの娘は？」

玉座に腰かけたままで、ベルゲルミルと呼ばれた巨人が聞く。

「あ、わたしは若郷香乃です」

「しきさと、かの？ ほう。似ておるな。あの娘と」

「それもそうですよ。香乃は、華葉と同じ日本人です」

「な、なんだと？ これはこれは」

バキボキ。なんでか、ベルゲルミルは拳を鳴らしている。

「ベルゲルミル。香乃は肉体派ではありません」

「む。そうか」

「華葉とは違うのです。日本人の全員が、巨人と渡り合える器量の持ち主だと勘違いしないでくれませんか」

「な、なぜ……怒っている？ 機嫌が悪いな。メングラッド」

「当たり前ですよ。日本人と聞いて、すぐに一戦交えたいと発想するんですから。第一、華葉は鍛練してあれほどの力を手にしたのです。それを忘れないでください」

な、なにがあつたんだろう。気になるっ。

「ふっ。こんな茶番に付き合わされるのなら、俺は帰るぞ」

肩をすくめて、ロキはベルゲルミルに背を向けた。

「待て。ロキ。俺はお前に協力してやりたいのだ」

「協力だと？」

両手を腰に置いて、ロキは不満そうにベルゲルミルの顔をあおぎ見た。

「俺らとて、オーデインにはほとほと困り果てている。できうるなら、俺も前線に出たいのだが……少し前に負傷してな。満足に戦えん」

「負傷だと？ 巨人の長が、笑わせる」

「ふっ。言ってくれるな。恥ずかしい限りだが、折笠華葉という人間の娘に背負い投げをもらってな。そのおかげで左足が折れておるのだ」

え？

「せ、背負い投げ……だと？ 馬鹿な。そんな戯言を」

「それは本当なんですよ。私も驚きました」

メングラッドが、微笑みながら言う。これは、本気マツっぽい。

「ほれ、その石壁がへこんでおるだろう。それは、華葉との戦闘で俺が投げられた跡だ」

で、でかいっ。言われるまで気づかなかった。

「おっと、すっかり忘れていた。メングラッド、セネアはどうした」

「香乃が代弁します。今、セネアは……ミスにつきっきりだから」

「そうか。姉妹だからな。しばらくはそっとしてやるべきか」

「気遣いができるようになりましたね」

「馬鹿にしておるのか？」



「いいえ」

メングラッドとベルゲルミル、とつても仲良しみたい。

「香乃といったか。話してくれないか。ウァンティレズドで何があったのかを」

メングラッドがうなづいたので、わたしは自分の知っていることを話した。

「やはり、オーディンがやったのか」

ベルゲルミルは、握り拳を作って怒っている。

メングラッドは予想していた通りだったのか、溜息をつくだけ。

「フレイヤを差し向けて、その結果とはな。オーディンもフリッグも、どんな顔をしたのやら。見てみたかった気もする」

「てかさ、ロキはその頃アースガルズにいなかったの？」

「俺は、その頃は辺境の地で生活を始めていたな。しかし、それをよく思わないトールやら他の奴に見つかってしまい、捕らえられた。地下に幽閉され、毒液の拷問のおまけまで寄りこしやがった」

「ふ〜ん」

「随分と馴れ馴れしいな」

「あ、ごめんなさい」

「いや、いい。それより、俺に協力すると言っていたが。巨人の兵士を数人くれるのか？」

ロキの質問に、ベルゲルミルはひげを指先ですきなながら答える。

「そうだな。しかし、まだ仕掛けるには早い。華葉がムスペルヘイムのスルトに書簡しよかんを届けてくれているのなら、もうじきスルトから連絡があるはずだが……」

「ムスペルと手を取り合うのか？ ふつ。簡単に話を通るとは思えん」

「そうでもないぞ。あのスルトのことだ。なまっただ身体を正そうと、華葉にケンカを売って返り討ちに遭っているはずだ」

「それはあなただけでしょう？」

メングラッドが厳しい突っ込みをする。

頬をボリボリとかいて、知らん振りをしてるベルゲルミル。

「それともうひとつ。協力を進言したいところがある」

「ニヴル Heim か？」

「そうだ。ロキ、お前の娘であるヘルが統治しておるのだろうか？」

お前が一声かければ、動いてくれるのではないのか？」

ふと、メングラッドの表情が曇った。

てか、あれ？ ベルゲルミルは、アルレイマが真の女王だって知らないの？

『ふむ。ヨツン Heim でわらわがニヴル Heim の女王だと知っておるのは、メングラッドだけじゃ。他の者はその事実を知らん』

そ、そうなんだ。

「それは、俺に死ぬと言っているのか？」

「馬鹿な。生きてままでニヴル Heim におもむくこともできよう」

「時間がかかる。距離もある。生憎俺は病み上がりだ。まともには動けない。第一、俺がやると言っても……その優秀な医師が止めるだろうか？」

「むう」

ロキの言葉に、メングラッドはコクリとうなづいていた。

「それに、だ。ヨツンとムスベル、アンデッドの軍勢でアースガルズへ攻め込むにも……いろいろと障害がある。そこへ向かうにはビフレストを通るか、空を飛ぶか、座標を合わせて転送するかだけだ。特に転送は不可能に近い。アースガルズは俺が出る前に、フリッグが結界を強化したからな。外部からの侵入はほとんど遮断されている」

「なら、ビフレストを通るしかないのか。だが、それでは目立ちすぎる」

「ああ。ビフレストとその付近は Heimダルが監視している。微妙かでも不審なことをすれば、Heimダルに感づかれる。いずれにしても奇襲は不可能だ。強襲するしかない」

Heimダル。

それは、ロキと相打ちになる神だったね。

「あ、あの」

わたしは拳手をした。

「ニヴルヘイムと連絡を取り合うなら、わたしに任せて」

「ダメです」

「うえっ？」

「香乃。あなたは何もしないでください」

「な、なんでよ」

メングラッドが、突然怒り出した。水玉エプロンをぎゅっと握り締めて、ロキのほうをにらんでる。

「ベルゲルミル、ロキ。あなた方は酷いです。冷たい仕打ちを受けただけと行って報復に出るのですか？ それでは、あなた方が嫌うアーシルと同じではありませんか」

「だからどうした。俺は、あいつらに辛酸をなめさせられた。家族を引き裂かれたんだ！ あのような非道を放置できるものか」

「家族を想うのなら、戦わずに話し合うこともできるのではないでしょう。このままあなたが事を起こせば、どうなるかぐらい解るでしょう？ 止めてください。絶対に」

「ふん。止めたさ。オーデインを何度も説得したさ！ それでも、俺の子供達は放逐ほうちゆくされた。あいつは俺の肉親に対して拒絶反応を示し、自分の息子が不始末を起こしても、甘い考えでそれを許していた。だからこそ俺は、あいつが最も可愛がっていたバルドルを謀殺したのだ。あいつが俺にした行為を、それ以上の事をしてやったのさ。だがあいつは諦めが悪かった。フリッグと共に、ニヴルヘイムからバルドルを取り戻そうとしたのだ。だがそれも、何者かにヘルモーズがやられたことで破綻した。スレイプニルも行方知れずとなった。ふっ。あいつの落胆した姿を見て、俺は喜んだよ。でもな、時間が経つにつれて空しさむなを覚えたさ。俺は結局、何も取り戻してもない。ただ、あいつと同様に奪っただけだと自己嫌悪おんじいに陥った。それからだった。アースガルズから出奔しゅっほんしようと思っただけは」

自分の身体を抱き締めて、メングラッドは伏し目になる。

「それでも俺は捕らえられ、拷問を受けさせられた。何者かが俺を救出し、ここまで運んでくれたのは何かの運命だ」

「運命？ それは、あなたがアーシルとの戦いに臨む<sup>のぞ</sup>？」

「そうだ。俺は、俺は必ずオーデインを討つ。俺だけじゃない。あいつのエインヘリア収集のために涙する人間の代わりに、復讐を果たさなくてはならない」

「……っ」

メングラッドはほろりと涙をこぼして、ここを出ていった。

しばらくの間、わたしたちは沈黙していた。

最初にそれを破ったのは、ベルゲルミルだった。

「香乃、といったか。お前は、ニヴルヘイムと連絡が取れるのだな」

「あ、はい」

「そうか。詮索はしないが、頼む。急いでくれ」

「待て」

わたしがメングラッドを追いかけてようとすると、ロキに引き止められた。

「ひとつ、頼みがある」

「え？」

「ニヴルヘイムと連絡を取るのなら、俺にも話をさせてくれ。ヘルにフェンリル、我が子と戦場で再会しては……長々と話もできない」

「そう」

「いや、できうるならふたりも、ヨルムンガンドも巻き込みたくはない。これは、俺の問題だ。俺だけの問題なんだ」

銀のロケットを両手でつかんで、ロキは切なそうに天をあおいだ。「先刻は済まなかった。メングラッドの両親は、雷神トールによって殺されているのだ」

「え」

「なんだと？ トールに？」

ベルゲルミルが、メングラッドについて話してくれた。

「ふっ。となれば、俺と同様に憎しみを抱いているのではないか？」

「いいや。メングラッドは優しいからな。血の流し合いに対して、潔癖なのだよ。多感な幼少期に両親を目の前で殺されて、心を閉ざしていた時期があつた。その時はエイルや儂が何とかして元気づけることができたが……未だに、争いに対して頑かたくなところがある」

そう、なんだ。

「メングラッドは、アースガルズとの戦争で多くの同胞が死ぬと思つている。少なからず犠牲者は出るだろう。あやつにとつて、ここにいる巨人は家族同然。だからこそ、心が通じ合つた家族を失うことを恐れている。折笠華葉が元の世界へ帰還するべくここを出てしまつた時も、号泣して倒れたほどだからな」

ロキは頭を手でかいている。

『香乃。反物を広げてやれ』

「え？」

わたしが有無を言う前に、腰に巻きついていた反物がほどかれた。

それらは空中で折りたたまれ、鏡のようにわたしの顔を映す。

けどそれは次第に、見慣れた景色を描き始めた。

「ロキ。ヘルとフェンリルの顔が見たいのじゃろう？」

「？ どうした。急に、雰囲気……いや、お前は」

「わらわのことはどうでもよい。ベルゲルミル、ロキ。ヘルとフェンリルと存分に話し合え。わらわはメングラッドを追う」

「待て。香乃、お前は……何か、華葉と通じる部分があるな。何者なんだ？」

「詮索は、しないのではなかったのか」

「むっ」

面食らつたベルゲルミルは、指先でひげをすく。

「しっかりと作戦を立てる。わらわは後で、フェンリルから内容を聞かせてもらつ」

扉を開けて、いざ走り出そうとしたら。

そこには、メングラッドがいた。

「香乃、アルトレイマ」

いきなり、メングラッドから平手打ちをもらった。

涙して逃げようとする彼女の腕を、わたしは強引に捕まえる。

「は、はなしてよ!」

「落ち着いて」

「なんで? どうしてなの? ふたりは、どうして……どうして戦争を起こすことにためらいがないのっ!?!」

「ないわけじゃないよ。」

「わたしは、オーデインが許せないの」

「な、なんで」

「あの子を……ドールを、利用しようとしたから」  
「利用って」

「エインヘリアとして迎え入れようとしたんだ。ドールを傷つけさせまいと、わたしは必死になって抵抗したよ。結果として、わたしは一度殺されちゃったけど。でもすぐに、アルトレイマが助けてくれた。だからこうして生きてる」

「何が、言いたいのか」

「わたしはドールを守るために戦う。ドールだって、わたしをヴィザルから守ってくれたもん。ロキだって、ベルゲルミルだって、そうした理由があって戦うんだ。メングラッド。あなたにひとつ聞きたいんだけどさ」

「ど、どうぞ」

「あなたはもし、自分の大切な人が……いじめられてたら、見て見ぬ振りをできる?」

「っ」

「できないよね? わたしも同じだよ」

アルテレイマ。あなたもこう言うよね。きっと。

「ドールはわたしの子でもあるの。我が子におよぶ魔の手を、親として排除する。子を守るのはいつでも、親の役目じゃない？」

まだ出会って間もないけど、わたしはドールって子に惹かれていた。

お腹痛めて産んだ子じゃないよ。でもさ。

わたしのこと、ママって呼ぶんだよ？

えーっと、卵から誕生した小鳥が初めて見たのを親と思う……なんだっけ？

『刷り込みじゃよ』

そう。それ。ドールはわたしを家族と思い、必要としてくれる。

「なあんてね。えらそうなこと言っても、わたしはまだまだ子どもだね。けどさ、わたしはドールを妹だっと思ってるよ」

「妹？」

「うん。アルテレイマにとっては子どもだとしてもさ、わたしには妹だよ。可愛い妹」

「ふたりのの中では、認識は異なるのですね」

「それでも家族には変わらないよ。ね？」

『うむ』

わたしの中で、うなづいてるアルテレイマがいた。

わたしとメングラッドは王の間に戻った。

「ん？ メングラッド。どうした？」

「ベルゲルミル」

反物がほどけてわたしの腰に巻き戻る。もう作戦会議は終わったんだ。

それはそうと、メングラッドの顔が生き生きしてる。何かを決意したんだね。

「私にできることは、傷ついた者を癒すだけ」

「うむ」

「それしかできない。だから、なるべく死者が出ないようにしたいの」

「何をするつもりだ」

メングラッドは白のリボンをほどいた。三つ編みのひとつがバラける。

あやとりの要領でそれを指先で踊らせ、ある形を作った。

「この治癒の印章を、皆に描かせてくれないかな」

「して、その効果は？」

「自然治癒力を上昇させる。ただ、記す場所が問題です」

「というと？」

「心臓に近いほうが効果が強く発揮されます。胸でも背中でも構いません。心臓に近ければ近いほど、高い治癒効果を発揮します」

「なるほど。その印章だが、自分の血で書いたほうがいいのか？」

「はい。それが嫌なら、泉の水を着色したインクでもだいじょうぶです」

「覚えておこう」

ベルゲルミルは頬杖をついて、ちらりと皆を一瞥した。

「ついさつき、炎鳥が書簡を届けてくれた」

それを聞いて、わたしとメングラッドは目と目を合わせる。

「ふう。読むぞ」

ベルゲルミルは、大きな紙を広げて深呼吸をする。

「親愛なる我が同志、ベルゲルミルよ。

つい先日、貴君が差し向けた人間の娘に惨敗を喫した。

久方振りに強者と相対し、いかに自分が遊びほうけていたかを痛感したぞ。礼を言う。

あの娘はもう深淵へと旅立った。惜しい気もするがね。

前置きはこれぐらいでいいだろう。

我と我が同胞ムスペル。共に戦線に立とう。

時間は明後日。正午までにヨツンヘイムへおもむく。



貴君はそれまでに備えを固めているがいい。

スルトより」

読み終えたのか、ベルゲルミルが手紙を折りたたむ。

「華葉は、スルトに勝ちましたね」

「わざわざ勝敗の有無を伝えるあたり、儂と同様にこつ酷くやられたな」

ふたりはにっこりと微笑む。

『いよいよ、か』

そうだね。てか、アルテレイマ。

『ん』

あなたは、ラグナロクには参加しないんじゃないの？ 関与しないとか、セネアさんに堂々と言ってたじゃない。

『ああ。しかし、あの女子おんな、ドールのためにも戦わねばならぬ。それに、オーデインはわらわの顔を覚えておる。ニヴルヘイムに鎮座していても埒うちが明かない。こちらから打って出るしかなかるう』

でもさ、ロキが言ってたよ。

アースガルズを攻めるには、どうしてもヘイムダルが厄介だって。

『それをどうにかせねばな』

わたしは思うところがあって、ロキのほうを見る。

「ん？ どうした」

「あのさ。ロキ、アースガルズにユグドラシルの根は伸びてる？」

「？ それがなんだって言うんだ？」

「あるの？」

「あるにはある。ノルンの館の近く、その泉に根はあるが……それがどうした？」

「あるんだ。ふうん」

「？ □に出して説明しろ。お前は何を考えている？」

嫌だよ。言わない。

「それと、結界を強化したと言ってたよね。それはどうすれば解除できるの？」

「……………」

「教えて。お願いっ」

両手を合わせてウインク。

「知ったところで、どうするつもりだ？」

ロキには効果がなかった。ちよっちシヨック。

「決まってるじゃない。解除するの」

「馬鹿なことを。外からの干渉を弾き返す結界など、内部から崩すしかないだろう。唯一ビフレストの出入口付近は除外されているが、どう解除するつもりだ？」

「何か、策があるようだな？」

「さあ」

ロキとベルゲルミルの問いかけに、わたしは首を傾げて肩をすくめる。

メングラッドはわたしを見て、おかしいのか笑ってた。

「まあ、いい。情報は共有しておこう。アースガルの結界は、フリッグが建造しると指示した四つの塔が制御している」

「どこにあるの？」

「東西南北。ただし、塔自体にも衛兵やら障壁が張り巡らされている。そう簡単に崩せるものではない」

「うん。全部壊せばいいの？」

「いや、ふたつ破壊するだけで充分だ。強力な結界ゆえに、維持するには最低限三つ必要になる。そうフリッグから聞いた」

なるほど。ふたつでいいのね。

「香乃。あなたには何かいい作戦があるのね」

「うん。メングラッド。あなたにも言わないよ」

「え？ そ、それじゃ、あなたひとりで？」

「だいじょうぶ。案がまとまったら、ちゃんと説明するから」  
言いながら、わたしは腹の中で笑ってた。

「何がおかしい？」

アルテレイマ。あなたは解るんじゃないの？ わたしの考えてい

ることがさ。

『ふっ。何となくはのう』

「ふあああああああああつ」

離れの館に戻るなり、いきなり大あくびしちゃった。

「あら、眠いのですか？」

「う、うん。寝ずにお手伝いしてたから、ちょっと」

廊下を歩きながら、わたしたちは親睦を深めようとおしゃべりしてる。

「さすがに俺も眠いな。まだ毒も抜けきっていないようだ」

メングラッドは「うふふ」と上品に笑う。

「ロキは医務室のベッドでおやすみを。香乃は着替えついでに、隣の部屋へ案内します」

「うん。ありがと」

まず先にロキと医務室に戻り、メングラッドは微笑みながら出てきて、その扉を閉めた。

「こちらです」

「はい」

案内するメングラッドは、少し複雑そうな顔をしていた。

彼女が扉のノブに手を触れた時、わたしは疑問を口にする。

「そこは、折笠華葉の部屋？」

「鋭いですね」

「何となく、そんな感じがしたんだ」

「そうですか」

メングラッドは静かに扉を開けた。

手招きされて、わたしは中へ失礼する。

「キレイな部屋だね」

「ええ。華葉がここを去ってからは、エイルが管理していましたし、ね」

木製の本棚には、たくさんの本があった。

他にもタンス、木の桶、テーブルに椅子、ベッド。普通に生活するには充分だ。

「灯石もあるんだね」

「ええ。最初のうちは使えないと嘆いていましたが、知恵の泉の水を飲んでからは魔力も心得ました。実を言うと、つい先刻香乃に飲ませた水は……泉のものなんですよ？」

「え？　そ、そうなの？」

「はい。感じませんか？　頭の回転が速くなっていると」

「あ。言われてみれば、そんな気もする」

「ふふつ。お茶をお持ちしますから、しばしここでお待ちを」

「あ、うん」

パタン。メングラッドは退室して、ゆっくりと扉を閉めた。

『……………。香乃』

「ん？」

『ロキから情報を得て、何をするつもりじゃ？』

「解らないの？」

『わらわは香乃と運命共同体じゃが、全てを感知できるわけではなし、話してもらわねば理解できぬこともある』

そっか。

メングラッドが来て、いなくなったら話すよ。

『ふむ』

しばらくして、メングラッドがティーポットを持って戻ってきた。

「紅茶は嫌いですか？」

「ううん。午後の紅茶を飲んだことあるから」

「は？」

「あ、なんでもないよ」

「そ、そうですか」

メングラッドはティーポットとカップをテーブルの上に置いてくれた。

「熱いですので、少し冷ましてから飲んでくださいね」

「うん。ありがとう。わたし猫舌だからさ」

「あら。わたしもそうなんですよ。華葉も熱いのがダメで、よくエイルを困らせました」

「そっかあ」

「では、私はこれで。ドールのことはおまかせあれ」

「あ、ちょっと待って。これ、ドールが気に入っているの。目覚めたら、これで落ち着かせてね」

わたしはポケットから、ずだ袋を出す。メングラッドに中のビー玉を見せてあげた。

「まあ、綺麗な宝石ですね。こんなに丸く研磨されている宝石は、初めて見ました」

「ビー玉って言うの。これでドールの興味を引いてあげてね」

「これが、びいだまですか」

メングラッドは感激している。この世界じゃ、ビー玉は珍しいものだしね。

「ドールについて話してた時から気になっていたのですが、これには魔法が込められているのでしょうか？」

「あ、うん。強く刺激しないで。発動しちゃうから」

「案ずるな。そのビー玉は周囲の魔力を集めて発動する仕掛けになっておる。投げるか砕くぐらいしないと起動せん」

「なるほど。とてもよく解りました」

一礼して、メングラッドは部屋の扉のノブに手をかける。

ふと、目を細めてこっちへ向き直った。

「血だらけの服。早く着替えたほうがいいですよ。サンダルも交換してください。予備がありますから」

「う。うん。適当なのを見つけて使わせてもらおうよ」

「はい」

パタン。メングラッドは微笑みながら扉を閉めた。

『メングラッド。無理をしておるな』

「え？」

『エイルがいるから心配はいらぬじゃろう』  
ぼんやりと、わたしの前にアルテレイマが現れた。

「わ。分離したの？」

『まさか。それをしてみる。香乃が消えるぞ』

「あなたに、つなぎ止められているんだね」

『……………』

「どう、したの？」

わたしはベッドに腰を下ろして、アルテレイマを隣に誘う。

『よい。そういう仲でもあるまい』

「は？」

『冗談じゃ。して、香乃。お前の作戦とやらを聞こう』

「その前に、フェンリルから作戦を聞くんじゃないの？」

『必要はない。反物から探したが、あやつらの合流地点の確認だけじゃった。まあ、いずれにしてもヘイムダルがおる。ラグナロクを仕掛けるのなら、奇襲は不可能。強襲するしかないのが現状じゃな』

「そうでもないよ」

『香乃。お前は、知恵の泉の水を飲んで、自覚したものはあるのかのう？』

「解んないよ。今は。でもさ、その強襲を奇襲に変える方法があるんだ」

『ほう？ 香乃の言動を見聞きしても、わらわにはそれが何なのか理解できぬ』

「じゃあ、説明してあげるよ。まずさ、アースガルズにユグドラシルの根はあるのかって聞いたでしょ？」

『ふむ』

「わたしはユグドラシルを通して、ドールの強い思いである場所へ転送させられた。それがどういうことか解る？」

『つまり、ユグドラシルを介して移動すれば結界を無視できるし、ヘイムダルに感づかれなと？』

「そう」

『しかし、それでは問題がある』

「向こうに引つ張ってくれる人が、アースガルズにいないってことでしょ？」

『察しが早い。泉の水は、香乃に合っているようじゃな』

「そう？」

『それともうひとつ。ユグドラシルを介して移動するには肉体が邪魔になる。誤解せぬようこれも言うておくが、香乃がドールの下へ導かれたのは、ドールの想念が空間に強く作用して歪みを生じさせたがゆえ。実際にそれをやると想念が漏れて近くの者に伝わる可能性がある。香乃やアールがドールの声を感じ取ったようにな。ユグドラシルを通路にするのは作戦上ちと無理があるのう』

「待って。アルトレイマ、今あなたは……肉体があるから無理だつて言ったね」

『……………』

「じゃあさ、わたしを放棄してアルトレイマだけがアースガルズに行くことはできるよね」

『……………』

「ねえ。どうしたの？」

『消えるつもりじゃったのか』

「うん。だって、ヘイムダルをどうにかしないと……わたしは」

『ヘルやフェンリルに、合わす顔がない。と言いたいのか』

「そうだね。ロキは、ヘイムダルと相打ちになる運命。それを覆すためなら、わたしは自分を捨てることを惜しいと思わない」

『見上げた覚悟じゃな。しかし、それも不可能』

「あなたにそれをする意思がないから？」

『いいや。正直驚いた。まさか、わらわ以上に狡猾になるとはね』

「そうでもないよ。わたしはまだまだ未熟。今だって、こうしてあなたに助けられている」

『……………。香乃』

「ん？ どうしたの。改まって」  
『今こそ話そう。わらわが、香乃を呼んだ真の理由を』

「真の、理由？」

目の前にいる幻のアルテレイマが、おもむろに腕を組んだ。

『そう。わらわは、気まぐれに香乃をニヴルヘイムに召喚したのではない』

「え、ど、どういう意味？」

『それを今から語る。聞きとらないか？』

「う、ううん」

『なら、紅茶で喉を潤せ』

「どうしてよ？」

『ちと喉が渴いた』

ああ、そう。

わたしはカップに紅茶を注ぎ、息を吹きかける。

一口すすると、ちよつと温めだった。

「メングラッド。気を遣ってくれたんだね」

『ふむ』

「これでいい？」

ゆっくりとうなづいて、アルテレイマは口を開いた。

『わらわは、自分と同じように生きられる者を探しておった』

「同じように、生きられる者？」

『そう。わらわは、永遠の命を約束された者。悪く言えば、死に嫌われた者』

「永遠の命？ 死に、嫌われた者？ どういう意味なの？」

『簡潔に言えば、わらわは死に等しい行為を受けた時、その肉体と靈魂は放棄される。その判断は常に死が行う。死という、理がな』

「なに、それ。まるで、死が生きているみたいじゃない？」

『そう。その通り。わらわは偽りの死を経て、転生する。自分が死



んだ付近にな。望むのならその場所から離れることもできる。それから前回の死までと比例する成長を、一瞬で終えるのさ。それ相応の疲労も伴うがのう」

意味が解らない。解らないよっ！

「じゃろうな。わらわの生き死にの周期については理解せんていいずれにしても経験することじゃ。百聞は一見にしかず。言葉より体験するほうが理解は早いじゃろう」

「それは、わたしに死ねって言うてるの？」

「ふ。ロキの真似か？」

「違うよ。それと、わたしと、何の関係があるの」

「わらわの力は、唯一無二。そのはずじゃった。しかし、夢見で感じ取ったのじゃよ。香乃。お前という存在をな」

「わたしが、あなたと同じ力を持っていると？」

「違う。死が、嫌いになりかけている存在を」

「嫌いに、なりかけている？ わたしが、死に嫌われそうになっていたの？」

「そう。そんな生命など、自分以外にはいないと思っていた。わらわは歓喜した。しかし、迷いもあった。自分の苦しみを、何も知らない他人に味あわせてよいのか……と」

「……………」

「ただ、香乃は嫌われかけていただけ。わらわがきつかけを与えれば、こちらに引き込める。本当にそれでよいのか？ そんな迷いを抱きながら、わらわは香乃をニヴルヘイムに召喚してしまった。ついで、出来心で」

「でき、ごころ？ そんな中途半端な覚悟で、わたしを？」

「済まない。しかし呼んでしまった以上、いつかは話さなくてはならない。呼び出してからしばらくの間、わらわは香乃の目を見るのが怖くなっていた」

「こ、怖かったって」

「理解されないかもしれない。突き放されるかもしれない。このさ

みしさを紛らわすために、わらわはひとりの人間の運命を狂わそうとしていた。いや、現に狂わせた。悩むに悩んださ。そうしてわらわは、香乃を知りたいと思って一步を踏み出した。ふたりきり話し合える機会を得たいがために、ウアンティレズドへおもむいた』  
そう、だったんだ。

『それと、見たかったのもある』

「な、なにを？」

『もうひとりの、日本人の存在を』

あれ？

何か、引つかかった。でもそれは、すぐに解った。

「アルトレイマ。あなたは……未来に何が起きるのか解るの？」

『夢見でな』

「そう、なんだ。どこまで？」

『ウアンティレズドと、ドールの事件のみじゃ。これらは夢見で見通した。ただ、ドールの一件は……わらわは、その運命を拒絶した。そのはずじゃった』

「でも、ドールによってそれは変わった？」

『そう。わらわは、あのドールという女子おなごを見くびっていた。香乃をニヴルヘイムに置き去りにすれば、回避できると。そう、そうなるはずじゃった！ なのに、なのに……っ』

わたしはびっくりした。

感情をむき出しにしたアルトレイマを見たのが、初めてだったから。

ふう。落ち着いて深呼吸。

本音を打ち明けてくれた親友に、わたしは素直に想いを伝えた。

「別にいいじゃない。わたしは、あなたと一緒に生きていく運命だったんだよ」

『……………。済まない』

「謝らないでよ。わたしだって、アルトレイマにつらい思いをさせちゃったことを悔やんでるの」

『悔やむ、じゃと』

「うん。でもこれからはだいじょうぶだよ。ずっと一緒だから、ね」？

『ぶっ』

あ、微笑んだ。いつもそういう顔してればいいのに。

『むう』

頬を指で引っかけて、照れてる。

「それでさ。わたしは、どうなっちゃうの？」

『わらわがこのまま香乃の靈魂に宿っていれば、いつかは香乃も死に嫌われた存在となる』

「わたしが、永遠の命を得るのね？」

『そうじゃ。あんまりうれしそうではないな？』

そうでもないよ。うれしいよ。

アルトレイマが、心を開いてくれたからさ。

でもさ、気になるの。あなたは、そんな自分に苦悩しているんでしょ？ さみしさを、感じているんでしょ？ それはなんで？

『……………』

答えたくないんだ。

『永遠なのは、わらわだけじゃ』

「え？」

『他の者は違う。親しくなった友人はいつかは子を産み、息絶える。わらわにはその、死がない。忘れることができない。その悲哀を何度も何度も繰り返し返すことに、嫌気が差しておるのさ』

「だから、欲しかったんだ。いつまでも傍にいてくれる親友を」

『そう。この苦しみを分かち合える、親しき友が欲しかった。永遠などという、解き放つことのできない枷。わらわと共にその枷に繋がれ、笑い合える人が……欲しかった。何よりも』

腕をほどいて、アルトレイマはそっぽ向いた。

「ぶうん」

アルトレイマの話聞いてて、率直にこう思った。

「永遠の命なんて、下らないね」

『下らない、か。生命いのちある者は、血眼でそれを追い求めておるのに？』

「こつちを向いて、アルトレイマはにこりと微笑んだ。

「だとしてもさ。アルトレイマも、同じように思っているんでしょ？」

『否定はせんがな』

おたがいに白い歯を見せて笑い合う。

「あのさ。アルトレイマ」

『ん』

「さみしいって感情についてさ、こつちは思えない？ 別れが悲しいのは、出会えてよかったって裏返しなんだよ」

『ふふつ。そうか』

アルトレイマは少しぼかんとしたけど、わたしの言葉にうなづいてくれた。

「それはそうと、別な作戦を考えないといけないね」

『いや、香乃のプランは実行できる』

「え？ で、でも……それだと、わたしが消えちゃうんでしょ」

『んや。わらわの靈魂は、香乃の靈魂に宿っておる。今の香乃の身体は、靈魂を物質化マテリアライズして得たもの。それを靈体化アストラライズし、ユグドラシルを通じてアースガルズにおもむいた後で、再び物質化マテリアライズすればよいだけの話じゃ』

「つまり、わたしの作戦は実行できるってこと？ なら、完璧じゃない」

『ふうむ』

「ん？ 何か、腑ふに落ちない点でもあるの？」

『ユグドラシルの根は、ノルンの館付近にあるのじゃろう？ ノルンの三姉妹に気取られる可能性がある』

「それでも、やるしかない。気づかれたら、それはそれで好都合。わたしはアルテレイマであり、アルテレイマはわたしなんだよ？」

『どういう意味じゃ？』

「死なないってことはさ。つまりは負けないうことでしょ？」

『勝てる力がなければ、それは無意味。しかし、ノルンと派手にやりあうのは危険じゃ。多勢に無勢では、目的を達成しにくくなる。できうるなら、ヘイムダルを倒すまでは事を起こしたくはない』

「どうして？」

『ラグナロクに近いのに、敵を警戒させてどうする。強襲を奇襲に変えるのじゃろう？ それでは本末転倒じゃろうに』

「あ、そ、そうだったね」

一息ついて、わたしは腕を組む。

「バレたらしようがないよ。臨機応変に動こう」

『さようか。なら、どうする？ もう動くのか？』

「少し休もうよ。えっと、ひとつ重要なことを忘れてたんだけどさ。」

「一番近くのユグドラシルの根は……」

『ユグドラシルの根の多くは地面に潜っておるが、知恵の泉に露出している。案ずるな。そこまでは転移できる』

「そう」

話して喉が乾いたので、わたしは冷めた紅茶をカップに注ぎ、一口すすむ。

「うん。おいしい」

『飲み干したほうがいい。この紅茶は知恵の泉の水。飲めば飲むほど、効果がある』

「ふうん」

なら、全部飲んどこう。もったいないしね。

『後で用足しすることになりそうじゃな』

「はいはい。それはそうと、書くものとメモないかな」

『置き手紙か？』

「そう。アルテレイマも、そういうの好きでしょ」

『ふっ。嫌いではないな。ただ、その前にひとつ頼みがある』

「ん。なに？」

『うむ。ちょっと編み物をしてほしい』

## 第9話

《アースガルズ・ウルドの泉 若郷香乃》

『だいじょうぶか。香乃』

へ、平気だよ。

『わらわの力を得たとはいえ、心身は香乃のままじゃしな。あまり無理はできぬか』

だいじょうぶだよ。あなたの思う存分にやればいい。

『さようか』

今わたしは、ユグドラシルの根を通じてアースガルズにやってきた。

マテリアライズ物質化だっけ。それを終えたのはいいけど、泉で溺れかけたよっ。

「あんまり騒ぐとまずいよね」

『服も着替えたのに、もうずぶぬれか』

言わないでよっ。あゝあ、せっかく新しい白ワンピースに着替えたのに、台無しだよお。

「乾かしている余裕はないよね」

腰に反物が巻きつく、それは目立つのを避けるために輝きを抑えている。

『近くに河川がある。それに沿って行けば、ヘイムダルの館に辿り着く』

「え。アルテレイマって、アースガルズの地理に詳しいの？」

『余計なおしゃべりをする時間はない。ノルンに気取られる前に、さっさとこの場を離れろ』

「う、うん」

河川に沿って移動していたら、キレイな虹の橋を見つけた。

その脇にはひとつの館。あそこに、ヘイムダルがいるんだ。

『ヘイムダルを倒すのがわらわ達の務め。置き手紙にも記したが、ヘイムダルを倒した後は騒ぎを起こしても構わん。早々に結界塔を破壊せねばな』

うん。でも、ちよつと不安だよ。

『案ずるな。ほれ、早う館に潜入せんか』

気づかれないかなあ。

『悟られるのは必至<sup>ひつし</sup>。館に入ってから任せろ』

う、うん。お願いするね。

わたしは忍び足で歩き、館の正面玄関にやってきた。

「あれ？ お、お邪魔しまゝす」

『不用心な。開いておるとはのう』

何と、扉に鍵がかかっている。

そそくさと中に入り、わたしは扉を閉めた。

『さて、もう館は凍結した。騒いでいいぞ』

「え？ も、もう閉じ込めたの？」

『ああ。わらわは封術<sup>シール</sup>に長けておる』

「しいる？」

『封印する魔術。敵の行動を制限したりするものじゃ』

「ああ、そう」

館のロビーで、声を出して会話していたからかな。

「何者だ。貴様は」

上のほうから、男の人が飛び降りてきた。

「あなたが、ヘイムダル？」

「そうだ。小娘、ここに何の用がある？」

ヘイムダルと答えた青年は、左腰に収めている鞘から剣を引き抜いた。

見た目は、寝癖だらけの黄土色の短髪に、目力<sup>めぢから</sup>のある橙の瞳。



服装は鎧とかじゃなく、普通にラフで動きやすそうなカジュアルなもの。目立つのは、首に巻かれた黄金のスカーフかな。

「俺の問いに答えろ」

答える必要はないよ。だってもう、アルテレイマが。

「ヘイムダル。お前には死んでもらう」

わたしの身体を使って、反物をほどいてみせたから。

「俺を？ 馬鹿なことを」

ふと、ヘイムダルはきよろきよろとあたりを見渡す。次第に、顔が険しくなっていく。

「俺を、閉じ込めたようだな」

「察しが早い」

「本気らしいな。なら、さっさと決着をつけないとね」

ヘイムダルが握り締める剣が、強い輝きを帯びた。

「はあっ！」

彼は剣の先端を磨かれた床に触れさせ、それを勢いよく振り上げた。

剣気が、地面を伝ってわたしのほうへ来る。

「ぬっ。こやつは」

わたしは横に動くことでそれを避けた。

「いい動きだ。反応はそれなりか」

「力押しで来るとはのう」

ヘイムダルは剣気と一緒に接近していた。反物を広げて凍結させ、それを盾にして突きを防いだ。

「女だと思って甘く見ないほうがよさそうだ」

ヘイムダルは後退した。

「ふっ。なかなか上々のようじゃな」

アルテレイマは、浮遊する反物を見て舌なめずりをする。

「さあ、一気に攻めるぞ」

両手から紫の球体をひとつずつ発現させ、アルテレイマはヘイムダルを見据える。

「発現だと？ ふん」

ヘイムダルはそれを見ても平然としている。

「余裕を嘯ましておるのか？」

「やってみろ」

怪訝に思いながらも、アルトレイマは球体をひとつ投げた。

でもそれは、ヘイムダルの目前で消えてしまう。

「なんじゃと？」

「俺を相手にしたのが運の尽きだ。俺には小細工など通用しない」

アルトレイマは残ったひとつを大きくして、両手でパチンと押し

潰した。

「む？ 何のつもりだ。還元したのか？」

「三」

不敵に笑いながら、アルトレイマは後退する。

「ん？ さん、だと」

今、アルトレイマは何かを数えていた。

「試してみるかのう」

アルトレイマは両手に氷の針を作り出し、それをヘイムダルへ投

げた。

「いつまでも遊んでいると思うな！」

まただ。ヘイムダルに届く前に、それらが塵となって消えちゃっ

た。

「うおおおおおおおおおおお」

動きが速い。瞬く間に接近されてしまう。

ヘイムダルとアルトレイマの間に、反物が割って入った。

光り輝くそれは、人の形をした何かを出現させる。

「きゃあああああああああああああああっ！？」

返り血が浴びたヘイムダルは、自分が斬りつけたものを見て愕然

とする。

「戦乙女ヴァルキリア……だと？」

「ふっ。戦いくに情などいらん」

「む。そのような布ごときに捕まるものかあつ！」

ヘイムダルを中心に突風が起きる。

彼を捕まえようとした反物だけでなく、わたしまで壁際へ吹き飛ばされてしまう。

「強烈な発気じゃな」

ヘイムダルは血まみれの剣を手にして、倒れた戦乙女を見下ろしている。

「我が同胞を盾にするとは。貴様、何者だ」

「二」

「ん？ 貴様、さつきから何を数えている！」

気になる。けれどもアルテレイマは、それをわたしに教えようとならない。

「よそ見をしておる場合か？」

「なにっ？ ぐあつ！」

今しがた殺された戦乙女が飛び起き、鞘から剣を抜いてヘイムダルへ斬りかかる。

「貴様、このような真似を」

惜しい。かすつてもいないなんて。

「戦に綺麗も汚いもあるのか？ わらわは貴様を屠るためなら、禁忌などにこだわらん。早々に葬<sup>ほうむ</sup>ってやるう」

そうだね。気持ち悪いとか、嫌だとか、そんなことは言ってもらえない。

不死者を使つてでも、ヘイムダルを倒さなくちゃ。

「くつ。俺には手にあまるな。だったら ん？ な」

「ヘイムダル。貴公が探しておるのは、これかや？」

「な。いつの間に！」

アルテレイマは反物が持つそれを堂々と見せつけた。

角笛？ あ、そっか。ヘイムダルはこれで神々にラグナロクの始まりを伝えるんだ。

てかさつき、アルテレイマは反物でヘイムダルを捕まえる振りし

て、これをくすねてたんだ。ひゅ〜 やつるう。

「これを吹かれてもしたら、わらわ達の行動が台無しになる。よつて、潰すまで」

「な、止める！」

ぐるぐると反物がそれに巻きつく。すごい力を加えられて、角笛は青白い塵となった。

「これで、何の気兼ねなしに戦える。ヘイムダル。覚悟するがよい」「く。図に乗るなよ！」

ヘイムダルが不死者をにらんだ。バタリと、戦乙女が倒れてしまふ。

「むっ？」

「まやかし、ではないのか。本物の、戦乙女だと……？ くっ」「ふたりは同時に驚いた。

でも、アルテレイマは何かをつかんだ様子。

「なるほど。ヘイムダル、お前は波眼はがんを使えるのじゃな？」  
「っ」

「そうと解れば、小細工を仕掛ける意味もない。存分にやれるぞ」「はがん？」

『一言で言えば、凍てつく波動を目だけで行える。ちと語弊はあるが、理解できたかの？』

説明、どうもありがとう。

要するに、ヘイムダルの視界内にある小細工はかき消されちゃうんでしょ？ 厄介だね。

「――」  
アルテレイマのカウントが進む。

「く、ならば操り手である貴様を屠ればいいだけの話！」

速い。さっきと違って、残像がちらついている。

「ぬ」

アルテレイマは反物から短剣を具現化し、それを左手に握って鏢つ迫り合いをする。



遊んでる場合じゃないでしょ。早く倒しちやおつよ。

「く。やるなら、さっさとやればいいではないか」

「そうさせてもらう」

戦乙女がヘイムダルの首筋に刃を走らせる。その時だった。

まただ。ヘイムダルを中心に大気の爆発が起きる。

「く」

アルテレイマは反物を巻きつけて、それをパラシュート代わりにして踏ん張ってみせた。

戦乙女はバラバラに吹き飛んでしまった。もう、不死者として使えそうにない。

「女だと、甘く見ていた。もう手加減はしない。確実に仕留めてやる」

飛び起きて、バク転して距離を取るヘイムダル。

その手に握られた剣は、未だに強い輝きを帯びていた。

「さて、そろそろやらねばな」

「なに？」

アルテレイマは両手にひとつずつ、紫の球体を生み出した。

「ふっ。そんなもの、我が眼で打ち消してやるっ」

答えず、アルテレイマは球体をひとつに融合する。

「まとめただと？ ぐ」

ヘイムダルは剣を盾に、防御の体勢になった。

「零。時は来たれり、“ブリーク”！」

「なに？ これは……！！」

アルテレイマの呼びかけに応じて、館内に吹雪が発生する。これは、融合した魔法じゃない。

さっきアルテレイマがしたのって放逸？ しかも待機？ すごっ。

「よそ見をするな。“アイスバーグ”！」

融合した魔法を解き放つアルテレイマ。

吹雪の中、氷塊がヘイムダルの周囲に発生する。

フェンリルとやりあっていった時よりも、遥かに巨大だ。

ヘイムダルの波眼ではどうしようもないほど、氷山ができるほうが圧倒的に速い。

「な、く、ぐああああああああああっっ!?!?」

無数の氷の槍。降り積もる粉雪。白銀の世界にとらわれたヘイムダル。

う、なんか……頭がクラクラしてきた。

『案ずるな。深呼吸しろ』

「う、うん」

空気が冷たい。でも、新鮮でおいしい。

『本当は高威力の氷魔法は使いとうなかった』

な、なんで？

『氷は、元は水であろう?』

そうだね。

『その水は、何でできている』

酸素と、水素だね。

『そう。わらわが本気で氷魔法を唱えると、その場の酸素が氷を生成するためにほとんど食い潰される。しかもここは密室。酸素に限りがある。今は自息法でどうにかまかかっておるが、ここに来る前に紅茶を大量に飲んでおいてよかったのう』

そ、そうだったんだ。魔法って、そう安易に使えるものじゃないんだね。

それはそうと、ヘイムダルは？

「っ」

アルテレイマが唇を噛む。とどめを刺せなかったようだ。

「や、やる……ではないか」

「左腕を切り捨てて、氷の牢獄から脱したか」

「はあ、ぐ、ぐぼおおう」

ヘイムダルは瀕死ひんじでありながら、まだ立つ気力がある。

口と左肩から垂れる血が、白い雪を赤く染めてゆく。

「お、お前は……何者だ?」

「冥土の土産に教えてやりたいが、早々に死ね」

「な、なめるなよ……俺は、俺はあああああつ！」

竜巻が発生する。それは、ヘイムダルを包み込んで守護している。粉雪も吹き飛んでしまった。床はつるつると凍結してて転びそう。接近戦も無理っぽい。

「む。ちと厄介じゃな。これでは」

とどめが刺せない。けど、ヘイムダルは瀕死。後少しで倒せる。

「もうひとつやるとするかろう」

アルテレイマはわたしの右の親指を甘噛み　い、いたつ。出血するほど噛みつかないですよ。

「戦は任せると言っていたではないか……」

だけどっ。痛いものは痛い。解りますかあ？

『慣れる』

そ、その一言ですませるのっ？

「長引くとこちらが不利になる。ならば」

アルテレイマは左手の平に、血で印章を書く。

「何をする気かは知らんが、もはや貴様を……無事で、帰すものか  
ヘイムダルの剣が、極光をまとう。

息も絶え絶えなのに、まだそんな力を残している。油断は禁物だね。

「刺し違えるつもりか？」

「馬鹿な。俺はまだくたばるわけにはいかない。貴様ごときに、貴様ごときにいつ！」

その血眼が、わたしを捉える。

アルテレイマ、ヘイムダルには小細工は通じないんだよ？　手に印章を書いたって、役立つかどうか。

印章？

目の前に浮かぶ反物を見て、わたしはあることを思いついた。

「ねえ、アルテレイマ」

「なんじゃ」



その手の印章、何の効果があるの？

「破滅の印章じゃ。これをヘイムダルの死角になるところへ当てて、その身を滅する。あやつを消すのに時間はかかるし、接近も困難を極めそうじゃが……酸素が残り少ない。強烈な魔法は唱えられん。

まだやるべきことがあるからのう。なるべく消耗はしとくないのさ」「  
「だったらさ、いい手があるの。メングラッドがそうしてたでしょ？  
「ほう？ やってみるとするかのう」

わたしの言いたいことを理解して、愉快そうに唇を歪めるアルテレイマ。元はわたしの身体なだけどね。

「何がおかしい……？」

「ヘイムダル。貴様というザコに、これほど手こずるとはのう」

「ぞ、ぞ……だと？」

「そうじゃ。貴様のようなザコを相手に、血を流すはめになるうとは。わらわもスルトと同様に、遊びほうけていたようじゃ」

おもむろに両手を広げるアルテレイマ。

「お、俺が……俺が、ザコだとお！？」

わ。キレちゃったよ。

極光のオーラが、ヘイムダルの全身を覆う。

それから、全速力でこちらへ踏み込んでくる。

「ふ」

アルテレイマは指先から、凍てつく波動を放つ。

ヘイムダルを守っていたオーラの竜巻は、それによって一瞬で消失した。

無防備になったヘイムダルは、ブレーキをかけて後退しようとする。

それを待っていたんだよ。

「な、く、こいつは……！」

反物がヘイムダルに巻きつく。

「さ、させるかあああああっ！」

発気して反物を吹き飛ばそうとする。でも、ついさっき全力を出

したから反物は引きはがせない。

「ふ。遺言は受けつけんぞ」

アルテレイマは館の玄関へ歩き出した。ヘイムダルを無視して。

「に、逃げるのかっ！ き、貴様を無事で帰す……な、ひい！？」

反物は、徐々にヘイムダルをバラしていた。

だってそれは、破滅の印章を形取かたちとっているんだもん。

後は時間さえ経てばいい。けどアルテレイマは、それさえも許しはしなかった。

「な、や、やめろ！ た、たすけて」

「見苦しいぞ。なら、ヴィザルの遺品で送り届けてやるっ」

ザスツ。反物が拾い上げた短剣が、ヘイムダルの額に突き刺さる。意識を失ったヘイムダルは、印章の効果で跡形もなく消え去った。

一戦を終えて、わたしはヘイムダルの館を脱出した。

遅れて、短剣を持った反物が腰に巻きつく。

「次は、結界塔だね」

そう意気込むも、息が上がってるよ。ふへえ。

「む？ まずい。何者かが来るぞ」

「え？ じゃあ」

『幸いにも、目の前に塔がある。あれをさっさと潰して、開戦の合図を鳴らそうではないか』

## 《ヨツン Heim・ガストロプニル》

香乃がアースガルズに潜入する二日前。

メンングラッドは香乃がいるはずの部屋を訪れて、置き手紙を見つけた。

それを読んで事を察し、メンングラッドはベルゲルミルの下へ駆け

込む。

「あの娘は、先んじてアースガルズに向かったというのか」  
ベルゲルミルは緊急招集をかけた。

王の間に、大勢の巨人が並ぶ。

メンングラッドは、セネア、エイル、ロキ、ベルゲルミルと巨人達  
が注目する中で手紙を読み上げた。

「え〜っと、簡潔に伝えるね。

わたしこと、若郷香乃とアルトレイマは先にアースガルズへ向か  
います。

だいじょうぶ。心配しないで。ユグドラシルの根を、霊体化して  
通ればヘイムダルには気づかれない。

そうして潜入した後、わたしはヘイムダルを暗殺する。必ずやり  
遂げるよ。

それからは結界塔の破壊に従事しつつ、対峙した神を屠る。

自分だけでは事足りないと感じたら、塔の破壊後にガルム、ニー  
ズヘッグのいずれかを召喚します。

他の皆は自分のペースで来て。わたしが心配だからって、無茶は  
しなくてもいいよ。

だってわたしは、ニヴルヘイムの女王アルトレイマと身体ひとつ  
を共有している。負ける事はない。

最後にひとつ。わたしは、あなた達の運命を変えてみせる」  
読み終えたメンングラッドは、震える手でその紙を折りたたんだ。

「香乃さん。ひとりで……」

「なんてことを。ひとりで、アースシルに立ち向かうなんて」

「ヘイムダルを暗殺する、だと？ 随分と言ってくれる」

セネアは両手を合わせて祈り、エイルは溜息をつき、ロキは肩を  
すくめて笑っていた。

「だいじょうぶ。香乃は、これに書いていることを必ずやり遂げる」

「ふん。その根拠は？」

「ないよ」

ロキの問いかけに、自信たっぷりに答えるメングランド。

「アルテレイマ、か。ニヴルヘイムの女王は、ヘルではないのか」

「ベルゲルミル。アルテレイマは強いよ。だって、死に嫌われた存在だから」

「死に、嫌われた？ どういう意味だ」

にこやかな笑顔で、メングランドはアルテレイマの存在について語り始めた。

《アースガルズ・北の結界塔 若郷香乃》

パンツ。手で叩いてもダメだ。塔の周りは障壁が張られてて、出入りできそうにない。

どこかに穴はあるはず。目視で発見するのは難しそうだ。

「ど、どうしよう」

『何かが来るぞ！』

ズガアンツ。突然の地響きに、わたしは膝を崩してしまう。

「雷神トールか！」

わたしは音のしたほうを振り返り、その存在に畏怖する。

「てめえ。何者なにものだあ？」

手入れしてない橙の短髪、目つきが鋭い碧眼。無精ひげが生えてて、見た目はだらしない。

肉体はいわゆるゴリマッチョ。やっぱ細マッチョのほうがいいよね。

「こっちのほう何か騒がしいと思ったら、見慣れない女がいやがるぜ」

くすんだ銀色の手袋を右手にしている。しかもその手には小さなハンマーが握られてた。あれは、ミヨルニル？

「まずいな」

なんで？ このまま、トールも倒しちゃおうよ。

「馬鹿を言つな。さっきのでかなり消耗しておるといふのに、トールとやりあうじゃと?」

う。息が切れてる。確かに危ういかも。

このままトール戦に臨んでも、長引いてジリ貧になるだけだ。

「かといつて、結界塔を見逃すのも痛い。様子見しながら、逃げ道を見出すぞ」

「何をゴチャゴチャ言つてんだ? おい、答える!」

ズウンツ。縦に揺れる大地震。

ミヨルニルは振るわれてない。足踏みだけで、こんな震動を起すんだ。すごいかも。

「感心しとる場合か……」

アルトレイマは反物で身体を浮かせて、地震対策を取る。

「なんだつて? へえ、なかなかおもしろいことするじゃねえか」

「トール。お前は単細胞じゃな」

「あん?」

い、いきなり挑発う?

「どうした? ぼつと突つ立ったままか? このデクの坊が」

ビキツ。トールのこめかみに、青筋が立つ。

やばつ。キレてる。殺気立ってにらんでるもん。

「こんの、どちくしょうがあああああああああつ!」

トールはブチギレて、接近してミヨルニルを振り下ろす。

「よつと」

アルトレイマは空高く跳び上がり、結界塔が倒壊するのを見下ろしていた。

「あ、や、やつちまった」

「よし。後ひとつ叩き潰せば完了じゃ」

アルトレイマ。やるう。

「これだけ派手に騒がれたとなれば、トール以外の神がやってくる。包囲される前にもうひとつを破壊するぞ」

「待てえええええつ!」

城壁に沿って、天女のように空を飛ぶわたし。それを追いかける  
トール。

その一步毎に、地面が大きくくぼんでいる。  
とんでもない馬鹿力。あんなのまともに受けたら、ひとたまりも  
ないよ。

「よし。降りるぞ」

結界塔の近くへ着地し、アルテレイマは反物を周囲に浮かせる。  
短剣は左手に持ち、サンダルをトントンと整えた。

「てめえ。オレにケンカを売っというて、逃げるたあどういこうった  
？」

「バカにつける薬はないか」

「な、んだと」

「ふっ。バカにバカと言って何が悪い。現に、貴様は塔のひとつを  
破壊した。バカ以外の何者でもあるまいて」

ビキビキッ。さつきよりも青筋が目立つ。これは、マジギレだよ  
っ。

「っざけんああああああああああああああっっっ！」

トールが接近する。

アルテレイマは姿勢を低くして、反物を潜り抜けた。

「な、ぐあああっ!?!」

擦れ違いざまにトールの左脇腹を斬りつけ、振り返ってすぐに。

「“フリーズ”！」

手を広げて、無数の氷のつぶてをトールへ放った。

「く、な、ぐおおっ!?!」

そのうちのひとつが脳天を直撃した。トールが片膝を崩す。

「む?」

反物がトールを捕らえようとした矢先、それは上空へ吹き飛ばさ  
れた。

トールも、発気できるんだ。

「しまった。今ので冷静になりおったか」

すつくと、トールが立ち上がる。

「はあ、く、女だからといって手加減はしねえぞ」

血で汚れた顔を手でぬぐい、トールは呼吸を整える。

「あほうが頭を使ったところで、脅威ではない」

「そっやって、オレの調子を崩そっつてののか？」

「脳が筋肉できておるくせに、自分ではできると思い上がっておるのか？ あほうがいくら頭を使おうが、はなはだもって無駄ではないか」

ビキツ。あ、またトールがキレた。

怒らせると怖いんだろっけどさ、アルレイマはわざとやってる。しかも楽しみながら。

「“フォトン”！」

声のしたほうを向かず、アルレイマはとっさに短剣を投げ捨てた。

「な、なんですって？」

女の人の声だ。横目で見えたけど、光線は短剣が触れたことで消失した。

「トール。いつまで遊んでいるのですか」

「ち」

「このような娘に手玉に取ら……っ？」

注意していた女の人が、わたしの顔を見て絶句した。

「あなたは、ニヴル Heim でヘルモーズを殺した女ではないか！」

「っ」

「それに、あなたは夫の邪魔をして　なぜ、このような場所にいるのー！」

「フリッグか。うるさいババアじやのう」

やれやれと、溜息をひとつ。

って、フリッグってオーディンの奥さんじゃない。

腰まである長い金髪に、怒りに燃える青い瞳。

背は高くすらっとしている。あちこちに黄金のアクセサリがあっ





は止まった。

手を握ったり開いたりして、どうしたのアルテレイマ？

「霊糸で操るには、トールは力がありすぎる。とても制御できんな」  
その失態を目の当たりにして、フリッグが激怒する。

「塔が、ふたつも。トール！ あなたは、いったい何をやっているのですか！？」

「お、オレに言うな！ あいつが、あの女がオレを操ったんだ。それをどうにかするのが魔術師じゃないのか」

「減らず口を。しかし、まだ塔はふたつあります」

おかしい。結果が消えてない。

「ロキに与えた情報は、やはり虚偽じゃったか」

やっぱりって、最初から解ってたの？

「んや。フリッグは、オーデインも手を焼く曲者じゃからのう」

ど、どうするの？ まだ塔はふたつあるんだよ。

「……………」

ふと、アルテレイマは空をあおいだ。

反物がようやくやく戻ってきた。トールの発気の威力は、ヘイムダルの比じゃないね。

「トール」

「なに？ うおっと」

フリッグは足下に落ちていた短剣を拾い、それをトールに投げ渡す。

「こいつは、ヴィザルが持っていた」

「その女は、わたくしの家族を次々と屠殺した。許しがたい存在です。トール、気を引き締めなさい」

「なるほど。手練てたれってことじゃあ違えねえちが」

反物を身体に巻きつけて、アルテレイマはトールを注視する。後方のフリッグは、今は無視するみたいだ。

「む？」

ズダァンッ。上のほうで、何か物音がする。



《ニヴル Heim・フェルゲルミル》

ニーズヘッグは、遠くで輝き続ける太陽を眺めていた。

「まだ、太陽と月はあるのか。穏やかなものだ」

ウァンティレズドから戻ってすぐ、ニーズヘッグはガルムと言葉を交わしていた。

『ガルム。お前は、あの若郷香乃という娘に何を感じた？』

『ワッ』

『やはり、そうか。あの方の、血を引いているんだな？』

『クウ』

『だからこそ、アルテレイマ様は……』

ピキッ。

その音に気がついて、ニーズヘッグは卵から離れた。

「これは……」

パキッ。

「ピギヤ〜」

「おお、ついに孵かえったのね」

我が子の誕生に歓喜するニーズヘッグ。

「よしよし。いい子でちゅね〜」

満面の笑顔で、ニーズヘッグは残りふたつの卵の誕生を待った。

《アースガルズ・西の結界塔跡》

巨大蛇ヨルムンガンドは、降りかかる瓦礫を頭を振って払う。

その際に粉塵ふんじんが舞い散り、見通しが悪くなった。

「さあ、ここおは自分に任まかせてえ〜え。父さあん、フェンリル兄

さあん」

「ああ、存分に遊ばせてもらおう」

「抜け駆けはさせんぞ。アルテレイマ」

その頭から飛び降りて、開戦に昂揚する男と銀狼。ロキとフェンリルだ。

「私はこのまままっすぐ向かおう。ロキ、死ぬなよ」

「ふっ。お前達こそ、無理はするなよ」

この場から立ち去るロキとフェンリル。

入れ替わりに何者かがやってきた。右手に小槌を持つ男。トールだ。

「けっ。随分と派手にやってくれたじゃねえかつ！」

「お、お前え……お前はあああああああああああああああ  
ああつつっ！」

咆哮するヨルムンガンド。仇敵の登場に、ふたつの眼が血走る。

「うらああああつっ！」

振り下ろされる槌。ヨルムンガンドは頭を引いてそれをかわし、大口を開けた。

「な、なにっ!?!」

トールは身を屈めて、喉奥から放たれる痰を回避した。

「うっうあああああああああああああああつっっ！」

口と鼻からどす黒い瘴気を吐き出し、ヨルムンガンドは眼前にできた大穴を見て舌なめずりをする。

「ヘルう。早あく背中を駆けえろよお。さあもないと、振りい落とすぜえ〜えっ」

ヨルムンガンドの背中から、ふたつの影が降り立つ。セネアとヘルだ。

「女ふたり? くっ、お前。自分の体を橋代わりにしやがったのか」

「だあからどうしたあ〜? 赤ん坊をあやあす小道う具を持ってえるくせにようおおっっ！」

ミヨルニルをオモチャだと罵るヨルムンガンド。

その挑発を受けて、トールは激しく興奮した。

「香乃さんはどこに……?」

「……セネア。ひとまず離れよう」

セネアとヘルはこの場に漂う瘴気に耐えられず、高く跳躍して退避した。

「もうお、もう自分の背を駆けるうのはいなあいよなあ〜あつ？」  
ヨルムンガンドの問いかけに、答えるのは誰もいなかった。

「へへっ。さあ、これで邪魔者はいねえな！」

トールは深く呼吸した。それが、命取りであるとも知らずに。  
「ううううがあああああああああああああああああつっ！」

大口を開けて突進するヨルムンガンド。

両足で踏ん張り、それを迎え撃つトール。

運命は、決した。

《アースガルズ・西の結界塔跡 若郷香乃》

「さあ、あの時の借りを返してやろう！」

オーディンがルーン文字の刻まれた剣で斬りかかってくる。

「く。力押しとは、面倒な」

反物を大鎌の形に凍結させ、アルテレイマはオーディンと打ち合う。  
う。

「“グレア”！」

その最中にも、フリッグによる光線の雨が飛んできちゃうよ。

「く、な」

反物で全身を覆うも、対応が遅かった。両腕や肩に軽い火傷を負ってしまふ。

「隙ありいー！」

「っ」

間一髪 じゃない。反物で剣先をつかもうとしたけど、その勢いは押さえられず左頬をかすってしまふ。

「させるか。戯たわけがあつ！」

「ちい。なら、その手を切り落としてくれる！」

アルテレイマは左手で刀身を押さえた。腕力じゃ勝てない。背後は城壁。動いてもフリッグに狙われる。ど、どうしたらいいのっ？

「ぬぐわあはああああっ!?!」

眼前のオーディンがなぜか吹っ飛んだ。

「あ、ぐ、ぐあああああああああああああああああああ」

両手で胸を押さえ、かきむしっている。よく見ると、オーディンの全身はドロドロの液体にまみれていた。

「この臭い。ヨルムンガンドの……」

アルテレイマは思わず鼻を押さえた。それから流れ弾を恐れて、どす黒い霧が発生してるほうを見る。

「よそ見をしている場合ではなくってよ!」

しまった。フリッグの光線が飛んでくる。

「なんのお!」

「ちいつ」

反物を広げることで、光線をもらすことなく受け止めた。

それからすぐに反物を全身に巻きつけて、横目で流れ弾を警戒する。

「自分の夫が苦しんでおるといふのに、フリッグ。見殺しにするつもりか」

鼻を押さえたままなので、ちょっと声がおかしい。

「ふん。このような使えない夫など、生かすに値しませんわ」

「な、なんですってえ!?! 自分が愛した人でしょう! どうして、どうしてそんなことが言えるの!?!」

「急に、雰囲気が変わりましたね」

鼻を押さえたままだったので、怒鳴り声は情けないものだった。

そんなことより、フリッグは意に介してない。完全にオーディンを見捨ててる態度だ。

ズドゥウウウンッッ!

黒い霧のほうから、鈍い音がした。

「な」

「え」

わたしとアルトレイマ、フリッグも絶句した。

上から、何か巨大なものが落ちてくる。

「ぬうつ!?!」

「きゃあっ!」

アルトレイマは城壁を蹴って、高く跳躍する。

何とか、それに押し潰される前に脱することができた。ふう。

「オーディン。あれでは、生きておるまい」

そ、それよりも、これってまさか。

「ヨルムンガンド、か」

反物で浮いたアルトレイマは、それを見下ろして悔しさに歯噛みした。

顎を殴打され、即死している。

目と鼻、口からは血だけでなく、黒い煙を発生させる液体がもれていた。

「っ。そ、そんな……」

運命が、決してしまった。

「嘆いておる場合ではないぞ。戦はまだ続いておる」  
「なんで? どうして、こうなっちゃうの?」

わたし達はラグナロクが始まる前に行動したのに、なんでよおっ!?!

「どうやら、ユグドラシルを通って移動するのは……思ったより、時間がかかるらしい。悠長に遊んではおれんようさのう」

アルトレイマはゆっくりと、フリッグの後ろへ着地する。

「ん。泣いておるのか?」

「誰が。血迷うにもほどがありませんわよ?」

フリッグは手で涙をぬぐってから、こちらを向いた。

「あなたは、わたくしから何もかも奪っていくのですね」

「奪う？ 最初に奪ったのは彼奴（まがや）ではないか。今更何をぬかしてやる！？」

激昂するアルテレイマ。

『香乃。済まん。香乃の肉体を氣遣って戦っていたが、これより全力でやる。苦しいじゃろうが我慢してたもれ』

え、あ、う、うん。お願いするね。

「任せろ」

「先程から何をブツブツと。あなたは、多重人格なのですか？」

「ふっ。似たようなものさのう」

地震が起きる。遠くから、声が聞こえた。

「ビフレストから巨人兵？ なぜ、ヘイムダルは……まさか？」

フリッグは、ようやく気づいたようだ。

「橋の番人、ヘイムダルを　あなたは」

「察しが遅いのう。さあ、フリッグ。次はそなたの番じゃな」

「“フォトン”！」

フリッグは杖の先端から光線を放ちつつ、空いた左手で白い球体を作り出す。

今の、明らかにわたしを狙っていなかった。むしろ、牽制（けんせい）のためになぜと？

「皆して、発現できるなんて」

「いや、あれは違うぞ！」

フリッグは白い光を手にとわせ、空中に何か描いている。

「逃しはしない。“グレア”！」

「む」

後退しながら、アルテレイマは光線の雨を見切ってかわす。

「あれは、刻印じゃ」

刻印？ 印章じゃなくて？



「空間に刻むなど、モーズグズ以外に見たことがない。フリッグめ、それをやりながら攻撃魔法を唱えるとは。かなりの腕前と見た」

眼前に白い文字を刻んだ後、フリッグは杖を地面へと突き立て、両手を合わせて呪文を唱えている。

「一気に勝負をつける気が。まずいのう」

え、フリッグは何をしようとしているの？

『刻印。それで盾を作り、それに守られた安全圏内から魔法一辺倒じゃな』

じゃあ、あれを壊しちゃえばいいんだ。

「いや、刻印は解呪が難しい。あれがどういう効果を持つのか見極めねば、近寄ることすらままならぬ」

でも、刻印って魔導具アーティファクトがないと無理なんじゃ。

「左腕に黄金の腕輪がある。あれがそうじゃろう」

じゃあ、どうするの？

「ええい、それを今から考えるのじゃ。何か妙案を出してみい！」「い、イライラしないでよおっ。」

「ゆきます」

フリッグが両手を広げた。何かが来る　　と思っただけど、何も起きない。

「どこを見ているのですか？　あなたはここで朽ち果てるのです。」

“シャイニング”！

わたしを取り囲む光の剣。半目になっちゃうほど、強く輝いている。「わ、わわっ」

どうしたらいいのか解らず、慌てたわたしは目を閉じて腕を振り回す。

「む？　なんと」

アルテレイマは目を開けてびつくりしてた。わたしもね。

何が起きたかというと、光が霧散むざんしてるの。フリッグは突然のことに、身を乗り出してまばたきを繰り返す。

「な、なんですって？　わたくしが、発動を失敗するなんて」

違う。今のは、確実にわたしに迫っていた。なのに、なんで消えちゃったの？

「ほう。香乃、やはり香乃は天才じゃのう」

え？ な、何を言ってるの？

「以前、言っただじやろう。香乃の魔の才を調べると」  
う、うん。

「ぶくくくっ」

額を手で押さえて、バカ笑いするアルテレイマ。せ、説明してよっ。

『無効系魔術パフォーマティブを潜在的に秘めておるとはなあ』

ばあみつとすべる？

『要するに、対抗呪文。魔法を打ち消し、相手の疲弊と動揺を誘う。わらわはこれを独学で学んでおったのじゃが、いかんせんコツがつかめなくてな。フレイヤとやりあった時に軽めのを実践したが、所詮それまで。諦めようと思っていたが、香乃の中からこんなおもしろいものが見出せるとはのう』

そ、そうなんだ。わたしって、魔法が使えるんだね。

『相手の魔法を打ち消すなど、魔法を使える内には入らん。何せ、相手が魔術師でなければ有効にはならぬからのう』  
むっ。

『腹を立てるな。香乃、そなたはモーズグズからリンゴをもらい、食したのであろう？』

そ、それがどうしたの。

『実はな、あのリンゴこそが魔の才を調べる道具なんじゃよ』

ええ？ 初耳だよ。しかもあれ、ゲロったじゃんか！

『それでよいのさ。対抗呪文の素質がある者は、あのリンゴを吐き出すのが必然』

わたしは、罪の意識でえずいたと思ってたよ。

『それもあるじやろうな。どうやら知恵の泉の水が、香乃の潜在能力を引き出したようじゃ。あのリンゴの結果が見えてからというも

の、香乃がいつそれを発するか楽しみで仕方なかったぞ。ぶくぶくつ。あゝははははははっ』

「そ、そうだったんだ。で、アルテレイマはそれでどう戦うつもりなの？」

『ふつ。参考程度に、今から見せてやろう。わらわが懂れるに懂れた、パーミッションとやらをな』

舌なめずりして、アルテレイマは口の中にたまった唾液を飲み込んだ。

「く。どうやら、今のはあなたが何かしたようですね」

「ほう？ 自分の失敗を他人になすりつけるか」

フリッグは手で前髪をかき上げて、余裕の笑みを浮かべている。

「おっほほほ」

「用心しておくべきかのう」

アルテレイマは反物を右腕に巻きつけて、端を握っては親指で何か文字を書いている。

「今からあなたを、浄化して差し上げましょう。 “ホーリー”！」

「 “カウンターSPELL”！」

フリッグの詠唱により現れた聖なる光は、アルテレイマの対抗呪文によって打ち消された。

指を鳴らしながら唱えるなんて、ご機嫌だね。アルテレイマ。

「な、なんですって？」

「よそ見をするでない。 “フリーズ”！」

対するアルテレイマは、上空から氷のつぶてを降らしてフリッグを狙い撃つ。

「無駄よ。 “サンクチュアリ”！」

フリッグは刻印を解き放った。

白光の鎧びんぎを身にまとい、頬に手を当てて高笑いしてる。

「おっほほほ。それぐらいの攻撃など、わたくしには効きませんわ」  
言う通り、氷のつぶてはフリッグに当たる直前に砕け散った。

「……………」

アルテレイマは腕を組んで目を閉じ、めい想している。

「わ、わたくしを無視するつもり？」

「……………」

「な、なんてことを。わたくしなど、眼中にないとも言うの？」  
アルテレイマは、フリッグなど実験台としか思っていない。

新たに発見したわたしの能力に夢中で、そのドキドキワクワクがこっちにも伝わってくる。

「わたくしを蔑視したことを、後悔しても遅くってよ！」

フリッグはまた同じ文字を刻んだ後、杖を握り直して「フォトン」を唱えてくる。

「よし」

目を開けたアルテレイマは、屈んで光線を避けた。

「ゆくぞ」

低姿勢から跳躍し、白い刻印を越える。

落下の勢いに任せて、アルテレイマはフリッグへ殴りかかった。

「対応に困ったら、近接戦？ 甘い。甘いですわよ！」

白光の鎧を身にまとうフリッグは、拳を顔面に受けた。

「む？」

「おっほほほ？ わたくしの美貌うつくしに傷をつけるなど、百年早くって

よー！

「ぐう！」

杖で頬を殴打されたアルテレイマは、口から垂れる血を反物でぬぐう。

「完璧な、防御か」

「ええ。そうですわ」

フリッグの光の鎧が薄れていく。

「効果時間は短いと見た」

「ふふつ。おっほほほっ！」

いきなり高笑いするフリッグ。

なんだろ？ 周りの景色が薄れて見える。

「これは……」

「お逝きなさい。“グランド・クロス”！」

「魔法を、待機させておったか」

ちよつと前、フリッグが“シャイニング”を唱える時だ。あの時に待機させたんだね。

極光の十字架が、わたしに突き刺さる。

ひっ。

し、死ぬのはやっぱり怖いよっ。アルトレイマあっ！

「 “スperlジャック” 」

「え？ な、そんな。嘘でしょう!？」

・・・ん？ あり？

「残念じゃったな。フリッグ」

わたしの右腕に巻きついてた反物が、変な形になって極光を吸い取っている。

それを全部取り込んだ後、反物は妖しげな光を帯びたまま、再び腕に巻きついた。

あ。この形は、さっきアルトレイマが書いてた文字とおんなじだ。

「さあ、己の力をその身に受けるがよい。“グランド・クロス”！」  
「ひいっ」

その直撃を恐れて、フリッグは“サンクチュアリ”を発動させる。しかし、まばゆい光の十字架は発生しない。

「な、え？」

「かかったな。戯たわけが」

「っ!？」

アルトレイマはまごつくフリッグを押し倒した。

「な、何をするのです! は、放しなさい!」

「やかましいのう。ちと黙っておれ」



ニーズヘッグは、空間が奇妙な波を立てていることに気がついた。

《アースガルズ・中央広場》  
イザヴェル

ヨルムンガンドが倒れる、少し前。

「久しいな。テュール」

「ふむ。あれから、どれくらい経っただろうか」

黄金で装飾された広場に、銀狼と、鎧兜を身にまとう隻腕の戦士が対峙していた。

周りには黄金で造られた建物が並ぶ。

ここは、アースガルズの中心にある広場だ。  
イザヴェル

「右腕に盾を取りつけたか。ふつ。片腕で、私に勝てると思うか」

「口先だけは達者だな。フェンリル」

話はそこで中断した。

フェンリルは前傾姿勢になる。

対するテュールは右腕に装着した盾を前に出し、左手に握る剣を振り被った。

「駆動に限界のある盾など、恐るるに足らん」

「やってみるがいい！」

フェンリルはテュールへ突撃する。

対するテュールは右腕の盾で防御し、フェンリルを受け止めた。

「む。だが」

「なに？ ぐあああつ！？」

盾を蹴って宙返ししつつ、フェンリルはテュールへ氷柱しゅうの雨を降らす。

全身に深い切り傷を負ったテュールは、よろけながらも剣を振って剣気を放った。

「そんなもの」

空中に作った氷の足場を用いて、高く跳び上がるフェンリル。

「片腕ではそんなものだろう。さあ、テュール。覚悟するがいい！」  
氷の鎧をまとい、上空から飛びかかるフェンリル。

ふたりが激突する直前に、遠くのほうで大きな音がした。

普段なら気にも留めなかったのだろうが、フェンリルはそれがヨ  
ルムンガンドが倒れたものだと思感する。

「な、なにが」

「よそ見などしている場合があっ！」

「しま　ぐああっ!？」

白刃をその身に受けたフェンリルは、激しく地面に叩きつけられ  
る。

左脇腹に深手を負い、フェンリルは戦いくに集中できなかった自分を  
恥じた。

「く」

「どうした？　これが貴君の実力か？　違っだろう」

「ふっ。言ってくれるな！」

瀕死のフェンリルは氷の鎧を再びまとう。傷口に染みるようだが、  
止血はできていた。

「負けるわけにはいかない！　私は　私はあああああっ！」

自然と涙がこぼれる。

フェンリルは涙が凍りつくのを恐れて、顔のほうだけは冷気を弱  
めていた。

「我もまた、負けるわけにはいかないのだ。さあ、来い。次で決め  
てやろう」

前傾姿勢になるフェンリル。

テュールもまた腰を落として、迎え撃つ体勢になった。

「ゆくぞおおおおおおおおおおおおおおおおおっっっ  
っ！」

「ぬうっおおおおおおおおおおおおおおおっっっ  
っ！」

突進するフェンリル。



しかし、その勢いが急に弱まった。

「ぐ」  
激しく動いたことで、傷口が広がったのだ。その痛みで動きが鈍っている。

「隙ありい！」

「なんのおおおおおおおおっ！」

擦れ違う両者。

「ぐ……おう」

先に倒れたのは、フェンリルだった。

氷の鎧は打ち砕かれ、更なる深手を負った。薄れる意識の中、フ

エンリルは自分の最期を覚悟する。

「ふん」

剣を振って血を払い、テュールは背後を振り返る。

ふと、横目で微かな光が見えた。それが気になり、テュールはそちらを見やる。

「なんだ？ 今、わずかだが光が　すぐに消えてしまったようだな」

そのよそ見が、テュールにとって命取りとなった。

「いつけええええええええええええええええええええええ」

「ワアウオオオオオオオッ！」

モーズグズの駆るガルムに急襲され、テュールは瞬く間に腹の中に収まった。

カラン。テュールが握っていた剣は、広場の中央に転がり落ちる。

「あ」

その音がしたほうを見て、モーズグズは倒れたフェンリルを発見した。

「いけなあい。急いで、メングラッド様から習った治癒の印章を書かないとお」

ガルムはフェンリルに接近し、モーズグズはその背中から飛び降りて、背負っていた大筆を両手に構える。

腰のベルトに取りつけていた小瓶を手に取り、ふたを外す。

その中から橙の魔インクを垂らして筆先を湿らせ、治癒の印章をフェンリルの身体に書き記した。

すると、淡い癒しの光がフェンリルを包み込む。

「間に合えば、いいんですけどお」

不安ながらも、モーズグズは周りを見渡す。

ふと、ガルムの様子がおかしい。モーズグズはその視線の先に、宮殿があることを確認した。

「あそこに、アルトレイマ様と香乃ちゃんがあ？」

「ガルツ！」

首を左右に振るガルム。

「血の臭い……？ 解った。フェンリルはわたちに任せて、ガルムは救援に向かってえ！」

「ワンツ」

その指示を受けて、ガルムは全速力で宮殿へ向かった。

### 《アースガルズ・宮殿》ヴァルハラ

バタン。黄金の宮殿に入るなり、門が閉められた。

淡い緑の前髪を指先ですいて、青年は溜息をつく。

「俺を閉じ込めて、どうするつもりだ？ フレイ」

「おや、気づいていたのかい。ロキ」

短いブロンドの前髪を手でかき上げて、フレイと呼ばれた青年は柱の陰から姿を現す。

「君はとうとうここまでやってきてしまった。残念だよ、ロキ」

「ふつ。女に現まを抜かして、何を強がっている」

肩をすくめるロキ。対するフレイは、自身のあやまちを指摘されて不愉快らしい。

「ロキ。君とてあやまちを犯した。その間違いは、正さなくてはな

らない」

「間違い、だと？ 何をぬかすか！ お前らに正義などない。戯言たわごとはよせ」

「ふ。ロキ、君こそ戯言たわごとはよしなよ。僕らは神だ。世界の均衡を守らねばならない、崇高な存在なんだ」

「思い上がるなよ。フレイ！」

腰に差していたロッドを右手で引き抜き、その先端から黒刃くろじんを発生させる。

その刃で振り払うも、フレイは跳躍してそれをかわした。

「話し合いはもう終わりかい？ 随分と乱暴だね、ロキ。スマートにいこうよ」

「だまれえええええええっ！」

空いた左手から黒い球体を発現させる。

ロキはそれを平たく伸ばし、フレイへ投擲とつてきした。

「なにっ!？」

姿勢を低くしてフレイはそれを回避する。

背後にあった黄金の柱は真つ二つに寸断され、その破片がフレイに降りかかった。

「く。や、やっってくれるね。ロキ」

「ふ」

「え？ な、これは……」

フレイはその破片でできた頬の傷に気がついた。指でぬぐうと、血が付着する。

「あ、あ、あああああああ。ほ、僕の美しい顔に……な、なんてことをするんだあ！」

「美しい？ 見た目だけにとらわれた貴様などに、正義をとやかく問われるのはごめんだ。早々に朽ちろ」

「あ、あ、あああああ。ロキい！ 君だけは絶対に許さないよっ！」

「言ってる」





女の血と肉片が飛び散る。

「な、く、そんな……」

メングラッドも力尽きてしまった。

「うっふふふっ」。ママあ、ママあああああああああああああああああ  
ああああっ」

狂乱するドールは、テレキネシス念動力を用いてガストロプニルを圧縮し始めた。

《アースガルズ・宮殿前》  
ヴァルハラ

崩落した宮殿の玄関前。

そこに、ロキが負傷して倒れていた。

「あっははは。フレイ兄さんを倒そうなんて、ロキ。あなたは甘いのよ」

「ぐ、不意撃ちとは……卑怯な」

起き上がるようにするが、フレイヤに背中を踏みつけられるロキ。

「あなたは這いつくばってればいいのよ」

「ぐ、ぐああああっ！」

「フレイヤ。君もロキが気に入らないのかい？」

「ええ。のこのこと帰って来て、血なまぐさいことを平然とやってのける。そんな醜い男は万死に値するわ」

ロキを取り囲むフレイとフレイヤ。

フレイは橙の球体を発現し、ロキの後頭部めがけて雷線を撃ち込もうとする。

「うあああああああああああああああああああああああああああ  
ああああっ！」

が。それをさせまいと、上から何者かが斬りかかった。

「なに」

「くっ」

ヘルだ。フレイとフレイヤはその場から飛びのいた。ロキを踏みつけるふたりを払いのけた後、ヘルは左手に持つ大鎌を下段に構える。

「あんだ、ヘル。ちっ、もう少しでロキを殺せたつてのに！」

「フレイヤ！」

フレイの呼びかけで、フレイヤはもうひとりいることに気づいた。側転で回避して、屈んだ体勢になったフレイヤはそれが誰なのか視認する。

「せ、セネア。あなたまで」

「すみません。タイミングが遅れました」

「……構わない」

慣れない槍を振り回し、セネアはフレイヤを注視する。

「な、それは、グングニル！　なぜ、戦乙女がそれを」

「フレイ。フレイヤ。あなた方はわたくしが滅します。覚悟なさってください」

「……勝手に取るなあ！　こいつらは、私がやる」

ヘルは憤激していた。

その怒りは、兄であるヨルムガンドの死を見届け、父であるロキの負傷により、色濃い紫のオーラとなって現れる。

「ふっ。傷ついたロキを庇ったまま、僕らとやりあおうってのかい。できるものならやってみれば　な」

フレイは背後からの気配に気づき、跳んで壊れた宮殿の上に降り立った。

「ガルムだつて？　ど、どうしてここに」

「グルルルルウウウウウツッ！」

ヘルとセネアの間に、ガルムが飛び込んできた。

フレイを見定めたガルムを見て、ヘルは溜息まじりにこう命令した。

「……ガルム。父さんを連れ、ここを離れて」

「ガウツッ！」







「ヘル。それ以上踏み込んだら、このメダルを破壊するわ。それと、早く大鎌を捨てなさい。さもないと 解るわよね？」

メダルひとつとマイスの魂だけで、形勢逆転できたことに歓喜するフレイヤ。

「な、何を……すればいいのですか」

「何って、そのグングニルでヘルを殺しなさい」

「い、いや……です」

「そう。だったら壊すわ」

「な、ま、待つて。妹は、妹は関係ないでしょう!」

「ない？ 本当にそうだと思ってるの？ だったら、こんなの無視してかかってくればいいじゃないの」

「っ」

あまりの悔しさに、セネアは唇を噛み切った。

「……やれ」

「え？」

「……構わない。やれ」

「な、何を言って」

ヘルは大鎌を投げ捨て、セネアをじっと見つめる。

「そ、そんなことをしたら。あなたの、家族も」

「…… たったひとり妹なら、大事にすべきだ」

「っ。な、なら」

セネアはグングニルを拾い上げた。

ヘルは、セネアの目を見て気がつく。その目に込められた決意が、自分の思うものとは違うことに。

「ふふっ。あゝっはははははははは」

フレイヤはふたりのやりとりを見て、高笑いしている。

セネアはグングニルの先端を地面へ突き刺し、ヘルを見据えた。

「……」

静かにうなづいたヘルは、セネアの想いを知った。

「ごめんなさい。ヘル」

無言のまま、ヘルはフレイヤを見やる。

「ほら、さつさとやりなさいよ。さつさとしないと、このメダルをぶっ壊すわ」

フレイヤの嘲りがきつかけとなった。

「え、な」

深呼吸した後、セネアは思いきり舌を噛んだ。そして、大量に吐血した。

「ちょ、ちょっと！ な、なんであんたが勝手に ひっ!?!」

金属音。セネアは間合いを詰めて、メダルを槍で弾き飛ばす。

それは、ヘルの手がつかんだ。

「な、この女あつ！ あんたなんてええええええええええええつ！」  
フレイヤは感情のまま光線を放った。至近距離、セネアは回避できな  
ない。

「え……?」

フレイヤは気づいた。セネアが不死者と化していることに。

光線を浴びて肉を焼かれても、苦痛に喘ぐことはない。槍を振り回して防御する必要もない。

だから、守りを捨てて攻撃に専念できる。

「あ、ぐあ ああああああああああああつ!?!」

光線の中を槍が通っていることに気づかず、フレイヤは左胸を貫かれた。

「あ、あんた……そ、こま」

言葉の途中で、フレイヤは力尽きた。

セネアは倒れたフレイヤの頭を、その頭蓋を踏み砕く。

「ご、ごべんね せねあああああつ」

ヘルは、嗚咽をこらえられなかった。

膝を崩して、自分がしたあやまちを悔いている。

セネアという仲間を、不死者にしたあやまちを……。

《アイスガルズ・中央広場》  
イザウエル

きよろきよろと周りを警戒しつつ、広場にてフェンリルの回復を待つモーズグズ。

ふと、遠くから何かがやってくる。

「あ、ガルム」

それに気づいて、モーズグズは手を振った。

重傷者が啜えられていると気づき、彼女は橙の魔インクを筆先に浸して待ち受ける。

「ワンツ」

「わ、こ、この人は ええい」

ガルムが静かに寝かした後で、その胴体に治癒の印章を書き記す。それを済ませてから、モーズグズはロキの近くにフェンリルを横たえる。

「だいじょうぶ。すぐに元気になりますよう」

「ガウツ！」

「え？ お、追手おってがく〜わ、わ、わわわわっ!？」

凄まじい地震。そして、まばゆい十字架の極光。

アルトレイマが乗った“グランド・クロス”の影響で、アイスガルズが激しく揺れ動く。

「ぬああああああああああああああっ!」

「うおおおおおおおおおっ!」  
合戦のかけ声。

地震などお構いなしに、残された神々と戦乙女とエインヘリア、ムスペルと巨人と不死者の軍勢が激突する。

その戦闘は徐々に広場に近づいていた。

「ち、近いですねえ。このままじゃ、わたち達も巻き込まれてしま  
う」

重傷者を抱えたまま戦場にいるのは危険。

モーズグズは首を傾げて、どうすべきか考える。

「“ギャザー”！」

「ぐあつ!？」

振りをして、モーズグズは空いている場所へフレイを撃ち落とすた。

「さつきからこそそと、わたち達を観察してえ。なんなんですかあ？」

大筆を両手に構えて、モーズグズはフレイを注視する。

「ガルウウウウウッ」

「ガルム。あなたはふたりを守って。わたちはこの人を片付けますう」

「ワンツ」

モーズグズは宙に治癒の印章を刻んだ。それは元の形と違い、アレンジされている。

それは強い癒しの光を放つ。淡い輝きは、傷ついたロキとフェンリルを優しく包み込んだ。

「な、なんだと？ それは」

「ガルム。あなたもそこで休んでいいよ」

「ワンツ」

前傾姿勢のまま、ガルムはフレイを注視する。

モーズグズはふたりとガルムから離れて、フレイと対峙した。

「く、幼い子供だと思って甘く見ないほうがよさそうだ」

「あなたは、フレイですねぇ？」

「そうだ。そういう君は？」

「モーズグズですう」

言いながら、モーズグズは残った橙の魔インクで空中に印を刻んだ。

「く。これ以上はさせんぞ」

フレイは雷球を発現させ、それをモーズグズへ投げた。

対するモーズグズは、驚くどころか笑みを浮かべている。

「せえい！」

モーズグズは大筆で振り払い、雷球を吸収した。橙の魔インクが染み込む筆先は、同属性の力を得て激しく放電する。

「な、なにっ？ く、あれはなんだ？」

「“サンダー・ブレード”！」

「く」

筆先から電流の刃が発生する。それをフレイへ振り下ろすも、かわされてしまう。

「ちっ。なかなか、できるようだな」

「手加減はしませんよう」

ベルトから紫の小瓶を手にし、その魔インクを筆先に湿らせる。

「な、なんだ？ 今度は何をする気だあっ！」

フレイは両手を合わせて、その中に白い球体を発現させる。

モーズグズが刻印をする前に、フレイは光線を撃ち込んだ。

「リバーズ・ダメージ”！」

モーズグズはついさっき刻んだ印を解放した。

それが放つ淡いきらめきに触れたことで、フレイの放った光線が癒しの光へと変換される。

「ふたりを癒してくれて、ありがとうございます」

それはロキとフェンリル、ガルムに活力を与えた。

「そ、そんな馬鹿なあっ！」

眼前の少女が相当な手練てだれだと知り、フレイは焦る。

ふと、フレイは近くに落ちている剣を見つけた。

それは、テュールが残した剣だ。

「ふふっ。“ギャザー”！」

「な、うあっ!？」

モーズグズは剣を、フレイに引き寄せられるように“ギャザー”を唱える。

当たると前にかわされてしまったが、モーズグズはにつこりと微笑む。

「く、な、何て真似をするんだ。僕の美しい顔に……?」







モーズグズはガルムを治療すべく、治癒の刻印を解き放つ。  
強い癒しの光は、瞬く間にガルムの傷を治した。

「が、ガウ」

「無理しないで。傷は治したけど、疲労まではどうしようもできないの。しばらく休んでたほうがいいよ」

モーズグズは続けて氷の刻印を記し、スルトの熱に負けない冷気を発生させた。

「ほう？ その小娘は、おもしろいことをするな」

「そう思うのでしたらあ、早くここから離れてください。わたちらを燃やすつもりですかあ？」

「ふ。もう戦は終わりで。我が全て焦がしてやったぞ」

スルトの言う通り、空しいほどの静寂と紅蓮の炎がアースガルズを包んでいる。

「我らの勝利だ。さあ、帰って宴をしようではないか」

スルトはゆっくりと起き上がる。

その表情は、すぐに険しくなった。

ビキッ。

空間に、亀裂が走る。

広場にいる皆は、この音が何なのか気になって、発生源を目で探す。

「な、なんだ？ あれは」

スルトは遠くのほうで、黒い爆発が起きたのを見つけた。

それは無音だった。しかし、衝撃は伝わってくる。

「な、なんですかあああつ！？」

「何してる。伏せる！」

モーズグズは混乱してしまう。

ロキはそんな彼女を抱えて、一緒にうつぶせになる。

「む？ 何か、粒が見えるな」

スルトは遠くに目を凝らし、何か動くものがあることに気づく。  
「……に、逃げる！」

黒い爆発から逃れるべく、ヘルが広場にやってきた。  
息も絶え絶えで、涙目で何かにおびえている様子。

「ど、どうした。ヘル」

身を起こして、ロキは冷静でないヘルの頭を撫でる。

「……く、黒い女の子が」

「黒い女の子？ まさか」

ロキはそれを聞いてピンと来た。

しかし、こんな場所にいるはずがない。そう思考するも、ロキは  
ドールの存在しか頭に浮かんでいなかった。

「どうした？ ロキとやら。我らにも説明しろ」

「……………。来るぞ」

ロキだけでなく、モーズグズ、ガルム、フェンリル、スルトは、  
強烈な殺気に心身が凍えるのを感じた。

「あっはあ。ママあ、あたらしいおもちゃみつけたよ」

可愛らしい声で、ドールは広場へ降り立つ。

血にまみれたドールは、不気味な笑みを浮かべながら、両手で育  
んだ重球を放つ。

「させるかああああっ！」

スルトは皆を庇うべくそれをつかんだ。それが、命取りになった。  
「な、なんだ…………？ ぐああああっ！？」

巨体であるスルトが、ドールの頭と同じくらいの重球に、全身を  
吸い込まれた。

「きゃっはあ」

パチン。ドールは重球を手元に寄せて、それを両手で叩き潰す。  
それは水風船のように弾けて、水ではなく大量の血と肉片を散ら  
した。微かだが、火の粉もある。

「す、スルトが…………こんな、たやすく」

ロキは戦慄した。

ドールが遊び半分でスルトを殺害したことが、何よりも恐ろしかったのだ。

モーズグズも、ガルムも、フェンリルも、ヘルも、ドールが次に何へ興味を向けるのか。それを考えるだけで悪寒が走った。

「えっへへへ」

ドールは舌なめずりしながら、皆の顔を一瞥する。

「つぎい」

「え？ ええ」

モーズグズは自分が指名されて、涙目で首を左右に振った。

「あつそぼっつ」

ドールは両手に黒の球体をひとつずつ発現させる。

「や、やだ」

あまりの恐怖に、モーズグズは腰を抜かした。

そこへ、青い球体がふたつ飛んでくる。

「わお」

それはドールが持つ発現を霧散させた。直後、皆の前に少女が現れる。

「か、香乃……ちゃん」

「早う逃げんか！ この場は、わらわと香乃が引き受ける！」

《没落した天界・広場跡 若郷香乃》

光の十字架によってできた大穴を見下ろしながら、反物で飛行するわたし。

なんだか、空しかった。

フリッグを倒したのに、わたしの心は晴れない。どうしてだろう。

「ねえ、アルテレイマ。あれって」

「巨人の軍勢か。やりあっておるな」

遠目で戦争を観察し、わたしとアルテレイマはたそがれている。

「香乃。戦に情と迷いは不要。今はただ、生き残ることだけを考える」

「……………」  
「救えなかったからかな。ヨルムンガンドを。」

ロキとフェンリルとヘルの大切な家族を、犠牲にしてしまった。運命は、変わらなかった。変えられなかった。わたしは、自分がなんて無力な存在なんだと痛感する。

「今はそういう時ではない。他の皆の支援へ向かおう。これ以上の涙は流さぬためにも」

「うん。そうだね」

皆を探そう。そう思ってた。すぐだった。

『ママあ、ママああああああああああああああっっっ！』

ドールの声がした。

「え、ど、ドール？」

『ごめんね。香乃、アルトレイマ』

メンングラッドの、声？

「なんじゃ？ ドールが、目覚めたのか？」

今、見えてしまった。

メンングラッドが、赤く染まっている姿を。

「アルトレイマも、見えたでしょ」

「……………」

無言。でも、心の動揺は伝わってくる。

「皆と合流しよう。ねえ、アルトレイマ」

「そ、そうじゃな。そ、それよりもあそこに見えるのは、スルトか？」

アルトレイマは一際目立つ巨人を見つけて、そこへ飛翔する。

「ビキッ。」

わたしは思わず停止した。

「こ、これは空間亀裂？ 馬鹿な、どうしてそのような  
直後、ユグドラシルの根が黒い爆発に飲み込まれた。」

と同時に、わたしとアルテレイマはある存在を感知した。

「ドール？」「」

バキピキツ。空間の亀裂は大きくなる。

「次元が、歪むほどの圧力じゃと？ ドールに、これほどの力があ  
るといふのか」「」

「アルテレイマ。考えてる場合じゃない。急いで皆と合流しよう！」

広場上空。

少しずつ歪む空間に、わたしとアルテレイマは息を飲む。

「どうなっちゃうの？」「」

「解らん。とにもかくにも、ドールを止めなければ次元歪曲ディストーションも収ま  
らぬ。このまま放置したら、この次元そのもの。つまりは世界が崩  
壊する」「」

歪みを避けながら降下する途中、スルトの姿がないことに気づく。

「あんなでかい図体。どこに隠れたというのじゃ」「」

それは暗黙に、スルトがやられたということに他ならない。

アルテレイマは、ドールの姿を見つけて両手に青い球体をひとつ  
ずつ発現させた。

「これは、わたしの力……？」「」

「香乃の力、存分に借りるぞー！」「」

それらを勢いに任せて投げつけた。

青の球体は、ドールが持つ黒の球体を打ち消す。

「わお」「」

そして、わたしはドールと相対する。

「か、香乃……ちゃん」「」

「早う逃げんか！ この場合は、わらわと香乃が引き受ける！」  
事情を説明しているひまはない。

皆を守るためには、わたしがドールを止めるしかないんだ。

「え、な、なにを」

「さつさと逃げる！ 貴様らは邪魔じゃあ！」

アルテレイマは両手の指をフルに使って、小さな青い球体を十つも生み出した。

「わあ〜っ。しゅっご〜いつ。まねちてみよ〜っ」と

「な、なんじゃとっ!？」

アルテレイマは愕然とした。

ついさっきまでふたつが限界だったはずのドールが、一度見ただけで十つの発現をマスターしてしまったからだ。

いいえ、違う。ドールはそれ以上だった。

足からも大きな黒の球体がふたつ発現している。となると、合計で十二個もあるの？ そ、そんなの打ち消しきれないよ！

「っ。早う逃げんか！ 死にたいのかあっ!？」

アルテレイマの呼びかけに、皆はハツとなり、背を向けて走り出す。

ようやく、ドールだけに集中できるよ。

「ママあ、わちきとあっしょぼ〜っ」

ドールは笑顔のまま、足を振り上げる。

サッカーボールのように飛んできた球体を、アルテレイマは右手で払って打ち消す。

「ちゅぎちゅぎい」

『済まぬ、香乃。……今ので、骨が折れた』

言わなくても、解るよ。すっごく痛いもん。

それに今の、わたしの手は球体に触れてもいなかった。指先の青い球体をかすらせたただけだ。なのに、折れてしまうなんて。

これで右手から発現することはできなくなった。後は、左手と反物しかない。

反物をほどいて盾とし、わたしは広場に着地した。

「香乃。このままドールの力が尽きるまで付き合っていたら、世界が持たぬ」

どうするの？

『こうなればいつそ、ドールを殺すしかないかもしれん』

ダメだよ。それは。

メングラッドと、約束したでしょう？ 責任を取るって。

『しかし』

責任を取るって、ドールを殺すことじゃないよ！ わたしは、わ

たしはそれでもドールを助けない。皆を守りたい。

それは、あなたでも実現できないことなの？

『言ってくれな』

「きやははははっ」

ドールの発現は、撃つたびに威力を増している。

反物は対抗呪文の文字を表現して防いでいたけど、少しずつ形が崩れ始めた。

「香乃。妙案がある」

なに？

「もう一度死んでくれぬか」

いいよ。

「そ、即答？ よ、よいのか」

構わない。それが、ドールを救うことに直結するのなら。

それに、いつかはあなたと一緒に体験しなくちゃいけないことで

しょう？ ずっと避けることなんて、できやしないよ。

「……………。解った」

腹を括ったわたしとアルレイマは、反物が耐えることを祈って

舌を噛み切った。

走って走って、ロキ、フェンリル、ヘル、ガルム、モーズグズは、ヨルムンガンドの亡骸のある場所へ辿り着いた。

「時空が、ねじ曲がっているだど？ あのドールという娘が、これほどまでとは」

モーズグズは、足を止めて後ろを振り返る。

「私たち、香乃ちゃんのところへ戻りますう」

ヘルはモーズグズに抱きついた。

「は、放してくださいっ。ヘルちゃんは、香乃ちゃんがどうなってもいいんですかあ！？」

「……そうじゃない。けど」

「けど？ 迷いがあるなら、どうして逃げたりするんですかあ！？」

憤りを隠せないモーズグズ。

ヘルは悔しそうに頭<sup>かぶり</sup>を振る。

「私とて、あの娘が心配だ。しかし、今は逃げることを優先しよう」「無理ですよ。ここまで時空が乱れて、この世界が修正されると思っっているんですかあ？」

「何が言いたい？」

フェンリルの問いかけに、モーズグズはこう答える。

「解るんですよ。この世界が、もう終わりだってことは」

「勝手なことを。何を根拠に言っている」

このロキの質問が、最後となった。

「私たちは、空術師<sup>ディムディクト</sup>ですから」

世界は、崩壊を始めた。



## エピソード

わたしとアルトレイマは、ドールに憑依ひょういしていた。

『ママあ、ママあ』

さみしそうな声が聞こえる。

ドールの心の中は、真っ白だった。

空虚で何も無い。その中でポツンと、体育座りしていじけてるドールがいた。

「ドール？」

『ママあ？』

通じ合う。何となくだけど、わたしは怖かった。

別にドールの力を恐れているんじゃない。

アルトレイマがわたしにしたのと同じように、受け入れてもらえるか不安だったんだ。

「こっちにおいで」

『うん』

ぎゅっと、ドールを抱き締める。

『もう、もうひとりではない。これからは、共に生きよう』

「解った？ ドール。あなたはひとりじゃないの」

『う、うん……』

困っているドール。わたしはその頭を撫でてあげた。

すると、ドールは照れ臭そうに微笑んだ。

『ありがとう。おねえちゃん』

そう呼ばれて、ちょっとさみしくなった。

さっきまで、わたしのことをお母さんと呼んでいたから、ね。

『わちき、おねえちゃんとあっしょぶ』

「ふふっ。次からはほどほどにしようね？」

『はあ〜い』

「ドールから抜け出て、わたしとアルテレイマは驚いた。  
「きゃあ!?!」

「まず、わたしは自分が全裸であることにびっくりした。

『ここは……どこじゃ?』

アルテレイマはもう慣れてきているのか。すっぽんぽんよりも外の景色を気にしていた。

「おねえちゃん」

「ど、ドール?」

「あ、ちゃんとしてる」

「落ち着いているね。ドールは夜の海岸に倒れていたわたしを揺さぶり、目覚めたことに胸を撫で下ろした。

「てか、ドールは血だらけだ。服が黒だからどうにかごまかせそうだけど、これは早く着替えさせないと。」

「わわ」

「浮遊していた反物が、わたしの身体に巻きつく。」

「そ、それで大事なところを隠しているけども。こ、これは、かなり際どいかも。」

『見慣れぬ場所じゃな。ついさっきまで、アースガルスにいたというのに』

「も、モウちゃんとか、ヘルは?」

『解らぬ。ドールの心の深くに潜っておったからのう。何があったのかは……』

「生きてるよ。きつと」

『ふむ。そうじゃな』

「わたしは身を起こし、ドールを抱き締める。」

「あつ。おねえちゃん、くるちい」

「やっぱり、落ち着いている。頭を撫でて、その温もりを確かめた。」

「ずっと一緒だから、心配しないでね」

「うん」

「いいいいい」

『落ち着いておるようじゃ。しかし、いつまた暴走するか解らぬ。ドールの子育ては大変そうじゃな』

「ん」。そだね。でも」

「頑張ってみるよ。精一杯さ」

『ふむ。そうじゃな』

それよりも、ここはどこだろう。

『む？ 近くに人がおるな。話しかけてみたらどうじゃ』  
人って、もし男性だったらどうするの？

背に腹は替えられない。

だってさあ。

「はっつっ！」

「うっつ」

くう〜つと、ふたりして腹の虫が騒いでるもん。

「ん〜？」

それはかなり大きな音だったらしく、気づかれちゃった。

「あれま、あんたら。ここで何してんのよ？」

とつても背の高い、スレンダーな女性だ。その黒髪は肩まで伸びてて、夜なのにとことなく輝いているように見えた。

服装は長袖の白 टीー シャツにダメージジーンズ。見事に着こなしてて、かついいい。

それよりも、よかったあ。女の人で。

「あ、そ、その」

事情を説明しようとしたけど、どうしたものか迷う。

「おなかすいたあ。おねえちゃあ〜ん」

「あ、そ、そうだね」

とりあえずドールを抱いて、空腹だと訴える。

「あら。じゃあ、あたいの車に乗りな。ここでの用事は済んだし、

誰かと一緒に食事したかったのよねえ」

「そ、そうなんですか。ありがとうございます」

車？

「てかさ、あんたら。凄い格好してるわね。もしかして、姉妹で家出したの？」

「はい。そうなんですよ」

げっ。今の、わたしが言ったように思えるよね？

でも違うよ。さっきの、アルテレイマがわたしのモノマネをしたんだ。か、勝手に何してくれてんのっ。

「誰かに襲われたんじゃないかと思っただけど、違うのね？ まあ、

近々物騒だし。事情はとやかく聞かないわ」

女の人はにこやかな笑顔で、親指を立ててこう名乗った。

「あたいは角沢理奈すみさわりなっていうんだ。あんた達は？」

すみさわ、りな？ 完全に、日本人じゃん。

「……………」

てか、こことって日本？ わたし、元の世界に帰れたの？

「わちきはドールでしゅう」

「ドール？ が、外国人？」

「あ、は、ハーフなんです。日本と…………その」

「複雑な事情がありそうねえ。んで、君は？」

「わたしは、若郷香乃です。こ、この子の姉です一応」

「そっか」

その人は手を差し伸べて、わたしが立ち上がるのを助けてくれた。

「あ、ありがとうございます」

「まだ何もしてないよんよん。さあて、そのままじゃ店員に止められるしね。車内にあるあたいの服を貸してあげるわ」

「そ、その」

「ん？ どしたのさ」

わたしは、この人に聞かなければならなかった。

「その、ここは…………どこでしょうか？」

「は？ どこって。ここは、九十九里浜くじゅうじゅういちりじゃないの」  
くじゅうくりはま？

「それって、千葉県の……？」  
「あつたりまえじゃない。おかしな子だねえ。逃げるのに夢中だったのかい？」

戻って、きたんだ。わたしは。

『……………』

アルトレイマ、どうしたの。

『んや。正直混乱してある。香乃、しばらく休ませてたもれ』

そ、そう。日本なら、わたしのほうが詳しいもんね。

後のことは、わたしに任せてだいじょうぶ。

『頼もしい限りじゃ』

「ささ、早く車へ向かうよ。そこで服を着替えてから、近くのファミレスで一緒にご飯ね」

「わあ〜い。ごはんごはあん」

「本当に、ありがとうございます」

「いいよいいよ。あたしも、婚約指輪を捨てたばっかでさびしかったからさあ」

〜え。

「さあ、今日はたらふく食うぞお〜！」

「お〜」

女の人とドールの無邪気な笑顔。

それを見てて、自然と笑みがこぼれていた。

## エピローグ（後書き）

完読していただき、ありがとうございます。

さて、私がこの物語を読んだ人に対して、言いたいことがいくつかあります。

まず、皆さんは生命いのちについてどう思いますか？

私は、尊いと思います。重く、そして価値がある。

だからこそ、私は言いたかった。いいえ。言わせたかった。

「永遠の命なんて、下らないね」

そう。私は常々、こう思っていました。

永遠の命。確かにそれは、誰もが追い求めたいものであるはず。

しかしそれは、生命いのちを軽んじている行為であることを忘れてはいけない。

限りがあるからこそ、尊く、重く、価値があるのです。

それが永遠に続かないで、私には考えたくもない。

私の思うことは全て、彼女らが伝えてくれました。

皆さんが生命いのちについてどう思うかは、私は存じません。

この作品を読んで、どのように価値観が変わったのか教えてくれると幸いです。

もうひとつ言いたいことは、北欧神話におけるロキの行動理由です。

ロキは、悪者扱いされていますね。

ですが、私にはロキという存在がどうも悪者には見えなかった。

ゆえに、私はロキについて考えた。頭の中でイメージした彼と、何度も対話しました。

そして、私はこう結論した。

家族。彼は、何よりも家族を想っているのだと。

私は、彼に語らせました。家族について、どう思っているのかを。第8話のシーンですね。

それが、どうラグナロクと結びつくのかを。私なりに表現してみました。

作中でも香乃が言っていました。

北欧神話の文献に、アルテレイマという存在はどこにも記述されていません。

私が勝手にニヴルヘイムの女王と定めたキャラクターです。勘違いなさらぬように。

ファンティレズドもミドガルズにある一国だとしていますが、そのような記述はありません。コーネイス地方もそうですね。

この作品で改めるところは、もう文章ぐらいしかありませんね。

ああそれと、私はこの作品を書く際にプロットは立てていません。話ごとの覚え書き、ぐらいしか記していないのです。

書き終えた後で、繋がりつつじつま合わせ、推敲したぐらいですかね。

では、この辺で失礼します。

## あとがき

### 《モウちゃんの魔法講座》

「はあい。これから、わたしによる魔法の使用方式フオーミットの講義が始まりますよ〜」

「ご機嫌だね。モウちゃん」

「ええ。得意分野ですからあ」

教壇きょうだんの上でない胸を張るモウちゃん。うん。やつぱBだ。

学校の教室。ここにいるのはわたしとモウちゃんだけです。

「え〜っと、まず最初に断っておきます。このお話は、時系列と設定とか、いろいろと無視してあります。香乃ちゃんと一緒にお勉強したければ、お付き合いどうぞ〜」

必要事項を述べて、モウちゃんは深呼吸する。

「まずは魔法の使い方、基礎編ですなえ」

身長が足りないので、モウちゃんは台の上に乗る。これでようやく、教卓から顔が見えたよ。

「出席は省略〜っ。ありや、チヨークチヨーク」

どっこいせと台を動かして、カツカツと上下スライド式の黒板に概要がいようを書くモウちゃん。

下のが書き終えたら黒板を入れ替えて、また黙々と書いていく。

「ノートを取りながらで結構ですよ。口頭でも説明します」

教鞭きょうべんを手にしたモウちゃんは、上の黒板の左端を指し示す。

「はい。最初は詠唱えいしょうですよ。

声に出して魔法を使う、一般的な方法ですなえ。

え〜、こほんっ。詠唱による利点や欠点は次の通り。テストに出しますから、必ず写しましょうねっ。

『詠唱えいしょう / Chant』



くメリツトく

- 1：呪文を声に出すことで集中力を養える。
- 2：方式の中で最も鍛練が容易。
- 3：発動失敗が少ない。

くデメリツトく

- 1：声を封じられるのに弱い。
- 2：唱える際に周囲が静かだとは限らない。
- 3：音が反響する空間では雑念が生じやすい。

と、なります。これはどの魔法とも相性がよく、一番やりやすい方式なんですよう。

えく、香乃ちゃん。ここまでで何か質問はありますかあ？」

「はい」

挙手して立ち上がるわたし。

「詠唱なんですが、声の大きい小さいとかは関係あるの？」

「ごっほん」

「あ、あるのでしょうか。先生」

着席。

「うん。そうですね。詠唱は声を使うので、低音や高音、よく通るかそうでないかなどの声質を気にする人がいますねえ。でも、だいじょうぶですよ。声が強ければ、魔法の威力が増すというのは誤解ですよ」

「声が強くなくても、強い魔法が唱えられると？」

「はあい。あくまでも詠唱は、声を用いて呪文を唱え、集中することが重要です。ベテランの方は呪文を詠唱せずに唱えたりもしますね。けれども、魔法の威力や精度は集中力に比例する。なので、声を出して集中。ひまさえあれば、精神統一をしてくださいねえ」

とりあえず、詠唱のところはノートに書き写した。

モウちゃん先生は台を引きずり、それに乗ってから、教鞭で上の黒板の右端を指し示した。

「さて、次に印章いんしょうですう。  
わたちの得意とする方式ですねえ。  
印章による利点と欠点は、次の通りだよん。

『印章いんしょう / Seal』

～メリット～

- 1：魔法を文字としてか、それを示す魔法陣を描くだけでよい。
- 2：石ころなどの無生物に魔法を込めて使用できる。
- 3：筆記用具の有無は重要ではない。

～デメリット～

- 1：文字と魔法陣の習得、それを描ききるまでに時間がかかる。
- 2：一部の誤りが全部の失敗に直結する。
- 3：動作で読まれてしまう。
- 4：描いてから時間が経つと効果が弱まる。

え、ここまでで質問はありますかあ？」

「はい」

「元気でよろしい。香乃ちゃん」

挙手して起立するわたし。

「筆記用具ってありますけど、これがない場合は何で代用するのでしょうか？」

着席。

「そうですねえ。自分の血とか、汗とかで文字を書くこともできませんねえ。ただ、体液による印章だと魔力が微弱なので、強い魔法は発動できません」

「あくまでも、代用であるか？」

「はい。印章で強い魔法を発動させるには、どうしても魔石などをすり潰して作る魔インクが必要になりますねえ。ただ、魔インクは高価ですので使いたがらない人もいます。自作すれば安価で済みますが、これもなかなか難しいことですしねえ」

溜息をつくモウちゃん先生。

「他に質問はあ？」

「ありません。ノートに書き写しましたから、次へどうぞ」

「ぶう。じゃあ、お次は祈念きねんですう」

頬をふくらませて、不満気なモウちゃん先生。もっと話したかったのかも。ごめんなさい。

ガダンツ。台を蹴飛ばしながら移動し、下の黒板の左端を見るよう示した。

「うっ。小指が……」

「せ、先生っ？」

蹴ったんじゃないなくて、ぶつけたんだ。

うづくまるとはせず、モウちゃん先生は我慢して講義を続ける。

「へ、平気ですう。祈念は魔法を意識で念じて行使する方法ですね。

祈念による利点と欠点は、次の通りですよ。

『祈念きねん / Pray』

（メリット）

1：何をするか読まれにくい。

2：声が出せなくても使える。

3：魔法を単発でなく、発動し続けることができる。

（デメリット）

1：一定の効果を保つのが難しい。

2：雑念が生じやすく、妨害に弱い。

3：精神力をどれくらい消耗したか自覚しにくい。

ではでは、ここまでで質問はあ？」

「はい」

「どうぞ」

拳手して起立するわたし。

「えっと、発動し続けるとありますよね。これは、具体的にどういうことなのでしょう？」

「ん〜。回復魔法があるとしましよう。これを重傷の方に唱えるとするなら、一回ずつ使っている場合ではありませえん。治るまでずつと行使するのが大事です。解りますかあ？」

「そうだね。治るまで一気にやるのがいいよね」

「ええ。重傷者の具合を見ながら調節もできるので、無駄な魔力を費やすことがほぼなく、祈念は回復魔法と相性がいいのです」

「ふむふむ」

「一定の効果を保つのが難しいとありますけど、これは集中を維持するのが難しいからなんです。詠唱などは唱える時に集中すればいいのですが、祈念は発動させ続けている間はずつと集中しなくてはならない。なので、デメリットの一部を無視することはできないのです」

「基礎編の中でも、難しいほうなんだ」

「はあい」

台を手でどかして、下の黒板の右端へ移動するモウちゃん先生。

「おっほん。お次は解放かいほうだよ。」

魔法を道具から解放して行使する方法ですなえ。

その解放による利点は次の通りっ。

『解放かいほう / Release』

〜メリット〜

1：道具さえあれば魔法を使えない人も使用可能。

2：精神力の消耗が軽い、もしくは皆無。

3：発動するのが道具の場合、使用者の力が封じられても発動できる。

〜デメリット〜

1：道具の入手が困難。

2：消耗品でない物は過度に使うと破損する場合もある。

3：単調になりがち。

4：発動の成否は創作者によって異なる。

この解放なんですけど、デメリットが目立ちますよねえ？」

「そうですね。信頼性はないんですか？」

「それは道具を創作した人によりますねえ。強力な魔導具アーティファクトなんて、そう簡単に手に入りませんからあ。だからといって安物に頼るのもいいのですが、失敗もある。これは実に運が左右されるんですよね」

モウちゃんは教壇から下りて、わたしがきちんとノートを取っているか確かめる。

「もう消してもいいですかあ？」

「あ、はい。この通り」

「よろしい」

モウちゃんは教壇に戻り、黒板消しでキュツキュツと黒板をキレイにする。

それからガクツと、黒板消しをキレイにする機械でチョークの粉を吸い取った。

「うしっ」

気合を入れ直して、モウちゃんはわたしのほうを見る。

「え〜、今から書くのは上級編ですう。あ、ちなみに基礎編にはもうふたつあるそうなんですけど……勉強中なので省きますねえ」

「え、そのふたつというのは？」

「ぶようとえんそうですう。え〜と、なんでしたっけ。ぶようは踊りで、えんそうはがっき、それを使うものだと聞いてますう」

「あ〜。何となく解りました。舞踊と演奏ですね？」

「え？ か、香乃ちゃん。私たちより理解が早くないですかあ？」

「そう言われても、体育と音楽の授業で習うことだし」

「なんですかあ？ おんがくって」

モウちゃん先生の世界では、音楽はそれほど進んでなかったんだ

ね。

「となると、歌うのもあるんじゃない？」

「うたう？ 上級にかしよとうというのがあると、聞きましたけど」

「なるほど。歌唱ですね」

「むっっ」

あ、モウちゃん先生がふくれちゃったよう。

「さてさて。これから上級編を書きますので、少々お待ちを」

カツカツと、スライド式の黒板にチヨークを走らせるモウちゃん。

全部書き終えて、パンパンと手を叩く。

「上級編の最初は、発現はっげんですう。魔法を思念球体しねんきゅうたいにして具現化し、それを対象にぶつけるなどして魔法を行使する方法ですねえ」

「あの」

「はあい。香乃ちゃん」

「思念球体って、なんですか？」

「ん」。そうですねえ。これは祈念の進化系で、念じることです。平とかから球体を生み出せるんです。その球体は通常の祈念よりも大きく、球体の形に維持されている。それには魔法が込められていて、ぶついたり解放することで魔法を発動させられます」

「祈念とは、どう違うのですか？」

「祈念は発動者の手やその付近、最も意識が集中したところに魔法が現れます」。

発現は発動者の意識が集中したところに球体として現れ、その球体を様々なことに応用できる。その球体は発動を抑えられている状態なんですよねえ。

ん。早い話が、上の黒板の左端を見てみましょう。

『発現はっげん / Emit』

くメリット

1：球体を宙に浮かせたり、敵にぶつかるまで追尾させることができる。

2：球体を直撃させれば、発動始点が近いため効果が増す。

3：連発および融合が可能。

（デメリット）

1：球体を発し、維持するだけで精神力の消耗が激しい。

2：球体が霧散すれば発動失敗。

3：球体を自身に還元しても、精神力はわずかに消耗する。

4：敵でなく味方に当たることがある。

5：融合に失敗した時に大事故が起きる。

では、ここまでで新たに質問はありますかあ？」

「はい。融合って、何か法則はあるんですか？」

「難しい質問ですう。確かに、発現は融合ができる魅力がありますねえ。でもでも、それは属性の相性を説くことになるので。私たちは説明できませえん」

「え〜？」

「香乃ちゃん。今は魔法の使用方式フキョウシヨウシの講義中です。属性相性についてはわたちでなく、違う誰かが教えてくれるでしょう」

「その時は、モウちゃんもお勉強だね」

「……………。今は先生ですう！」

あ、キレちゃった。

「ごめんなさい。つ、続きをどうぞ」

「むう。香乃ちゃん、わたちのことをバカにしていますねえ」

「そ、そんなことはないよ。先生、早く次を教えてください」

モウちゃん先生は教鞭で上の黒板の右端を指し示した。

「はあい。怒っててもしょうがないので、次に行きますう。

え〜、刻印こくいんですね。

これはわたちが最も得意とするものですう。

その利点と欠点は、記した通りっ。

『刻印<sup>こくいん</sup> / Brand』

〈メリット〉

- 1：刻んでから時間が経っても効果が弱まらない。
- 2：有効期間、発動条件などを自由に設定可能。
- 3：刻んだ魔法は解呪されにくい。

〈デメリット〉

- 1：刻むのに時間と集中力と技術がいる。
- 2：刻む際に専用の魔導具<sup>アיתיファクト</sup>がいる。
- 3：刻んだ魔法は修正できない。

え、こほん。魔導具<sup>アיתיファクト</sup>とは、わたちの大筆のような代物ですう」

「その大筆ですけど、普通の筆とは何が違うのでしょうか？」

「いい質問ですっ！ この大筆は、わたちが自作したもので、その創作法はドヴェルグから学んだんですう」

「そ、そうなの？」

「ええ。魔インクの製造法まで教えてもらいました。その代わりにわたちはドヴェルグの小屋の掃除をしたり、食事の世話をしてあげましたねえ。いやあ、懐かしい」

想い出にふけるモウちゃん先生。

てか、肝心の筆については答えてないよ。ま、別にいいけど。

「おっと、刻印について質問はありますか？」

「はい。その、刻印は印章とはどう違うのですか？」

「これもいい質問ですう。刻印は印章の進化系で、大きな違いはこれといてないんです。記したり刻む文字はほぼ同じですし、刻印で魔法陣を刻むこともできる。書くか刻むかぐらいの違いしかないんです」

「え、じゃあどうして、印章と刻印を分けたんですか？」

「印章と刻印の違いを述べるとするなら、水彩絵の具と油彩絵の具のようなものと言えがいいですかね」



このふたつの説明をするモウちゃん先生は、普段のように砕けた口調ではない。

真剣で、本気でわたしに教えてくれている。

「水と油？」

「はい。水彩絵の具と油彩絵の具で描く絵画の違い。画家さんには失礼ですけど、印章と刻印の説明をする時はこの例えがしっくり来るんです。香乃ちゃんは、どちらの絵の具が好きですか？」

「そう言われても、ちよつと」

「そうですね。水彩絵の具と油彩絵の具には、どちらにも一長一短がある。素人目から見ても、どちらがいいかなんて答えられないでも単純に考えてみてください。手に付着した水彩絵の具は簡単に洗い落とせて、油彩絵の具はなかなか落ちませんよね？」

「あ、はい。もしかして、それが印章と刻印の異なる点ですか？」

「印章は解呪されやすい。しかし、刻印は解呪されにくい。これは印章が書くのに対し、刻印が刻むことからなる。ただ、これだけだと印章が弱く感じますよね」

「はい。印章よりも、刻印のほうが強いんじゃないですか？」

「そうでもないんですよ。印章には書いた後から修正できる強みがあるんです。要するに、印章は間違つても後から書き足せるんです。ただ、刻印は間違えてしまうと修正ができない。誤つた刻印を刻んでしまったら、もうそれはダメなんです。どうしようもなくなりま

す」

「印章は初心者用で、刻印は上級者用。そういうことですか？」

「ん〜。それだと画家さんに失礼ですね。水彩画と油彩画はどちらにも味があります。どちらにも優れた点はあるし、劣る点があるということです。刻印が上級に位置している理由としては、単純に魔<sup>ア</sup>導具が手に入りにくいからなんです。それに加えて、刻印を実践できる技術とセンスを持つ人がそれほどいないということもあります」

「じゃあモウちゃんは、とつても貴重な存在なんだね」

「……………。香乃ちゃん、さつきからわたしが先生だというの忘れ

「てませんかあ？」

「バンツ。教卓を叩いて、モウちゃん先生は一喝する。でも、全然怖くない。そこがいいところです。」

「おっほん。講義を続けます」

「モウちゃん先生は下の黒板の左端を指し示した。」

「放逸ほういつですね。」

これは、魔法を発動状態もしくは待機状態で行使する方法です。発動状態というのは、例えるなら火が燃えている状態。ここでは焚き火としましょう。

これは祈念とは違います。

祈念は発動者が念じ続けることで発動状態を維持しますが、これは発動者がどういう状態であろうと関係ありません。つまり、発動者から独立しています。

祈念だと水をかけられても火は一時的に弱まるだけですが、放逸による焚き火は水をかければ消えてしまいます。

待機状態というのは、魔法が発動を待っている状態。発動者の合図があるか、もしくは時間が来るかして、待機状態の魔法は発動します。

この放逸は祈念の派生系で、わたしもちょっと理解できてないところがあるんですね。解らなかつたらすいません。

前置きが長くなりましたね。放逸の利点と欠点は次の通りです。

『放逸ほういつ / Trick』

〜メリット〜

1：意図すれば複数の魔法を同時に発動できる。

2：魔法が意思を持つかのように行動する。

3：魔法を通常通りに発動させるより、待機させたほうが精神力の消耗が軽い。

〜デメリット〜

1：待機した魔法が発動するまで時間がかかる。

- 2：発動者に従わず、暴走する可能性がある。
- 3：待機した魔法がいつ発動するか制御がしにくい。
- 4：発動者を含む味方が害を受けることもある。

ではでは、質問はありますかあ？」

「なんか、すつごく扱いづらそうなんですけど」

「そうでしょうかあ？ 場当たりに戦う人にとってはそう感じるかもしれません、巧者ともなると待機をうまく活用して、流れを掌握へんりゃくできる。また、放電現象をほったらかしにして水魔法で攻めるといった、幅広い戦法も可能なんですよう」

「なるほど。勉強になります」

「放逸についてもうひとつ補足です。待機させた魔法を即座に発動させると、普通に唱えるよりも精神力を消耗します。そのへんは注意しましよつ」

「はい」

ここまではノートに写した。

ふう。ようやく最後だね。

モウちゃん先生は下の黒板の右端を指し示した。

「え〜つと、次は絵画かいがです。」

魔法を絵に描き具現化させて行使するなんですよう。

絵画による利点と欠点はこちらの通り。

『絵画かいが / Picture』

〜メリット〜

- 1：描いた生物は倒されるか解除するまで自律的に活動する。
- 2：描いた現象、物質、景色は破損するか解除するまで残存する。
- 3：描いたものと連携することが可能。

〜デメリット〜

- 1：描くのに時間と集中力と技術がいる。
- 2：描く際に専用の魔導具アイティファクトがいる。

3：描いたものが従属するとは限らない。

さて、ご質問はありますか？」

「はい。この絵画ですけど、印章とほぼ同じですよ？」

「いえいえ。絵画は文字を記すものではありません。印章の派生系ではありますが、描いたものを具現化させるという、召喚の過程があるのが大きな違いでしょうか」

「召喚？ この絵画は、他とどう違うのですか？」

「はい。絵画の強みは、描いた物が具現化し、それが質量を持つことです。その重さや硬度などは、本人が描く際の思念で微調整できます。誤解しないでほしいのですが、かなりの鍛練が必要な方式ですね。安易に使うとは思わなくてください」

「となると、一番難しい？」

「いいえ。もつとも、上級編は全部鍛練が必要でしねえ。どれが一番難しいか、ではないでしょう。どれが、自分に合っているかです」

「自分に、合う？ 得意不得意ってこと？」

「ええ。私たちは印章、刻印を熟知している。他の方式も使おうと思えばできます。が、別に熟練度を上げようとは思いません。あれもこれもと手を伸ばすより、自分の好きなものを学んで特化する。自分の長所をきちんと見つけて、それを伸ばしたほうがいいですよ。絶対に」

モウちゃん先生は、じいっとわたしを見つめて諭さとしてくれる。

「ん〜っと。この上級編にも先刻述べたように、かしよう、抽出などの方式があります。でも私たちは、それらについて知らないのです」

「ふうん。まだまだ魔法の使い方には、未知の部分があるんだね」

「究極の形として、自律があるというのは聞いてますけどもあ」

「自律？ それが究極の方式なの？」

「いいえ。まだまだ未知なる使用方式フォーミュラがあると思います。私たち

も新しい方式を編み出そうと鍛練しているので、ご期待を。」

「もう、講義は終わりですか？」

「ええっ。ここでわたちの講義は終わりですねえ。」

えっへんとない胸を張るモウちゃん先生。

「でもいつかは、舞踊と演奏、歌唱と抽出と自律について教えてく  
ださいね。」

「はっっ！」

わたしの指摘に、モウちゃん先生はがっくりとうなだれた。

## カードリスト（前書き）

後で、フレイバーテキストを付け加えるかも…？

## カードリスト

これはただのカードリストです。小説ではありません。

ルールは公開しておらず、用語は説明しないと解らないので、  
内の注釈文で補ってあります。

解る人は解るでしょう。

ぎやざのみならず、様々なゲームに影響されているな、と。

マークは、\* (プレイ)、! (起動)、? (誘発)、 (永続)、

E (装備)、 (ルール)、の能力を示しています。

「」はコスト、【】はタイミングを示す。

コスト内にある ( ) は、マナコストです。

サヴァントの下部の記述はこういう意味がある。

パワータイプ<sup>パワー</sup>≡ POW? / SPD? / LIFE?。<sup>スピード</sup>

数値の後にFとある場合、それは効果によっては上下しない。固定値を示す。

パワータイプには、A (ATTACK。戦闘ダメージ)、M (MAGIC。効果ダメージ)、S (????)、がある。

これ以上の情報は開示しません。

解らなくても、質問してきても、公開を求めても。

特定の条件を満たさない限り、私は応じません。あしからず。

《サヴァント》 (SERVANT)

死に嫌われた者、アルテレイマ。(しにきらわれたもの、あるてれ

いま)

カラー紫。(死、未知属性)  
サイズS。

伝説の不明のサヴァント。

：プレイ 無効x、召喚 効果x。(このカードのプレイは無効にされず、このカードは効果で召喚できない)

\* - 「(8 + 紫8)」【あなたの使用不可にカード30枚以上】  
ディフェンス。(同HEXの他の味方がダメージを受ける場合、そのダメージ全てを自身に移す事ができる)

リタリエイション4。(1ターンに戦闘ダメージを4点まで反射できる)

リフレクション4。(1ターンに効果ダメージを4点まで反射できる)

全体防御。(隣接HEXにいる味方が攻撃された場合、そここのHEXでチーム編成できる。攻撃されたHEXには、このカードは必ず移動しなくてはならない)

：このカードはダメージ以外の他のカードの効果を受けない。  
S I I P O W 4 / S P D 4 / L I F 。

黒き妖姫ドール。(くろきようきどーる)

カラー黒。(重、未知属性)  
サイズS。

伝説の不明のサヴァント。

：プレイ 無効x、召喚 効果x。

\* - 「(8 + 黒8)」【あなたの使用不可にカード30枚以上】  
オフェンス。(移動と攻撃をしてもパッシブにならない)

ジャンプ。(このカードは、自身が位置できる好きなHEXへ制限なく移動できる)

リタリエイション3。



リフレクション3。

：このカードはダメージ以外の他のカードの効果を受けない。

M || P O W / S P D 8 / L I F 3。

無邪気な少女、モーズグズ。(むじゃきなしょうじよ、もーずぐず)

カラー黒。(重、空属性)

サイズS。

伝説の不明のサヴァント。

：名称 「空術師」  
ディムテイク

リンク「(4)」(手札にあるこのカードは、「コスト」を払う事で味方のサヴァントに装備できる。その場合、装備者はこのカードの \* とリンク以外の能力を得る)

\* - 「(2 + 黒2)」【あなたの使用不可にカード5枚以上】  
クリーン。(移動が完了した時、そのHEXにある依存とセットカードを使用不可に送る事ができる)

! - 「(4)P」：あなたのデッキ、使用不可、除外からセットできるアーティクルがマジック1枚を選び、それを公開して手札に加える。

：味方の「魔犬」「魔狼」全ては+1+1+1を得て、効果では破壊されない。

M || P O W 1 / S P D 5 / L I F 3。

悪戯な妖姫ヘル。(いたずらなようきへる)

カラー紫。(死属性)

サイズS。

伝説の不明のサヴァント。

：プレイ 無効x、召喚 効果x。

\* - 「(3 + 紫3)」【あなたの使用不可にカード10枚以上】

オフエンス。

再生「(3)」(「コスト」を払う事で、そのターンの破壊を一度だけ無効化できる)

プロテクト=橙と白。(このカードは指定されたものからの対象にならず、ダメージを受けず、装備されない)

! - 「手札1枚orカード2枚を使用不可から除外に送る」: このターン、+1+1+1を得る。

A= POW3 / SPD3 / LIF3。

冥界の番犬ガルト。(めいかいのばんけんがるむ)

カラー黒。(闇属性)

サイズL。

伝説の獣のサヴァント。

: 名称 「魔犬」、プレイ 無効x、召喚 効果x。

\* - 「(3+黒3)」【あなたの使用不可にカード10枚以上】

オフエンス。

ダッシュ。(このカードは、距離制限なしで移動できる)

再生「(4)」

A= POW15 / SPD3 / LIF6。

ニーズヘッグ。(ニーズへっぐ)

カラー紫。(死属性)

サイズL。

竜のサヴァント。

\* - 「(紫4)」or【自軍HEXに敵の橙のサヴァント1体以上が存在】

オフエンス。

再生「(3)」

A ≡ POW 6 / SPD 2 / LIF 8。

優雅な戦乙女セネア。(ゆうがないくさおとめせねあ)

カラー白。(光属性)

サイズS。

伝説の天使のサヴァント。

：名称 「戦乙女」  
ヴァルキリー

リンク「(2 + 白2)」

\* - 「(2 + 白2)」【あなたの使用不可にカード5枚以上】

ディフェンス。

ヒーリング。(このカードがダメージを与えた場合、あなたを同じ  
点数分回復する)

プロテクト ≡ 紫と黒。

A ≡ POW 4 / SPD 4 / LIF 3。

氷結の狼フェンリル。(ひょうけつのおおかみふえんりる)

カラー紫。(氷属性)

サイズM。

伝説の獣のサヴァント。

：プレイ 無効×、召喚 効果×。

\* - 「(紫6)」【あなたの使用不可にカード10枚以上】

オフェンス。

ディフェンス。

ダッシュ。

プロテクト ≡ 赤と橙。

再生「(紫4)」

A ≡ POW 8 / SPD 4 / LIF 5。

巨大蛇ヨルムンガンド。(きよだいじゃよるむんがんど)

カラー赤。(毒属性)

サイズXL。

伝説の竜のサヴァント。

：プレイ 無効x、召喚 効果x、移動 自身x。(このカードは自身ではHEX間を移動できない)

\* - 「(赤8)」【あなたの使用不可にカード10枚以上】オフエンス。

再生「(赤4)」

リーチ「1」2HEX先。(このカードは指定された攻撃範囲を持ち、その範囲内ならば通常ダメージを与える事ができる)

- 【VS同HEX、隣接HEX以外&ダメージステップ】：通常ダメージの代わりに、全体攻撃(効果ダメージ5点)をする事ができる。

A「POW15/SPD0F/LIF21。

悪戯な魔神ロキ。(いたずらなましんろき)

カラー黒。(闇属性)

サイズS。

伝説の不明のサヴァント。

：プレイ 無効x、召喚 効果x。

\* - 「魔導具・ストラガルハド」&(黒4)」【あなたの使用不可にカード10枚以上】

オフエンス。

アドバンス「3」。(自分ドローフェイズ、あなたが引くカードは3枚増える)

リーチ「任意HEX」。

M「POW6/SPD3/LIF5。

奔放な妖姫フレイヤ。(ほんぼうなようきふれいや)

カラー橙。(命属性)

サイズS。

伝説の不明のサヴァント。

：プレイ 無効×、召喚 効果×。

\* - 「(3 + 橙3)」【あなたの使用不可にカード10枚以上】

オフエンス。

ヒーリング。

全体攻撃。(自身のパワー÷2(小数点切上)の通常ダメージを、相手側HEXに割り振る事ができる)

! - 「(5)P」：赤、黄、青、橙、紫、緑、白、黒のどれか1つを選ぶ。

このターン、味方全てはプロテクト⇨選択した色を得る。

M⇨POWER/SPD3/LIF3。

武神オーデイン。(ぶしんおーでいん)

カラー白。(光属性)

サイズS。

伝説の不明のサヴァント。

：プレイ 無効×、召喚 効果×。

\* - 「神槍 - グングニル」 & (白4)」【あなたの使用不可にカード10枚以上】

オフエンス。

アドバンス⇨2。

ブロッカー3。(1ターンに戦闘ダメージを3点まで軽減できる)

カウンター3。(1ターンに効果ダメージを3点まで軽減できる)

リーチ⇨直線2HEX。

A || POW 7 / SPD 2 / LIFE 5。

鷹目のヘイムダル。(たかめのへいむだる)

カラー白。(光属性)

サイズS。

伝説の不明のサヴァント。

：プレイ 無効x、召喚 効果x。

\* - 「神剣 - ブルトガング」 & (白4) 【あなたの使用不可にカード10枚以上】

オフENS。

クリーン。

ガッツ。(このカードが残り3点以上で致死ダメージを受ける場合、代わりにこれは残り1点となる)

? - 【攻撃する】：攻撃HEXのアーティクルとマジックとセットカード全てを使用不可に送る。

A || POW 7 / SPD 3 / LIFE 5。

雷神トール。(らいじんとーる)

カラー橙。(雷属性)

サイズS。

伝説の不明のサヴァント。

：プレイ 無効x、召喚 効果x。

\* - 「神槌 - ミヨルニル」 & (橙4) 【あなたの使用不可にカード10枚以上】

オフENS。

ガッツ。

二段攻撃。(通常ダメージを、自身のスピードのタイミングと、それを-1したタイミングで与える)

A ≡ POW 10 / SPD 2 / LIF 5。

女神フリッグ。(めがみふりつぐ)

カラー白。(光属性)

サイズS。

伝説の不明のサヴァント。

：プレイ 無効×、召喚 効果×。

\* - 「(3 + 白3)」【あなたの使用不可にカード10枚以上】  
クリーン。

サポート。(このカードをパッシブにして、このカードと同じ色マナを2つつ分補える。ただし、そのマナはこのカード自身の能力には使用できない)

アドバンス ≡ 2。

リフレクション2。

！ - 「(3 + 白2) P」：あなたのデッキの上のカード5枚を見て、それらを望む順番でシンクにする。(シンクとは、デッキの上で表向きになっているカードである)

あなたはカード3枚を引く。

M ≡ POW 3 / SPD 3 / LIF 3。

戦神テュール。(せんじんてゆる)

カラー白。(光属性)

サイズS。

伝説の不明のサヴァント。

：プレイ 無効×、召喚 効果×。

\* - 「(3 + 白3)」【あなたの使用不可にカード10枚以上】  
オフエンス。  
ディフェンス。

ガッツ。

リタリエイション2。

A ≡ POW8 / SPD3 / LIF5。

豊穰神フレイ。(ほうじょうしんふれい)

カラー橙。(命属性)

サイズS。

伝説の不明のサヴァント。

: プレイ 無効x、召喚 効果x。

\* - 「(3 + 橙3)」 【あなたの使用不可にカード10枚以上】

オフエンス。

ガッツ。

ヒーリング。

全体攻撃。

A ≡ POW5 / SPD3 / LIF5。

サンド・ワーム。(さんど・わーむ)

カラー黄。(土属性)

サイズL。

昆虫のサヴァント。

セット。(このカードはHEXに裏向きでセットできる。そうした

場合、セットしたターンはプレイできない)

\* - 「(黄3)」

ディフェンス。

? - 【リバーズ】 : このターン、+4 +4 +4を得る。

A ≡ POW8 / SPD0 / LIF8。



ツリーフォーク。(ツリーふおーく)

カラー緑。(木属性)

サイズL。

植物のサヴァント。

\* - 「(緑3)」「or」【自軍HEXに敵の黄のサヴァント1体以上が存在】

ディフェンス。

再生「(3)」

A ≡ POW5 / SPD0 / LIFE10。

コカトリス。(こかとりす)

カラー黄。(金属性)

サイズS。

鳥のサヴァント。

! - 「(3)」【VS敵のサヴァント】：対峙した敵のサヴァント1体を対象とし、それを破壊する。

そのコントローラは「(2)」を払う事で、この効果を無効にできる。

L・ターン1回。(この能力はターン1回しか発動できない)

A ≡ POW2 / SPD3 / LIFE2。

《アーティクル》(ARTICLE)

氷死藍界ニヴルヘイム。(ひょうしらんかいにつるへいむ)

カラー紫。(氷、死属性)

伝説の依存のアーティクル。

：プレイ 無効x。

フィールド。(これは自軍HEXに位置し、あなたはフィールドを持つカードを1枚のみコントロールできる)

\*・「(4+紫4)」

：このカードは破壊されない。

あなたがプレイする紫のサヴァントの\*のコストは「合計(4)」  
少なくなる。

周囲1HEX内の紫のサヴァント全ては+2+2+2を得る。

戦乱郷地ミドガルズ。(せんらんごうちみどがるず)

カラー赤。(火、土属性)

依存のアーティクル。

：色 黄。(このカードは黄色でもある)

フィールド。

\*・「(2+赤/黄」2)」

：あなたがプレイする亜人と獣のサヴァントの\*のコストは「合計(3)」少なくなる。

神天煌砦アースガルズ。(しんてんこうさいあーすがるず)

カラー白。(水、光属性)

伝説の依存のアーティクル。

：色 青、プレイ 無効x。

フィールド。

\*・「(3+青/白」3)」

：このカードは破壊されない。

！・「(2+青/白」2)」：名称「エインヘリア」、青と白、霊  
体、サイズS、A2/2/2のファミリアサヴァント2体を同HEX  
Xにパッシブで場に出す。

《マジック》 (MAGIC)

シャットアウト。(SHUTOUT)

カラー黒。(重、空属性)

依存のマジック。

：名称 「ロック」、プレイ 使用不可。(このカードは使用不可からプレイする事ができる)

\*・「(1+黒1)」

：同HEXは出入りできない。(HEX以外からカードを移すことはできない)

カウント≦3。(このカードはエンドフェイズにカウントが進む。カウントが0になった時、このカードを使用不可に送る)

ディスプレイ。(DISPEL)

カラー橙。(命属性)

効果のマジック。

：名称 「ディスプレイ」

\*・「(2)」：1HEXを対象とし、そのマジック全てを破壊する。

炎の印章。(SEAL OF FIRE)

カラー赤。(火属性)

依存のマジック。

：名称 「ダメージ」

\*・「(2)」

！-「場から使用不可に送る」：周囲1HEX内の1HEXを対象とし、その全てにダメージ2点を与える。

アイソレート。(ISOLATE)

カラー黒。(重、空属性)

効果のマジック。

：名称 「マニピュレート」

セット【あなたの使用不可に黒のマジック5枚以上】(このカードはHEXに裏向きでセットできる。リバースしてプレイする際、【内の条件が満たされているなら、このプレイはコストを無視し、スタックに積まれない)

\*・「(2+黒2)」：サヴァントのいる1HEXを対象とする。そのサヴァント全ては周囲2HEX内あなたが割り当てたHEXに移動する。(1HEXには4体以下、サイズ合計8以下のルール内に収めること。また、敵味方を同HEXに位置させることはできない。一部を移動させないこともできる)

ギャザー。(GATHER)

カラー黒。(重、空属性)

効果のマジック。

：名称 「マニピュレート」

セット【あなたの使用不可に黒のマジック5枚以上】

\*・「(2+黒2)」：1HEXを対象とする。その周囲2HEX内から敵のサヴァントを可能な限り、4体以下とサイズ合計8以下になるように選ぶ。

選んだサヴァント全ては対象のHEXに移動する。(すでにそこにいるものは移動しない)

\*・「(1+黒1)」：1HEXを対象とする。その周囲2HEX内から味方のサヴァントを可能な限り、4体以下とサイズ合計8以下になるように選ぶ。

選んだサヴァント全ては対象のHEXに移動する。(すでにそこにいるものは移動しない)

リプレイス。(REPLACE)

カラー黒。(重、空属性)

効果のマジック。

：名称 「マニピュレート」

イミット「(3)」(このカードをプレイ可能なら、「コスト」を払う事で、そのコピーをスタックに積む事ができる。その場合、このカードは移動しない)

\* - 「(1+黒1)」：サヴァントのいる2HEXを対象とし、それぞれのサヴァントの位置を交換する。

大地の印章。(SEAL OF EARTH)

カラー黄。(土属性)

依存のマジック。

：名称 「ダメージ」

\* - 「(2)」

！ - 「場から使用不可に送る」：周囲1HEX内の1HEXを対象とし、そのの全てにダメージ2点を与える。

破滅の印章。(SEAL OF DOOM)

カラー紫。(死属性)

依存のマジック。

：名称 「デイスロツジ」

\* - 「(2+紫2)」

！ - 「場から使用不可に送る」：周囲1HEX内の1HEXを対象

とし、その不死と霊体でないサヴァント全てを破壊する。それらは再生できない。

ストーン。(STONE)

カラー黄。(土属性)

効果のマジック。

：名称 「ダメージ」

\* - 「(2 + 黄2)」：3 HEXまでを対象とし、その全てにダメージ2点を与える。

ライトニング。(LIGHTNING)

カラー橙。(雷属性)

効果のマジック。

：名称 「ダメージ」

\* - 「(2)」：1 HEXを対象とし、その全てにダメージ2点を与える。

バーニング。(BURNING)

カラー赤。(火属性)

効果のマジック。

：名称 「ダメージ」

\* - 「(2 + 赤2)」：2 HEXまでを対象とし、その全てにダメージ3点を与える。

フリーズ。(FREEZE)

カラー紫。(氷属性)

効果のマジック。

：名称 「ダメージ」

\*・「(紫2)」：1HEXを対象とし、その全てにダメージ3点を与える。

アイスバーグ。(ICEBERG)

カラー紫。(氷属性)

効果のマジック。

：名称 「ダメージ」

\*・「(4+紫4)」：1HEXを対象とし、その周囲1HEX内の全てにダメージ5点を与える。

このカードは対象のHEXに依存する。

：周囲1HEX内の紫が与えるダメージ+1、橙が与えるダメージ-1。

カウント=3。

ブレインウォッシュ。(BRAINWASH)

カラー紫。(死属性)

効果のマジック。

：名称 「マニピュレート」

\*・「(3+紫3)」：1HEXを対象とする。このターン、あなたはすべてのサヴァント全てのコントロールを得る。

ブリーク。(BLEAK)

カラー紫。(氷属性)

効果のマジック。

：名称 「ダメージ」

\*・「(3+紫3)」：1HEXを対象とし、その周囲1HEX内の全てにダメージ4点を与える。

このカードは対象のHEXに依存する。

：周囲1HEX内の紫が与えるダメージ+1。

カウント<sup>||</sup>3。

フォトン。(PHOTON)

カラー白。(光属性)

効果のマジック。

：名称 「ダメージ」

\*・「(1+白1)」：1方向を選ぶ。その直線2HEX上の全てにダメージ2点を与える。

ホーリー。(HOLY)

カラー白。(光属性)

効果のマジック。

：名称 「ダメージ」

\*・「(白2)」：1HEXを対象とし、その全てにダメージ3点を与える。

グレア。(GLARE)

カラー白。(光属性)

効果のマジック。

：名称 「ダメージ」

\*・「(1+白1)」：2HEXまでを対象とし、その全てにダ



ダメージ2点を与える。

シャイニング。(SHINING)

カラー白。(光属性)

効果のマジック。

：名称 「ダメージ」

\* - 「(3 + 白3)」：1HEXを対象とし、その周囲1HEX内の全てにダメージ4点を与える。

このカードは対象のHEXに依存する。

：周囲1HEX内の白が与えるダメージ+1。

カウント=3。

カウンタースペル。(COUNTERSPELL)

カラー青。(元属性)

効果のマジック。

：名称 「パーミット」、プレイ エレメント。(このカードはエレメントでも、通常通りプレイできる)

\* - 「(青3)」：スタックにあるスペル1つを対象とし、それを無効にして使用不可に送る。

サンクチュアリ。(SANCTUARY)

カラー白。(光属性)

効果のマジック。

：名称 「リリーヴ」

セット【あなたが残り5点以下】

\* - 「(2 + 白2)」：このターン、あなたはダメージを受けない。

あなたを5点回復する。

グランド・クロス。(GRAND CROSS)

カラー白。(光属性)

効果のマジック。

・名称 「ダメージ」

\* - 「(4 + 白8)」 : 1HEXを対象とし、その周囲1HEX内の全てにダメージ8点を与える。

このカードは対象のHEXに依存する。

? - 【エンドフェイズ】 : 周囲1HEX内の全てにダメージ2点を与える。

カウント=3。

スペルジャック。(SPELL JACK)

カラー青。(元属性)

効果のマジック。

・名称 「パーミット」

\* - 「(3 + 青3)」 : スタックにあるスペル1つを対象とし、それを無効にして除外に送る。

【無効に成功したカードが除外に存在】する場合、あなたはそれをプレイできる。(コストは無視する。Xなどの不定値は0として扱う)

サンダー・ブレード。(THUNDER BLADE)

カラー橙。(雷属性)

効果のマジック。

：名称 「ダメージ」

\* - 「(1+橙1)」：1方向を選ぶ。その直線2 HEX上の全てにダメージ2点を与える。

リバース・ダメージ。(REVERSE DAMAGE)

カラー橙。(命属性)

効果のマジック。

：名称 「シェイプシフト」

\* - 「(1+橙2)」：発生源1つを選ぶ。このターン、それが与えるダメージは代わりに回復になる。

ディフレクション。(DEFLECTION)

カラー紫。(氷属性)

効果のマジック。

：名称 「マニピュレート」

\* - 「(1+紫1)」：単一の対象を取るスペル1つを対象とし、その対象を変更する。

## カードリスト（後書き）

ツリーフォークは『マジック・ザ・ギャザリング』に存在するクリ  
ーチャータイプです。

ひとりのぎざプレイヤとして、この場を借りて感謝の意を表しま  
す。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6625s/>

---

頑張ってみるよ

2011年8月11日03時28分発行